# 金日成主席と朝鮮

# 金日成主席と朝鮮

朝鮮・平壌

外国文出版社

1 9 8 2

# はじめに

　金日成主席は、つとに革命闘争の壮途について以来今日にいたる五十余年の間、ひたすら人民の自由と幸福を念願し、社会主義・共産主義大業の勝利に向けて献身的にたたかってきた。

　主席は、不滅の主体（チュチェ）思想を創始して朝鮮人民の進路を明示し、洗練されたすぐれた指導によってかれらを勝利一すじに導き、五千年にわたる朝鮮の悠久な歴史においてもっとも偉大な輝かしい業績をつんだ。

　朝鮮民主主義人民共和国の今日の尊厳と栄誉、朝鮮人民の幸福と栄光は、ひとえに主席の賢明な指導と不眠不休の精力的な活動のたまものである。

　それゆえ、世界に名の知られた多くの政治家や社会活動家、文筆家など各界の人士が共和国を訪れ、主席に接見することを熱望しているのである。

　朝鮮を訪問して主席に接見した各国人士は、こぞって、主席の高潔な品性と輝くばかりの英知、抜きんでた指導芸術と高邁な徳性をたたえる文章を書き、出版物に公表している。

　本書は、主席の誕生七十周年にさいして、それらの一部を翻訳し収録したものである。

一九八二年四月　　編集部

# 目次

# 伝説的な将軍

フランス
ファルジュ・ジェルメン・ジャンヌ

全朝鮮人民の偉大な指導者であり、伝説的な英雄である金日成主席を語らずして朝鮮を論ずることはできない。朝鮮人民は主席を「わが元帥」、「敬愛する領袖」と呼んでいるが、主席にたいするその深い敬愛の念は人々を感動させるものがある。

人々は幼いころから、主席の輝かしい生涯について学んでおり、主席の生家は参観の対象となっている。各地の革命博物館と革命事績館には、主席の苦難にみちた時期や光輝ある時期の活動を示す数多くの写真と史料が展示されている。

主席にたいするこうした深い敬慕は、懐疑的な西方の人々を驚かせるかも知れない。それを理解するためには、金日成主席の全生涯が、朝鮮の受難の歴史と、主席の父をはじめ一家親族が英雄的にたたかって倒れた長年の革命闘争史といかに深く結びついているかを知らなければならない。

主席がいかにして年少の身で祖国をあとにし革命闘争にのりだしたか、青年時代にマルクス・レーニン主義の普及と祖国解放のたたかいを指導して投獄され、いかに苦痛をなめたか、そして一九三二年に労働者、農民、青年た

ちで反日遊撃隊を組織し、いかに英雄的な民族解放闘争を展開したかを知らなければならない。

朝鮮人民は金日成将軍を共和国主席にいただくはるか以前から、祖国と民族の運命を救う不世出の愛国者として、伝説的な英雄として、熱烈な革命家として敬慕してきた。

朝鮮の都市や農村にある革命博物館と革命事績館には、二十年にわたる抗日革命闘争期の主席の業績を示す多くの写真と史料が展示されている。主席の指導のもとに愛国者たちはおり重なる試練を乗り越えて勇敢にたたかった。かれらは酷寒の森林のなかで、長年のあいだ食糧不足に悩まされながらも敵の重囲と追撃を破り、貧弱な武器をもって数的、技術的に優勢な敵にうち勝った。

一九四五年将軍は、遊撃部隊を率いて敗走する日本帝国主義者を撃滅し、祖国に凱旋した。

## 祖国と自負心

すべての国の人民と同様、朝鮮人民も美しい自然と芸術を愛し、勇敢な先駆者たちの偉勲をたたえている。しかし、領袖にたいするかれらのひたむきな信頼と敬愛の情を十分に理解するためには、一九四五年当時の朝鮮を念頭において今日の朝鮮を見る必要がある。

日帝植民地支配者の三十六年間の暴政と収奪で天然資源は荒らされ、規模や技術装備においてきわめて貧弱な状態にあった工業さえも、敗走する日帝によって破壊された。人民の文化もたえず踏みにじられてきた。

伝説的英雄である将軍は、五年足らずで新しい朝鮮を建設し、民族の尊厳をとりもどした。その間に、農民を従

属から解放する土地改革をはじめ民主教育、八時間労働制、男女平等権、医療サービスなど人民に生き甲斐を与える民主改革が実施された。
しかし解放五年にして戦争が起こり、建設の成果は灰燼に帰した。将軍はつねに人民と生死苦楽をともにし、すぐれた戦略・戦術で全戦線にわたって世界「最強」を誇るアメリカ軍をうち破った。
すべてが破壊された北朝鮮では、戦後の再建が重要な課題となった。百戦百勝する金日成主席の指導のもとに朝鮮人民は、祖国をさらにりっぱに建設しようと奮い立った。人民は主席を信頼し、主席は人民を信頼した。
朝鮮では、人々に各分野の成果を見せるとき、停戦直後の記録映画を同時に上映している。スクリーンには主席が廃虚と化した平壌市の中心地で建築家や労働者たちに首都建設の展望を示すシーンや、崩れ落ちた壁やがれきを踏んで、労働者たちと工場再建の方途を話しあうシーン、あるいは農村の木陰や地面に座って農民の話に注意深く耳を傾けるシーンなどが映しだされる。
今日朝鮮を訪れる人はまず、近代的な大工場や文化的な農家の立ちならぶ協同農場村、大きく明るい校舎、内容の充実した博物館などに驚きの目を見張る。そして、かれらはつぎのような説明を聞くことになるだろう。
「これはみな金日成主席の配慮によるものです。主席は、工事がおこなわれているあいだたびたび工事現場をたずねて、ゆきづまっている問題があれば即座に解決してくれました。勤労者の住宅も生活に便利なように建てるべきだと言って、建築の様式や方法を教えてくれました。…
主席は休養所の敷地を定めるときには、もっとも景色のよい場所を選んでくれました。…
主席は子供たちに細心の配慮をめぐらし、親にもまさる愛を注いでいます」

# 子供たちにあらゆる幸せを

平壌学生少年宮殿は、少年少女たちの課外教育施設が完備した実にりっぱな宮殿である。都心の将台丘にあるこの雄大な宮殿は建築のべ面積五万平方メートルで、二百余の研究室、舞踊室、音楽室、体育室、実験室がある。少年少女たちはここで素質と芸術的才能を存分にのばしている。

学生少年宮殿や学校、あるいは街頭などで見る少年たちの表情は非常に明るく、朝鮮は別世界の感を深くした。それでわたしには託児所や幼稚園、各級学校を訪問するのがいちばん楽しい日程の一つであった。

朝鮮では民族教育に多額の予算がふり向けられている。国家は、子供たちが生まれてから学校を終えるまでその保育と教育に全的に責任を負っている。かれらには毎年二度衣服が支給されている。

朝鮮には文盲がなく、勤労者の一般的知識水準は高い。

わたしはよくこんな話を聞かされた。

「主席は、子供たちの幸せのためならなにも惜しむことはない、いちばんよいものをかれらに与えようと言っています」

北朝鮮の子供たちは実に恵まれている。金日成主席は祖国と人民のまえにはかり知れないほど大きな業績をつみあげた。主席はいかなる名誉も望まず、ひたすら人民の自由と幸福のためにすべてを捧げている。朝鮮人民が主席を敬慕しているのはきわめて当然なことである。

# イブ・ファルジュをしのんで

朝鮮訪問の日程が終わりかけたころ、イブ・ファルジュをしのんでわたしを接見しようという金日成主席の意向がわたしに伝えられた。

主席は、広い執務室でわたしを迎えてくれた。最初は公式的な雰囲気がただよっていたが、主席はすぐにわたしの気持をなごませてくれた。

主席の飾り気のない謙虚な物腰と、客にたいするあたたかい思いやり、非凡な英知にわたしは感動した。

主席は、写真で受けた印象よりもはるかに闊達で若々しく、人間味ゆたかななかにも剛毅な精神をひめている。

主席は、きびしい戦争のさなかに朝鮮を訪れたイブ・ファルジュをしのび、かれとフランスの平和闘士たちが朝鮮人民の闘争を支援してくれたことを感動をこめて語った。

わたしは主席との接見をとおして、朝鮮人民が主席を敬慕する理由を十分に理解することができた。

主席は長時間にわたって朝鮮と勇敢な朝鮮人民について語った。そして、朝鮮を今日のように発達した国にきずくためには多くの困難を乗り越え、多大な力を傾けなければならなかったが、外部勢力の侵略策動によって、朝鮮にはいぜんとして新しい戦争の危険が存在していると述べた。

主席は、朝鮮人民の第一義的な課題は朝鮮の統一を自分自身の手で達成することであり、北の愛国勢力と南の民主勢力が力を合わせれば、それは実現できると強調した。そして統一を妨げる最大の要因は、アメリカ軍が南朝鮮

に駐屯して、愛国的南朝鮮人民の統一への熱望を踏みにじるファッショ政権をあと押ししていることにあると語った。

主席は、合理的な自主的統一方案をしばしば提起したがいずれも拒否されたこと、軍事境界線で挑発事件が続発していること、朝鮮人民軍の懲罰を受けた「プエブロ」号事件をはじめスパイ艦、スパイ機事件などアメリカ側の停戦協定違反事件が頻発していることにふれたあと、つぎのように述べた。

「われわれは朝鮮で、平和がどのような代価によって維持されているかを誰よりもよく知っています。人民軍は長いあいだ、忍耐力を発揮してきました。それにもかかわらず、アメリカ人が戦争を望むならば、われわれは高い代価を支払ってでも国の自主権を守るでしょう。われわれにはその準備ができています。朝鮮人は絶対に屈服しないでしょう。そして戦争が起これば南朝鮮の愛国者は祖国を守るために北の愛国者と手をとることになるでしょう」

## 憂慮すべき問題

わたしが平壌を離れてすでに三か月が過ぎた。

世界を震撼させる悲劇的な出来事を報ずる新聞紙上で、あまり読者の注意をひかない短信のなかに朝鮮にかんする記事を読むことがある。「日本外相南朝鮮を訪問」、「韓日協定調印」、「米国務長官南朝鮮をふりだしにアジア諸国を訪問」など南朝鮮関係の記事は多いが、北朝鮮にかんする記事は少ない。そしてそれらの短信が明るい平壌の空を曇らせていることをわたしは知っている。

金日成主席が接見の席上示した憂慮は思い過ごしであったろうか。日米安保条約によって日本軍国主義の復活が促進されているというのは根拠のない説であろうか。いつにもまして朝鮮は、アジア侵略を企むアメリカの理想的な侵略基地となっているのではなかろうか。

世界の良識ある人々は、勤勉で勇敢な朝鮮人民を愛し、かれらのりっぱな成果に驚嘆している。しかし朝鮮人民の貴重な獲得物と平和への努力がいまなお外部勢力に脅かされていることを知るならば、右の憂慮すべき諸問題から目をそむけるわけにいかないであろう。

いかに平和への欲求が大きくても、朝鮮人民はおろかな戦争放火者が戦争をひき起こすならば、金日成主席のまわりに一枚岩のように団結して、平和の撹乱者をいま一度うちのめすであろうことをわたしは確信している。

フランス平和運動全国ビューロー

一九七〇年　八月

# 英明な現代の指導者

日本
久野忠治

一九七二年一月、わたしは、日朝友好促進議員連盟代表団の団長として朝鮮民主主義人民共和国を訪れ、親しく金日成主席にお会いすることができた。

金日成主席はまことに若々しいばかりか、ますますご壮健で、国事を指導しておられた。

われわれを接見された金日成主席は、おおらかに笑みをうかべながら、親しみをこめてわれわれと握手をされたが、その暖かく大きな手の力づよさは、主席がいかにお元気であるかを感じさせるものであった。同時にこの力づよさは、困難な建設と革命事業で人民をつねに勝利へ導いてこられた確信にみちた偉大な指導者のものであった。

接見当初からわれわれを大きく包みこむようで、はじめてお会いした感じを抱かせない、まるで旧知の間柄のような親近感を感じさせる大きな度量、国内問題、国際情勢、とくに日本との問題などを明快に強い説得力をもって、しかもユーモアをまじえながら論じるするどさ、われわれをぐんぐん引っ張っていく主席は、まさに英明な現代の指導者のなかの指導者だと、つくづく感じさせられたものである。

共和国を訪れてみて、実際に朝鮮人民の主席によせる敬愛の情が、いかに強いかを身をもって感じたが、金日成主席にたいする人民の敬慕の念はまさに当然のものであった。

われわれは、朝鮮人民が、朝鮮戦争の廃虚のなかから、敬愛する金日成主席の指導のもとに、歴史上、類例のない早さで朝鮮を社会主義工業国にかえた姿を実際にみて、金日成主席の指導の偉大さに、いまさらのように敬服したものである。

金日成主席は早くから祖国解放と革命活動の困難な道に入り、その闘争を勝利へ導くなかで偉大な主体(チュチェ)思想を創始された。

この主体思想は、自国の革命と建設にたいして主人らしい態度をとるという「主体の確立」、すなわち、すべての問題を自主的立場と創造的立場に立って、主として自らの力で、自国の実情に即して解決してゆくという思想である。

これは苦難の歴史をへた朝鮮民族の英知を反映したものであり、ひとり朝鮮人民だけでなく、われわれ日本国民にとっても非常に貴重で深奥な思想である。

金日成主席のこの主体思想にもとづいた賢明な指導があったからこそ、朝鮮のこんにちの発展がもたらされたものであろう。

しかし、この思想は、ただ共和国の革命と建設を勝利に導いただけでなく、こんにち世界の複雑な情勢を解明するうえで重要な思想である。

金日成主席は主体思想にもとづいてつねに原則を堅持しながら、同時に現実にあった非常に柔軟で幅のある政策をうちだしておられる。

朝鮮の自主的な平和統一について、統一を願うものであれば、だれでも直ちに受け入れることのできる、実に現実的な提案をしておられるのも、そのひとつである。

現在の不幸な日本と朝鮮との関係についても、主席は善隣友好関係を確立するために、きわめて妥当な提案をされた。

いま日朝友好を要求する声は、日本国民のなかでも高まっている。日朝友好関係にも、まさに、すべての氷を解かす春が近づいているのを切実に感じさせられるのである。

わたしは金日成主席が、ますます壮健に長寿なさるよう願ってやまない。

日本・衆議院議員、日朝友好促進議員連盟会長

一九七二年　四月

# 金日成主席の人間性について

日本　西谷能雄

「敬愛する金日成主席」とは、わたしたちが平素接してきた在日朝鮮公民のすべてが、いついかなる場合でも必ずといってもいいほど、口にする主席への忠誠と敬慕を示す尊称である。わたしたち日本人からすれば、この呼称をきわめて奇異に感ずる知識人もかなりいることはたしかである。ほんとうにふかく人民に敬愛されているのだろうかという疑問である。

若干の疑問を抱きながら、私が始めて朝鮮民主主義人民共和国をおとずれたのは、いまから二年あまり前の一九七〇年六月二日であった。約一か月の滞在期間を通じてかなり多くの各層の人たちにお会いする機会を得た。ここでもすべての人民が「敬愛する領袖金日成主席」と呼んでいることを実際に知った。各地を見学する中で、社会主義建設がすべての領域にわたって、おどろくばかりのテンポで進められ、労働者も農民も、婦人も、学生も、子どもたちも、実に明るく、明日の希望に燃えて労働し、勉学にいそしんでいる姿を実際に見聞して、この国には大変いい政治がおこなわれていることを知った。今日までそれを指導してきた金日成主席という人は、聞きしにまさる相当偉い人だろうと想像した。各種文献資料によって、私は数多くのことを学んだし、金日成主席の人柄について

もおおよその想像もついた。
私は、日本を発つ前も、また共和国に滞在することになったその日からも、なんとかして主席にたといほんの短い時間でもいい、お目にかかれたら、というねがいを強くもちつづけたし、機関を通じてそのことを願い出ていた。三週間の滞在予定がまさに終らんとする前日の六月二十三日の夕刻、私たちのねがいはきき届けられ、主席にお目にかかる機会を得た。殆ど絶望と思われていた主席との謁見は、私にとってはまさに青天のへきれきとでもいうべき大きな事件であった。
一九七〇年の六月といえば、日本からの共和国訪問は若干の貿易関係者を除いてはきわめて珍しくもあったし、公然と共和国への入国がわが国ではみとめられていなかった時期である。今でこそ両国の関係はかなり友好的に進展してきているし、金日成主席にお逢いすることも以前ほどではなくなったようであるが、二年半も前の時期は主席にお目にかかることはおろか、共和国に招かれることすらもきわめて稀少価値であり、それだけに私には全く大きな感激であった。
私は今、既に二年半も経過したその日のこと、共和国滞在の一か月を、深い感慨をこめて思い出している。あの感激的な主席との謁見の瞬間は、今も私の脳裏に実にくっきりと焼きついている。私の生涯を通じて、このような感激的瞬間は再び訪れることはないであろうと考えている。
私はこの日をどんなに待ちわびたことだろう。朝鮮民主主義人民共和国の現実的発展を見るにつけても、朝鮮人民の建設にとりくむ偉大なエネルギーを知れば知るほど、その原動力となっているものはいったい何か、を知ることはわれわれの共和国訪問の最大の目的であったし、それを知ることなしには、共和国の真の姿とその未来を理解することは困難であると考えてきたからであった。それは著作や論文やその他の出版物で知り得たものの総決算に

もなりうると考えたし、自分ひとりのドグマでなしに、ある種の客観性と普遍性をもつ理解でなければならぬと考えたし、何よりもその国の真の姿を理解するためには、その国の指導者を理解し、その指導者の人間像をトータルに捉えるにまさるものはないと考えていたからである。

それゆえに、金日成主席との会見は、私に大きな期待と同時に若干の不安を与えた。期待は、もちろんわれわれが主席に対して抱いてきたところの、共和国発展の原動力をその中に見出せるにちがいないという期待であり、若干の不安とは、主席がはたして名実ともに「敬愛される」主席として存在しているのかどうか、という点にかかわっていたといっていいと思う。

その時の印象を、帰国後私は「朝鮮民主主義人民共和国のこと」と題して『金日成首相謁見記』(当時、主席は首相であった――編集部注)に書きしるした。その時のことを私は今静かに想起してみるのである。それは僅か一時間半の会見にすぎなかったが私がこれまで抱いていた疑問を消すには充分な時間だったといえる。「敬愛する領袖金日成主席」はたしかに実在したし、その呼称の意味が実によく理解できた。革命家とはおよそこういう人をいうのであろうということも分った。

少なくとも金日成主席という人は、われわれが従来もちつづけてきた革命家の像とはどうもちがうのではないか、というのが私の印象であった。

革命家とは何かを追求し、革命家像を自分なりに設定する上で、私はこの会見をきわめて重要なものだと考えるし、その時の印象を再び思いおこし記しておきたいと思う。それは一個人の体験を越えて、革命家の一つのタイプを理解する上できわめて大きな意味をもつと私には思えるからである。

その日の夕方、われわれは指定された時間かっきりに内閣庁舎についた。エレベーターからおりると、そこに思

いもよらず、満面に笑みをたたえた主席の姿があった。心からなる歓迎の面持ちが、充分によみとれた。しっかりと握手をかわした。カメラマンを促してすぐに記念撮影にうつった。構えたところが全くなく、実に無雑作といってもいい。写真でみた、堂々たる体軀が私のすぐ傍にあった。永い間ねがいつづけてきた主席との謁見はこのような形で始まった。すぐに謁見室に通され、主席みずからわれわれの席までこられてしきりと茶菓をすすめるのであった。一時間半にわたる謁見は、殆どが主席のペースで進められ、われわれは主席の一言半句も聞きもらすまいと懸命だった。アジアの軍事状勢からはじまって、実に多方面にわたる国内問題が間断なくつづけられた。ここではそのすべてを書きつくすことはできないし、またここでの主題でもないので多くはふれないが、主たる内容はおおむね次のようなことだった。

シアヌーク殿下の来朝で会見がおくれたこと、インドシナ三国をめぐる軍事的、政治的状勢、三国人民の連帯とその支援、かつてのプエブロ号事件、ＥＣ一二一型機の侵入事件、最近西海岸海州沖で起った南朝鮮艦艇の領海侵犯事件、また南朝鮮軍の挑発による軍事的緊張のため今なお国防に力を入れざるをえない事情、もしアメリカ侵略軍が撤退すれば、南北の平和的統一は可能になり、その結果教育施設の拡充や人民の福祉にその予算を振り向けることが出来る点を強調した。九年制義務教育について、教育に力をいれているのでこれが大きな予算を占めていること、人民の日常的生活を豊かにするためにとられている諸種の政策について、そのため重工業とならんで軽工業にも力をいれていること、とくに塗炭の苦しみにあえいでいる南朝鮮の人民に対する深い思いやり、更に在日朝鮮公民の自由を抑制された生活に深い配慮をしめし、権利擁護の闘いに強い関心をしめした。また南北朝鮮の平和的統一の強い悲願について、それを妨げているものについてはきびしい口調で語った。われわれは、平和に徹し建設をすすめているが、ひとたび外敵の侮りを受けるような事態が起これば、国を挙げて一撃のもとに外敵を打ちのめ

すだけの力をもっている。しかし、われわれの側から戦いをしかけることは絶対にありえないし、軍備はあくまで防衛的だとも強調した。単一言語、単一民族の南北朝鮮人民が、何ゆえに単一国家を樹立することができないのか、それゆえに国連軍の名をかたるアメリカ侵略軍の撤退は平和的統一にとって必須の条件であるのだと強い憤りの念をこめて語った。朝鮮民族には、国連に依存することなく、自らの力で統一をかちとる充分な能力があるということだ。十一月二日から始まる朝鮮労働党第五回大会の主要課題にもふれ、重労働と軽労働の格差、工業労働と農業労働の格差をなくし、婦人を家庭労働から解放するためにどうすべきかについても語った。話の終りごろにはよど号事件にもふれ、学生たちと、その家族に対する深い思いやりは私たちの胸を強く打った。それは深い人間愛というより外はない。私たちは心からお詫びとお礼を申し上げるという一こまがあった。

私は主席の声があまりにも太く大きいのにすっかりどぎもを抜かれた。さびの利いた渋いその声がいったいどこから出てくるのだろう。笑うとまるで子供のようにあどけない童顔、とても五十八歳とは思えないその若々しさ。顔だけ見ていると、あんな声はとうてい出そうもない。左右に、同時に前後に、あの頑丈な身体を大きくゆすりながら、時に深々とソファーにもたれかかり、何の秘密も屈託もなさそうなおおらかな話し方、あけっぴろげなこだわりのない話術は、人を惹きつけるには充分だった。実に庶民的で魅力的だった。こんな指導者があるだろうかと思った。思うに日本帝国主義との十五星霜にわたる抗日武装闘争、一九四五年の独立後まもなく一九五〇年に起こった祖国解放戦争＝朝鮮戦争、その中にあって、たえず全人民と全軍隊を叱咤激励してきた、その激しい闘いの歴史があの声の中に深くこめられているのであろうか。そうとしか考えようがない。少なくともあの柔和な容貌からは、表面上革命の闘士としての面影は、みじんも見出すことはできなかったし、誇り高い一国の宰相、指導者として虚勢などは一カケラも見当らず、庶民そのものといってもよかった。内に烈々たる闘志を秘め、指導者としての自信

に導かれながら、外に柔らかく内に剛毅な精神を宿しているのであろう。「二十世紀が生んだ世界革命運動のすぐれた指導者の一人」と外報紙はしばしば伝えているが、なるほどそれに値する人物であると私も感じた。豊かな知性と深い思慮、人民と祖国によせる限りない愛情、戦略・戦術家としてこれまで数多く示された天才的な英知と豊かな経験、金日成主席こそは、たしかにまれにみる不世出の革命家の一人といえるのではないだろうか、と思った。

主席の話術はきわめて具体的で説得的で、たくみであった。原稿などはもちろん持たず、資料のメモさえ一つもなしに具体的数字を次々にあげられるのには全く驚いた。短く区切ってすぐに通訳を促すあたりは、実につぼを心得たものである。通訳氏の日本語がまた実にすばらしかった。微妙な日本語の言葉の綾が、よく理解されているように見えた。殆ど同時通訳といえるほどに、主席の話はよどみなくわれわれに伝わってきた。以上、主席との会見を通じて得た私の印象を私は率直にのべてみた。そこに主席の人柄を見ることができたし、その人間的魅力に強く打たれたからである。

聞くところによれば、主席は非常にしばしば現地指導というのをされるとのことだ。工場に農村に学校に病院に託児所に、ありとあらゆる所へ実に身軽に出かけてゆき、そこで指導者や管理者とではなく、真先に労働者や農民や病人や児童や学生や働く婦人と膝を交えて現場の人の話をきくという。そこから数多くの教訓を学びとり、次の施策の参考にするという。中には既に何十回と現地指導に出かけたところも数多くあるということだ。降仙製鋼所、青山協同農場等への現地指導はあまりにも有名な話である。一九四五年祖国に凱旋した折、休む間もなく主席は、なつかしい故郷、万景台に通ずる道を途中までゆき、故郷へもよらず降仙製鋼所への道をまっしぐらに進んでいったという話は、後世に残る逸話として今もひろく伝えられ、われわれの胸を打たないではおかない。祖国の解放と発展だけが主席の胸の中に深く去来していたのであろう。

私が主席に直接お逢いしたのは、あとにも先にも、一時間半に過ぎない。間接的には二回ほど見かけたことはある。この短い会見によって、主席の人となりのすべてを語ることはきわめておこがましくもあり、一面的とのそしりを受けるかもしれない。共和国の発展ぶりを現実に見ることによって、主席の卓越した指導力を理解することはできても、われわれの滞在期間は僅か三十日でしかなかったし、見学地も逢った人も限られていたから、それによって共和国の発展の全貌や主席の人となりや、すぐれた指導力の全てを語るには、私は必ずしも適任者ではないかもしれない。しかしそのような限界があるにせよ、三十日間の滞在期間と、限られた見学地と、一時間半の主席との会見は、共和国の発展とその原動力、その頂点にある金日成主席の人間的魅力と卓越した指導理論である主体思想を理解するには、決して短い時間だったとはいえないのではないか、私はそう確信しているのである。

共和国の人民、在日朝鮮人のすべてが「敬愛する」の尊称で主席を呼んでいることについて若干の疑義をもったことは先にのべた。そして今はその疑義は霧散したとも書いた。そのことの意味をもう一度よく考えてみたいと思う。

共和国における人民の、主席への忠誠心と尊敬の念には、われわれの想像をこえた特殊な条件と事情があるのではないか。そのことを理解しなければならぬと私は思う。それはどういうことか。金日成主席が共和国の創建と建設の上で果たしてきた大きな役割は、共和国の歴史と現実を具体的に知ることによってはじめて真の理解に達するのであって、この際一般論は通用しないのである。そして主席の自己犠牲の実態を具体的に理解しないと、この問題の本質はやはり解きほぐしえないのではないかと思われる。

百年に及んだ外国からのたびかさなる侵略とそれに堪えつづけてきた朝鮮人民の激しい抵抗、不屈なたたかい、

それを底から支えてきた朝鮮民族の強靱な精神力と強い忍耐がまずあって、また三十数年間にわたる日本の植民地支配と圧政、言語に絶するすさまじい弾圧をくぐり抜け、抗日武装闘争の時代を戦い抜いてきたきびしい試練、それらを通して示された主席の天才的な戦略・戦術、朝鮮民族が永い間夢にまで見た独立国家、朝鮮民主主義人民共和国の創建途上で果たされた主席の偉大なる役割、一九五〇年に始まる祖国解放戦争＝朝鮮戦争において示された主席の強力な指導と不屈な鉄の意志、南北朝鮮の自主的平和統一という大きな課題をになった朝鮮民族にとって、金日成主席こそは輝ける星と映じたことは当然であり、主席に対して大きな感謝を捧げていることも当然である。永い間の植民地支配を脱して新しい社会主義の国づくりを推進していく上で、朝鮮民族がどうしても必要とした一人の英雄、革命家、それを待望せざるをえなかった民族的背景が、結局金日成主席という一人のすぐれた指導者を具体的に生み出したものと考える以外、考えようがないといえるのではないか。主席は自らをむなしくして人民と祖国に奉仕し、深く人民と祖国を愛し、人民の幸福と祖国の発展をこよなく願いつづけ、それを最大の使命と考えてきた人であった。そのすぐれた指導力とヒューマニズムこそは、朝鮮人民の敬愛と尊敬を一身に集めるにまことにふさわしいものだったといえるのではなかったろうか。主席と人民の関係については既に二つのすぐれた本が出ている。一つはかつての抗日武装闘争時代の歴史を綴った『朝鮮人民の自由と解放』であり、また現在の主席と人民の関係を示している『人民のなかで』が、それである。（共に未来社刊）

その軍事的、政治的指導力の卓越さはいうに及ばないが、それ以上に私は主席の全身にあふれる人間愛を高く評価しないではいられない。われわれの想像をこえた、このような条件が、朝鮮の全人民の忠誠心を呼びおこす結果となり、一人の革命家、指導者を生み出さないではおかなかったのであり、それが「敬愛する領袖」となってわれわれの前に現出したのだと私は理解した。

「敬愛する領袖」という尊称に私は深くこだわってきたが、この尊称の中にこそ、新しい革命家の人間像を見たからであり、それは朝鮮民主主義人民共和国において、初めて具現した一人の革命家像を理解する上できわめて重要な要素と考えたからである。

革命家としての金日成主席をもっともよく特徴づけているものは、全人民が「敬愛する領袖」と呼んでいる、この呼称の中に象徴的に示されていると私は考える。全人民に対する深い愛情と高いヒューマニズム、それが金日成主席を、単なる革命家と区別する大きな特徴であり、それゆえに「敬愛する領袖」の意味が特別の響きをもってわれわれに迫ってくるのである。

「未来は青年のものである」という言葉がある。その国の運命を左右するのは青年であり、それ故に青少年教育がどのように立派になされているかどうかが大きな問題になる。私はその意味で共和国の青少年教育にもっとも大きな関心をもった。

共和国では「子どもは王様である」といわれている。私は共和国滞在中平壌の「学生少年宮殿」を二度訪問した。「学生少年宮殿」は、平壌の中心部にあり、将台丘と呼ばれるやや高台にその威容を誇っている。

建物は壁も柱もすべて磨きあげられた大理石で、廊下には赤いじゅうたんが敷かれ、豪華なシャンデリアが輝いており、その名にふさわしくまさに宮殿のおもむきがあった。ここでは毎日八歳から十六歳までの青少年が一万人もサークル活動に参加しており、各種六十あまりのサークル活動が日夜休みなく専門家の指導によってくりひろげられているという。

日本にいるときからこの少年宮殿のことはしばしば話にも聞き、写真でも見ていたが、この地にきてはじめて少

年宮殿の実体に接しその規模の雄大さばかりでなく、その内容の充実ぶりに全く驚嘆した。予想をはるかにこえた、まさに「宮殿」そのものであった。「子どもは王様」だから、子どものためならどんなに金をかけても惜しくはないという金日成主席の心意気がいたいほど読みとれた。このようなすぐれた指導者によってすくすくと育っていくことができる共和国の青少年は、なんと幸せなことであろう。日本の教育の現実を知るにつけてもそのひらきのあまりにも大きいことに、ただ唖然とするのである。社会主義と資本主義の体制の優劣はここにもはっきりあらわれているといえるが、それよりもさらに指導者の質の優劣がはっきりとあらわれていることをいやというほど知らされた思いがする。「学生少年宮殿」はひとり平壌のみにとどまらず、共和国の主要都市のすべてにそれなりの規模で、立派にもうけられている。子どもが王様なのはなにも「学生少年宮殿」だけに見られるのではない。平壌滞在中私は託児所、幼稚園、人民学校から金日成総合大学、平壌音楽舞踊大学等を見学したが、子どもが王様であることがどこででも実に深く理解できた。それらを通じて、共和国では青少年教育にいかに大きな力が注がれているかを具体的に知った。全般的九年制技術義務教育（一九七五年から全般的十一年制義務教育が完全に実施された。—編集部注)をはじめとして、教育制度と教育施設が実にすばらしく完備しているのにまったく驚嘆した。金日成主席をはじめ、労働党と共和国政府の教育政策の勝利がここでもはっきりと読みとることができた。

主席との会見の際、教育費が国家予算の大きな部分を占めているとの発言があったが、各地の教育施設を実際に見学する中でそれが事実であることをたしかめることができた。思うに革命と建設によってかちとられた社会主義朝鮮の成果の上に立って革命の伝統をどう次の世代にうけつがせるかが大きな課題ということであろう。

平壌滞在中のある日、海外同胞援護委員会副委員長の招待会があった。その席上で在日朝鮮公民の子弟の教育に

対する主席の深い配慮について副委員長から詳しい説明があった。すでに知られているように毎年数億にのぼる教育基金が主席の名で贈られその総額はすでに百数十億におよんでいる。遠く海外にある同胞の子弟に注がれる主席の深い教育的配慮は在日朝鮮公民をいたく感激させているばかりでなく、われわれ日本人の心をも深くゆさぶるのである。

長期的展望に立って共和国の未来を青少年に託していることが、この教育政策とすぐれた教育施設の中に充分表明されているといってもいい。それゆえに「子どもは王様」として非常に大切にされているのであると思う。共和国の未来はほんとうにすばらしいバラ色に包まれているといえるのではないか。

六月二十五日、「反米闘争デー」に、私は婦人たちの熱狂的な主席への忠誠心と敬愛の情をつぶさに見て涙をおさえることができなかった。長くつづいた封建社会のもとで更に半世紀近くに及んだ外国の支配と隷属のもとで忍従と差別の生活を強いられてきた朝鮮婦人のことを、われわれはその歴史によって知っている。それを思うと婦人の解放を心から喜び主席に感謝しているその日の婦人たちの感激的光景はいたいほど私には理解できた。あらゆる束縛から婦人を解き放し、男性と並んで人間としての尊さを婦人にまで及ぼした主席の深い配慮に対して婦人が熱狂的に感謝するのは当然である。婦人の社会的地位を高め、婦人を人間として解放したのはまさしく主席であったことが、実によく理解できた。婦人と子どもにたいする主席の配慮は特別であるといえる。

私は、主席の高いヒューマニズムの精神を何よりも高く評価したい。国の内外の政策の中にそれはあますところなく表現されている。国防・軍事・外交・政治・経済・教育・医療・芸術・スポーツの全ての領域にわたって主席の創始した主体(チュチェ)思想は深く浸透し、全ての発展の基礎にこの主体思想があることを私は事実を通じて知ることができた。

人民への愛、祖国への愛はやがて南北統一による南朝鮮の同胞への愛にも及んでいるし、インドシナ三国人民への連帯のなかにも主席の高いヒューマニズムはつらぬかれて表明されている。

私はここで朝鮮民主主義人民共和国の発展の基礎をなしている主体思想に再び思いをめぐらさざるをえない。その深い哲学的原理にもとづく主体思想は根源において人間への愛にあることを知ったのである。主体思想は単に朝鮮人民に民族解放の道を指し示したばかりでなく、世界人類のまえに人間解放の道を指し示したものとして、まさに画期的な思想であるということができる。それは根本において深い民族愛と、人間愛につらぬかれている普遍的なヒューマニズムの精神に裏づけられている。

朝鮮民主主義人民共和国の偉大なる発展の根源である金日成主席の主体思想が、人間中心の思想であることはいうまでもないが、最近この点に関して更に深い解明が各種文献に発表されている。少し長いが重要な意味をもつので引用することにしたい。

主席は、本年（一九七二年）九月十七日、『毎日新聞』記者代表団の提出した質問に答え、およそ次のようにいっている。

「主体思想とは、一口に言って、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設をおし進める力もまた人民大衆にあるという思想であります。言いかえれば、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力も自分自身にあるという思想であります。

…

わたしは、祖国の自由と独立をめざしてたたかう過程で、自己の運命は自らの手で切り開かなければならず、また切り開くことができるという確固とした信念をもつようになりました。

……われわれは、このような過程を通じて革命の主人としての自覚をもち、自己の力を信じ、それに依拠してすべての問題を自国人民の利益と自国の実情にかなうよう解決していくことが、革命と建設で堅持すべきもっとも正しい立場と態度であるという確信をいっそう強めるようになりました」

主体思想は、政治における自主、経済における自立、国防における自衛として具現され、わが国にもひろく理解されつつある。軍事・外交・教育・医療・学術・スポーツ等々において、主体思想がどのように開花しつつあるかは、すでにわが国にもあまねく知られており、特に外交における主体性は、国際的緊張の中にあって実にみごとにつらぬかれているといってもいい。

「朝鮮革命に主体思想を具現するうえでもっともさし迫った当面の問題は、祖国の自主的平和統一を実現することであります」と述べている主席の言葉のなかに、朝鮮人民の長い間の悲願がこめられているということができる。

革命家金日成主席の特質は、人民に対する深い愛情と高いヒューマニズムであり、さらにもう一つはその主体思想にあると私は書いてきた。しかしそのヒューマニズムと主体思想とは、その根が同じであることが、『毎日新聞』記者団の質問への答えの中にはっきりと示されていることは、私にとって大きな発見であった。

更に主席はつづけて次のように語っている。

「われわれが、漠然と重工業を発展させるとか、軽工業を発展させるとかいうのではなく、人びとを骨の折れる労働から解放するための三大技術革命の目標をかかげたのも、経済建設や技術革命それ自体に目的があるのでなく、それが人民に国家と社会の主人としての張り合いのある生活をもたらす手段とならなければならないという、わが

党の一貫した立場をはっきりと現わすものです。すべてのことを人間を中心にすえて考え、人間に奉仕させるのがほかならぬ主体思想の要求であります」

「人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定する、というのが主体思想の基礎であります。自然と社会を改造するのも人間のためであり、また人間のなすことであります。世の中でもっとも貴いものは人間であり、もっとも有力な存在も人間であります。われわれのあらゆる活動は、人間のためのものであり、その成果いかんは、対人活動をどうおこなうかにかかっています」

かぎられた枚数の中で、革命家金日成主席の人間像のすべてをいいつくすことはとうてい不可能であるが、その独創的で卓越せる主体思想によって具現されている朝鮮民主主義人民共和国の輝かしい諸達成を知るに及んでは、金日成主席という人はやはり偉大な革命家の一人であると考えざるを得ない。「敬愛する領袖金日成主席」をいただく、朝鮮人民は、その意味ではきわめて恵まれた羨ましい民族であるということができよう。朝鮮民主主義人民共和国には、支配と被支配、主人と召使い、搾取と被搾取の関係はまったく存在しない。ただあるものは慈愛にみちた父と、父を敬愛する子供たち（人民たち）の美しい関係だけである。革命的人間像の一つの典型を私は金日成主席の中に見出すのである。

われわれの訪朝以後、日本の政界、学界、言論、報道の各界の知名人が数多く共和国を訪れるようになった。そしてその多くは主席と謁見し、国の内外政策について、主席の話を聞いて帰国した。その都度共和国の実態はテレビ、ラジオ、新聞紙上で伝えられ「近くて遠かった」共和国は日一日と近くになりつつある。共和国への理解はそれにつれて日増しに深まりつつあることは確かだ。今後日本からの訪朝は日をおって拡大していくであろう。にもかかわらず、共和国からの来日は政府の差別・敵視政策にとざされて未だに微々たるものである。在日朝鮮公民の

祖国への自由往来と合わせて主権尊重、平等互恵、平和共存の原則にもとづき一日も早く自由往来を実現すべきであることは言うまでもない。

共和国の建設のテンポはまさに日進月歩といわれている。一年前の共和国はもはや今日の実態を写していないようだ。テレビや新聞によってもそのことがうかがわれる。二年以上も前に訪問したわれわれの共和国観はその意味ではもはやあまりにも古すぎると言えるかもしれない。本年四月、朝鮮社会科学院の招きで訪問した未来社編集長の松本昌次君のつぶさな報告によって、私はさらにその感を深くした。

私の訪朝以後、今日までの二年間の空白をうずめるために朝鮮関係の記事に特別の関心を私ははらってきた。その後主席との会見記も数多く紙誌面に出るようになった。それらを私はつぶさに読んで、私の主席と共和国に対する考え方が、基本的にはまちがっていなかったことを確認することができ、これは私にとって大きな幸いである。

訪問後、私は請われるままに、テレビに、新聞に、雑誌に主席に逢った印象、共和国の発展のもようを、できるだけ主観をまじえずに、具体的にのべた。しかし当初多くの人は、殆ど私のすなおな印象に疑問を感じたかもしれない。あまりにも話がうますぎる、朝鮮民主主義人民共和国がそんなにいい国か、金日成主席とはそれほどすばらしい偉い人間か、という疑問は率直にいって多くの日本人にもたれたかもしれない。しかし私は曇りないすなおな目で主席・共和国を見るならば誰もが同じ結論に達する筈だと深く考えていたし、種々の非難やそしりを惧れなかった。

今、そのことが日一日と明らかになっていくことは、結局、私もすべての人も同じ目をもっていたということを示していると考えて、心から嬉しく思っている。金日成主席こそは、ほんとうにすばらしい人だと声高らかにいうことができる。

最後に主席にお会いした折のエピソードを一つつけ加えておきたい。一時間半の会見がまさに終らんとし、主席をはじめ居合わせた人がすべて立ち上った折、私は通訳氏のところへ近づき小さな姫のしを主席に渡してくれるよう頼んだ。日本の秀れた劇作家木下順二さんの、九十二歳になる御母堂が主席の万年長寿を祈願して作られた真心のこもった記念の品物と私は説明した。はじめけげんな顔をしていた主席もやっとその意味がわかったらしく、大変にこやかに「どうも有難う、木下さんのお母さんにくれぐれもよろしく、いつまでも長生きして下さるようにお伝え下さい」と言われた。帰国の前日、主席の代理として対外文化連絡協会委員長が来訪され、主席からのお土産として数々の品物が木下さんのお母さんへと届けられた。思いがけない主席からのお土産品に木下さんのお母さんがどんなに喜ばれたかは想像に余りある。ここにも主席の深い思いやりと礼儀に厚い人柄を見ないではいられない。

日本・未来社社長

一九七二年　十月

# 「いまはすべての人民が白米を食べられるようになりました」

日本　安江良介

金日成主席との会見は、一九七二年十月六日に私（安江）の単独会見として行なわれた。平壌市の郊外の山中にあって湖ともいうべき美しい灌漑用の貯水池に面した政府招待所の一つに私は宿泊していたが、当日の朝、主席はわざわざ政府招待所を訪ねてこられ、六時間半の長時間にわたって話しあうことができた。

その日は美しい秋晴れの日であったが、貯水池を眺めながら農業建設の成功が話題になった。すると主席は「李飯という言葉を知っていますか」と訊ねた。私は知りませんと答えると、主席は「そうでしょう」と楽しそうに大笑して説明した。「李飯というのは白米のことです。なぜ李飯というかといえば、昔は、白米を食べられたのは李王朝の王家の人たちだけで、地主でさえいつもは食べられなかったからです。日本植民地時代には、一生に一度でよいから腹一杯に白米を食べたいというのが、民衆の希いであった。親の葬式にでもせめて白いごはんを出したいと思っても、結局は粟めしの上に一センチほど白米を盛りつけて白米のようにみせかけたものしか出せなかった。だが、いまはすべての国民が白米を食べられる」

この主席の言葉に対応した話を私はあらゆるところで聞いた。即ち「瓦の屋根の家に住み、絹の着物をきて、白米を食べたいというのが長年の私たちの憧れであった。いまは私たちは、この三つとも自分たちの手にしている。昔の地主の生活と同じである。いや、国家の保障によって大学までも無料でゆけることにかつての地主層でさえ昔より良いといっている」というのである。この言葉には嘘はないと私には思えた。勿論、国民生活には不十分な点が多いことは主席はじめ多くの人たちが率直に認めている。

だが、注目すべきことは、衣食住に加えて教育・医療という国民生活の基本的な課題において十分な保障がなされていることであり、また一つには、そのことが、かつての歴史との比較によって、国民につよい自信を与え、将来への楽観に繋がっていることである。それは、国際的交流への積極的姿勢と統一への具体的志向となってあらわれているともいえる。

金日成主席は、あらかじめ提出した編集部の質問に積極的に答えられた。質問は多岐にわたり長文でもあるので、省略するが、主席の回答で印象的に思えたのは、朝鮮革命において、内部的困難が多かったことをかくそうとしなかったことである。事大主義と官僚主義がいかに悪弊をもたらしたか、その克服のためにいかに努力してきたかを、闊達に話して尽きることはなかった。午餐会の席上においても、社会主義革命における知識人の役割について興味深い事例が話された。

また、朝鮮統一の展望については、自信にみちた冷静な見通しの反面、意外とも思えるほどにきびしい指摘があった。統一問題および日朝交流に関しては、全朝鮮的な視座に立った考えに接することができた。

とりわけて、「日本の言論は南朝鮮の野党の声を紹介してほしい」という主席の希望は印象深く思えた。

日本・政治理論雑誌『世界』編集長

一九七二年十二月

# 金日成主席との会見

日本
奥山えみ子

金日成主席と我々代表団との会見は、最終日程の十一月十六日、十時四十分から行なわれた。

## 〃朝鮮の父〃の笑顔

私たちが案内に従ってエレベーターを降りたところに、主席は柔和な笑顔で、私たちに握手の手をさしのべながら待たれていた。さすがに、朝鮮人民が心から敬愛し父と仰ぐにふさわしい人、これが私の第一印象であった。私たちは、主席を中心に列席された職業総同盟の委員長・副委員長・国際部長等をはじめ数名の共和国側の人びとの列席の中で主席と会見した。

会見は、初対面の堅苦しさなどみじんも感じさせない和やかな雰囲気の中で、約一時間余にわたって行なわれた。

まず主席は、日教組代表団が朝鮮を訪問したことを熱烈に歓迎すると前置きして、去る四月十五日の主席満六十

歳の誕生日を祝って、日教組・各県教組からお祝いの言葉や品々が贈られたことに厚く感謝する、というあいさつを述べられた。そして、「日本国内において日教組が常に在日朝鮮公民の民族教育のために協力し、また日本と朝鮮の自由往来のために尽力していることをよく知っているし感謝している。今後とも日朝両国の教育者が互いに友好親善を深めていってもらいたい」と、非常に真心のこもったあいさつがあった。これに対し、槇枝委員長は日教組代表団の朝鮮訪問に対し、金日成主席が格別の配慮をして下さったことに深く感謝すると前置きして、「日本国内における私どもの運動をおほめいただき恐縮である。日教組は、一九四七年結成以来、一貫して日本の平和と独立・民主主義のためにたたかい、二度と再び侵略戦争をおこすことのない日本人を育成するために努力をつづけている。しかし、日本政府が未だに朝鮮を認めていないことや、今日、日本国内に軍国主義復活の動きがあることなど、私たちの今までのたたかいはまだまだ不十分であったことを深く反省している。これからさらに、力強く運動を発展させて行きたい」と答え、相互の友好と連帯をいっそう深めることができた。

## 主体(チュチェ)思想に基づく総インテリ化

つづいて、会談の内容は次第に教育問題に移った。私たちは、次の世代を革命家として育てることに基本をおいたこの国の主体思想に基づく教育原理について、その創始者であり、指導者である金日成主席自身からうかがうことができた。

それは、九日間にわたる私たちの、教育を中心とする具体的な見聞の内容について、一つ一つ系統的に整理し、

理論的にまとめた総括のような説明であった。

日本の植民地支配の時代における、住民の八〇%という文盲をなくすことから、この国の教育は始められた。そして今、すでに六十万の民族幹部を擁し、さらに、全人民のインテリ化に向けて努力がつづけられているということである。

共和国では、教育そのものが革命事業である。金日成主席は、「私たちが忘れてはならないことは、朝鮮の未来のために、青年の未来のためにたたかうことである。これから育つ子どもたちの教育は、未来を育てる貴い事業であるから、未来のためには何ものも惜しんではならない」と述べられた。

この話を聞きながら、私は平壌市の中央部の十一万平方メートルという広大な土地に、十三階建、五百余のサークル室と実験室をもち、その他図書館・体育館・映画館・劇場まで完備した広壮な学生少年宮殿で、楽しそうに課外活動にとりくんでいた子どもたちの、幸せいっぱいの姿が目に浮かんできた。

こうした中で、金日成主席は、七二年九月からはじめられた十年制高等中学義務教育を五か年で完成し、その上の高等専門学校および大学教育によって、全社会のインテリ化を実現するという計画について話された。

金日成主席は、年間を通じて、工場といわず学校といわず、一つひとつの職場・農村、そして託児所・幼稚園…と、すべての職場に何回となく足を運び、直接指導や話し合いをされている。だから、主席の頭の中には朝鮮の国のすみからすみまでの実情が、はっきりと描かれ、どこの農村が今どんな状態になっているか、一つひとつの学校の経営の情況まで手にとるように知っている。

金日成主席は、今年九月から実行期に入った十年制高等中学義務教育の実施についても、「ある郡では五か年もかからず二年ないし三年でやれると言っていた。あそこは、それが可能だと思う。このような意気ごみを見ると、

全国的にもっと早くそれは達成されると思うが、それにつけても問題なのは教員不足である。その早いテンポに合わせて養成することができない」と言う。共和国では、こうした教員不足の中でも、決して一学級四十人も五十人もという、すしづめ学級などにはしていない。人民学校三十名以下、高等中学校でも最高四十名の学級編制である。現在、教員の資格をもちながら他の職についている者を教職にもどるよう呼びかけているという。また、一九六九年から、教員の給与を一律に三〇％引き上げ、その待遇についても改善が行なわれている。このような措置によって、十年制高等中学義務教育の達成も当初の予定より期間を短縮して実現されるだろう。また十年制高等中学義務教育をうまく達成するために、幼稚園における準備教育が必要である等々、主席の教育に対する熱意のほどを披瀝された。

*　*　*

以上のような長時間にわたる教育問題を中心とした会談のあと、私たち代表団が提出した、①日朝国交回復問題、②南北統一問題、③共和国における憲法改正問題の三点にわたる質問について、回答があった。

日教組婦人部長

一九七三年　四月

# 金日成主席にお会いして

日本　飛鳥田一雄

私たち日本全国革新市長会代表団は随員、記者団とともに、金日成主席誕生六十周年の意義深い年一九七二年五月に、隣国朝鮮民主主義人民共和国を訪れた。（当時、飛鳥田一雄氏は日本全国革新市長会訪朝代表団団長であった。——編集部注）

私たちの平壌滞在はきわめて短い期間であったが、何よりも朝鮮人民の敬愛する領袖金日成主席にお会いし、約五時間にわたって親しくお話をきくことができたのは何にもまして大きな喜びであったし、生涯忘れることのできない感銘をうけた。

私たちはその間、金日成主席の偉大な主体（チュチェ）思想と、それにもとづいた社会主義建設の模様を見せていただき、朝鮮革命の経験についてもきくことができ、強い印象をうけた。

## 大きな包容力、暖かいふんい気

その日—一九七二年五月十四日、私たち代表団一行は、平壌近郊の湖のほとりにある招待所で主席をお待ちしていた。

さわやかに、高く晴れわたった朝鮮特有の青空のもと、みずみずしい新緑が映える、それは実にすばらしい風致であった。

この湖は驚くなかれ、海抜五百メートルもある高地につくられた人造湖で、日本でいえばちょうど日光の中禅寺湖ぐらいの大きさに思えた。

朝鮮人民のえい知と社会主義建設の一面をみる思いで、雄大な眺望に目を奪われていると、急にあたりが騒がしくなった。

みると、湖の向こうから自動車がこちらに向かってやってくる。みるみるうちに私たちのすぐ目の前にきて止まった。

はじめてお目にかかる金日成主席はどんな方だろうか…と自動車の方に歩みよったが客席には誰もいない。おやっと思ってよくみると、なんと党帽をかぶった、写真でおなじみの主席が助手席に座っているではないか!

私は正直いってびっくりした。日本でならば、後の座席に悠然とかまえていて、秘書がうやうやしくドアを開けてから降りてくるのが普通である。

ところが金日成主席は、助手席からご自分でドアを開け気軽にひょいと降り立った。そして真っ直ぐに私の方に歩みより「あっ、飛鳥田さん、よくいらっしゃいました。お待たせして恐縮です」と、大きな、あたたかい手でしっかりと握手をされるのであった。その時私は、あ、人びとをひきつけるのはこの手なんだなあ、と思った。主席は親しく私の肩をだきかかえ「それじゃお茶でも飲みながら…」と階段をのぼり、建物の中の方へ案内するのであった。

きわめて率直でありながら親しみにみちた応待であった。一国の指導者としてかなり構えた儀礼的な応待を想像していた私たちにとっては意外でもあり、驚きでもあった。主席の、飾るところのないおおらかな態度には、私たち一同大いに敬服したものである。

ともに階段を登りながらも主席は「ほんとによくいらっしゃいました」「平壌に着いてから何か不便なことはありませんか」と、こまごまと気を配り、心をつかって下さるのであった。

金日成主席の言葉や身のこなしにはリズム感がみちあふれ、接する人びとをみ了しひきつけるものがある、と私はすぐに気がついた。大きな包容力であり、おおらかで暖かいふんい気である。

言葉は太くて丸味と張りがあって生き生きとしており、論理には説得力と弾みがある。主席の話術には世界最高級の味わいがあるように思われた。

それにしても、何と親しみ易い人柄であろうか。初対面の人にも一ぺんで固さをとり、気づまりをほぐし去り、もう百年の知己のようにざっくばらんにお話することができ、冗談さえいえるようなふんい気をつくりだす豊かさ。これについては、代表団、随行記者団一同がひとしくのべていたところである。

主席の人柄の偉大さ、接する人びとをひきつけ、納得させる魅力、会った瞬間にいだかせる信頼感…そういう気

質と特性について私なりに感じたことは多いが、ごく限られた時間での印象であるので、これ以上の言及はさし控えたい。

むしろいろいろ個人的な特性、人柄というものが、朝鮮における社会主義建設と祖国の統一、国際関係分野などで戦略、戦術となり、組織化されていくところに大きな意義があるというべきであろう。

そういう意味で、金日成主席のような、まれにみる指導者をもった朝鮮民族は幸せであると思う。

私は平壌に行ってみて始めて金日成主席にたいする在日朝鮮公民、総聯の人たちの敬愛と信頼の念がどうしてあれほど深いのかという理由が、はじめて実感としてつかみ得たように思った。

帰国後私は家内に「あなたは金日成主席にほれてしまいましたね」とよくいわれたものだが、まさにその通りである。私は、朝鮮民族の偉大な指導者としてばかりでなく、アジアと世界のすぐれた指導者の一人でもある金日成主席にいまだにほれつづけているわけである。

## 主体(チュチェ)思想は革命と建設の羅針盤

接見の席上金日成主席は、約五時間の長きにわたり、私たちが提起したいくつかの問題について、懇切に、明快にのべられた。

まず国際情勢から、朝鮮民主主義人民共和国における行政単位の組織と地方政権機関の機能と役割、教育体系と教育内容、在日朝鮮公民の問題と朝・日両国人民間の親善、団結、沖縄の問題、その他についてであった。

ここで主席がのべられた内容は、『日本全国革新市長会代表団との談話』として平壌で出版され、日本でも多くの人たちによって読まれている。

金日成主席のすべての談話を貫通しているのは、主席が創始し発展させてきた偉大な主体思想であった。

私はこの部門の専門的な学者ではないので、主体思想について多くを語ることはできないが、私なりに深く感ずるところはあった。

主体思想は、金日成主席が組織し指導した、栄光と苦難にみちたあの輝かしい抗日革命闘争の時期に創始され、社会主義革命と建設、祖国の統一のためのたたかい、国際共産主義運動の中で発展させたものであると理解している。

金日成主席は、主体思想が何であるかについて次のようにのべている。

「主体思想とは、一口に言って、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設をおし進める力もまた人民大衆にあるという思想であります。言いかえれば、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力も自分自身にあるという思想であります」

主席はまた次のようにものべておられる。

「主体性を確立するということは、革命と建設のいっさいの問題を独自に、自国の実情にそくして、そして主として自分の力で解決していく原則を堅持することを意味する」

金日成主席は自ら創始された主体思想にもとづいて、革命と建設にかんする朝鮮労働党と共和国政府の指導理論を確立した。

このようにして主体思想は、朝鮮の革命と建設において確固とした自主性と限りない創造性を導きだし、政治に

おける自主、経済における自立、国防における自衛の原則となって輝かしく具現している。

とくに主体思想は、人間こそがもっとも貴重で力のある存在であるという根本から出発して、人間を大切にし、人間を中心においてすべての問題を考え、解決していくという思想であるだけに、全人民の自覚的な前進活動を導きだし、めざましい社会主義建設の成果となってあらわれているのであろう。

主体思想は今や、朝鮮人民にとって革命と建設の羅針盤となっているばかりではなく、プロレタリア国際主義とも完全に合致しているところから、日本や世界各地でひろく研究され、各国人民のたたかいを励ます思想ともなっている。

## 人民政権機関

金日成主席は談話のなかで「われわれの人民政権機関は、人民の利益のために奉仕することを基本使命としています。まさに、これが、わが人民政権機関の特徴です。われわれは、『政権機関は人民の忠僕である』というスローガンをうちだしました。いいかえれば、われわれの人民政権機関は人民の召使であります」といわれたが、このことは同じく日本の地方自治体の長たる私たち一同にとって大いに教えられたものであった。

朝鮮における地方政権機関の機能と役割、郡の役割に関する構想は、金日成主席の天才的な理論の具体化であるように思われる。これは、どの社会主義国家でも、社会主義建設路線の一つのモデルになるのではなかろうか。

もし機会があれば、もう一度朝鮮民主主義人民共和国を訪ねて、もっぱらこの問題を中心にじっくり教わり、研

究してみたいものだと思っている次第である。

教育の面でも主体を確立することがもっとも重要な問題となっている。

金日成主席は「教育事業は革命事業であり、教育家は革命家である」と重ねて強調されたように、朝鮮では学校教育事業でも主体を確立することがもっとも重要な問題となっている。

学校教育で主体を確立するということは、外国のものを機械的にまねるのではなく、自分の国のものを基本として教育するという意味である。そして、すべてを自分の頭で考え、自分の立場を堅持していくように教えられている。

朝鮮ではまた、教育の分野ばかりではなく文化、芸術、科学、技術などすべての分野で、人民に服務し、人民の好むものを発展させ、自分の国の資源をよく利用するために取組んでいた。

それに、私たちが大いに感銘をうけたことの一つに、上から下まですべての人びとが同じようにつづけている学習運動であった。誰でも一日最低二時間以上の学習をやり、そのほかにいろいろの学習をする制度と学風が確立されていた。

朝鮮ではとくに、すべての人が労働を愛するように教育し、教育と生産労働を密接に結びつけておこなわれていた。働きながら学び、学びながら働くというのが朝鮮における教育の基本の形であった。

そして学生たちはみな一つ以上の技術をもち、一つ以上の楽器が扱えるように教えられている。

私たちが訪問した平壌のトンフン女子高等中学校でも、みんながカヤグム（伽倻琴）などの民族楽器をはじめピアノ、チェロ、バイオリン、フルートなど洋楽器の何れかが弾けるようになっていると、きかされた。

席上金日成主席は、日本に居住する朝鮮公民の問題、および朝・日両国人民間の親善、団結の強化についても懇切なお話をされた。

## 日朝両人民間の親善団結の強化について

主席は、民族教育、祖国往来など在日朝鮮公民の民主主義的民族権利を守り、祖国の自主的平和統一を実現するための正当な活動にたいする日本国民の支援にたいし謝意を表明された。

また日本で、「日朝友好議員連盟」が結成されるなど、朝・日間の友好と交流、関係の改善と国交の正常化をのぞむ声が高まり、そのための運動が広く展開されていることを高く評価し、朝・日両国関係改善への基本的立場と展望についてのべられた。

主席も指摘されたように、日朝関係の改善と国交正常化を妨げているのはとりもなおさず日本政府の朝鮮にたいする非友好的、敵対的な政策にあるので、こんご日朝関係を前進させるためには何よりもこれを是正していくことが急務である。同時に、経済、文化、人事など多方面の交流を具体的に拡大していくことも必要である。

私たちは席上、このような日朝両国間の関係を改善し、親善を深める一環として、たとえば日本の横浜と朝鮮の咸興、新潟と清津間で兄弟、姉妹都市の関係を結ぶこと、平壌市人民委員会委員長（日本の市長にあたる）の日本招待計画などについてお話したところ、賛意を表明された。

さらに主席は、すでに日本側から申入れのあった朝鮮の芸術団の日本公演、朝・日双方の学校どうしや学生間の

交流、往来などもよいのではないかと言及されたのであった。

## 各地にみちみちた主体思想の豊かな実り

私たちは朝鮮民主主義人民共和国で、主体思想の力強い生活力と豊かな実りを到るところで目撃した。今日、社会主義工業国へと発展したこの国の社会主義建設のすべての分野において、目を見張るような進歩と飛躍的な発展をとげていることに圧倒され、感服した。

うっそうとした緑の並木に映える広々とした道路、林立する労働者たちの高層住宅団地、活気溢れる工場群、建設と技術のめざましさ、ますます充実する教育制度と施設、そのどれ一つをとってみても、そこには自主性と計画性、革新と躍進があり、はばたく気象がみちあふれていた。

このような躍動する現実の中から私たちは、全朝鮮人民が金日成主席を心から敬愛し、主席を中心とした一つの大きな家庭のように揺らぐことのない統一と団結がなしとげられていることを知ることができた。

限られた期間の短い滞在期間であったし、私は朝鮮の社会主義建設のことを深くは知らない。

朝鮮人民は、アメリカ軍によるあの徹底した破壊の中からどのようにしてこの建設をなしとげたのであろうか。金日成主席は「われわれは、なにもない廃虚のうえに都市と農村を建設し、工場を建てました」といわれたが、これは主席によって示された、世界でも始めて試みられた自立経済建設路線の輝かしい結実である。

朝鮮人民が「革命の首都」と誇らしげに語る平壌の場合、これが朝鮮戦争で文字通り完全な焼野原になった灰の

なかから生まれた都市とはどうしても思えないくらいのすばらしさであった。
全市が緑におおわれたように見える並木と色とりどりの花、都市の中に公園があるのではなく、公園の中に都市があるようだ。
緑といえば朝鮮では、どこへ行っても道の両側には、日本のみなさんに見せてあげたいような立派な並木が茂り、緑のトンネルをつくっていた。だから私たちの車は緑のトンネルの中を走っているようなものであった。
整然とした平壌の建物、それはすべて五階～八階建ての近代ビルであるが、それも日毎に新しい型へ、文化的なものへと建てかえられているという。なかでも立派なのが労働者住宅である。
建物の中をのぞくと、大ていの家は２ＤＫ、３ＤＫのととのったものだが、家賃が何と収入の三パーセント、その中に電気、水道代まで含まれているというから驚きである。
ざっと見た感じでもこの国の人びとは、一般的にいって日本での月収十五万円前後の暮らしをしているように思われた。
清潔で堅実——都市や農村、施設その他私たちのみたすべては、政治をも含めて、きわめて清潔であり堅実であった。思うにこの国の人びとの心もまた清潔で堅実なのであろう。

## 人の心も都市も農村も清潔で堅実

朝鮮の農村についてはどうしても一言ふれておきたい。

それほど農村の発展はすばらしいものであった。

いま朝鮮では、朝鮮労働党第五回大会の決定に従って、三大技術革命が力強く進められているが、その一つに、婦人たちを台所仕事から解放することと並んで、労働、生活、文化などすべての面で農村の水準を引上げ、都市と農村の差をなくすことがある。

朝鮮の農村ではすでに水利化、電化が終り、今や農村でも電力の多くを農作業に使用する段階に来ている。どんな山奥の農村にも電気はもちろんバスも入り、文化住宅や文化施設がととのえられている。

車で農村地帯を走ってみると、両側の協同農場（朝鮮の農村はみな集団化されて協同農場とよばれている）の田畑は非常にきれいに整理されている。

これは日本でのように小さな田畑ではなく、大きくてしかも整然と仕切られていて、そこにトラクターや耕転機が入りこんで協同で農作業をおこなっている。

農村出身で農業問題にくわしい山形市の金沢市長、上田市の小山市長の二人も感嘆するほど、朝鮮の農村は全く姿を新たにし、大きく発展していた。

たとえば、土質改良から区画整理、地盤形成などがすべて総合的にできあがっており、とくに水利化はすばらしい。

はじめに人造湖についてのべたが、全国いたるところに大きな人造湖が数多くつくられている。これらの湖は単に川の流れをせきとめるという程度のものではなく、下を流れる川の水を電力で何段にもつぎつぎと上の方へ汲みあげて、海抜数百メートルの高地にまで壮大な湖をつくりあげている。

湖がダムとなって、いざ大水といえばこれをひきうけて貯え、旱ばつともなれば放出して田畑をうるおし、田植

時にでもなればいっせいに水を流すのである。

これらの水は全国をまるで人間の血管のようにくまなく張りめぐらされた水路によってすみからすみまでゆき渡るのである。

そればかりではなく人造湖では養魚もおこなわれるし、風致づくりにも一役買っているというのだから、一石二鳥どころではない。

農村に限られたわけではないが、朝鮮のすぐれた医療制度についてぜひふれておきたい。

朝鮮では徹底した予防医学の立場である。つまり病気になってから大騒ぎするのではなく、病気にならないよう事前に予防するという行き方なのだ。

このような政策にしたがって全国の医者はそれぞれ地区担当制をとっていて、医師が一定の地域住民の健康について全責任を負うというシステムであって、これは主体の国らしい制度であると感心した。

もちろんこの国ではすべて国の責任、負担において無料治療、無料医療である。

## 祖国の自主的平和統一と各国人民の連帯のために

金日成主席は談話のなかで「われわれは、社会主義建設で困難な峠を基本的にのりこえました」とのべ、これまでの建設成果によって自立的な経済の土台がしっかりと築かれたので、こんごの経済をより早く、より立派に建設していくことができるようになった、明るい展望についてお話をされた。

そこで私は、一部の国で「週五日制」労働が実施されている事実を説明し、「朝鮮ではどうするのですか」とたずねた。経済と人民生活の発展に伴い、朝鮮でも当然「週五日制」の方向へ進むのではないかと思ったからである。

ところが主席はきっぱりと「飛鳥田さん、わが国では週五日制にする考えは毛頭ありません」と語った。

なるほど共和国北半部では社会主義工業化を達成し、人民の生活も安定している。

しかし南朝鮮はいまだに米軍の占領下にあり、祖国の統一もできていないし、南朝鮮の同胞は大きな不幸と苦しみのなかにある。

だから朝鮮人民は外勢をしりぞけ、一日も早く祖国の統一をなしとげなければならず、そのためには北半部での建設と生産を少しでもゆるめるわけにはいかない。

いま共和国北半部の人民は、クギ一つをつくり、工場一つを建てる場合も、衣料と食糧の増産をする際も、自分たちだけが楽に暮らすためではなく、つねに南の同胞を思い、統一のあかつきにはいち早く南の兄弟を救援し、力を合わせて建設をすすめるために立ちあがっている。

アフリカにしても、ラテンアメリカにしても、多くの人民が独立と建設の途上で苦しいたたかいをつづけているのだ。

このように考えてくると、とうてい「週五日制」というような自分本位で安易な道をどうして考えられようか、というのである。

そして金日成主席は「われわれは週六日間働いて結構です」といわれたのである。

金日成主席のこのきっぱりとした言葉から私は、朝鮮における社会主義建設と祖国統一、さらには各国人民にた

いする国際連帯にかんする主席の原則的で毅然たる立場を見、強い感銘を禁じ得なかったものである。

*　　*　　*

横浜市長として、日本の市長としてははじめて朝鮮民主主義人民共和国を訪問し、親しく金日成主席にお会いしてから早くも一年の歳月が流れた。私はいま当時をふりかえりながら感慨を新たにしている。

この一年間に朝鮮でも国際情勢にも大きな前進がみられた。

朝鮮民主主義人民共和国では昨年十二月の最高人民会議で社会主義憲法が採択され、金日成首相は新たに設けられた国家主席に推戴された。

朝鮮の社会主義建設でも大きな前進があった。さる四月に開かれた最高人民会議第五期第二次会議では、すでに昨年九月から実施された全般的十年制高中義務教育および一年制学校前義務教育をいっそう発展させるための措置がとられた。

高校段階までの義務教育化を意味する、この全般的十一年制義務教育の実現は、世界にも例のない画期的な出来事であった。これは朝鮮における社会主義建設がどの段階にまで到達しているかを示す、一つの輝かしい指標でもあった。

とくに朝鮮の南北統一問題で、歴史的な進展が見られたことは、ひとり朝鮮民族にとってのみならず私たちにとっても喜ばしいことである。

朝鮮では昨年、南北間に高位層の接触があった後七月四日の歴史的な南北共同声明が発表され、その後平壌とソ

ウルで交互に赤十字会談と南北調節委員会がひらかれるようになり、南北間の具体的な交流と合作、緊張緩和と軍縮について話し合う段階までできた。

だが南北対話ははじまったもののアメリカや南朝鮮当局の不誠実な態度のため、南北共同声明の合意事項は実現されず、軍事境界線をめぐる緊張と軍事的対じ状態は依然として解消されていない。

日朝間で、横浜や咸興、新潟や清津など両国の港湾都市を兄弟、姉妹都市にしようという親善と平和の話合いが進んでいる反面、同じ朝鮮の南半部では、釜山や浦項などのように、どんどん軍事化が進められ、各港湾がいわゆる「民防空訓練」という名の、挑発的な軍事騒動が定期的に強行されている。これはまことに遺憾なことであり、和解と統一、平和への挑戦としか受取れない。

このような状況のなかでさる四月、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議は「祖国の自主的平和統一を促進するため外国の内政干渉を終らせることについて」決定が採択された。

決定では、南北の対話がおこなわれている情勢のもと外国勢力の干渉を除去することが強調され、南朝鮮駐留米軍の撤退と「国連軍」および「国連韓国統一復興委員団」の解体、国連における朝鮮に関する不当な決議の取消しと朝鮮民主主義人民共和国にたいする正当な取扱と朝鮮問題の討議妨害排除などを要求しており、それを各国の政府や国会にひろく訴えた。

会議ではとくに、南朝鮮から米軍が出ていくならば共和国の軍隊をみずから二十万以下に縮小することを宣言した。これは、南北間の緊張緩和と祖国の自主的平和統一を願う共和国政府の真しな立場とゆるぎない自信に裏づけられた主動的な措置であって、南北朝鮮人民はもちろん、全世界の人びとからひとしく歓迎されている。

また最近、朝鮮民主主義人民共和国を承認する国が相次ぎ、その国際的地位はかつてなく高まり、南朝鮮駐留米

軍の撤退と朝鮮に関する不当な国連決議の取消しを要求する声も高まっている。これらの事実もまた、南北朝鮮の統一によい影響をあたえているように思われる。
朝鮮人民の祖国統一のための正当なたたかいを一貫して支持している私たちは、朝鮮にたいする外国の干渉を終らせ、朝鮮の自主的平和統一を実現するための朝鮮民主主義人民共和国の今回の主動的な措置と訴えを支持し、その実現のためにいっそうの努力を惜しまないであろう。
日本政府も当然、アメリカと南朝鮮への一辺倒政策を改め、南北朝鮮にたいし均等な政策をとるべきであり、朝鮮人民の自主的平和統一に寄与する方向で行動すべきである。まして従来のように、一方的に南朝鮮の肩をもち、共和国側を敵視する態度はとるべきではなく、国連における態度でも反省すべきである。
そして朝鮮民主主義人民共和国にたいする非友好的、敵視政策を改変し、互恵平等、平和五原則にのっとり、日朝間の関係改善をすすめ、国交正常化へいっそう力をつくしたい。こうすることこそが、日朝両国人民の利益に合致するばかりでなく、日本とアジアの平和にも大きく寄与する道でもある。
私たちが一年前の訪朝時に提起したいくつかの親善友好促進のための懸案はまだ実現されてないままである。
私たち革新市長会代表団ばかりでなく、日本から多くの人びとや代表団が朝鮮民主主義人民共和国に受入れられ、厚遇をうけている。有難いことではあるが、反面誠に心苦しい次第である。
私たちはいま、平壌市人民委員会委員長の日本入国を実現させるとともに、第二次革新市長会代表団の派遣のために最大限の力をつくしているところである。

日本・横浜市長

一九七三年　六月

# 目に浮かぶ主席の姿

日本
岩井　章

金日成主席にお会いしたのは今度がはじめてですから、これは、まったくの印象記にすぎません。また、不正確なものも入っているかもしれません。

しかし反面、第一印象とか直感といったものの中に、案外鋭いものが含まれていることも、私たちが度々経験するところです。

私たちは昨年十一月、朝鮮民主主義人民共和国を訪問いたしました。

朝鮮職業総同盟の招待により朝鮮各地を約三週間旅行し、多くの事実を見、多くの人びとと話し合いました。

その中の最大のハイライトが、主席にお会いしたことでした。

私たちが主席とお会いしたのは、もうかなり風の冷たい季節でした。場所は、招待所と呼ばれているところで、温泉のでるところでしたが、日本式の温泉とは大分趣が異なっていました。

金日成主席は、私たち一行が車でつく、その建物の玄関の外で、待ちうけていました。

早速、初対面の挨拶、そして大きな手で一人一人と握手しました。

私は、お会いできて心から嬉しいという意味のことをのべたように記憶しています。
主席の顔が思いのほか、真黒に陽焼けしているのが大変印象的でした。
背丈も、体つきもがっしりして、写真のとおりでしたが、顔の色だけは、一寸意外でした。だがこれも、前後五時間近くにわたる話し合いの中で、当然だと思えました。
一年中、工場、農村、山、畑、海と朝鮮全土をかけまわっているそのための陽焼けだと気づいたわけです。
さて主席は早速、気軽に私たちの真中に立って記念写真をとりました。
そうして、たしか、これから丁度、農村の視察にでるところだから、私に車で出かけようといわれたと思います。
大きな手で自分の乗用車のドアを開けて、私を押しこむように乗せました。
そして、ご自分も反対側から気軽に乗りました。
助手席には、日本人と間違うほど、日本語のうまい通訳さんが乗りこみ、早速車中での気軽な話が始まりました。
「こうやって毎日、現地を指導して歩くのは大変ですね」
と私がいうと、
「とんでもない。私は指導などしません。ただ労働者や農民から話を聞いて歩くだけですよ」
と笑いながら答えました。
私は、
「それこそが指導だと思います」
とのべたのですが、本当にそうだと思います。
偉い人が人を集めて長い演説をするのが、指導だと思いがちですが、現場へ出向いて労働者、農民の実情や経験

を聞いてこそ、もっとも大衆的な指導だと思います。
やがて金日成主席は、まわりのたわわに実った水田の真中の、いわば自動車が通るのにいっぱいといったたんぼ道で、車を止めるようにいいました。
主席の話によると、ここは海岸を埋め立ててつくった水田だそうです。海水による塩分を完全にだして、稲をつくることは、素人の私にも大変なことだろうと想像がつきます。
主席は、大きな手を動かしながら、今年の稲作の状況をこの地区の党書記、農業協同組合の管理委員長の二人に大声で聞きました。
二人の地区幹部は、ニコニコ顔で、風を吹きとばすような大声で、「五トンぐらいにはなりそうです」と答えました。
多分一ヘクタール当りのことのようです。
「昨年は、一・五トンだったから三・五トンふえたね」
と、主席も相好をくずしながらうなずきました。
そして、三・五トンを一キログラム六十チョン（銭）で政府が買いあげ、これを協同組合員で平等に配分すると、一人当りどのくらいの増収になると、数字をあげて説明してくれました。
主席は、そばの幹部をふりかえって「君の月給はいくらかね？」と聞いたようでした。
その幹部が、いくらいくらと答えますと、主席は、この外務省の同志より農民の方が、どのくらい収入が多いといって大変満足そうに、大笑いなさいました。
かなり風の強い、田のあぜ道での主席の姿です。

ふたたび主席の乗用車に乗って、一まわりして私たちは、さっきの招待所にもどり、いろいろ主席と本格的な話し合いに入りました。

精かんな体つきと顔、しかし一年中労働者、農民の中にあって、実地指導する自信、それらは主席の長い革命闘争の中で、鍛えられたものでしょう。

主席は六十歳といわれましたから、革命活動に身を投じて以来実に、半世紀にわたる革命一筋の闘いの道のりです。

この革命の理論と経験とが、ゆったりと、ざっくばらんな自信のある人柄をつくりあげたのでしょう。

大変おだやかな口調でまず、主体(チュチェ)思想についてじゅんじゅんと話してくれました。

政治において自主、経済では自立、国防では自衛、この三本柱からなる主体思想は、この国の土台であり、骨組みです。

主席はこの間、タバコをさがして口にし、私たちにもすすめてくれました。前に聞いていたところでは、主席はタバコを喫わないとのことでしたが、今目の前にいる主席は、タバコを喫っています。おそらく、ご自分の健康のことを考え、ただ口の中でスパスパとやっていただけかも知れません。しかし、私たちには、いかにも人間らしい主席の一面と感じられました。

工業と農業を同時に発展させるといわれているように、この国は、工業国家であると同時に、農業政策もみごとに成功しています。

川の水を六十メートルもの上まで、二段ポンプで押し上げて、それを貯水池にためて、飲料水、灌漑用水に使っています。

小高い山腹に、一番上が果実、次が野菜、一番下が稲作と順々に水を使って効果をあげています。
この農作物は全部、政府が高い値段で買い上げて農民生活を守り、今度は一般労働者、都市生活者に安い値段で売っています。
この国は、かなり北ですから綿はとれません。そこで、この国独得の葦を原料とした繊維や、石灰石からつくったビナロンという繊維製品が、全国の労働者の作業服として使われています。
私たちは、主席の配慮で、ある日特別飛行機を仕立ててもらい、見に行きましたが、ここに主体思想が生かされていました。
経済における自立とは、こういったものでした。
足りないものは外国から輸入することをこの国でも決して拒否していませんが、もっとも重要なものは自分の国でつくるということです。
これは私たちの日本が、大いに学ばなくてはならないところです。
食料品でも何でも、安くさえあれば、外国から買うといった姿勢はとっていないのです。
主席との話し合いは、昼食をはさんで五時間近くおこなわれました。
昼食時になると主席は、いちいち料理を私たちの皿にうつし取って、心からのサービスをしてくれました。
そして、軍国主義日本のこと、アジア人民との連帯のことをエネルギッシュに語るのでした。
私たちは、主席の健康と社会主義朝鮮の発展、およびその成功を心から祈ってお別れいたしました。

日本・総評顧問

一九七三年　九月

# 金日成主席はアジアと世界を動かす人

日本
高木健夫

「敬愛する金日成主席が高木先生にくださった贈りものです」
五月の或る日の夜、多忙な時間をさいて宅をたずねてくれた朝鮮記者同盟の人がこういった。
「日本へ行ったらかならず高木先生におめにかかるようにとのおことばでした。奥様のご他界に心からの弔意をのべるよう、申しつかってまいりました」
日本の一介の記者にすぎない私のことをこれほどまでに気づかい、貴重な贈りものまで持たせてくれた主席の配慮に、私は思わず目がしらを熱くした。
朝鮮を訪問したときばかりでなく遠くはなれた日本にある無名の記者にたいするこの配慮、それは私一人だけのものではなく、日本人民との連帯のしるしである。
主席からの刺しゅうや朝鮮人参を手にしていると、私は二か月もの間、主席とともにすごしたたのしい日々をふたたび思い出さずにはいられなかった。

## 忘れることのできない光景

今でもはっきりとおぼえている。それは、一九七一年十二月三十一日のことであった。

私は金日成主席が毎年この日を平壌学生少年宮殿で子どもたちとともにすごすということを聞いて、そこにかけつけて待っていた。

夕刻七時三十分、世界を動かす政治指導者の姿が宮殿にあらわれた。

その瞬間、「万歳」の声で宮殿がどよめいた。前列にいた数十人の子どもたちが、「アボジ、アボジ」といいながら、主席のまわりにかけよりあまえるようにその腕にぶらさがった。

後ろにいた子どもたちも身をのりだし、はげしく手をふって涙をうかべながら「万歳」を叫んでいる。

波のように大きくゆれる子どもたちにつつまれて、主席の大きなからだも左右にゆれる。

満面に微笑をたたえながら、子どもたちの頭をなで、身をかがめて子どもたちの話を聞く主席の愛情のこもった姿に、私は胸が熱くなった。

はじめてみる金日成主席の印象は、強烈だった。

父母をなくした孤児を胸にいだいて抗日の聖戦におもむいた金日成将軍。

母の熱い愛情のこもったあの貴重な金で、ぼろをまとった子どもたちのために衣服をつくって着せた将軍。

金日成主席のパルチザン時代のエピソードがふと私の脳裏をよぎった。

毎年子どもたちとともに正月を迎えるという指導者が、はたしてどこの国にあるだろう。それも子どもたちから「アボジ」と呼ばれその腕や肩にまつわりつかれるような指導者がほかにいようか。世界各国をめぐり歩いた私も、いまだかつてそのような指導者を見たことも聞いたこともない。

「アボジ」に会ってうれしさをかくそうとしないこの国の子供たちの中に、私ははじめて、生涯をかけて探究してきた世界を動かす「アジアの新しい力」を見つけることができた。

私は東南アジア諸国を歩き、多くの政治家たちにも会ってみた。しかしそれだけではまだアジアを論ずることもできなかったし、いわんやこれからの世界の潮流をとらえることができなかった。

このようなときに、朝鮮から伝えられる報道、なかんずく、金日成主席が創始した主体思想を知った私は、朝鮮だ、朝鮮を知らずしてアジアを論ずることはできない、世界を動かす人物は朝鮮にいるのではないかと考えるようになり、それをこの目で自分の肌で確かめたいという衝動にかられた。

したがって、私の朝鮮民主主義人民共和国訪問は、私の記者生活にとって決定的な瞬間といってよい。それだけに、子どもたちにかこまれた金日成主席の姿を見たとき、私は自分の生涯をつうじてもっとも大きな感動をおぼえたのである。

宮殿の応接室における主席との初会見は、かぜはもうよくなりましたか、という主席のあたたかい見舞いのことばからはじまった。

私の手をつよくにぎり、からだのことを心配してくれた主席のことばに、私は胸が熱くなった。

主席は私が平壌に着いた瞬間から、病弱な私のためにいろいろと気をつかってくれた。

主席は、私がかぜをひいたことをどうして知ったのか、幹部をよこして、私の宿所をホテルから国賓用の宿舎に

移し、精密な検診まで受けさせてくれた。
平壌の医師たちは主席のことばにしたがって私の健康を精密に検査して腸が衰弱しているのはそしゃくが不十分であることに原因があると診断し、歯まで新しく入れてくれた。
十二月二十五日の夕刻に歯を抜いたのだが、二十九日には主席が送ってくれたリンゴを食べることができた。入れ歯としては驚異的なスピードである。それまで私は、リンゴをかじったことがなかったので、あまずっぱい味が胸の奥底にまでしみとおるようであった。まったく感謝のほかはない。
主席は、私が歯を新しく入れてもらいかぜもなおったことを話すと、非常によろこんで、宮殿の劇場で子どもたちの演芸会を見ようとさそってくれた。
希望にみちた新年を告げる鐘の音がひびき、公演がはじまった。主席は幕間のたびに私を呼んで子供たちの公演はどうかとたずね、外国の記者といっしょに正月をむかえるのははじめてだといって、にこやかに笑うのであった。公演が終わってから、主席が私を呼んでいるというので行ってみると、そこには今日の公演を指導した教師たちがいた。
主席はかれらに、私を親友として紹介し、いっしょに新年の祝杯をあげてくれた。
談話がつづいた。私は「こんど共和国を訪問するときには、主席が一九三〇年代に活躍された革命戦跡地をたずねて伝記を書きたいと思っています」と、話した。
すると主席はびっくりしたように両手をふって、そんなことをする必要はない、書くなら人民について書いてほしいといった。
はにかむようにしながら、顔を赤くほてらせた主席を見ながら、私は、（この人こそ真の人民の領袖だ）と確信

した。

主席のかたわらにいると、だれでもまるで両親にいだかれたように思われるという。その話には年来の旧知のようなあたたか味があふれていた。

—偉人の風格とはまさしくこれをいうのであろう……—

一介の記者にすぎない私を親友として健康から取材にいたるまでこまやかに配慮してくれる主席の心づかいに、私はただ深く感謝するばかりであった。

大きな感動につつまれながら、私は一九七二年の新年をこうしてむかえたのであった。

## 主体は世界の潮流

「あなたがたは、われわれの現地指導について多く話しましたが、われわれは指導というよりは学ぶために大衆のなかにはいっていきます。

…困難な時であればあるほど、大衆のなかに深くはいってかれらとすべてのことについて相談し、かれらから学ばなければなりません。

先生は人民大衆であります。われわれはつねにかれらから学びます」

一九七二年一月十日、主席の私たちとの会見はこのようにしてはじまった。

金日成主席の現地指導についてはすでに聞いて知っていたので、私は、主席の話を聞きながら、その根本には政

治よりも領袖と人民との間の切っても切れない血縁的関係があるということを感じた。
主席の配慮によって全国各地を自由に取材することのできた私は、降仙の労働者階級はもちろん、両親をなくした姉妹の家庭においても、金日成主席のあたたかい愛情を感ずることができた。
私たち一行が東海岸をおとずれたときのことだった。
西湖を中にはさんで六階だての建物が太陽の光を受けて、まるで絵のように建ち並んでいた。
「あれは何というホテルですか?」
私の問いに、同行した朝鮮の記者が答えてくれた。
「遠洋漁業の漁夫たちのアパートです。この西湖は漁港都市なんです」
私はさいしょどうしても信ずることができなかった。
漁夫たちの住居といえば、日本でも南朝鮮でもみすぼらしいときまっているからである。
金日成主席は、遠海に出る漁夫たちを案ずる家族のために、海辺の風光明媚な場所をえらんでアパートを建てさせたのであった。
これと同じような話はいくらでもある。
油にまみれた手を見せながら、主席がこの手をにぎってくださったと語る労働者たち、農民たち、漁民たち、そして子どもたちと数えきれないくらい会った。
この国のどこへ行っても、主席の足跡のないところはなく、主席にたいする人民の信頼と尊敬と愛が全国いたるところで炎のように燃えている。
人民大衆は、金日成主席がいるから朝鮮があり、自分たちの生があるといい、主席は工場と農村に無数にいる英

雄たちが革命と建設をおしすすめているといい、かれらから力と勇気を得ているとのべている。
私が、金日成主席を「領導の芸術家」と呼ぶ要因の一つは、まさにここにある。
人民をもっとも大切にし、人民が革命と建設に無限の力を発揮できるようにみちびく主席の領導芸術は、人間の精神活動にその根本をおく新しい領導芸術である。
金日成主席はつぎのようにのべている。
「主体を確立するということは、自国の革命と建設にたいして主人としての態度をもつということです。いいかえれば、それは、革命闘争と建設事業において提起されるすべての問題を自主的な立場と創造的な立場で、主に自分自身の力で自国の実情に合うように解決していく自主性と創造性を具現することを意味します」
主席のことばは、アジアの潮流、世界の潮流を模索していた私の胸に新しい鮮烈な光を与えたようである。
アメリカ帝国主義のアジア戦略を分析し、
「…今日のアジアは昨日のアジアではなく、その面貌は根本的に変わりました」と指摘した主席のことばは明快である。
—そのとおりだ。こんにちのアジアには新しい波がおきている。こんにちの基本的な潮流は主体であり、現代は主体の道を進んでいる—
ここにアジアの光がある。金日成主席の楽天的な表情、よくひびく声で主体思想を論ずるその目は輝き、口をついて出る、主体にもとづく平和協定案には、祖国と民族にそそぐ偉大な人物の大きな愛がこめられているように思われた。
主席の談話が掲載された『読売新聞』は南朝鮮で発売禁止になった。

しかし、祖国統一のためには過去の一切を問わず、政策も思想も不問にし、胸襟をひらいて話しあおうという主席のことばは、統一を妨害する勢力の策動をうちくだいて歴史的な七・四共同声明を生み、統一をめざす新たな発展の道をきりひらいた。

主体思想は、奸悪で、物量的に優勢であった日本帝国主義侵略者を打倒して祖国の光復をなしとげ、アメリカ帝国主義侵略者を撃破して廃虚の中から不死鳥のようにたちあがり、雄壮な朝鮮を建設した朝鮮人民の胸に生きている。

この新鮮明快な思想は、統一の歯車をまわす原動力となり、いまやアジアを、世界を動かす推進力となっている。もともと文章を書く以外に能のない私が、すべての役職を固辞してきたにもかかわらず、今になって日朝文化交流協会の理事長を引きうけたのも、自分の余生を主体思想の研究にささげ、体制の異なる国々が友好的に共存する平和をめざすことこそがもっとも価値ある行動だと思ったからにほかならない。

日朝両国を「近くて遠い国」と呼ぶようなことはもう昔話にしなくてはならない。今や、日朝両国の関係改善と正常化をめざす日本国民の運動は高まりつつある。

平壌万寿台芸術団の日本訪問も実現した。

朝鮮から帰国した以後、何事をも主体思想にてらしてみると、新しい解決の角度が展開されてくるのである。一部の勢力が時代の流れに逆行し、日本の恥ともいうべき「出入国法」をつくりあげようと狂奔し、日本の一部不良学生が朝鮮高校の学生に暴行をくわえるという許すべからざる蛮行をはたらいているが、それも結局はかれら自身、みずからの墓穴を掘る行為にすぎない。

金日成主席は朝鮮の自主的平和統一をめざす歴史的な五大綱領を明らかにした。

主席が一言いえば世界中がいっせいに反応する。

主席の呼びかけが、大きな志が、きょうも国際的な波紋をまきおこすのを見て、私は主体思想の創始者である金日成主席こそが今後の世界を動かす指導者の一人であると、いまいちどかたく信ずるのである。

『領導の芸術家キム・イルソン』（番町書房から出版された本）を書いた感慨がまださめやまないままこの一文を草したのだが、何か書きたらないというもどかしさが残る。

金日成主席については書いても書いても、書きたらないという気がする。

日朝文化交流協会理事長、評論家

一九七三年　九月

# 生涯にまたとない光栄

日本
吉田政雄

私は昨年（一九七二年）五月九日から十五日まで朝鮮民主主義人民共和国訪問全国革新市長会代表団の一員として共和国に滞在し、各分野にわたって社会主義建設の成果を直接この目でみることができた。私たちの共和国滞在は一週間にすぎなかったが、それはきわめて印象深く、感激的なものであった。

とりわけ、金日成主席にお会いすることができたのは、私にとって生涯忘れることのできない幸せであり、光栄であった。

私たちは日本を発つときから、できれば金日成主席にお会いしたい、とのひそかな希望をもっていた。共和国に着いて、工業、農業、教育、文化、医療、芸術など多くの分野にわたって精力的に見学したのだが、すばらしい発展ぶりで、アメリカ帝国主義者との三年間の戦争によって廃虚と化した国土を、わずかの間によくもこれまでに建設したものだと驚嘆した。

しかも、共和国のすみずみにまで主席の主体（チュチェ）思想がしみ通り、それが社会主義建設のすべての分野で具現されていることを実感的に知ることができた。

金日成主席にお会いして直接お話をうかがいたいという気持は日とともに深まるばかりであった。私たちのこの切実な希望は、帰国を明日にひかえた五月十四日、ついにかなえられた。

この日の朝、ホテルから、会見場に指定された人造湖のほとりにある招待所へ、主席さしまわしのヘリコプターにのって直行した。

緑の山に囲まれて、澄み切った水をたたえた湖、夢のように静かで美しい場所であった。その湖のほとりに白亜の建物があって、それが主席とお会いする招待所だった。

主席が現地指導にいっておられたので、そこで会うことになったわけである。ほどなく乗用車が横づけになって、助手席先に到着した私たちは招待所の玄関に並んで主席の着くのを待った。ほどなく乗用車が横づけになって、助手席からひとりの方が降りてこられた。（普通は後の席にのるものなのだが…。主席はつづいてお降りになるのかな）と思ったが、つぎの瞬間、その大らかな風格からして、あ、この方が主席に違いないとすぐにピンときた。つかつかと私たちの前にきて、一人ひとりと握手を交わしながら、主席はよくきて下さったとあいさつして下さった。暖かくして柔らかい大きい手であった。

はじめのうち、私たちは緊張していたが、二階の会見場に案内されて、二言、三言、話を交わすうちにいつのまにか緊張がとけて、いつのまにか主席の懐のなかにとび込んでしまったような感じになった。

主席は私たちの一人ひとりにタバコをすすめて下さった。私はずっと前にタバコをやめたのだが、折角、主席からすすめられたものをもったいないと思い、受けとって、とうとう十五年目に禁を犯してしまった。

途中で昼食になったのだが、主席は珍しい朝鮮の餅をすすめて下さった。年寄りにも食べられる柔らかい餅であった。

会見のとき、私は幸運にも主席のちょうど真前で、それだけに一番多く話をしたのではないかと思う。私は日本を発つ前から金日成主席の人となりについて私なりに研究もし、朝鮮総聯の友人たちからもいろいろ話を聞いて、想像していた。

しかし、実際に会ってみると想像以上に大らかで、謙虚で、温容そのものであった。まさに世界一の大人物という思いがしたものである。

私は市長としての立場から亀田市と共和国の都市との姉妹関係の締結、水産物や寒冷地農業の経済、技術交流などについて提案し、快諾を得ることができた。

私は、もともと教育行政に長くたずさわってきたので、とりわけ教育問題について多くの話をした。

私は主席に、前日ある女子高等中学校を参観したときのことをお話した。そこの校長先生が「敬愛する金日成同志は、われわれ教育者は革命家である、との最高の称号を与えて下さいました。人間を教育する仕事はもっとも重要な革命活動のひとつなのです。私たち教員は無上の誇りと栄誉をもってこの仕事にたずさわっております」と目を輝かして語っていた。

校長だけではなく、その学校の教職員、生徒が一体になって励んでいる姿をみて感激した。

私がこのようなことを主席にお話したら、主席は大変お喜びになって「人間を教育、改造する対人活動こそ革命と建設の第一工程であって、教育事業は対人活動の重要な一環です。だから私は教育の仕事は単なる職業ではなくて、崇高な革命活動なのだといっているのです」といわれた。

そして主席は、社会主義建設をすすめるためには思想革命とともに技術革命も大いにすすめなくてはならないといいながら、共和国ではすべての学生が義務教育を終えるまでにひとつ以上の技術を身につけている、技術のない

のは私ぐらいのものではないか、と冗談めかしておっしゃった。

そこで私たちの団長が「いや主席は一番すばらしい技術をおもちではありませんか。こんなにすばらしい国づくりの技術を主席はおもちではありませんか」といったら、主席は大きな声でお笑いになった。

朝鮮民主主義人民共和国は「社会主義の模範国」として世界に名高いとともに「教育の国」としても有名である。共和国には学業をもっぱらとする学校のほかに働きながら学ぶ工場大学、通信教育なども広範に実施されており、人口の約三分の一が学生である。このような国はおそらく世界のどこにもないであろう。

しかもすべての人民は仕事のあと毎日二時間の自習をし、土曜日には四時間の集団学習をする。どんなに地位の高い幹部でも一年に一か月は学校に入って仕事から完全に離れて学習に専念する制度ができている。まさに人民総学習である。

これほど徹底した学習の気風があるからこそ金日成主席の主体思想が国のすみずみまでしみ通り、人民の一人ひとりが国の主人公であるとの自覚をもって主席のまわりに一致団結し、社会主義建設で自発性、創意性、積極性が発揮されているのではなかろうか。

これは人間をもっとも有力な存在とみなし、革命と建設の成否を決定する鍵は人間にあるという金日成主席の主体思想の国をあげての実践である。

共和国では「子どもは王様」といわれるくらい大切にされている。私はとりわけ、平壌学生少年宮殿を参観したとき、主席の次の世代にたいする配慮の厚さに感激を禁じえなかった。

主席の次代にたいする配慮の厚さも、代をついで革命を行なわねばならないという、金日成主席の思想の表われであることを私は知ることができた。

共和国では、一九七二年から十年制高中義務教育が実施されているが、託児所や幼稚園が無数に完備されているので、生まれたときから集団教育を受けているのと同様である。

このような教育のなかから「ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために」という新しい社会にふさわしい品性を身につけた、新しい型の人間がすくすくと育っている。

私は教育者の出身なので、どうしてもその国の青少年の姿に目を注ぐことになる。私が共和国の青少年をみて受けた印象をひと口で表わせば、規律があって、それでいてのびやかに明るいということである。私はこのことを大変うらやましく思った。

たとえば私たちが自動車にのって通り過ぎると、道を歩いている子どもたちが手を上げて少年団式の敬礼をする。二人以上いっしょにいてもみんなが並んでいっせいに手を上げる。遠足かなんかにいくらしい小学生の列をみていると足並みがそろっている。

街が非常に清潔なのも子どものときからそういう教育が徹底しているからではないだろうか。ある外国記者が共和国の中学校を訪れたとき、エンピツを削ったら子供がやってきて削りくずを手で受けたという話があるが、私はこの話が全くその通りであったであろうと実感できた。

子どもたちの姿勢がシャンとしていて、服装も清潔だ。それに明るい。バレーや朝鮮の踊をする子どもたちの笑顔が実にいい。

学生少年宮殿のことについては多くの人がかたっているのでくわしくはいわないが、要するに子どもたちの自主性と個性を最大限にのばす教育をしているのだなということがよく分かる。

それから学校教育では基礎教育をしっかり与えると同時に技術教育、情操教育に非常に力を入れている。

共和国の青少年の規律と礼儀正しさ、明るさ、のびやかさを目のあたりにして私は、日本の教育の現状を思わずにいられなかった。

会見の席上、金日成主席は、

「…ヤンキー式の教育ではだめです」

といわれたが、私は全くその通りだと共鳴したものだった。

私が朝鮮に行ってもう一つつよい印象を受けたのは街づくりのすばらしさである。

平壌の街は、都市のなかに公園があるというのではなくて、平壌全体が巨大な公園で、そのなかにビルが建っているという感じであった。

亀田市は急速に人口がふくれ上がり、いわば「できつつある都市」だ。私は日頃から、緑と太陽がいっぱいの街をつくりたいと計画し、実行もしているのだが、実際はなかなか困難である。ところが、まったく私の夢がそのまま目の前にひろがっている。ただもう、驚嘆したものだった。ウィーンは森の都とか、パリのマロニエの並木道など世界中の人が知っているが、平壌にくらべれば問題にならないと誰かがいっていたが、さもあろうとうなずける。

道路は広々としているし、街路樹はすばらしくいい。街のいたるところには木が青々と茂り、そして家並は整然としている。道の両側には延々と四季の花が咲き乱れ、アパートのベランダにはこれまた鉢植えの草花がいっぱいだ。しかも街全体が清潔で道路にはチリひとつも落ちていない。同行者がタバコをもみ消して、吸いがらをポケットにしまい込んだほどである。

金日成主席はつねに労働者や農民、子どもや学生、老人や婦人のなかに入っていって話をきき、国家の政策や方針を説明してすべての国民を建設へとふるいたたせている。これが有名な現地指導である。中央であぐらをかいて、

頭のなかだけで考えて、ああしろ、こうしろなどというやり方はしない。

日本国憲法の根本思想は主権在民である。この思想を私は市政の根本にしたいとつねづね考え、私なりの努力をしてきたつもりだ。「移動市長室」とか現地懇談会などで話し合いをし、住民の自治意識を高め、市政にたいする住民の自発的な参加を実現していくという私なりのもくろみをもって実行してきた。

私なりのこういう方法を主席の現地指導と比べるわけにはいかないが、朝鮮に行って、やはり現地の住民のなかにとび込んで話し合うという方法に自信をもったことは事実である。

それと、もう一つ、主席の指導方法に学んだことは、一か所に「肯定」を創造し、それをモデルにして全国的に一般化する方法である。私はこれを「モデル主義」とひそかに名づけている。

当市では人口一万三千戸の本通り住宅団地造成を昨年いらい五か年計画で建設中なのだが、総面積百五十ヘクタールのうち、まず四十ヘクタールをモデル住宅地区に指定し、三年間で完成する予定だ。

縦、横の幹線道路を建設、そのほかに自動車の通らない道をつくる。小、中学校、幼稚園、保育所も設け、ショッピングセンター、医療機関、郵便局もつくる。なによりも緑がいっぱいの住宅団地にしたい。

このモデル地区によって実物教育を行ない、周辺地区住民の積極的な協力をつよめて大団地の建設を立派にやりとげてみたいと思う。

北海道は周知のように、第二次大戦中、強制連行されてきた数万、数十万の朝鮮人を炭鉱で奴隷のように酷使し、かれらのうちの多くを殺した土地である。炭鉱だけではない。鉄道やダム建設でもたくさんの朝鮮人を殺した。鉄道の枕木一本にひとりの朝鮮人の死がいが横たわっているといわれるほどだ。

私はそれだけに、日本人のひとりとして良心の苛責と後めたさを抱きつづけて共和国を訪れた。「あれは軍国主

義者のしたことで、われわれには関係のないことだ」といってすますわけにはいかないのだ。
しかし金日成主席は、会見の席上でうらみがましいことは一言も口にされず、かえって私たちを親しい友人だといい、日本人民とはともに手をとってアジアの平和のためにつくしていこうではないか、とおっしゃった。
私はその寛容さ、大らかさに胸を打たれ、両国民の親善と団結、両国間の国交正常化のためにいっそう力をつくし、アジアの隣国として末長く仲よくしていくよう努力を重ねなくてはならないという決意をさらに固めたのであった。
私たち代表団はそれぞれの都市と共和国の適当な各都市との間に姉妹都市の関係を結びたいと提案したところ、主席は即座に賛成してくれた。
私は共和国の姉妹都市との間に水産物加工と水産機械の技術交流をしたい。また、共和国から原料を輸入して公害のない産業をおこしたいとも思っている。たとえば木材加工、軽金属工業、精密機械工業などである。
北海道の気候は共和国北半部とにているのでその農業技術をぜひ学びたい。畑灌漑、電化、水利化、機械化などすばらしいものだった。われわれの方からは寒冷地での果樹栽培、酪農などについて経験と技術を提供できるのではないかと思う。
共和国ではニワトリ工場とよばれるオートメ化された大養鶏場が方々にあって、ひとりで一万四千羽のニワトリを飼っている。これなども学びたいことの一つである。ビニールハウスによる野菜や果物の栽培も大規模で驚いたものだった。なにしろビニールハウスのなかをトラックが通っているのだから…。
まあ、三大技術革命だとか、婦人を解放するための完璧な諸施策などは社会体制が変わらない限りわが国では実行に移せないだろうが、現在の条件のもとでも生かせる技術や経験は積極的に取り入れて市民の生活と福祉の向上

に役立てたいと考えている。

亀田市は決して大きな都市ではないが、活気にみちた伸び盛りの新興都市である。あらゆる分野で、あらゆる機会をとらえて朝鮮民主主義人民共和国との交流と親善を深めることによって日朝両国の交流と親善を深めるのに寄与したいと願っている。

朝鮮民主主義人民共和国、この国は金日成主席というたぐい稀な偉大な指導者が苦難の闘争のなかで自らの手でつくり上げ、みがき上げた偉大な主体思想がすみずみにまでしみ通っている。だからこの国はこれまでそうであったように、これからも破竹の勢いで千里馬(チョンリマ)の進撃をつづけるであろう。

私は、金日成主席のような偉大な人に会えたことを、しかもその方の思想が現実となっている朝鮮民主主義人民共和国の姿を目のあたりにしえたことを生涯にまたとない光栄であり、幸せだと思っている。

日本・北海道亀田市長

一九七三年十一月

# 金日成主席の現地指導

日本
緑川　亨

金日成主席との会見は、九月十九日（一九七三年）に行われた。その前日、私は政府招待所に招じられて一泊した。十九日朝、主席は、その近辺の協同農場に新築された住宅の「現地指導」に立ち寄られ、その村まで、私は招かれて、出むいた。

赤煉瓦造りの二階建ての棟が立ち並んでいた。住居もあれば、託児所、幼稚園もある。前庭に、郡や里（村）の人々に立ちまじって、金日成主席が私を待っていて下さった。主席とお目にかかるのは、共和国創建記念の行事以来、これで三回目である。

その日までに私が訪れた各地の農場、学校、託児所、休養所等ほとんど至るところで、金日成主席の「現地指導」は話題に上った。その「現地指導」に立ち合うことができるのは、なかなか得がたい機会だと、後になって人々から言われた。

金日成主席は、「ここの村人たちは、日本からのお客様が私といっしょに見に来てくれたことを喜んでいる」とまず言われた。

主席の「現地指導」には儀礼的な要素は全くない。ただ形式的に現場に臨む「お手植えの松」といった要素も全くない。一国の元首が視察するといえば、人々は礼服をつけ、予行演習の一つもするのが、一般のならわしであろう。この国の人々がくりかえして語る「現地指導」は、その単語だけ聞けば、一つのセレモニーであったり、ドラマ的演出が伴うものと想像されがちだが、しかし、その場に立ち合ってみると、そうした想像は裏ぎられる。

主席は村人たちと握手を交わし、いきなり次々と質問を発し、答えを聞き、現場を見てみまわる。納得がゆくと、破顔大笑して、その労をねぎらう。村人たちも、怖れず臆せず、何かと説明し、主張する。主席がすすめるまえに、村人たちはさまざまな希望を陳述する。よし、それは一年内に実現しよう、と主席は答える。この秋の収穫高の予想について、建設について、こどもたちを運ぶ自動車のステップの高さについて、話は具体性をもち、時として技術的、専門的な領域にわたり、指示が発せられる。その会話は人間的交流に終始し、上からの一方交通的な指導という印象を与えない。

抗日パルチザン闘争以来、人民に依拠し、人民に呼びかけて民族解放と革命の闘いに参加させることは、金日成将軍にとって基本的戦術であった。社会主義建設の過程でもまた、金日成主席は、「現地指導」という形をとって、人民と直接の交流を深める。その結果、「現地指導」は、他に例をみないものとなり、この国の人々は、それをもっとも大切なこととして、われわれに語るのであろう。

主席が与える注意は、たとえばこんな具合であった。「住居につかった材木の量は?」「一戸当り〇・三立方メートルです」「それは少ない。大変良いことだ。材木は節約しなければ」。この地方は海に近く山は遠い。その条件に合わせて建築資材を考える必要がある。

室内に家具・調度の類が置かれている。「これでは部屋が狭くなってしまう。こうした家具は部屋の外におくよ

うにするか、壁にはめこむ設計にかえて、部屋を広く使う工夫をしなさい」。この点は二階からおりてきて、くりかえし注意を与えた。

一戸当り一階に一室、二階に一室、それに台所と浴室がついている。浴室のドアを開閉してみて、扉の板と板の間にすき間があるのに気づくと、「木材を乾燥させないで使うから、こんなすき間ができるのだ」と、警告が飛ぶ。二階に上ると、そこでは、主席と通訳と私と、三人だけになった。前の窓から野を渡って爽やかな風が入り、うしろの窓から抜けてゆく。「これで良いのだ。夫婦とこども二人か三人、夫婦が下の部屋にねて、こどもたちは二階にねる。いや、よかったらその逆でもいい」。「都会と農村の差をちぢめる。農村の方が住むのに良いくらいだ。空気は良いし、とりたての野菜や果実はうまい」。

託児所と幼稚園には、それぞれの年齢相応の寸法に合わせた小さな椅子や机、ベッドが整えてある。板と板の間の極度に狭いすのこが床に敷いてある。この国では、何処へ行っても、こどもは大事にされる。主席は仔細に見てまわる。幼稚園の片隅に、おむつをかえる台があるのをみて、「ここでも要るのかね」とおかしそうに質問する。

住宅の中央は広場になっていて、プールがつくられ、バレー・ボールのコートや卓球台が設けられ、さながら綜合競技場のヒナ型の観がある。学校が終るとこどもたちは皆ここに集まって他処に行かない、と村人が報告する。この広場を見廻して、「よし、よし、これは良くできた」とうなずいて、この「現地指導」は終った。

私は主席の自動車に招じられ、その傍に同乗して会見の場所に向かった。「見本になる家づくりが必要でね。皆がそれをみならって、良いものをつくるようになる」とぽつりと言われた。

小は村の住宅や託児所から、大は巨大な工場や金日成綜合大学にいたるまで、まず「現地指導」によって、その時点で可能であり必要を十分に満たす理想的なモデルをつくり、これを見本として周辺に拡げてゆく。学校や重工

業の場合には、もちろん地域的な条件は少なく、適用範囲は全国的規模になる。一は十になり、十は百に至る。こう考えてみると、かなり意図的に地域は選ばれ、対象も綜合的判断にもとづいて選択されているのではないか。そして、ある時は遅れた地域に、ある時には進んだ地域に、またある時には平行して「現地指導」が行われ（その頻度が多ければ必然的に全国各地に及ぶ）、反復され、社会主義社会の建設の拠点としての機能をはたす。ここに「現地指導」の基本的ポリシーがあるのではないか。もとより、これは私の想像にすぎない。こうした方法論めいたことについて、誰にも説明を求めたわけではない。しかし、もしこの推測が幾分かでも当を得ているならば、現在行われているこのきわめて個性的な「現地指導」は、抗日パルチザン闘争以来の人民に拠り、拠点を設け、それを拡大していった拠点闘争の戦術と直結するものといえる。

農村のどこへ行ってみても、耕作地を避けて山や丘の麓といったところに瓦屋根の集落が見える。今見てきたような赤煉瓦造りの農家も次第にふえはじめている。電化は山村にいたるまで全国的に完了し、農村の水道化が進行している。

車内の会話は多岐にわたった。農・工業について話が続いた。化学肥料の生産と、それを使用する際のチッソ、カリ、リン等の量的配分の話、立ち遅れた国家が発展しようとするためにはまず工業化に重点をおき、そのために農村に負担をかける時期がある… 等々、主席の談話は化学肥料についてきわめて専門的な内容にわたり、一般的にその説明は合理的思考にもとづいていた。

私がこの共和国に到着した際に提出しておいた質問状について、金日成主席は、二時間半にわたって、回答をして下さった。

質問状は、現在、朝鮮の問題は国際的にも大きな歴史的転換の機に立ちいたっているという現状認識を前提にして、①共和国創建二十五周年に当っての回顧と展望について、②現在における国際連合の機能とこれに対する評価について、③朝鮮の統一問題と高麗（コリョ）連邦共和国の提唱について、④経済六か年計画の現状について、⑤日朝関係について、それぞれ多岐にわたる項目をもって構成されている。

金日成主席は、終始、熱意をこめて、しかし、悠揚迫らず、語り続けて下さったが、話が「二つの朝鮮」の問題に立ち至ったとき、おのずから語調は強まり、その眼光は厳しさを増した。

この国を訪れると、ほとんどすべての人々が、その肉親なり、血縁なりと南北に分かれて住み、互いに逢うことはおろか、消息さえも知ることができないでいることを、あらためて認識する。この事実を、われわれ、日本の国民は知らないのではないか。南北統一は、南と北に分かれて住む朝鮮の人々の切実な要求であり、また、日本国内に居住する六十万に及ぶ朝鮮の人々にとっても、痛切な問題である。しかも、われわれと生活を共にしているそれら在日朝鮮人は、朝鮮の南半部に行くことはできても、北半部と往復することは、政府が例外的に認める恣意的な措置を除いては、全くできない。

創建二十五周年慶祝の行事で、在日朝鮮人よりなる「在日同胞祖国訪問団」を、人々は盛大な拍手をもって迎え、金日成主席も、他の幹部たちも、長年にわたる彼らの労苦を温かくいたわり、ねぎらっていた。私は、その場にいる数少ない日本国民の一人として、証人としての自覚をもって、再三にわたるその光景をみつめていた。

質問状への回答が終り、引続いて催された午餐会の席上でも、金日成主席との会話は続いた。すでに六時間をこえる時間がすぎていた。その間のすべての会話を通じて、きわめて強く印象に残ったのは、主席の発言が、南北を

問わず、国内、国外を問わず、全朝鮮の民族的視点をもって終始していたことである。南朝鮮に住む人々、共産主義者でなくても統一を自らの問題として努力している人々への想いが、主席の心の奥に秘められていることを、私は会食の席上、突如として、さとった。

金剛山に行けば、この国の人々は、南朝鮮に住む人々にもこの美しいみごとな山に遊びに来てもらいたい、と言う。それは、体制をこえて、朝鮮の人民に共通した願いなのである。

主席とお別れする時、日本と共和国との交流について、短かい会話が交わされた。ようやく活発になりはじめている文化交流や人の交流が、今日まで共和国の側の一方的努力のみに拠ってきたこと、この交流を一日も早く、双務的なものにすることは、私たち日本国民の努力にかかっていることを私が口にすると、「万寿台芸術団が日本の方々にはずいぶんお世話になったではないか」という答が返ってきた。

戦後、日本外交はいくたびか、選択を誤ってきた。冷戦下一九五一年に締結された講和条約と日米安保条約、その直後に台湾政府との間に結ばれた日華条約、一九六〇年の安保条約改訂、そして一九六五年の日韓条約の締結。日中国交回復は行われた。だが、一九一〇年以来今日にいたる六十三年間の朝鮮民族への償いは、未だ何ひとつ行われていない。むしろ、日本外交は、日韓条約締結によって、朝鮮の北半部との交渉の道を閉ざした。この秋、政府は、重ねて、国連において誤った選択を行っている。

戦後二十八年間、われわれ多くの国民は、日本統治時代のこの民族の歴史を改めて識ることなく、南北両朝鮮のそれぞれの現実についてもほとんど知ることなく、今日まで過してきているように思われる。しかも、歴代政府がとってきた朝鮮についての誤った選択は、第二次大戦が終了した時点で生じた南北分断の固定化に力をかし、こ

世界の中で、日本人はもっともよくそれを知っているはずではなかったのか。

日本が、国の政策として、朝鮮に関する基本的姿勢を改めないかぎり、日本外交にとって、「戦後」は終らないであろう。従って、一九一〇年来今日にいたる間、その近・現代史を通じて日本が犯し続けてきた大きな誤りを、日本の国民は、みずから匡すことができないであろう。

三週間の見聞は、一知半解たることを免れない。しかも、社会主義建設が日を追って進んでいる国である。

日本・岩波書店常務取締役、編集担当

一九七三年十一月

# 人民の領袖

ペルー
ヘナロ・カルネロ・チェカ

「わたしは…あなたたちの友人です。トンムとよんでください」
金日成

朝鮮民主主義人民共和国への三度目の訪問であった。わたしの最大の望みは、全朝鮮人民の著名な領袖金日成元帥にじかにお目にかかって知りあいになれたらということであった。この希望はりっぱに実現した。

一九六九年、平壌で開かれた「アメリカ帝国主義の侵略に反対してたたかう全世界ジャーナリストの任務にかんする国際会議」の代表として初めて朝鮮を訪問したさいに、わたしは二時間余りも元帥の近くにいた。平壌は訪問客を暖かく迎え、街頭には国際ジャーナリスト機構のマークがかかげてあった。

金日成元帥が会議でおこなった演説は、反帝民族解放闘争の時代、われわれの時代におけるジャーナリストの任務についてのもっともすぐれた文献である。

金日成元帥は落ち着いた、謙虚な態度で代表たちの拍手にこたえたし、元帥自身とその業績にたいする演説者たちの称賛にもそのような態度をみせた。

二度目の朝鮮訪問では、遠目にも元帥の姿に接する機会にめぐまれなかった。しかし、行事という行事、朝鮮人とのすべての談話、どの劇場での催しでも、そして教室や街頭、一言でいってあらゆる場所で元帥の名前と肖像に接することができた。こうしてわたしも、過去と現在の朝鮮歴史のすべてのエピソードに元帥の名前を結びつけることに習慣づけられた。農民の息子であり、その後の学生蜂起者であり、山中のパルチザンであり、労働党創立者であり、国家首班であり、戦場でヤンキーどもをうちのめした勝利者であり、そして、今日朝鮮半島の北半部で社会主義建設を導いている元帥をおいては、事実上、革命と反侵略のきびしい戦いと希望にいろどられた数千年の永い歴史に輝く朝鮮について語ることはできないということをわたしは悟った。

この二度目の旅行のさい、大同江が見おろされる平壌で一番高い丘の上の、雄大な革命博物館の正面に元帥の巨大な銅像が建立中であった。ある日の午後、わたしはその建設場を訪ねて二時間ほど労働者といっしょに働いた。記念碑に向かう広い正面階段の一か所には、わたしたち夫婦、それからE・バルガス・ビクニャの手で敷かれた小石がたくさんある。これらの砂利のなかには、わたしの妻マルハが、その将来の運命は考えもしないでリマク川の岸辺から記念にひろってきたペルーの小石も一つまじっている。わたしたちが働いているあいだ、軍楽隊が民謡や行進曲を奏でつづけながら励まし、謝意を表するのだった。その夜、大衆集会でわたしたちが演説をおこなったとき、参会者たちはわたしたちをよき友人として迎えてくれた。そして、その集会でわが協会と同じ性格の朝鮮・ペルー親善文化協会が結成された。

今回わたしは空港に着くなり、せめて数分間でも金日成元帥にお目にかかれるようにはからって欲しいと懇請し

た。朝鮮の偉大な指導者に会えずに朝鮮についてなにを語り、なにを書くというのかと、招待者側に申し入れた。
わたしが着いたのは夕方だが、翌日の早朝にはもう返答をうけた。元帥は、わたしの平壌到着の知らせをうけて、わたしを自分の客として会うことを承諾してくれたという。吉報をもたらしてくれたその人は、わたしと妻と娘を平壌郊外の招待所へ案内してくれた。そこは樹木におおわれた低い山にとりかこまれており、そばの人造湖では魚が群れをなし、湖畔の柳が水晶のように清い静かな水面に影を落としていた。まるで天国のようであった。

## 米と鋼鉄

少なくともわたしが見たところ、朝鮮の礼儀は古典的なものであった。なにごとにつけ誠実で精力的であるように、それは清廉で、かげりがない。
朝鮮人民は、白頭山の老木のように古い歴史をもちながらも、清新で青春の気迫にみちている。朝鮮はあらゆる嵐をのりこえて毅然とそびえ、花咲いている。その幹はたくましく、その陰はすがすがしい。朝鮮こそは陽春を迎えてよみがえる南山の青松なのだ。
婦人たちの足どりは軽く、その笑みは明るい。客にたいしては実に礼儀正しかった。だが、彼女らの民族衣装の上衣―チョゴリのコルム（ひも）は遊撃闘争のときにも、ヤンキー侵略者との闘争のときにも多くの場合敵の首を締めるひもとなった。音楽を愛する朝鮮人民は叙情的な歌をよくうたい、それは古代および現代楽器のメロディーとともに流れる。しかし、かれらは戦争や警告、闘争の歌もうたう。米と鋼鉄、それはまるで平壌をとりかこむ田

野のようなものである。陽光を浴びた広々とした水田がそよ風に波立ち、田野のなかにたえず鉄の湯を吐き出す降仙製鋼所がある。

道端で外国の客に会うと手をあげて敬礼をする赤いネッカチーフの少年団員、かれら朝鮮の子供たちは生まれながらの芸術家で、ほがらかで愛らしい。だが、祖国の敵にたいしては容赦がなく、反米思想が骨の髄にまで徹している。

友好と平和の守り手である軍隊は板門店の停戦会談では強硬で妥協を許さない、米日侵略者とはいつでも武器を手にして決戦にのぞむ闘士である。米と鋼鉄。「われわれは黒でもなければ、灰色でもありません。われわれは赤い人間です」と、朝鮮の人々は胸をはって言っている。かれらはまた、こんな話も聞かせてくれた。妙香山には金の埋蔵量が多い。そこで、ある人はそれを掘り出そうという案を出したが、元帥は反対した。どうして何トンかの金のためにすぐれた景勝の山を掘り崩すというのか。米と鋼鉄……。

これらすべては金日成元帥の徳性を語ってくれる。

つまり元帥自身が米であり、鋼鉄なのである。

だから「父なる領袖」、「鋼鉄の統帥者」という言葉が元帥に寄せるもっとも熱烈な賛辞となっているのは不思議でない。

「ご機嫌いかがですか。近頃の寒さになにか不便なことはありませんか。わたしはその家にお越しは願ったが、街はずれなので気にかかっていました。場所が不便ではないでしょうか」

これは、元帥が政府庁舎の広間でわたしたちとの談話のさい、まっ先に言った言葉である。

返事は明らかであった。わたしたちはいまだかつてそれにまさるもてなしを受けたことがなかった。

あとで案内員から聞いたことだが、元帥はわたしたちを「親友」として招待してくれたのである。これは朝鮮で最高の待遇だという。

翌日、わたしたちが降仙製鋼所に行ったとき、労働者たちは、元帥からわたしたちの訪問についてすでに電話があったことを告げ、こういった。

「こちらに少し事情があって、あなた方をちゃんと迎えられるかどうか心配ですと申し上げたら、元帥は『かまわない、かれらは家族も同然な親しい友人だから、われわれの事情を理解してくれるはずだ』とおっしゃったのです」

わたしたちはあえて、元帥を「トンム（友人）」とは呼びかねたが、わたしたちをそのようにみなしてくれる元帥に心から感謝した。

遊撃闘争に勝利して祖国に凱旋した金日成将軍に初めてインタビューした南朝鮮『ソウル新聞』の一記者の記事をわたしは思いうかべた。「…あけっぴろげな快活な性格、謙遜で明快な態度、まわりの人びとをして、まるで古くからの知己でもあるかのように感じさせる。

…かざり気のないことばと、明快な表現をもちいる。

謙虚そのもので、政治家として出馬するのかという質問に、自分はそのような表現には適さないとこたえる。青年や学生が、将軍、将軍とよぶと、『わたしは将軍ではありません。あなたたちの友人です。トンムとよんでください』という…」

以来今日にいたるまで大同江の水はどれほど流れたことだろうか。金日成同志は元帥であり、強力な国家の首班であり、朝鮮人民の絶対的な領袖であり、全世界の反帝闘争の領袖である。

それでも、元帥はつねに「トンム」であった。

## ポプラのかげの建物

大道路からはずれると背の低いポプラと松の木が両側に立ちならび、土で固められた農村の小路にさしかかる。小路をくねくね曲がると湖畔の宿舎である。わたしたちを乗せた「ベンツ」は大道路から宿舎まで走るのに五分しかかからなかった。

「招待所」にはわたしたちの宿舎のほかにも二棟の宿舎がある。そこの人たちは常に静かな雰囲気を破らなかった。休息にはうってつけの美しいところであった。

小型の本箱と、欧文タイプライターが置いてある机、その他設備の完備したこの建物の一階と二階がわたしたちの専用にあてがわれた。元帥は、わたしたちがなにか不自由はしないかと、随時報告をうけていた。だから、そこで勤めている人たちはことさら関心を向けてくれた。腕利きのコックは野菜や米、みそ、スープの素、鶏肉、わけても魚などで、異国情緒ただようとりどりの朝鮮料理を味わわせてくれた。わたしたちは「マニ（たくさん）」、「アニ（いや）」という朝鮮語の単語をおぼえたが、食事のつど、こうした単語のどちらを用いたものか、とまどった。

一週間のあいだこの建物はわたしたちの住居であったし、平壌と、そして朝鮮民主主義人民共和国各地の工場、劇場、学校、機関、景勝地など多彩な参観スケジュールの出発点であり、帰着点であった。あるときはわたしたち

がかぜ気味だというので、わざわざここまで医師をよこしてくれた。またその建物のなかで、わたしたちは同業の記者たちと会い、「両国の人民および記者が互いに援助し、相互理解を深め、友好協力関係を発展させ、アメリカ帝国主義を頭目とする帝国主義とその手先に反対する文筆活動で連帯を強め、民族の独立と社会の進歩、平和と民主主義を強化するために」ペルー記者連盟と朝鮮記者同盟間の友好協定を結んだ。

朝晩この家で過ごし、係りの人たちのもてなしをうけながら、朝鮮はほんとうに親切な国であると思った。

招待所の人たちは、わたしたちが金日成元帥の接見をうけたときや、ペルーに帰るため別れを告げたとき、心から喜びと惜別の情を分かちあってくれた。

ある朝、儀礼局の働き手が訪ねてきて、金日成元帥がわたしたちを待っていると告げてくれた。

## 素朴で沈着な、確信にみちた方

朝鮮民主主義人民共和国政府の庁舎は平壌でもっともすばらしい、魅惑的な建物の一つである。

平壌はほとんどが近代建築で特徴づけられる都市である。それは日米侵略者との度重なる戦争によって事実上すべてが破壊され、屋根ひとつ壁ひとつまともな建物が残されなかったからである。

朝鮮民主主義人民共和国の首都平壌は数千年の歴史を数えるが、アメリカ人どもが敗戦して、金日成元帥の指導のもとに朝鮮人民がただちに新しい都市づくりに取り組んだそのときから、わずか二十年のあいだにその姿を一新した。事実、この革命の首都は戦争たけなわなころ、すでにその復興が始まったのである。爆撃はまだ続いていた

が、当時すでに、金日成元帥は有能な設計家を呼びよせて、平壌の再建について討議した。現在の平壌は実に清潔で雄大な、静かな都市である。広い街路には並木が立ちならび、公園が多く、アパートや公共建物が林立している。便利で華麗な地下鉄は都市の近代感をいっそうひき立てる。その麓を大同江が流れている。夏は広い川面が陽光にきらめき、秋ともなれば両岸が紅葉をなし、冬には氷が張りつめて灰色をおびる。街の片隅にそれより小さい普通江という川もある。これは柳の茂る美しい公園のなかを流れるさわやかな青春の川である。中心街の向かい側、公園にかこまれた広場の中央に政府庁舎がある。雄大な建物であるが、壁のふちや面には装飾をほどこさず、日光が十分射し込むようにたくさんの窓がつけてある。廊下は広く、部屋は清潔で静かだ。

わたしたちは儀礼局の働き手の車につづいて庁舎に着いた。

玄関に元帥の副官が待っていた。

大きなホールを五十歩ほど歩いていくと、エレベーターがあった。

わたしたちだけを乗せたエレベーターは、またたくまに二階で止まった。

戸が開いたとたん、わたしたちはびっくりした。

階段を上がってきたわたしたちの通訳と記者同盟委員長、対文協委員長、もう一人の通訳、そのほか二、三名のカメラマンと映画、テレビ撮影家らにとりかこまれた金日成元帥が、満面に明るい微笑をたたえて手をさしのべるのであった。

そんなにも手まどらず、そんなにも格式なしに元帥に会えるとは思わなかった。

エレベーターをおりたらまず、どこか大きな部屋へ案内されるだろう、そして、金日成元帥が奥の方のある戸口からおごそかに姿を現すまで待たされるであろう、と思ったからである。

全く予想外だった。朝鮮の歴史始まって以来もっとも偉い方、その方が太い重みのある声で挨拶をしながら迎えてくれたのであった。元帥は精気にみち、かざり気なく、落ち着いた笑顔をしていた。身なりはさっぱりとして質素であった。上下一列に五つのボタンをつけたグレーの詰襟はこの上なくさわやかで明るかった。元帥は自信に溢れていた。観察力のするどい思慮深い方である。挨拶をするとき秀でたひたいを軽く下げたが、白髪一本見あたらなかった。

会った瞬間から終りまでなにか絶対的で確かな印象をうけたものがあるとすれば、それは主人である元帥、つねに最高の称賛をうけ、あらゆる嵐をつきぬけてきた元帥のこのうえない素朴さと沈着さからくる印象であった。

読者は朝鮮民主主義人民共和国のどの家庭や学校、どの事務室や工場にも必ず金日成元帥の肖像がかかげてあることを知って欲しい。大学や劇場、工場や協同農場、街頭や村落のどこへ行っても、朝鮮の人々はあらゆる公式的あらゆる非公式的な談話の席上で、深い敬愛の情をこめて金日成元帥のことを語る。元帥の著書は手から手へと回されており、元帥の思想は旗じるしとなっている。博物館では、元帥の歩んできた生涯の資料が革命歴史の核をなしている。すべての新聞や教科書、文学作品や映画、バッジなどには金日成元帥の像が輝き、元帥が遊撃闘争をおこなった場所、または、たんになにかの用事でたち寄ったことのある数多くの場所に、元帥の事績にかんする資料が丁重に保存されている。

このように人民の尊敬を集めている偉大な方が、国内のまたは外国の訪問客をかくも素朴に迎えるとは全く予想外であった。

しかし、それは事実である。いささかも格式ばらず、兄弟に会うかのように、または同志の間柄のように、金日成元帥はわたしたちと座を共にした。まるで、あらゆる書物から、バッジや絵から、伝説や教科書から抜け出てきた

ように思われた。元帥は、この夢のような事実にいっそう現実感を与えようとするのか、一緒にカメラの前に立つことをすすめるのであった。

朝鮮の人たちは、元帥のそのような態度を不思議がることは少しもないという。そして元帥にまつわる無数のエピソードを聞かせてくれた。

ある早暁、元帥は一農家へ立ち寄った。農民はまだ床から起きていない。元帥は、空腹と喉の渇きをおぼえていたが、ぐっすり寝入った農民が目をさますまで、わら束に腰をおろしてしばらく待った。それからその農民と話をかわし、経験を語り合い、一緒に食事をとり、ともに春の日ざしを浴びながらひとときをすごした。

ある日の夕方、元帥を乗せた車は、ある田舎道を走っていた。道行く多くの人のなかに一人の老婆がいた。たいへん疲れた様子である。元帥は車を止めて老婆を乗せ、数キロはなれた彼女の家まで送っていった。この話は伝説さながらに朝鮮中に広がった。

抗日武装闘争中のことである。朝鮮人民革命軍司令官であった元帥は隊員の食事から寝床のことにまでいちいち気を配った。そしてすべてを隊員とともに分かちあった。隊員と同じ食事をとり、いちばん体の弱い隊員に自分の分までゆずったりした。元帥も隊員と同じくわらじをはき、星空を仰いで野宿した。戦士たちは元帥に一番よい食事をすすめるが、元帥は差別待遇に反対であった。元帥は隊員と同じく生活し戦闘に参加した。

青山里(チョンサンリ)精神、青山里方法は、元帥が幾日も青山里で寝起きしながら創造したものである。元帥は農民のゆきづまっている問題を解決し、じかに経験を聞きとるためそこへ出向き、かれらと寝食を共にした。

元帥は工場の労働者をたずねて意見をかわし、農村に出向いてはいつも協同農民の声に耳を傾ける。そして婦人と子供たちの要求をたずねる。

かつて不毛の地として見捨てられてきたある地方一帯が、金日成元帥の教えを貫いてリンゴの天国と化した筋書のオペラ『青春果樹園』は、一九五〇年からの三年間にわたる米帝の侵略戦争当時、村にただ一本しかなかったリンゴの木が爆撃に倒れたことを、村のある子供が涙ながらに元帥に訴えた事実をもとにしたものである。元帥はだれにも理解できる現実、大多数の人民が体験し、数千万朝鮮人民の血と時間、労働と夢によって遂げられた現実、かれら自身の一部分となり所有物となり日常の歴史となった、その現実の英雄である。

四時間を金日成元帥と共にするあいだわたしたちは、朝鮮の領袖であり、世界の反帝革命運動の領袖であるその方に、平凡な英雄、われわれのような人民のひとりを見出した。

自国の人民や元帥の幼年時代について、祖国の統一や帝国主義について語るとき、また、チェ・ゲバラを回想して「かれはひじょうに聡明で勇敢な人でした。…わたしの親友でした。…朝鮮にいるわれわれはいつもかれを忘れていません」と語るとき、元帥は緊張した面持であったが、相変らず沈着で重みがあった。その日はちょうど十月八日、英雄的な遊撃隊員であるゲバラが戦死した記念日で、平壌の新聞はゲバラの写真と、かれがキューバでフィデルとともに戦っていた頃のエピソードを載せていた。「この日を迎えていまなおチェ・ゲバラを追慕しているところはごく少ないのですが、朝鮮はそのうちの一つでしょう」と元帥はいった。

革命家のあいだでは、特別の場合を除いてはなんの格式も必要としない。

午餐会の大きな円卓をとりかこんだとき、わたしは故郷ピュラの西瓜のことまで話題にのせる心安さを感じていた。元帥は椅子から立ち上がり、生命の薬草といわれる人参のつかった有名な朝鮮人参酒で、わたしたち一人ひとりと乾杯してくれた。

「心臓にとてもいいですよ」元帥はわたしの心臓の持病を知っていたらしく、こういうのであった。わたしの娘

ヌリが元帥にたばこの火をつけてあげた。元帥は大きな太ぶちの眼鏡越しに「カムサハムニダ（ありがとう）」と丁寧に謝意を表した。

わたしたちは、湖のほとりの宿舎に帰る途中、平壌市内のある曲がり角で元帥の車とすれちがったが、元帥は微笑をうかべて挨拶を送ってくれた。

わたしたちとの接見後、元帥はとり入れの様子も視察し、収穫ざかりの郊外の農村へ出かけるところであった。数時間前、元帥はわたしたちに、朝鮮の社会主義制度をいっそう強化するために最高人民会議でおこなう予定の報告について情熱的に楽観にみちて語ったが、不眠不休の活動家である元帥は、夜にはきっとその演説文を書きつづけるにちがいない。実に元帥は親しい友人であり、さらには同志である。

まさにこの礎の上に元帥の風格の鋼鉄の柱が立っているのである。…

ペルー朝鮮親善文化協会書記長
ラテンアメリカ記者同盟書記長

一九七四年　五月

# 愛は南の子供達にも

日本

畑中知加子

家の庭に咲く杏の花、リンゴの花をみるたびに私は朝鮮で暮らしたつかの間の日々をなつかしく思いだす。平壌の飛行場におりたったとき、可愛らしい少女たちがくれたライラックと赤いバラ、カンナの花束からも、こんなあまずっぱい香りがしたような気がする。

私は一九六九年五月、朝鮮対外文化連絡協会の招きをうけた夫（日朝協会・畑中政春理事長）とともに朝鮮民主主義人民共和国を訪れた。

はじめてみる主体（チュチェ）の国。それは人民の楽園であった。

米機撃墜事件（一九六九年四月十五日、ＥＣ—一二一事件）のあった直後のことゆえ、さぞ国内が緊張し、大変なことだろう、と思っていた私には、ただただ驚くことばかりであった。

落ち着きはらった街なみをさっそうとかっ歩する労働者、色とりどりのチマとチョゴリに身をつつみ、幸せそうに語りあう婦人たち。

やわらかき　柳の緑　野辺の花
平壌の街　余りにも静か

私はノートにこんな歌をつづっていた。

街ののどかさは人々の態度にもあらわれていた。アメリカとのきびしい戦争をへて、あの廃虚から雄々しくたちあがった朝鮮人民であることを、このもの静かな人々から、だれが想像することができようか。

いまもアメリカの新しい戦争挑発がつづいているのに、どうしてこう落ち着いていられるのだろうか？　日がたつにつれ、私はだんだんとわかってきた。朝鮮人民は、どのような大事が起きようとも、すでに心の準備ができていることを。

どんなことがあろうとも、金日成主席の教えにしたがい、その導きのもとにすすむならば、自分たちの前途には勝利があるのだという確信にみちているのである。

それは朝鮮人民が金日成主席を中心にうごいているということである。

私は滞在中に万景台にある金日成主席の生家をたずねた。そこには平壌の街が一目でみわたせる高台があった。

私はそこで、アメリカとの戦争でなに一つ残らず破壊された平壌を、いまは高層ビルのたちならぶ美しい都市に復興させた金日成主席の指導力を見た。いや、その前に日本の植民地支配から国を救い、きょうの社会主義朝鮮をきずいた金日成主席の偉大さの一端をみた。私は心から感想録に次のようにしるした。

万景台　平壌の街　みはるかし

私は金日成主席に直接お会いして、いつも人民とともに歩まれる主席の姿をみいだした。がっちりした体格、どこからともなくにじみでる威厳、かといっていかめしさはなく、いつもやさしい笑みをたたえて語る主席をみて、私はほんとうに国をまかせることのできる人、人民が安心してついていくことのできる人だと直感的に感じた。人民への愛が、にじみでていた。

私はこの日、一国の主席がエレベーターの前まできさくに出迎え、心から歓迎してくれる姿に、ただただ恐縮するばかりであった。

わかりやすく順を追って静かに話される若々しい主席のお顔が、ときどきくもるときがあった。それは南朝鮮のことを語るときであった。

私は朝鮮に滞在中、幸せにくらす子どもたちと婦人たちの生活が、とくに印象に残った。

朝鮮で一番大事な宝は子どもである。なんでも一番良いものを子どもたちにあたえ、国家的負担で何不自由なく育てている朝鮮。

通訳の人が「街で一番大きく、りっぱなものがあれば、それは金日成主席が子どもたちのために建てられた宮殿なのです」と誇らしげに語ってくれた。そのことば通り、私は平壌でも一番りっぱな建物を、すぐにみつけることができた。

十三階建ての学生少年宮殿は平壌の中心にある小高い丘の上にあった。

建坪五万平方メートルの平壌学生少年宮殿は五百の部屋のほかに劇場、娯楽室、体育館、図書館をそなえ、日に

一万人の子どもたちが思い思いの課外活動を楽しめるようになっていた。もちろん費用は全額国家負担である。

心ゆくまで学び、とびまわる子どもたちの姿をみたとき、私は『ユンボギの日記』でよんだ南朝鮮の悲惨な子どもたちを思った。

金日成主席のお顔をくもらせたのも多分、その子どもたちのことであり、子どもになにもしてやれない南の母たちの心情に思いを致しているのであろうと思った。

私は一日も早く南朝鮮からアメリカ軍がでていき、朝鮮が統一されて、南朝鮮の子どもたちも金日成主席のひざもとで幸せにくらす日が一日も早くくることを願ってやまない。

私はその時、釜山から平壌に行きたいと思っている。

そして、金日成主席のおすこやかな姿にもう一度、ぜひお目にかかりたいと思っている。

日朝協会前理事長畑中政春氏の未亡人

一九七四年　八月

# 前進する朝鮮

日本　　市川　誠

## 日本労働者の宝

私の執務室には、朝鮮人民の敬愛する金日成主席が、日本労働者階級のため揮毫された大額がかけられている。

全世界の労働者階級は団結し、帝国主義とあらゆる圧迫、搾取のない新しい社会を建設するためにたたかおう！　全人民の幸福のために！

金日成
一九七四年十月

この書をみるたびに、私は朝鮮民主主義人民共和国を訪問して尊敬する金日成主席にお会いした日のことを、新

たな感激とともに想い起こす。
一九七四年十月八日、朝鮮職業総同盟（職総）の招きをうけて総評、中立労連代表団は朝鮮を訪問した。それから帰国までの八日間、私を団長とし、中立労連の堅山利文議長を副団長とする一行六人は、連日朝鮮労働者階級の熱烈な歓迎をうけ、また、金日成主席の温かい配慮に浴した。
主席にお会いしたのは、十月十二日であった。われわれがうかがうと、主席はわざわざ部屋の外に出て、エレベーターの前で出迎えてくれた。それまで、主席の人民的なことについていろいろな話で聞いていたが、やはり直接会って、主席の温かさ、偉大さにうたれた。
握手を交わしながらの主席の第一印象は、ひじょうに若々しく、健康的な方だということだ。それから、人間的な深さを感じた。困難な革命闘争をたたかいぬき、今、盤石の社会主義革命基盤を築き上げ、前進しつつあるという満々たる自信があるからこそ、たくまずして確信の笑みがにじみでてくるのであろうと思った。
率直にいって、私は最初、主席に対する朝鮮人民の敬慕の念をよく理解できないふしもあった。
しかし、実際に会い、お話をしてみてよく分かった。「清水」が地底から湧き出るような、極めて自然な愛情をともなう尊厳なのだ。それは、金日成主席の指導に従って廃虚のなかから社会主義国を建設し、今、大躍進をとげつつある朝鮮の現実がそうさせるのだと感じた。
朝鮮人民をひきいて革命と建設を実践し、みごとな指導力を発揮しながら、社会主義朝鮮を日に日に発展させている一事を取り上げても、金日成主席の偉大さがうかがい知れる。偉大な革命指導者、金日成主席に最大の称賛の言葉を贈りたい。

## ざっくばらんな会見

会見に際しわれわれは、主席は多忙な方だし、せいぜい三十分から一時間程度の表敬訪問に終わるのではないかと思っていた。ところが主席は、形式的、外交的なことはやめて、ざっくばらんに話しましょうといわれ、結局、四時間もの長時間にわたった。

会見の席上、われわれの方からは、朝鮮の自主的平和統一や南朝鮮人民の闘争支持、日本政府の朝鮮敵視政策反対、日朝国交正常化など、日本における朝鮮問題についての運動の実情や、日本労働者階級の連帯強化についてお話した。

金日成主席はまず、朝鮮総連の活動と朝鮮人民の正義の偉業に対するわれわれの積極的な支援に感謝し、代表団を通じて、日本の労働者階級に敬意を表すとのべられた。ついで主席は、日朝両国人民と労働者階級の偉業は同一の運命で結ばれており、団結してアメリカ帝国主義と日本反動に反対する共同闘争をすることは非常に重要で、アジアの平和に寄与するものだと強調された。

南北朝鮮の自主、平和統一、民族的大団結の三大原則にもとづく祖国統一偉業を実現するための朝鮮人民の闘争と、思想、技術、文化の三大革命の旗のもとに一大飛躍をとげている社会主義大建設について語る主席の言葉のはしはしに、労働者階級に対する主席の限りない愛情と配慮がうかがえた。

会見の後、別室で午餐をともにする光栄に浴した。私のすぐ隣りに主席が座られたが、そこで私は主席に日本の労働者階級を励ます意味で、一筆揮毫していただけないかとお願いしたところ、主席は破顔一笑しながら「今後、

これを前例にしない」という前提で引き受けようと快諾された。本当に私は嬉しかった。それが冒頭でのべた大額である。

主席の大額は訪朝の最後の日、十五日に朝鮮労働党中央委員会書記から伝達式を行って頂いた。中立労連や団員として参加の動力車、鉄鋼労連、全農林にも、後の便船でそれぞれいただいた。

みごとな筆跡で感服したが、多忙な主席が揮毫のために半日も費やされたという話を聞き、私は深く恐縮するとともに、心から感謝した。日本の労働者階級の宝として、この書を後世まで守っていきたいと思っている。

## 日朝労働者連帯と団結の強化

今回の訪朝の目的は、総評としてはまず第一に、総評と職総間に交流協定を結ぶことであった。しかし、結果的に交流協定として調印するところまではいかなかったが、交流に関するさまざまな方針について意見を交換し、基本的に合意をみることができた。

われわれは職総代表団と三回会談して十五日に共同声明を発表したが、その会談の際、総評と中立労連で今秋、職総代表団を日本に招待することを申し上げた。

訪朝目的の第二は、闘争情勢の報告交換である。

近年、アジア情勢における朝鮮問題の重要性は大きくクローズアップされているが、とくに南朝鮮におけるファッショ弾圧政治の事態は、われわれ労働者階級が絶対に見逃すことのできないものである。

われわれは、朴正熙一味のファッショ的な弾圧政治への抗議と南朝鮮愛国人士への激励、また共和国で主張している南北朝鮮の自主的平和統一方針に対する日本の労働者階級の支持、連帯の意思を、朝鮮の労働者階級に表明した。とくに、日朝国交正常化に対するわれわれの努力の実情を伝え、力を合わせてアジアと世界の平和のためにつくしていくために現情勢の認識について意見交換した。それは共同声明に集約されているように、きわめて効果的な成果をえた。

## 新しい発展に驚く

私は一九五八年にも、朝鮮民主主義人民共和国を訪問したことがある。

そのとき祖国解放戦争記念館を参観した私は、手帳につぎのように記した。

「血を流してたたかい、かちとった平和は貴重だ。祖国に捧げた青春の崇高な犠牲、ここにアジアの光がみえる。朝鮮に栄光あれ!」

解放戦争の血の跡は、当時の朝鮮にはまだ残っており、新義州から平壌までの列車の沿線には、アメリカ帝国主義者によって投下された爆弾の穴跡が無数にあった。だが、列車から降り立った平壌では、古い住宅をこわしてどんどん新しい住宅を建設している最中で、社会主義建設の逞しい息吹きが噴き出していた。

今回、十六年ぶりに再訪して、私は驚いてしまった。平壌は「緑の都」としてまったく生まれ変わっている。爆弾の跡だらけだった農村の山も、立派な果樹園になり、また、農園に変貌している。このようなすばらしい発展は、

社会主義制度の優越性をはっきり示すものといえる。
朝鮮の労働者は、いたるところでわれわれを熱烈に歓迎してくれた。
われわれは平壌の地下鉄や金星トラクター工場、黄海製鉄連合企業所、沙里院の協同農場などを訪れ、現場の労働者と積極的に接触した。協同農場では農民に国家が家を保障していることを知った。
社会主義を目標として前進をはかる、遠大な構想をもつ総評として、日本の労働運動の将来的展望を考える場合、かつて日米両帝国主義とたたかって解放をかちとり、祖国を守った朝鮮の現状は大変参考になり、得るところ大であった。

## 三大革命に学ぶ

思想革命、技術革命、文化革命の三大革命が進められ日に日に前進している朝鮮では、金日成主席の主体（チュチェ）思想が、一つの政治哲学として全人民に浸透している。この点が、日本と朝鮮の労働運動の質的な差異だ。
それに、なんといっても日本とちがうのは、全人民の衣食住が国家から完全に保障されていることだ。生活がまったく安定しているうえに、働く目標が国家目的と一致しており、そういう点で、労働者や農民の人生に対する価値観が確立している。だから朝鮮の労働者は、明るい生活態度でそれぞれの仕事に喜んで全力を上げているのだが、私はそれをひじょうにうらやましく感じた。
朝鮮の労働者は本当に幸福だ。

主体思想を身につけた朝鮮の労働者階級は、民族の誇りをもち、自主的、自立的に革命と建設を推し進めている。若い諸君も、労働者としての階級的、民族的自信をもっている。今すぐわれわれが朝鮮をまねることはできないが、日朝労働者間の交流を深めながら前進の足跡と実績を学んでいくことは重要である。

地理的、歴史的条件をふまえて建設にはげんでいる朝鮮では、職業同盟の任務が思想教育団体として明確に規定されている点が特に注目された。これは社会主義諸国のなかでも、きわめて特徴的である。労働組合は、労働者の思想教育を主たる任務としているところから、強さが生まれる。朝鮮は社会主義国における労働組合運動としても、一歩前進しているという感じをうけた。

日本ではようやく労働組合における思想教育活動の重要性が理解されだしたところである。だが、その認識を、実際の組合活動のなかに組み入れる点で、日本はひじょうに立ち遅れている。

日本でも資本や権力の攻撃に対抗して、労働組合が自ら教育施設をつくり、労働者の思想教育に着手しつつあるが、一貫した形の教育活動体系が組まれている朝鮮に比較すると、日本はまだ初歩的な段階だといえよう。

## 主席の賢明な指導

労働者階級が自分の地位を高め、国の主人となるのは、なみたいていの苦闘ではない。血のにじむ苦労をし、辛酸をなめながら、朝鮮労働党がここまで発展できたのは、尊敬する金日成主席のすぐれた指導によるものである。

金日成主席は朝鮮の労働者階級と人民をつねに賢明に導き、温かい配慮をめぐらしてきた。

滞在中万景台を訪れ、主席の生家を見学し、主席の家庭がやはり伝統的に革命的な家庭だったことを知って感激をおぼえた。そこで生まれ育った金日成主席は、若くして革命運動に身を投じ、想像を絶する苦労をしながら、朝鮮人民の愛と尊敬を一身にうけるようになったのである。

解放後、祖国に凱旋して平壌にもどったとき、主席は祖父母の待つ二十年ぶりの故郷に寄らず、まず降仙製鋼所へ赴き、労働者に会った。常に祖国の運命をまず第一に考え、肉親的な情愛をころしてでも、多くの課題を前に主席の指示を待っている労働者に会うという行動の中に、私は偉大な革命指導者金日成主席の体にしみこんだ労働者階級と人民への奉仕と愛情を強烈に感じた。

## 七万人の大歓迎集会

労働者階級のためには、何物も惜しまない金日成主席は、われわれにも細やかな温かい配慮をめぐらしてくれた。金日成主席は私達を送迎するために北京まで主席の専用特別機を送ってくれ、また地方に参観に発てば、そのつど電話で安否をたずね、歓迎集会の接待まで事前に了解して手落ちのないよう幹部の方々に指示された。

十一日、平安南道の南浦へ行ったとき、われわれのために七万人の歓迎野外大集会が行われ、学生青少年五万人の出演によるマスゲーム『主体の光』が催された。

後で知ったのだが、当時農村は取り入れの最盛期で、職総だけで七万人を動員するのは無理だったようだ。農民にとって取り入れは戦争にもひとしいため、大動員はむずかしいという報告がなされたところ、主席が直接南浦市

の労働党責任者に電話し、日本の労働者代表団は大変大切な客であり、全道をあげて歓迎の態勢をとらなければならないと指示されたらしい。そのために南浦市などの党、職総、その他関係部門の幹部は、主席の指示にこたえるために連日徹夜で努力し、その結果、七万人という大集会が成功裏に開かれたのだ。東京でも大きな集会はあるが、歓迎集会であんなに大きいのははじめてであった。

朝鮮でもやはり七万人の大集会というのは、外国の元首以外にはやっていないということだ。われわれ日本の労働者階級代表団は、国賓並みの待遇をうけたのである。この事実を、私は日本の労働者と国民に報告しなければならない。

われわれは主席の配慮にもとづく熱烈な歓迎をうけ、喜び、感謝するとともに、隣国の日本労働者階級に寄せる期待の大きさと責任を痛感した。

日本の労働者階級を代表して総評と中立労連の議長が、七万人の朝鮮労働者、農民、学生、市民の前で、朝鮮の自主的平和統一方針を支持し、朴正煕一味のファッショ政治に反対して連帯してたたかい、また、日朝国交正常化を促進していくという決意を表明したのは、友好、連帯の強化ばかりでなく、朝鮮人民に対する最大の激励になったと思う。

## 朝鮮は一つである

朝鮮訪問中、私は板門店で青く澄んだ空を見上げながら、こんな静かなこの地に、なぜ平和がもたらされないの

かと反問し、アメリカ帝国主義への憎しみをさらに深めたものだ。

朝鮮は一つだ。

われわれ日本の労働者階級は、朝鮮の労働者階級に約束したとおり「二つの朝鮮」をでっち上げようとするいかなる策動にも断固反対し、南朝鮮人民の反ファッショ民主化闘争を支持し、朝鮮の自主的平和統一を支持してたたかっていく。

日本と朝鮮の労働者階級が団結して全力をつくしてたたかうならば、南朝鮮から米侵略軍を撤去させ、南北朝鮮の自主的平和統一、日朝国交正常化実現をめざす闘争で必ず勝利するであろうと確信を深めることができる。

日本・総評議長

一九七四年十二月

# 人民の心であり、頭脳であり、心臓である金日成元帥

パナマ
マリオ・アウグスト・ロドリゲス

わたしは記者生活三十年のあいだ、先進国、中進国、あるいは発展途上国や後進国など数十か国を訪問した。その過程でさまざまな傾向と理論をもつ多くの革命的な人民解放勢力の指導者や国家元首の著書を読み、その思想と活動について研究もした。

しかし、金日成元帥に導かれる朝鮮民主主義人民共和国が世界に示しているような驚異的な発展のエネルギーと創造的かつ組織的で、指導的な能力をもつ国を見出すことはできなかった。わたしは朝鮮で、悠久な民族の文化と伝統を誇る豊かな大地に生をうけて洗練され、今日、第三世界のみならず全人類の革命闘争における心となり、頭脳となり、心臓となった一人の指導者について正しい理解をもつことができた。

金日成元帥には、事実上、朝鮮民族が数千年にわたって営々とつみあげ、世紀の試練のなかで昇華した文化と英知が集大成されている。元帥は曾祖父、祖父母、そして父母から祖国の自由と独立のため外国帝国主義に抗してたたかう気高い献身性をうけついだ。

人民にすべてを捧げる献身性に貫かれたこの革命的家門の伝統は、今日、朝鮮民主主義人民共和国を導く指導者を特徴づける輝かしい英知と豊かな創意性、気高い闘争精神と必勝の信念によって、いっそう偉大で強固なものとなり、確固たる勝利の裏づけとなった。

驚嘆を禁じえないのは、高度の指導力をそなえた金日成元帥と労働者、農民をはじめ広範な人民大衆とのあいだに結ばれた血縁的な関係についてである。おそらくこれは、現代史における唯一の実例といえよう。元帥はつねに人民大衆から励ましと勇気をくみとり、かれらに進路を示し力と勇気を与え、かれらを見守り、世界の人民を驚嘆させる愛と信頼、福祉と進歩をもたらし、献身的な勤労精神と革命への闘争精神をつちかっている。

全朝鮮人民の偉大な指導者が示し導いている国家活動の本質と思想的原則は、まさに各階層人民大衆との思想的なつながりにもとづいている。元帥は、つねに都市や農村の男女、幹部、反帝反植民地主義闘争の老兵、工業および農業部門の経験ある勤労者、大学をはじめ各級学校の青少年に深い配慮をめぐらし、かれらのためにすべての活動をおこない、国事を決定する。金日成元帥は、一身をかえりみることなく、ひたすら人民のために、人民とともに生活し活動している。

人民と密接なつながりをもつべきだというその深い自覚、そして人民を愛しかれらの感情と思想を見きわめる非凡な能力のなかにこそ、金日成元帥が革命と建設の指導理念として創始した天才的主体(チュチェ)思想の独創的な源がある。主体思想は、自由な人間の力と勇気、そして不屈の精神をもって、足の爪先まで武装した日本の侵略軍を撃破する偉大な闘争に立ちあがった朝鮮人民に勝利の信念をいだかせ、その前途を照らす烽火となった。

主体思想は、朝鮮人民こそ自己の運命の主人であることを世界に宣言した。金日成元帥が創始したこの天才的な思想は、朝鮮民族に新しい生命を与えた。なぜなら、主体思想は、人民があらゆる抑圧と脅威から自分自身を解放

する能力と力と手段をもっていることを教えたからである。まさに、主体思想をもつがゆえに、この偉大な民族は、工業、農業、教育、保健医療、文化などの各分野におけるすべての問題を解決して難関を打開し、その祖国をいかなる大陸の先進国よりはるかに発達した国につくりかえたのであった。

わたしは、二度にわたる朝鮮民主主義人民共和国の訪問をとおして、金日成元帥の指導を受けるこの民族が、すべての分野で、発展計画の目標を超過遂行しているばかりか、発達した国の社会経済学専門家のあらゆる思惑や理論をのりこえている事実を確認した。

金日成元帥の導く朝鮮民族が、工業と農業部門でかくも高い生産目標を達成し、教育と保健医療分野などでかくも急速に輝かしい成果をおさめた実例は、人類史上どこにも見出すことができない。「天がける馬」にのって勝利のうちに前進するこの国の勤労者は、より多くの人口と豊かな資源をもつ大きな国々が百年ないし二百年かかって遂行したことを、わずか二十年足らずでなしとげた。これは、金日成元帥の指導のたまものであり、主体思想の結実である。

学校、協同農場、工場、事務機関、家庭、そして街頭のどこででも人々は老若男女の別なく、自由と幸福と進歩をもたらしてくれた父なる偉大な元帥に限りない敬慕と支持をよせている。すべての人々は、自分たちを肉親の情で見守り、導いてくれる元帥の万年長寿を心から祈り、花束と頌歌を捧げている。わたしは朝鮮人民のこの喜びと幸せをともに分かち、第三世界人民の指導者であり鼓舞者である元帥を祝うため、妻子ともども四十余時間、大洋を渡り大陸を越えて朝鮮に旅した。

わたしは、元帥の万年長寿と幸福を心から祈っている。それはひとり元帥のみならず、朝鮮人民の自由と幸福でもある。元帥が生涯をかけた犠牲精神と不屈の献身性によって、今日、朝鮮人民の自由と幸福はたくましく枝をの

ばし葉をおい茂らせている。
われわれは、全朝鮮人民が元帥の方針に従ってアメリカ帝国主義侵略軍を南朝鮮から駆逐し、外国勢力の干渉を退け、自主的かつ民主主義的原則によって祖国の平和統一を実現し、南半部の兄弟も北半部人民と同様に喜びと幸福をともに分かつべきであると考える。
われわれは今後とも変わらね熱情と信念と勇気をもって朝鮮人民のたたかいを支援するであろう。

パナマ朝鮮親善文化協会書記長

一九七五年　四月

# 偉大な愛、無限の幸福

シエラレオネ
デイシ・ボーナ・アレン

わたしは、わが国の首都大港湾都市フリータウンの都心にある『フラッシュ』新聞社の一室でこの小稿を書きはじめた。
はるかな東方の国朝鮮の平壌空港から、ここフリータウン郊外のトウンギ空港に着いたのは、昨日の午後のことである。
長い空の旅の疲れも忘れて、わたしはいま歓喜と幸福感にひたりながらペンを走らせている。
なぜこんなに楽しいのだろうか。
久しぶりに祖国の土を踏んだからだろうか、それとも愛するわが子たちと終夜再会の喜びを分かち、かれらを心ゆくまでに愛撫することができたためだろうか。
もちろんそれは人情としていなめないことである。
懐しかった祖国であり、『フラッシュ』社であり、わが家であり、愛児たちである。しかしわたしはいま、祖国、シエラレオネの首都フリータウンでなく、主体(チュチェ)の祖国、革命の首都平壌の都心にある招待所の静かな部屋で、この

原稿を書いているような気がしてならない。
開け放った窓からときたま湿っぽい熱風が吹きこみ、ルケル川の流れが視野に映るが、わたしの目の前には平壌の青く澄んだ大同江が、そしてバオバブの木でなく平壌を美しく装った緑の並木がありありと浮かんでくる。
長い旅の疲れをけしとばし、わたしを執筆にかりたてている歓喜と興奮の実体はこれなのだ。
わたしは急に若返った自分に驚くとともに、かつてなくすらすらと走るペンの動きがわれながら不思議でならない。
英雄の国朝鮮民主主義人民共和国を訪問中わたしは、金日成主席が人類の望んでやまない幸福と栄光を人民にどのようにもたらしたかを確認し、きわめて強烈な印象をうけた。
幸福と栄光という言葉はよく使われる言葉である。この世の数限りない言葉のうち、もっとも高い代価を要求するのがこの言葉だと思う。
人間はだれもが社会的存在として幸福と栄光を望んでいる。それは一口に言って人類の世紀的な願望の結晶体であって、今後ますますその価値を増していくことであろう。
この幸福、栄光を現実のものとして人々にもたらしたのは、ほかならぬ金日成主席である。
わたしはある一時的な興奮からこのようなことを言っているのでは決してない。
これは朝鮮を訪問してわたしが自分の肌で確かめた現実であり、一生変わることのない確固とした信念である。
主席の偉大な思想と品性は、主席に謁見した瞬間からわたしの心を強くとらえた。
それは一九七五年五月、よく晴れたある日曜日のことであった。
樹齢三百余年のゴトウンをはじめ緑におおわれた首都フリータウンの美を誇ってきたわたしではあるが、朝鮮の

行く先ざきで自分の審美眼の限界を思い知らされたことを率直に認めずにいられない。

その美しい朝鮮の革命の首都平壌で、わたしはその日、万人がひとしく切望する特典に浴した。金日成主席の接見を受けたのである。

主席はわたしたち一行を身内のように暖かく迎えてくれた。素朴で謙虚で慈愛にみちた主席の人柄にわたしはその胸に飛びこみたくなる衝動をおぼえた。主席はまったくくだけたお方で、わたしたちの一人ひとりと握手を交わし、旧知のように気さくにたいしてくれた。

金日成主席は簡素な部屋で、わたしたちが知りたがっていた問題について親切に話してくれた。

わたしはそのときの心情を表現する言葉を見出すことができない。

よく響く太い声、春の日ざしのように明るい笑顔、情熱的なジェスチュア…。主席の偉大な風格に接して、わたしは父母のかたわらにいるような幸福感に包まれていた。

窓から陽光がさしこんでいた。全宇宙が主席の思索のなかに溶けこんで、その陽光に運ばれてくるような気がした。

事実、国際情勢について、帝国主義・植民地主義の抑圧と従属をふりきるためにたたかってきたわれわれの発展途上の諸問題について、長時間貴重な解明をおこなってくれた主席の言葉から、わたしたちは世界の動きを鮮やかな形でとらえることができた。

主席はわが国の情勢にも明るかった。そして、帝国主義者と植民地主義者が第三世界の天然資源の略奪に狂奔している今日、かれらの非道な搾取と抑圧から抜け出すために、第三世界諸国は断固としてたたかわなければならないと強調し、帝国主義者は、平和愛好人民を抑圧し搾取しないでは命をながらえることのできない窮地におちいっ

ている と語った。

わたしたちははじめて学校の門をくぐった人間のように、驚嘆の念で主席の教えを心にきざんだ。

帝国主義と植民地主義者に制裁の鉄槌をくだす主席の言葉には、またかれらの過酷な搾取に反対してたたかう世界人民の苦痛を思いやる温情がにじみでていた。

貧しい家庭に生まれ、ひたすら人民の自由と幸福のためにすべてを捧げてきた真の人民の指導者である金日成主席は、人民の心情と生活状態をよく知っていた。それだけに主席の言葉はすべて人民の念願を反映しており、このうえなく貴重で感動的である。

だれにも分かりやすい平易な言葉であるが、その一言一句に実に深い意味がこもっていた。

わたしは、人々がなぜ主席をそれほど敬慕して主席の接見を望むのか、そして接見後にはなぜ自身の第二の誕生について誇らしく語るのかを、はじめて悟った。

人民を深く理解し、新しい力と勇気を与える主席を、万人が人類の太陽と仰ぐのは当然なことである。

主席の教えに耳を傾けながらわたしは深い感慨にとらわれ、真理にたいする確信に胸が高鳴った。

光栄ある接見の席上、わたしたちは、主席のきわめて高潔な人柄とぬきんでた英知について知るとともに、かつて世界地図から抹殺され後進性と貧困にあえいでいた朝鮮を、歴史上もっとも短い期間に強力な社会主義国にきずきあげた主席の賢明な指導のもとに、朝鮮の婦人と子供たちが充実した真の生活を営み、幸せに育っているのを知ることができた。

人民の幸せと子供たちの明るい未来のために生涯を革命ひとすじに生きてきた主席は、とくに婦人と子供たちを暖かく見守っている。

平壌の一託児所で、幸せな幼児たちの歌や踊りを見物したときのわたしの驚きと喜びは形容しがたいものだった。まだ幼くてもみんなは、主席が自分たちのためにどのような活動をおこない、どんなに深い愛情と配慮をめぐらしているかをよく知っていた。幼児たちは主席の幼年時代とその輝かしい業績についても上手に話した。

このすばらしい託児所では、外国の幼児（駐朝外交団の子供たち）もあずかっていた。

伸びゆくすべての新しい世代を完全な中等知識をそなえた社会主義・共産主義建設者に育成している朝鮮民主主義人民共和国の全般的十一年制義務教育は、進歩的なすべての国が学ぶべき模範である。

主席がつねに語っているように、朝鮮では子供たちが「王様」である。

主席は婦人たちの福祉のためにもたえず深い関心を払い、社会的に解放された彼女たちを家事の重い負担からも解放する措置を講じた。

朝鮮の婦人はだれもが子供たちを国家と社会の負担で育てており、家庭生活に必要なすべてのものを供給されている。したがって彼女たちはなんの心配もなく国の主人として社会主義建設で大きな役割を果たしている。

主席は朝鮮人民を主体思想で励まし、かれらが千里馬精神で前進するよう賢明に導いて、自立的な近代的工業をきずいた。

鋼鉄の統帥者であり、偉大な卓越した指導者である金日成主席と栄えある朝鮮労働党の指導のもとに、朝鮮人民は人間による人間の搾取と抑圧のない新社会を建設した。

世界の人民は、過去たち後れ名さえ失っていたこの国がおさめた今日の成果に大きな関心を向けている。

朝鮮民主主義人民共和国は世界最初の無税国となった。この国の勤労者は、重税にうちひしがれている南朝鮮や資本主義国および植民地諸国の勤労者とは違って、税金による苦しみを知らず、みちたりた生活を送っている。

これらの成果はすべて、金日成主席の賢明な指導と愛と配慮に負うものである。

わたしはまた、朝鮮のめざましい建設と発展をうながした偉大な千里馬運動についても深い感銘を受け、格別な関心をひかれた。

この運動によって朝鮮人民は、アメリカ帝国主義者がしかけた侵略戦争で廃虚と化した自国を、最短期間内に強力な重工業と近代的軽工業、発展した農業をもつ社会主義工業国に変えたのであった。

わたしは平壌のメーデー慶祝行事に参加する機会にめぐまれた。

朝鮮民主主義人民共和国では、メーデーが労働者の戦闘的な団結を示威し、国際労働者階級にたいする支持と連帯を強める日となっている。

わたしはこの日、平壌のある美しい公園でもたれた大衆野遊会で、朝鮮の愛らしい子供たちと楽しいひとときを過ごした。そして運動競技にも参加し、外国の侵略と干渉から祖国を守りぬくことを誓う朝鮮少年団員をかたどったかわいい人形など、多くの賞品を贈られた。わたしの子供たちはこのみやげに大喜びだった。

わたしは板門店に向かう途中信川に立ち寄り、強いショックを受けた。そこには、アメリカ帝国主義者とその手先南朝鮮の殺人者らが、婦人と子供たちにたいしいかに戦りつすべき暴虐行為を働いたかを語る資料が多かった。

また板門店では朝鮮戦争に関する全般的な内容を詳しく知り、アメリカ帝国主義の雇い兵と南朝鮮かいらいの蛮行をあばく証拠品も見た。朝鮮で依然として緊張状態が続き、戦争の危険が増大している原因は、全的にアメリカ侵略軍の南朝鮮占領にある。

朝鮮は実に麗しい国である。美しい山河と豊かな大地は、主席の賢明な指導と大いなる愛によってますます住みよい人民の楽園となっている。

金日成主席こそ人類に幸福と栄光をもたらすもっとも偉大な方であることは、疑いの余地がない。それゆえ、世界のすべての進歩的人民と解放運動、政党、大衆団体の活動家、平和愛好人民が心から主席を敬慕してたたえ、朝鮮人民の闘争に支持と連帯を送っているのである。

わが国と主体の祖国朝鮮は地理的には遠くへだたってはいても、わたしは常に朝鮮とともにあり、主席に謁見した栄光を末長く伝え、主体の永遠の光を胸に秘めて生きるであろう。

シエラレオネ・『サンディ・フラッシュ』紙主筆

一九七五年　六月

# 明るい太陽の下で

日本
松本昌次

帰国も目前に迫った一九七三年九月三十日、わたしたちは、思いがけなくも金日成主席から招かれた。わたしは、ふたたび朝鮮を訪れるにあたっても、主席にじかに会えるとは思わなかった。わたしは一個のジャーナリストではあるが、新聞記者や雑誌記者のように、何かを報道する義務は持っていなかった。また、何かの政治団体の代表として訪問しているわけでもなかった。いわばフリーの立場にあった。従って再訪にあたってわたしが希望したことといえば、できるだけ多くの朝鮮人民と話しあいたいということであり、できれば一週間か十日ぐらい、どなたかの家で起居をともにさせて欲しいということであった。たとえば自分の固定した観念でひとの国と自分の国の優劣をさがしまわったり、政治体制がどうなっているかと首をつっこんでみたりすることは、避けるように努めた。むろんその任でもなかった。朝鮮人民がかつての苦難の道のりをどう歩んできたか、そして現在はどう生きているかを、日常的な観点からわたしの知覚のすべてで感じとりたいと願ったのである。

その日以前、わたしたちは、金日成主席と握手し、ふたことみこと、言葉をかわす機会はあった。九月八日、平壌体育館でおこなわれた朝鮮民主主義人民共和国創建二十五周年慶祝中央記念報告会の会場でであった。また創建

記念日当日の九月九日、南浦市で行なわれたマスゲーム見物のあと、万寿台議事堂で開かれた慶祝宴の席上でであった。主席は、各国からきている公式の代表団とはちがい、まったくのフリーの客であるたった二人のわたしたちの掌を固くにぎり、健康を気づかう言葉をかけてくれた。慶祝宴の席上、主席のはじめての演説を聞いた。いや、それは演説というより、談話といったほうがいいだろう。段落の冒頭で、必ず「ドンジドゥル(同志の皆さん)…」と始まるその談話は、決して獅子吼調ではなく、冷静で、重味のある声でつらぬかれ、ある優しさすらわたしは感じた。一人のフリーの人間にとっては、これで十分であった。それが、突然の招きである…。

その日も、秋晴れの素晴らしい天気であった。関係者の人からそれとなく暗示があり、気の弱いわたしは、ある種の緊張感を覚えざるを得なかった。いったい、そんなえらい人と何を話したらいいのだろうか。そういう機会になれないわたしは戸惑った。午後一時すぎ、朝鮮対外文化連絡協会の委員長とともに、招待所を車で出発。「果樹園でも見ましょう」ということで、車はひろびろとした果樹園や田畑をぐるぐると通り抜ける。

わたしたちの緊張をときほぐそうとしているのか、または時間を調節しているのか、よく解らない。主席は、近くの農村に現地指導に行っているとのことだった。やがて沙里院市につく。最初の旅の折食事した懐かしいホテルの一室で休息。午後五時ごろ、外務省儀礼局の車で再び出発。平壌の方向に向かってやや走ると、山間の閑静な小じんまりした招待所か休養所に到着。深い樹々に囲まれているためか、すでに暮色が垂れこめはじめている。車を降りると、すでに主席は庭の中央でわたしたちを待っていた。握手、挨拶、そして記念写真。率直にいって、わたしはカチカチになっていた。朝鮮人民の敬愛する指導者と直接会うなどということは、わたしにとって想像もつかないことであった。はじめは、庭で話そうかということのようだったが、秋深い夕暮れ、すでに冷気があたりに漂い、すぐに応接室に入った。

以下に、金日成主席の談話の中でまとまった部分のみを、矢田さんとわたしがあとでまとめたメモをもとに、わたしたちの受け答えを除いて要約したい。応接室で約一時間二十分、食堂で食事しながらの約一時間四十分、計三時間であった。わたしたちの緊張が、主席の談話がはじまった途端、あっという間にときほぐれてしまったことはいうまでもない。実に気楽に笑い、身ぶりをまじえた率直でユーモアに満ちた談話は、たちまちのうちにわたしたちをまきこみ、ゆったりさせてくれた。煙草をすすめ、マッチをつけてくれ、食事の時には調味料に何をつけたらいいかにまで気をくばる主席の暖かい態度には、いわゆる「政治家」というものにある種の偏見を抱いていたわたしを驚かせた。朝鮮人民が主席をアボジ(慈父)と呼ぶ気持もわかるような気がした。その三時間は、楽しい、あっという間の三時間であった。通訳の人のものの見事な同時通訳は、直接話しているような感じであった。

*　*　*

——今日は、特別の話題についての話しあうわけではありませんから、友人として気楽に話しあいましょう。元山から金剛山へ行ったそうで、それは大変よかったと思います。九竜淵までは歩いて行くのが一番いいんです。金剛山には宿泊所が少ないんですが、まだ十分に宿泊所を作ることができません。これからもっと作りたいと思っています。若い人たちはテントを張ってキャンプしているようですが、若い時はそれも楽しいし健康にもいいでしょう。昔は、地主や資本家の別荘があり、遊廓などもありました。(笑)わが国の北部には休養所がたくさんあります。この次に来た時は、北部のほうへいらっしゃい。しかし北部は寒さが早くきて、秋にはもう雪が降ることがあります。七月か八月がいいでしょう。わが国の人びとも、夏は涼しいのでたくさん出かけます。

―今日も、近くの協同農場に行ってきたのですが、今年の米の収穫は、まあいいほうでしょう。一ヘクタールあたり平均六トン、場所によっては八トン、最もいいところで十トンでしょうか。わが国では、土地のカードを作っています。全国至るところの土地を調査して、その土質の特徴を調べ、カードを作るわけです。農業大学の学生や技師が総動員で二年がかりで完成しました。その土地の成分によって、適合するマグネシウムやカリウム、ホウソ等を配合するわけです。化学工場を増設してそれらを生産していますが、使用するのは僅かの量です。各農場に農業大学の学生二人ずつを配置しましたが、農民を指導するほかに、彼等は農民から教えられるわけで、お互いに向上します。医者に行けば、一人一人身体の状態を書いたカードがあり、それさえあれば、医者がかわっても、一目でその人の身体の状態がわかります。それと同じで、土地にもカードを作り、誰が行ってもその土地に適合する肥料がわかり、どういう品種がいいか選べるようにしたわけです。その結果がでてきたのでしょう。稲穂を抜いて調べてみましたが、去年は一本の稲穂のうち十二〜三粒がカラ粒でしたが、今年はカラ粒が二〜三粒でした。

―どこの農場でも、去年より増産しています。少ないところで五百キロから八百キロぐらいが普通ですが、一トン増産しているところもあります。今朝もある農場へ行ってみましたが、今年六トンの収穫を来年どのくらい増産するか尋ねたら、二トン増産すると答え、「空を見あげていっているのではなくて、科学的根拠があります」といっていました。(笑)いまわが国の農民は、解放前の中農以上、いやそれ以上の生活をしています。解放前の自作中農は五月の麦の収穫期までいかに食いつなぐかが問題でした。しかしいまの農村は、次の年の米の収穫期まで何の心配もありません。余った米を貯蔵する倉庫を作らねばなりませんが、それはいいことですからね。先日、農業大学の実習生を集めていろいろと話しあい、意見を出させました。そこでわたしは、昔話を一つしてやりました。このあたりに伝わる昔話ですが、いまの若い者は新しい本ばかり読んで昔の本を読みませんからね。

―昔、長い大雨が降りつづき、村は洪水で水びたしになりました。地主は、金庫から金を持ちだして木に登りました。農民は、握りメシを持って木に登りました。お互いに話ができる距離でした。なかなか水がひかず、二人ともお腹がへってきました。そこで地主は、お金を払うから握りメシをくれないかと農民にたのみました。農民は考えました。このさいはお金より食べ物が大事だ。農民は首を横にふり、握りメシを食べて水のひくのを待っていました。水は何日もひかず、地主はついに空腹のため、木から落ちて死んでしまいました。この昔話で、米がいかに大事かということを話したわけです。米が沢山あれば、人の心は安らかです。いま農民は、昔の中農というより、富農の下ぐらいかも知れません。さらに向上させたいと思いますが、いくらなんでも地主ぐらいまでという言葉は使うわけにはいきませんね。（笑）それは遊んで暮らすということですから。つまり大事なことは、重労働からの解放ということです。

―そのためには、トラクターが必要です。現在、百町歩あたり二～三台です。これを平均六台に増やすのが目標です。技師や農業大学の学生に尋ねたら、八台あれば完璧だと答えていました。そうすれば骨の折れる手仕事がなくなるでしょう。稲の自動刈取機も作ってみました。先日も、学生が考案した刈取機を実験してみました。彼は自慢して張り切って動かしてみたんですが、雨のあとで、後輪はいいのですが前輪がうまく動かず役に立ちませんでした。（笑）雨のあと役に立たないのでは仕方ありません。日本からも試験的にとり寄せてみました。作動はよく、手で刈るよりは早いのですが、手押しなので手が疲れます。イタリアのも調べてみましたが、稲のまん中あたりを刈るのでやはりダメでした。（笑）そのほか、フランスなんかからもとり寄せています。農村が豊かになるのは、風景としても大変気持いいものです。農民は、冬の間は学習をしています。解放直後、農業大学は平壌と元山に二つしかありませんでした。解放前はむろん一つもありません。それが現在、各道に一つずつあり、そしてそれぞれ

の道の実状にあった教育と農業にたいする援助をおこなっています。もう二年もすれば、技師の数もふえ、農業もさらに発展するでしょう。教育には、わが国は沢山の金を使います。予算の大部分が教育費で、余った分を他にまわすわけです。

—万寿台芸術団が日本公演から帰ってきて、団長から電話で報告がありましたが、大変な歓迎を受けたとのことでした。わたしは、万寿台芸術団が芸術的にそれほどすぐれているとは思いませんが、日本での公演の意義は、芸術を見せるというより、日本人民とじかに触れて、朝日両国人民間の友好親善がどんなに深いものであるかを知ることだといいました。過去の日帝支配者と日本人民とを区別しなさいといっても、どうしても怨みが残っている人がいます。だからこの目で見てくれれば、日本人民がどんなにわが人民と友好親善をのぞんでいるかがわかるといったわけです。出発の時、団員がみんな泣きだした。中国とかフランスとかイタリアとか、世界の各地に出発する時に泣いたことのない彼等が、みんな泣きだしました。日本に行くということで泣くんです。なにをそんなに泣くんだ、泣くことはないといいましたが、その気持はわかる気がします。在日同胞と会えるということは、ほかの国に行くのとはちがいますからね。

—帰国してから、団長の電話を受けましたが、わたしはまだ会っていません。万寿台芸術団は、中国で一か月の予定が、ひきとめられて二か月も公演し、休むひまもなくすぐに日本に渡って六十日・五十回公演をしたわけですから、金剛山にでも行ってゆっくり休養してくるようにいいました。報告はいつだって聞くことができます。団長の電話によれば、日本人民がこんなに歓迎してくれるとは思わなかった、朝日両国人民の友好にとって大きな意義があったということでした。万寿台芸術団の若い人たちが膚でそのことを知ってくれただけでも、わたしはよかったと思っています。

――わたしは、わたしやわが国に対する悪口・中傷・誹謗にはなれていますので、気にもとめません。抗日武装闘争の時いらい、あちこちに出没するので偽物だといわれたこともあります。（笑）あなたの『マーク・ゲイン批判』も読みました。あなたがわが国を支持してくれることには感謝しますが、悪口を言いたい者には言わせておけばいいのです。この前の非同盟諸国会議でも、八十余か国の参加国が満場一致でわが国の加盟を支持しました。誰がどんな悪口をいっても、歴史はちゃんと進むものです。それにしても、南朝鮮当局は何をやりますか。白昼公然と日本から金大中氏を誘拐するんですからね。彼等のやることといったら、まったく驚くほかありません。

わが国にとって最も大事なことは、祖国の自主的平和統一ということです。どうして祖国を分断したまま、子孫に残すことができるでしょうか。祖国を統一すること、これはわたしたちに課せられた重大な責任です。

＊　＊　＊

日常的な対話を省略すると、金日成主席の談話は、ほぼ以上のごとくである。わたしは、主席の著書『社会主義的教育論』（未来社刊）を制作して持参していた。つまり、原著者にできあがったばかりの本を日本から持ってきていたのである。共和国に着いてすぐ係の人に見本をわたしてあるので、すでにその本を受け取られたかどうかをわたしが尋ねると、主席は、「確かに本は受けとりました。しかし、創建記念日にあたって何かと忙しく、カバーや表紙をちょっと見ただけで、そのままにしています。カムサハムニダ（感謝します）」と答え、話題はあっという間にほかに移って行った。そこには、自分に関したことについては、まったくといっていいほど触れようとしない謙虚さがうかがわれた。自分のことには一切触れず、わたしたちの健康状態や毎日の生活状態を聞き、果ては日

本にいる家族のことや、仕事の仲間のことまで気づかう主席の思いやりには、ただ感心するほかなかった。
考えてみれば、特に何かの使命も持たないわたしたちフリーの人間に、主席が会うこと自体、大変なことであろう。そういえば、最初の旅の時である。共和国を去るにあたって、主席に直接お礼の言葉を伝える機会がなかったので、わたしは係の人に手紙を託して帰国した。帰国して一か月余りたった時である。一通の長文の電報が届いた。主席からのものであり、そこには手紙を嬉しく読んだこと、また朝日両国人民間の友好をさらに前進させたいこと、そのために出版活動でがんばって欲しいことなどが記されていた。わたしは驚いた。予想もしないことであった。こんな小さなことにまで心をくばる一国の指導者がいようとは、思ってもみないことであった。朝鮮革命博物館を見学していた時である。ある期間の十年間に、主席は、平壌以外の各地を千七百か所現地指導したという説明を聞き、わたしは仰天した。二日に一ぺんは、地方のどこかに出ていることになるのだ。わが耳を疑ったほどである。しかし、たえず「対人関係」を党活動の中心に置く主席としては、あり得ることである。そのようにして、主席は、人民の生活のすみずみにまで心をくばりつづけているのである。
またたく間に三時間が過ぎ、金日成主席に送られて建物を出ると、外はすでに夜で、庭にポツポツとあかりがともり、空気は冷やかだった。別れの挨拶をして十メートルほど歩き、ふとふりむくと、主席が、わたしたちに手をふっていた。主席に対して手をふるのは、何となく馴れ馴れしくて失礼な気がしたが、わたしも思いきって手をふった。車は、まっ暗な農村をつらぬく白い一本の道を、平壌に向け、一気に走りだした。空には無数の星が散らばり、わたしは、なんとなく深海の底にゆったり休んでいるような、心暖まる思いにひたっていた。
その日の前夜、わたしたちは、『明るい太陽の下で』という映画を見ていた。一言でいえば、ダム建設の現場の苦闘を描いた映画である。しかし、そのダム建設には、抗日武装闘争と祖国解放戦争の歴史的経験が流れこんでい

る。主人公である建設現場の支配人は、かつて、抗日パルチザンの一人として戦ったことがある。侵入した日本軍によって家は焼かれ、彼の妻は射殺される。燃える家のなかに投げこまれた幼い娘は、辛うじて近くのオモニに助けられる。その娘は成長して設計技師となり、ダム建設に当たっても革新的な意見をだす。のちに支配人が父だということがわかるのだが、彼女は、祖国解放戦争の兵士として、前線で戦ったことがある。深夜、降りつづく大雨で増水し、建設中のダムが崩壊寸前になる。ダムを守るためには、上流の堤防を爆破して川の流れを変えるほかないという主席からの指示が電話で入る。朝鮮人民軍が出動して待機するが、すべての連絡網は絶たれている。まっ暗ななかで、彼女は高台にたち、松明を手にしてかつての祖国解放戦争の時のように、手旗信号で爆破の合図を送る。かくして建設中のダムは救われる。土のうを積んだ堤防を守るため、スクラムを組んで水圧と闘う人びとの一人一人の姿は、わたしに、この半世紀に及んだ朝鮮人民の革命と建設の苦闘の歴史を思い起こさせた。わたしなどにはとても想像のつかないことが、この国で起こったのだ。主席と朝鮮人民とのつながりにおいても、わたしの理解を遙かに越えているといえるだろう。

一路、ひた走りに平壌に向かって走る車のなかで、わたしは、〝明るい太陽の下で〟朝鮮人民が、南北を問わずがっちりとスクラムを組む日のくることを、ただひたすら思いつづけていた。

日本・未来社編集長

一九七五年　十月

# 楽観している朝鮮の領袖

オーストラリア
ウィルフレッド・バーチェット

朝鮮民主主義人民共和国の金日成主席は、ワシントンの「緊張緩和」政策にいささかの期待もかけていない。

金日成主席は、一九七五年十月二十一日、平壌での四時間半にわたる談話のなかで、朝鮮にたいするアメリカの侵略策動がエスカレーション式に拡大されていると非難し、彼らは、朝鮮半島で重大な戦争危機をつくりだしていると警告した。

また朝鮮の主席は、ワシントンのいかなる好戦的な陰謀も破綻をまぬがれえないとの確信をもっていた。

金日成主席は、インドシナでのアメリカの敗北が朝鮮に及ぼした影響、そして国連における朝鮮問題に関する討議について語った。

主席は、インドシナにおけるアメリカの敗北からみた朝鮮の統一展望はどうか、という質問に次のように答えた。

「アメリカ帝国主義者はインドシナで恥ずべき惨敗をこうむった後、南朝鮮をアジア侵略の拠点として掌握しつづけようとし、朝鮮にたいする侵略策動をいっそう強化しています。

最近、アメリカ帝国主義の頭目たちは、南朝鮮をアメリカの『前線防衛地域』とし、アメリカ帝国主義侵略軍を

南朝鮮に継続駐留させるだろうとうそぶいています。最近には、アメリカ国防長官なるものが南朝鮮にやって来て、朝鮮で戦争が起これば『アメリカ軍は自動的に介入』し、『核兵器の使用』も辞さないといい、さらには軍事境界線一帯を視察して共和国北半部を侵略する『作戦計画』まで謀議しました。これは、南朝鮮を侵略基地として全朝鮮を占領しようとするアメリカ帝国主義の野望が少しも変わっていないことを示しています」

## 軍事活動

金日成主席は、前アメリカ国防長官ジェームズ・シュレジンジャーが八月末にソウルを訪問したあと、南朝鮮、とくに北と隣接した地域での軍事的策動がさらに激化したと語った。

金日成主席の接見をうける数日前、板門店で会った北朝鮮の高位級参謀たちも同じようなことを言っていた。このような実例として、非武装地帯の南側わずか三マイル地点に、核弾頭用誘導ミサイル発射台を設置し、たえまない軍事演習と北に向けて核兵器の模擬発射をおこなっていることなどがあげられる。

金日成主席は、つづけて次のように語った。

「アメリカ帝国主義者はすでに、南朝鮮にいるその侵略兵力を増強し、核兵器をはじめ大量殺りく兵器を大々的にもちこんで軍事境界線一帯に配備し、作戦指揮体系を再編成しました。最近アメリカ帝国主義者は、『国軍近代化』の名目のもとに南朝鮮かいらい軍を最新兵器で装備させ、南朝鮮のいたるところに軍事基地を大々的に新設、拡張する一方、南朝鮮かいらいを共和国北半部にたいする戦争挑発へとそそのかしています。…

こうしたアメリカ帝国主義者の侵略策動のため、わが国では緊張が激化し、いつ戦争が再発するか分からない重大な情勢がつくりだされています」

## 高度の警戒心

金日成主席は、ここ数か月間、とくに主席が今年の北京訪問のさい幾度となく指摘した次のような内容の警告を再び強調した。

「わが人民は、敵の侵略策動を高度の警戒心をもって見守っており、それに対処する万全の準備をととのえています。もし、アメリカ帝国主義者が朝鮮で新たに戦争を引き起こすならば、朝鮮人民は断固たる反撃をもって答え、その機会に分裂した祖国を統一するでしょう。

アメリカ帝国主義者は、朝鮮にたいする無謀な侵略策動をただちに中止すべきであり、南朝鮮から侵略兵力を取り払い、遅滞なく撤退すべきです。アメリカ帝国主義者が朝鮮人民の正当な主張に耳をかたむけず、共和国北半部にたいする侵略策動をつづけるならば、インドシナでこうむったよりもさらに大きな敗北をこうむるでありましょう」

金日成主席は、戦争がいつ起こるか分からないということを公式の席上で幾度となく明らかにした。

主席の警告を、ソウルでは北からの「南侵脅威」と解釈しているが、そのような準備をしているという根拠はない。

ソウルを訪れた以前のペンタゴンの頭目は、北からのいかなる攻撃も「ほとんどありそうにない」と認めざるをえなかった。事実上北は、経済建設に拍車をかけており、全国各地に新設中の企業所に莫大な資金を投入している。それに大規模の都市や農村の建設を直接目撃した。

一切の税金を撤廃し、工業消費物資の価格は平均三〇％値下げし、全般的十一年制の義務教育を実施した。これが、戦争の勃発にそなえた施策でないのは自明なことである。

全般的な雰囲気は私が戦後はじめて朝鮮を訪問した一九六七年とは全く異なっていた。

## 歴史的勝利

金日成主席は祖国統一のための具体的な措置にふれ、次のように語った。

「…なによりもまず、南朝鮮を占領しているアメリカ軍から『国連軍』の帽子を脱がし、彼らをすべて撤退させるべきです。アメリカ軍の南朝鮮占領は、わが国の統一を妨げる基本障害であり、朝鮮の平和を脅かす根本的要因です。それゆえ、南朝鮮からアメリカ軍をすべて撤退させるのは、わが国の統一問題を自主的に、平和的に解決する先決条件です」

「二十余年前に締結された朝鮮軍事停戦協定は、あくまでも戦争停止にかんする協定であって、わが国における強固な平和を保障するものではありません。…朝鮮民主主義人民共和国とアメリカのあいだに平和協定を結ぶのは一刻も遅らしてはならない差し迫った問題です。平和協定を締結してはじめて、朝鮮で新しい戦争が起こる危険を

取り除き、祖国の平和的統一を可能にする環境をつくることができます。南朝鮮からアメリカ軍がすべて撤退し、わが国とアメリカとのあいだに平和協定が締結されれば、朝鮮人民は自分自身の力によって自主的に、民主主義的原則にもとづき、平和的方法で国の統一を実現するでしょう」

「わが国の統一の展望は、一口にいって楽観的です。もちろん、アメリカ帝国主義者とその手先の妨害策動のため、統一の前途には依然として大きな障害が横たわっており、国の統一のためには解決すべき問題がたくさんあります。だからといって、われわれは国の統一の展望について少しも悲観しておらず、楽観しています。…全朝鮮人民の積極的な闘争と世界人民の圧力によって、内外の分裂主義者の策動は阻止され、破綻し、わが国の統一は必ず実現されるでしょう」

金日成主席は国連総会に提出された朝鮮問題に関する四十三か国決議案と関連し、次のように述べた。

「あなたもご存じのように、南朝鮮にいる『国連軍』とはほかならぬアメリカ軍です。それゆえ、『国連軍司令部』解体問題とアメリカ軍の撤退問題は絶対に切り離すことができません。『国連軍司令部』が解体されれば、国連の旗のもとに南朝鮮にいるアメリカ軍も撤退すべきです。南朝鮮からアメリカ軍を撤退させず、『国連軍司令部』だけを解体するのは、わが国の自主的平和統一の実現には実質的に大きな意義がありません。国連が朝鮮の統一問題に力をかすためには、『国連軍司令部』を解体すると同時に、国連の看板にかくれて南朝鮮にいるアメリカ軍をすべて撤退させる措置を講ずるべきです」

十月二十九日の政治委員会（第三十回国連総会――編集部）は「国連軍司令部」の解体と、国連の旗のもとに南朝鮮に駐屯している一切の外国軍隊の撤去を要求する決議案を採択した。

この決議案に指摘されている一切の外国軍隊とは、アメリカの官吏たちのいういわゆる「国連軍司令部」管下の

アメリカ軍三百名だけをさすのではなく、四万二千余のアメリカ占領軍を意味している。…

この決議案のもう一つの重要な条項では、朝鮮民主主義人民共和国とアメリカの間に締結された一九五三年の朝鮮軍事停戦協定を平和協定にかえることを要求している。

このような表決は、平和を願う全朝鮮人民にとって歴史的な勝利としてむかえられた。それは国連機構がこのような決議案を封じようとするアメリカの執拗な策動にもかかわらず、アメリカ軍の南朝鮮占領を公式に排撃し、その終息を要求したのは、これが最初であったからである。

しかし同盟国にたいするアメリカの極めて強い圧力により、政治委員会は棄権二十九、五十九対五十一票で、アメリカ側の決議案も通過させた。この決議案は停戦協定の履行を保障するための協商を求めたものであった。このような協商がおこなわれた後、はじめてアメリカは国連軍司令部の解体に同意するというのである。またアメリカは、自国の過去と現在における対朝鮮政策の正当化をねらった演説で、米軍を南朝鮮に駐屯させる意思を明らかにした。アメリカの主張によれば、南朝鮮占領の法的根拠は、ワシントンとソウル政権――米軍の南朝鮮駐屯によってのみ、維持されている政権である――の間の双務条約である。

総会での最終決定の内容いかんにかかわらず、国連がアメリカの南朝鮮占領を非難したのは、アメリカがこうむったもっとも深刻な政治的敗北であった。これは、明らかに国際舞台において緊要な問題として残されている。国際舞台ではアメリカの威信と南朝鮮かいらいの合法性をそこねる反響がひきつづき起きている。そして同じ程度に確実なのは、アメリカがその政策的見地からアジアにおける最後の拠点を手放さず、また、これを許している南朝鮮政権維持のために狂奔するであろうということである。

## 拡大される朝鮮の経済規模

朝鮮民主主義人民共和国の経済規模は、驚くべきテンポで拡大されている。公表された統計によれば、世界の経済状況、燃料危機やその他の不利な要素にもかかわらず、最近四年八か月間の工業生産の年平均成長率は一八・四%である。

現在重工業の近代的大工場が多く建設されていることからおして、朝鮮民主主義人民共和国の目標は、今後数年間、ひきつづき急速な拡大を維持することにあると見て間違いない。経済における自立政策が世界経済危機の影響から国内の発展を救ったのは疑う余地のないことである。外的要因が経済に及ぼす影響程度は、ただ自力更生政策の正しさを立証したにすぎない。

問題はやはり「主体(チュチェ)」路線の堅持にある。これは先月の金日成主席との長時間にわたる談話の過程で明らかになった。

この席上で主席は、私の提起した国内外の問題について語った。

金日成主席は次のように述べた。

「現在、世界の多くの国が食糧難、燃料難、原料難に見舞われていますが、われわれにはそのような困難はありません」

「われわれは、今年、気候条件がひじょうに不利であったにもかかわらず、大豊作をおさめました。

今、われわれは食糧難がないばかりか、かえって、食糧の蓄えをもっています。われわれは食糧の輸出もおこなっています。社会主義諸国にも少し輸出し、その他食糧不足を訴え、その提供を求める国にも送っています。昨年は、インドネシアで二十万トンの米を求めてきたので、輸出しました」

このことから推して、また主席の談話から推して明らかなのは、北朝鮮が重要な穀物輸出国に発展しているという事実だ。

農業での急速な前進は、一九五六年に戦前の最高収穫年度である一九四九年の穀物生産高をはるかに上回った事実によっても評価できる。一九七四年にはそれが七百万トン以上に達した。穀物生産が急増した主因は、耕地の全面的な灌漑、高度の機械化と科学的な施肥体系にある。

金日成主席はつづけて次のように述べた。

「われわれは、今後穀物千万トンの生産を計画しています。

わが国では、耕地面積が少ないため、農業を集約化しています。わが国における農業の水利化、電化はすでに完成しました。現在われわれには、農業の化学化と総合的機械化を完成すべき課題がひかえています。われわれは、農業の化学化と総合的機械化の課題も短期間内に完遂することができます。われわれはすでに、近代的な大トラクター工場を建設し、各地に連結農業機械工場やトラクター組立工場を建設しました。…」

「われわれはすでに穀物生産を間断なく高める基礎をきずいてあるので、今後穀物千万トンを生産するのも問題はないでしょう」

このような農産物が輸出の可能性をもっているのは明らかである。しかし、金日成主席の説明にあったように、ここにも一部の困難がある。例えば、穀物輸送用船舶のチャーターがむずかしいことである。北朝鮮の他の輸出品

の場合も事情は同じである。輸送手段の逼迫のため、非鉄金属が港に山積されている。
主席は、すべての緊切な問題にたいする「自主的」な解決方途を概括して次のように述べた。
「今日、わが国でもっとも緊切な問題は、海上運輸を発展させることです。海上運輸を速やかに発展させるのは逼迫した輸送事情を緩和し、対外貿易を発展させるうえできわめて重要な意義をもちます。
以前われわれは、わが国にたいするアメリカ帝国主義者の経済封鎖策動のため、社会主義諸国とだけ貿易をおこない、資本主義諸国とは貿易をおこなえませんでした。しかしこれからは第三世界諸国との貿易を大々的におこない、フランスをはじめ西ヨーロッパの資本主義諸国とも貿易をおこなわなければなりません。対外貿易を拡大発展させようにも、海上運輸が問題です。
今、わが国の港には貨物が山と積まれていますが、船舶不足でそれを適時に積み出せないでいる有様です。最近、用船料が三倍にはね上がりましたが、それさえもチャーターするのが難しい状態です。こうした状況に照らして、われわれは自力で大型貨物船をたくさん建造しなくてはなりません」
「以前にはわれわれに船があっても自由に航海できず、他の国といっしょに海運会社を設立して運営しましたが、今ではわが共和国の国旗をかかげてどこへでも航海できるようになりました」
「わが国には、造船業を大々的に発展させうる物質的・技術的土台もきずかれており、労働者階級の熱意もひじょうに高まっています。われわれの労働者階級は、資材さえ供給してくれれば、党が要求することはどんなことでも全部やってみせるといっています」
金日成主席は、海上運輸問題をここ二〜三年内に解決する見通しをもっていた。

## 期限前に

金日成主席は経済発展の全般にふれ、一九七六年末に完遂する予定だった六か年計画を工業総生産額のうえで一年四か月、農業は二年繰り上げて完遂したと述べた。

金日成主席は次のようにつづけた。

「しかし、六か年計画の主要生産目標のうち、二つの生産目標はまだ達成していません。その一つは鋼鉄生産目標であり、いま一つはセメント生産目標です。われわれが二つの生産目標を達成できなかったのは、大きな近代的設備を外国から輸入するのに少々手間取ったからです。この二つの生産目標も、来年の上半期内には達成できるでしょう」

金日成主席は、今後、鋼鉄千万〜千二百万トン、セメント二千万トン生産すると語った。

金日成主席はまた、次のように述べた。

「われわれが鋼鉄、セメントなどをこのようにたくさん生産しようとするのは、われわれだけが使うためではありません。セメントを二千万トンも生産して、自分だけでどこに使うというのでしょうか。われわれは、鋼鉄、セメントを大量に生産し、わが国で利用するだけでなく、第三世界諸国、新興勢力諸国を援助するつもりです。今、第三世界諸国は建設をたくさんおこなっており、鋼鉄、セメントなどを大量に求めています」

勤勉で規律正しい千七百万の人口と無尽蔵の原料をもち、重工業、軽工業、農業が均衡のとれた発展をとげている北朝鮮は驚くべきテンポで前進している。

## 経済政策における「主体」は朝鮮民主主義人民共和国においてその威力を発揮している

自主と自立は、朝鮮民主主義人民共和国における急速な経済発展の核をなしている。

自主・自立は朝鮮民主主義人民共和国の国内経済発展を、燃料危機のような外的要因や資本主義世界の周期的経済危機の影響から守り通した。……

一般的に言って、実際に、朝鮮が気候条件に左右されない高度に自立的な農業と、大部分の原料を国内でまかなう強力な工業をきずきあげたため、現在の世界経済危機は朝鮮の発展に影響を与えていない。

金日成主席は、次のような重要な実例をあげた。

「以前われわれの一部の学者も、原油発電所を建設する方が水力発電所を建設するよりはやいといって原油発電所の建設を提案しましたが、私はそれに反対しました。水力発電所を建設するよりは原油発電所を建設した方が少々はやいかも知れませんが、運営費が高くつきます。

わが国には川が多いので水力発電所を建設することもでき、また石炭が豊富なので火力発電所を建設することもできます。それなのに、どうして原油を輸入して使う原油発電所を建設する必要があるでしょうか。……現在世界中が燃料危機に見舞われているにもかかわらず、わが国ではそのようなことがありません。今日にいたって、われわれの科学者は自国の資源に依拠して動力工業を発展させたわが党の政策が正しかったということをいっそう痛切に感じています。

原料問題にしても同じです。われわれはあくまでも自国の原料に依拠して工業を発展させる方針をゆるぎなく堅持しました。われわれは、今原料の七〇パーセント以上を自国の原料に依拠して工業を発展させています。…また、世界の多くの国で、原料危機のためはなはだしい物価騰貴をまねいていますが、わが国には物価騰貴がありません」

金日成主席は大笑して次のように述べた。

「今後…莫大な外貨を稼げると思います。現在、わが国の鉛、亜鉛は国際市場で重要な位置を占めています。わが国の鉛、亜鉛が国際市場に出まわらないと、国際市場の鉛、亜鉛価格が高騰するそうです」

自力更生の「主体」思想は、未加工の原料を国際市場でダンピングし、それを精練、加工する高度に発展した国ぐにに利益を与えるのに反対する。主席は鉄鉱石についてもこれを強調した。

「わが国には鉄鉱石が豊富にあり、その品位もすぐれています。われわれは鉄鉱石を掘りだして鉄を生産し、機械をつくって外国にも売ります。

…われわれは、自力で溶鉱炉を建設し、鉱山設備をつくっているので、われわれの考え通り千万~千二百万トンの鋼鉄を生産するのは十分可能です」

千万~千二百万トンの鋼鉄を生産すれば、朝鮮は、毎年各種の機械五百万トンを生産し、その一部を輸出する計画である。

金日成主席が示した朝鮮労働党の独創的な革命路線、という言葉がしばしば引用される。

金日成主席は三十余年前に朝鮮労働党を創立し、今日まで導いてきた。

金日成主席が創始した「主体」は、主席が創立し指導して来た朝鮮労働党の革命路線となっている。これは、金日成主席がうち出した路線である。

金日成主席は、十月十日、朝鮮労働党創立三十周年慶祝宴での演説で次のように指摘した。

「わが党は分派主義、地方主義、教条主義、修正主義をはじめ、さまざまな日和見主義的思想潮流、そして党の統一団結をむしばむあらゆる形の不健全な思想の残りかすに反対するきびしい闘争を通じて主体思想の偉大な勝利をかちとり、党隊列の思想、意志の統一を確固と実現しました。主体思想にもとづいて党の確固たる統一と団結を実現したことは、…われわれにもっとも大きな喜びをもたらす偉大な勝利であります」

金日成主席がふれた「きびしい闘争」は完全に破壊された国の復興問題が俎上にのぼった朝鮮戦争直後、とくに先鋭化したと思われる。一部の社会主義国間に意見の相違が生じた時も、朝鮮は思想及び対外政策において「朝鮮的な路線」を持たねばならぬということが、一部の人には非現実的なものとして受けとられた。たしかに金日成主席は、この政策の貫徹に闘争の主なほこ先を向けたのである。

経済分野で「主体」思想を貫く問題が提起された時も、反対意見があったのはたしかである。それは一部の人が解釈するような「われわれだけでする」政策ではないが、すくなくとも「われわれの方式でする」思想であった。それは成功した。結局「閉鎖経済」や関門主義の危険は克服されたのである。…

金日成主席は、工業生産の高度成長にともなって生じた一定の難関をみとめ次のように述べた。

「最近わが国の経済は、工業生産の急速な増大に輸送が追いつけず、少々難関が生まれています。今日わが国で逼迫した輸送事情を緩和するのは、社会主義大建設を力強くおし進めるうえで、きわめて重要な問題として提起されています」

金日成主席はまた、次のように述べた。

「われわれは逼迫した輸送事情を緩和するために、鉄道の電化をひきつづき力強くおし進めています。わが国で

はすでに、主要鉄道幹線の電化が基本的に終わっています。今後われわれは、まだ電化のできていない鉄道支線を完全に電化する計画です。そうすれば、輸送能力は現在に比べて三倍以上高まるでしょう。

…われわれは自動車運輸を積極的に発展させ、近距離輸送はすべて自動車でおこなう考えです。

…現在わが国では、三トン車、五トン車、十トン車、二十五トン車などを生産しており、最近では百トン型のトラックも生産しています」

## 食糧豊かな朝鮮民主主義人民共和国

朝鮮民主主義人民共和国の高い工業成長テンポは、いくつかの統計資料によって知ることができる。

一九五六～一九六九年までの十四年間に、朝鮮民主主義人民共和国の工業と農業総生産額で工業の占める比率は工業三四％、農業六六％から、工業七四％、農業二六％と全く逆転したものになった。

この比率の変化が農業生産の減少を意味するのではないかと単純に考えやすいが、これは決して農業生産の減少から生じたものではない。

反対に農業生産の各分野での発展は、朝鮮民主主義人民共和国のもっとも驚異的な成果の一つに数えられている。

…一九七四年の穀物総生産高は七百万トン以上に増大し、一九七五年にはそれを上回る大豊作を収めた。穀物予定収穫高は八百万トン以上である。今後数年内に千万トンを計画している。…

他の多くの発展途上国とは異なり、食糧生産量が人口増加率を上回っている。

朝鮮民主主義人民共和国の穀物栽培地帯はすべて大水や干ばつの被害から守られている。それは貯水池や灌漑水路と結びついたりっぱな貯水および排水体系があり、水利化が一〇〇%実現したためである。共和国北半部では、安定した灌漑水の供給、増大する化学肥料の生産、すべての農作業における高度の機械化にもとづき、ひきつづき穀物生産の増産が見越されている。

金日成主席は一九七五年一月十五日、全国農業大会での演説で次のように述べた。

「将来、戦争がおきた場合、農村に電気がまともに供給されなくなることも考えられます。だから、農業部門では、戦争が起きて電気の供給がとまっても、揚水機などを回せるよう、今からガス発動機や重油発動機などを準備しておく必要があります」

一九七四年の穀物収穫高は七百万トンであり、一九七五年には八百万トンに達するだろうと語ったあと、金日成主席は次のように指摘した。

「今年ふたたび農業を立派に営んで八百万トンの穀物高地を占領すれば、われわれは百万トン以上の穀物をもっと蓄えることができるでしょう。われわれに数百万トンの食糧予備さえあれば、わが国は大金持ちになり、いかなる敵と戦っても勝利することができます」

「燃油を節約し燃油の予備を十分に蓄えることは、戦備を整えるうえできわめて重要な問題です」

「それに戦争がおきても、農村で肥料などは自力で生産して使うよう対策をたてるべきです。最近、化学工業部の責任幹部にも言ったことですが、地方に千トン、二千トン、五千トン生産能力をもつ小型肥料工場を大々的に建設する必要があります」

経済成長問題に関する長時間の談話で、金日成主席は、トラクターの合理的利用の面では問題点がある、なぜな

ら、まだ多くの小さな田畑や畦があって、近代的農業機械の利用面で制限をうけているからだと説明した。

主席はトラクターと連結農業機械の増産問題について、次のように述べた。

「今後、耕地面積百町歩当たりトラクターが八~九台、さらには十~十二台ずつゆきわたるようにする考えです。こうすれば、進んだヨーロッパ諸国の水準に追いつくでしょう。

農業の機械化を実現するためには、耕地整理をよくおこなわなければなりません。総合的機械化に必要なトラクターの生産は短時日内にできますが、耕地整理をおこなうには時間が大分かかります。それは、秋の取入れを終えてから翌年の春耕前までのあいだしか耕地整理をおこなうことができず、それも地面が凍りつく真冬には不可能だからです。

現在われわれは、まず平野地帯から機械化をおこない、つぎに順を追って中間地帯と山間地帯を機械化する方向に進んでいます」

金日成主席が熱意をこめて述べた今一つの問題は水産業についてである。主席はその発展に特別有利な条件を備えていると指摘し、共和国はここ数年内に毎年約五百万トンの漁獲高をあげるだろうと述べた。一九六一年の漁獲高は五十万~六十万トンであった。めざましい漁獲高の成長速度も、現在の「養豚工場」「養鶏工場」での豚肉、鶏肉生産の高い成長速度には及ばない。

養豚工場や養鶏工場はじつに近代的で高度の自動化された施設を誇っている。平壌郊外の万景台養鶏工場で飼育している約五十万羽の雌鳥は、鶏肉売店にだされる前の、最高産卵期に毎年約一億個の卵を産む。白い衛生服姿の婦人たちが操作室で温度、飼料、水の供給などを電子調節器で調節している。一人で一万羽の飼育を受け持っている。

## 豚肉生産

豚肉の生産も同じような方法でなされている。私は平壌市から二十五〜三十マイルはなれた郊外にある寺洞区域の平壌養豚工場を見学した。

清潔な工場が、山裾に整然と立ち並んでいた。雄豚は前列の建物、雌豚は二列目、母豚は三列目、「乳ばなれした子豚」は三十日間ずつ四列目と五列目の建物に入れられたあと肥育場をへて屠殺場へ送られる。

建物ごとに四千匹ずつ入れられた三つの豚舎で約一万二千匹の肉豚が飼育されている。

一日平均百十匹の「肉豚」が屠殺され、年に三千トンの豚肉を生産している。この工場支配人はうちの工場は普通の大きさにすぎない、年産一万トンの養豚工場があると語った。

支配人はまた次のように説明した。

「わが国には畜産に必要な農地や田野が足りません。それでわれわれは豚肉、鶏卵、鶏肉の生産をこのように集中的に、工業的方法でしているのです」

工業と農業、重工業と軽工業間の均衡関係は、共和国で驚異的な成功を生んだ。共和国が発展途上国に関する世界の専門家の注目をひくことは疑う余地がない。

## 熱心に学ぶ人民、社会主義朝鮮の学校

朝鮮労働党のマークは見なれた鎌とハンマーである。ところがその中央に筆がおかれている。これはただ装飾のためではなくインテリを象徴したものであって、学習問題を強調しているのではないかと思う。朝鮮民主主義人民共和国は、教育に大きな関心を払っている。

金日成主席は、十月の談話で次のように述べた。

「日本帝国主義の植民地支配当時、わが国には鉛筆工場の一つもありませんでした。日本帝国主義者はわが国で略奪した原料を自国で加工し、それをまたわが国にもちこんで売りつけました」

金日成主席は、およそ三十年前、現政府の前身である臨時人民委員会で経済問題と関連して採択した最初の決定が鉛筆の生産問題であったことを想起させた。

十月九日、朝鮮労働党創立三十周年記念報告で、金日成主席は教育に関する新たな「革新的」方針をうちだした。主席は、今年中に十一年制義務教育の完全実施に関する決定をおこなう報告をし、これを全面的高等教育へと前進させる方針を示した。

主席は次のように述べた。

「全社会のインテリ化を実現するためには、勤労者の全般的文化・技術水準を高等中学卒業程度に到達させたうえで、かれらをみな一定の高等教育体系に網羅して勉強させるようにすべきです。全人民が高等教育体系に網羅さ

れて勉強するようになれば、わが社会の全般的文化・技術水準は、非常に高い段階に達するでしょう」

教育というものが実際になく、朝鮮語の使用さえ禁止されていた国で、鉛筆の生産からはじめて教育全般を大学水準に引き上げようというのであるから、これこそ驚異的かつ記録的な成果といわざるをえない。

金日成主席は次のようにつづけた。

「文化革命を遂行して勤労者の文化・技術水準を高めないことには、思想革命、技術革命をおこなうことができず、共産主義社会を建設することができません。……

もちろん、全社会のインテリ化を実現する問題は、誰もおこなったことのないひじょうに難しい課題です。しかし、決心して取り組めば十分実現できます。

マルクスは、共産主義社会を建設してみて共産主義建設にかんする理論を示したのではありません。われわれは、全社会のインテリ化方針をうち出し、それを実現するためのたたかいを力強く進める考えです」

## 幼稚園のときから

金日成主席は次のように述べた。

「現在わが国には、託児所と幼稚園で国の恩恵によって保育される幼児が三百五十万もいますが、子どもたちは幼稚園の時から系統的な教育を受けています。わが国では、今年から全般的十一年制義務教育が完全に実施され、人民学校から大学にいたる各級学校で四百七十万に及ぶ学生が学んでいます。その他、多くの勤労者が、働き

ながら学ぶ教育体系に組みこまれています。

現在われわれは、すべての勤労者に高等中学卒業程度の知識水準と一つ以上の現代技術を身につけさせる目標をかかげてたたかっており、それが実現した後には、すべての勤労者の全般的文化・技術水準を高等専門学校もしくは大学卒業程度の水準に引き上げる考えです。

一部の人は、われわれの構想が余りにも現実離れしていると考えるかも知れません。われわれがインテリ隊列を百万に拡大する課題をうちだした時にも、一部の人は余り欲張りすぎるといったものです。だが、われわれは百万のインテリ大部隊を養成する課題をりっぱに実現しました」

私は青山協同農場を訪れたさい、管理委員長からすべての農場員を一九八〇年末まで大学卒業水準に引き上げる計画を興味深く聞いた。彼女は語った。「私たちは解放後に成人教育をはじめました。そして数年間で文盲退治を終えました。現在、うちの農場員の知識水準は高等中学卒業程度です。千名の労力者のうち、百五十名の技師――農産技師や畜産技師がおり、二百四十名が各専門分野の資格をもっています。私たちは一九八〇年までに作業班の全員をインテリの水準、すなわち、大学卒業生水準に引き上げようと思っています」

その方途について彼女は次のように語った。「現在うちの農場には高等中学校が二つ、高等技術専門学校が一つあります。農場員は通信大学に通っています。すべての生産工程がますます機械化されるにつれ、私たちは彼らが交代で通信大学へ通えるようにしています」

## 向学の熱望

向学の熱望は発展途上にあるアジア諸国共通の現象となっている。共和国では政府がその熱望を助長し、必要な設備を保障するためにあらゆる可能性を動員しているのは明白な事実である。

六歳以上の人口のうち、三分の二が各種の教育体系のなかで学んでいる。青山協同農場管理委員長がそのいい実例である。彼女は四十三歳、はつらつとして才気にあふれ、一目ですぐれた婦人であることがわかる。

借金のかたにその地元の地主に売られ、十三歳まで学校の門前にさえいけずに解放を迎えた。「夢に見ていたのが現実となりました。私は人民経済大学の三年制に通い、協同農場の管理方法を学びました。農業大学も卒業しようと思っています。…」向学の熱意にもえ、政府がそれを奨励し条件を保障している以上当然のことだ。人民はすべて職場をもち、同時に学ぶことができる。平壌総合紡織工場を例にあげれば、そこには紡織技師を養成する大学が一つ、技手を養成する高等技術学校が一つ、見習工を熟練工に養成する学校と作業班長をより高い管理幹部に養成する学校がある。工場の支配人は次のように語った。

「われわれはこのようにして労働者出身の技師、技手、熟練工、管理幹部を養成することができます。彼らは主に、われわれの工場で働きます。余った技術者は小さな紡織工場に勤めることができます。われわれの任務は、できるだけ多くの織物を生産するだけでなく、できる限り多くの技師、熟練工を養成することです。…」

全国すべての大工場に、現場で学ぶこのような体系がうち立てられている。

金日成主席は一九五八年、朝鮮民主主義人民共和国創建十周年記念報告で、それまでの十年間に二十二の大学と高等教育機関で六万三千余名の新しい専門家や技術者を養成したと述べた。それから十二年後、朝鮮労働党第五回大会での報告で、金日成主席は技術者、専門家の数を百万に増やす課題を示した。

主席は「…すべての工場、企業所と協同農場の労働力構成において、大学および高等技術学校出身の技師、技手、専門家が一〇%以上に達するように」するだろうと語った。

総括期間に、大学は百二十九に増え、技師、技手、専門家の数は四十九万七千余名に達した。

それが現在では百万に達し、共和国の人口千七百万のうち八百二十万が託児所、幼稚園から大学にいたる各級の学校で学んでいる。私が訪れた工場や協同農場には専門家の資格をもった人が労力者の一〇%以上を占めていた。

## 百万冊の新しい本を

金日成主席は、われわれとの談話で次のように述べた。

「現在、わが国には百万のインテリ大部隊があるのに、われわれになにができないというのでしょうか。数年前、私は大学の教員を集め、すべてのインテリが本を一冊ずつ書くか、または外国の技術書籍を一冊ずつ翻訳するようにといいました。百万のインテリが本を一冊ずつ書くなり翻訳するなりすれば、百万冊の新しい図書が発行されることになります。

われわれは現在、各地に図書館を建設しており、将来は人民大学習堂を大きく建設する考えです。こうなれば、

すべての勤労者が勉強するのに大変有利な条件がつくられるでしょう」
ハンマーと鎌が組み合う中央に立てられた筆、これは空虚な象徴としての筆ではなく、朝鮮における一つの支配的な要素を表示しているのである。
「鉛筆」の重要さにたいする強調が、すべての分野における朝鮮の驚異的な発展の秘密をとく鍵の一つであるといえよう。

オーストラリアの作家・記者

一九七五年十一月

# 吹き飛んだ「感傷旅行」

日本
大鷹淑子

一九七五年七月二十日出発の自民党訪朝団の一人として朝鮮を訪問してまいりました。

今回の訪朝団参加の誘いを受けた時私は「よろこんで」と二つ返事で答えました。インドシナ後、緊張が伝えられる朝鮮半島はどうなっているのか。第三世界の理解と連帯を得ている朝鮮民主主義人民共和国とはどんな国だろうか。アジアの社会主義先進国としてどのように国内建設に取り組んでいるか。中近東やヨーロッパを飛び歩いた時と違う、じっとしていられない衝動すら感じられました。しかし、この夏の短い旅は、そうした私の「感傷旅行」をすっかり吹き飛ばしてしまいました。

南北分裂の事実は、生意気なようですが、政治家としての私に新しい使命を与えてくれました。平和を確実なものにするために、政治家としてやらねばならないことがたくさんある。そんなことを教えてくれた旅でした。

北京から平壌への汽車の旅は昔と少しも変わっていませんでした。真夏のうだるような暑さの中、コンパートメントの中によこたわっている時、かつて仕事で通った四泊五日の日々を思い出しました。今同じ道を走っているが、行き先は東京ではなく平壌である。思い出の土地を訪れているという感慨よりも新しい見知らぬ国への期待が二重

三重に私をかりたてる。車窓のながめを追いながらよく眠れぬまま、北朝鮮入りしました。

平壌に着いた時、私が驚いたのは、目にしみるような緑の美しさです。文字通り「公園の中に町がある」のです。木々の名前をたずねます。プラタナス、アカシア、キリ、ポプラ、イチョウ……。こんなに緑が整理された町が他にあろうか。花も多い、車で郊外を走ると何十キロという道筋に切れ目なく花が咲き乱れている。これは人民学校の生徒たちが受け持ち区域を決めて植えているのだという。私の好奇心は一層かりたてられます。朝鮮戦争（現地では祖国解放戦争という）で完全に焦土と化した町を、こんなにも短期間で緑の町にしたのはただごとではありません。

どうしたらできるのですか。お会いする人ごとに聞いてみました。答えは「偉大な指導者・金日成主席」です。初めのうちはなんとなく抵抗を感じていたのですが、日がたつに従って理解できるようになりました。主席との会見でなるほど主席は年少のころから革命一筋に歩んできた人ですが、同時に慈父としてなんともいえない温かさをそなえています。

私を見つけると「李香蘭さんですね。昔あなたに雑誌や映画でお目にかかったことがあります」と声をかけられました。私は飛び上がらんばかりに驚きました。出発前、宇都宮徳馬先生から植民地時代のことには悪感情を持っているからと注意されたからです。平壌入りしてからもいわれはしまいかと心配していたことをズバリといわれたのです。それでいて非難するようなところは少しもありません。

「人生には一生懸命働くばかりでなく歌を歌い、アコーデオンをひくことが大切なのです」と理解を示されました。こうした主席の明朗な態度は、この国の民族性でもあるようです。歌を歌えば鈴のように響きます。踊りを踊れば実にのびのびとしています。自らの持てる力をフルに表現したいというあけっぴろげな民族性はうらやましい

限りです。もっともそれを支えているのは安定した生活環境です。

主席の教育に対する熱意は大変なもので教育はいくら費用をかけても惜しくないということで、十一年の義務教育費はただ、大学生も奨学金で、学費や食費がまかなえるという。一般消費者の食費もお米などは極めて安い。働く女性が三人寄れば託児所ができるとさえいわれています。男女の同一労働同一賃金が実現しています。何の心配もなく国づくりに全力をあげることができるというものです。

平壌では朝鮮の婦人議員にいろいろお世話になりました。朝鮮の女性の地位などについていろいろと聞いてみました。朝鮮では一九四六年に男女平等が宣言され、男性と同じ待遇を受けるようになりました。女性の平等と解放をかちとるには法律だけでは駄目です。金日成主席が女性の社会的活動と労働参加のためにあらゆる条件を作ってくれました。今朝鮮では各層へ女性が進出しています。最高人民会議代議員（国会議員）二九・四パーセント、地方各級人民会議代議員（地方議員）二五・四パーセントを女性が占めていますとほこらしげに語っておられました。

私は今日本の現状をみる時、もっとわが国では女性ががんばらねばと痛切に感じました。しかし、板門店を訪れて、釜山へ通じる鉄路の中央に巨木が青々と繁っている写真を見せられた時、南北分裂を強く印象づけられ、祖国統一に寄せるなみなみならぬ思いをはだで感じました。やはり統一によってこの巨木を除かなければなりません。朝鮮問題は複雑です。しかし、私は今回の訪問で得た友好の輪をもっとひろげるとともに、北朝鮮についてその姿を正しく伝えるようにしたいと思います。足踏みせずに、進まねばと思っている今日です。

日本・参議院議員

一九七六年　十月

# 偉大な金日成主義は、現代における指導思想・指導理論・指導方法である

日本

安井　郁

私が青春の日に初めてマルクス・レーニン主義に接したときから、もう五十年以上になる。その間に、私は、或は専門の国際法学を単なる「法解釈学」や「法社会学」から戦闘的な社会科学としての国際法学に高めようとする努力のなかで、或は私の参加した核兵器禁止、平和擁護、友好促進のための大衆運動を日本の歴史的条件に合わせて正しく発展させせようとする闘争のなかで、マルクス・レーニン主義の創始者たちが残してくれた歴史的遺産から多くの貴重な教訓を学びとったが、その研究の過程でつねにもどかしさを感じた。それは、マルクスやエンゲルスやレーニンがわれわれといちじるしく違う時代に生き、その時代の歴史的条件の制約をうけつつ、彼らの思想と理論を形成しているからである。

このような私のもどかしさは、金日成主席の不滅の主体(チュチェ)思想を真髄とする思想・理論・方法の全一的体系と出会ったときに消え去った。この全一的体系こそ、私の思索している問題点について、百科全書的な広さと深さと豊かさをもって明快な解答を与えるものだからである。自分の生きる同じ時代に、かくも卓越した思想家・理論家が存

在することは、真理を求めて苦闘する科学者にとって無上の幸せである。

いま述べたことによって、私は、マルクス・レーニン主義の創始者たちが人類史上で果たした巨大な役割を、決して否定するものではない。

観念論的妄想がさまざまの形をとって人間を迷わしていた時代に、マルクスとその生涯の友エンゲルスは、弁証法的唯物論をもって世界を物質から成り立つものとして捉え、その発展法則を明らかにすることによって、人間の認識を初めて科学の土台の上に乗せた。このマルクス主義の真理を、レーニンは帝国主義段階の歴史的条件に合わせて発展させ、人類史上で最初の社会主義革命を成功に導いたのである。

しかし、マルクスの時代からすでに一世紀が過ぎ去り、レーニンの時代からでさえ半世紀が過ぎ去った。とくに第二次世界戦争のあと、情勢は急速に変化した。

この新しい時代は、必然に、この時代の歴史的条件に即した、より高い革命思想を要求する。その中心テーマは、物質から成り立つこの世界で、なにが基本なのか、なにが決定的役割を果たすのか、という哲学的原理を究明することである。

この新しい時代の要求する新しい哲学的原理を掲げて、主体思想が登場した。朝鮮労働党創建三十周年記念大会で金日成主席がおこなった報告は、「主体思想の叢書」といわれるほどに重要な歴史的意義をもつ総括的な綱領的文献であるが、そのなかで主席はつぎのように述べている。

「主体思想は、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理に根ざしています。主体思想は、世界における人間の地位と役割を科学的に解明することによって、自然と社会にたいするもっとも正しい見解を与え、世界を認識し改造する強力な武器を与えます」

この主体思想がもたらした革命思想の転換の重要性をどれほど強調しても、過ぎることはない。
一九七四年十月、東京で「第五回主体思想科学討論全国集会」が開かれたとき、私は、基調報告のなかで、金日成主席の主体思想を真髄とする思想・理論・方法の全一的体系を「金日成主義」と呼ぶことを提起した。私なりの長い研究と思索の結論として、確信をもってこの断定をしたのである。
それから二年の後、マダガスカルでの「主体思想に関する国際科学セミナー」は、宣言のなかにつぎの一節を取り入れた。
「われわれは、尊敬する金日成主席同志が半世紀にわたるもっとも困難で複雑な条件のもとで革命と建設を指導する過程で、その真理と正しさがはっきり確証された主体の思想・理論・方法の全一的体系である革命思想のもつ科学的かつ普遍的意義を深く認識しつつ、この独創的な思想を金日成主席同志の尊名と結びつけて呼ぶのは、当然なことである、と認める」
私はこの宣言を歓迎し、その採択に努力した同志と友人に心から敬意を表する。
これは決して単なる用語の問題ではなく、内容と深い関りをもつ問題である。
私自身、研究の初期に、主体思想の本質を、「われわれの時代のマルクス・レーニン主義」と規定したことがある。この規定は必ずしも誤りではないが、これをもっては主体思想の歴史的地位と独創性を正しく捉えることができない。
私は、マルクス・レーニン主義の単なる発展として主体思想を捉えるのではなく、人類の革命思想の発展史上に、十九世紀後半のマルクス主義と、二十世紀初頭のレーニン主義と、現代の金日成主義をそれぞれに位置づけ、金日成主義を革命思想の発展の最高段階にあるものとして捉えなければならない、と考えるようになった。その場合にこ

そ、不滅の主体思想を真髄とする偉大な金日成主義の歴史的地位と独創性を、あますところなく解明することができると信ずる。

人類の革命思想の発展史上でこのような地位を占める金日成主義を、もし科学者が研究室であれこれと分析し、その構成体系のすばらしさを賛美するにとどまるならば、それは決して金日成主義を正しく研究する態度ということはできない。

日本帝国主義の支配の下に、朝鮮人民がもだえ苦しんでいた暗たんたる時期に、早くも金日成将軍は、抗日革命闘争の炎の中で、その不滅の主体思想を創始した。静かな書斎においてではなく、激しい闘いの手を休める束の間に、或は深い山あいで木に腰をかけ、岩を机にして、或は吹雪が荒れ狂う密林のテントで夜を明かしつつ、将軍はその独創的な革命思想をねりあげていったのである。

こうして創始された主体思想は、さらに革命と建設の実践を通じてその正しさと生命力が実証され、それを最高の指導的指針とする朝鮮人民の闘争に百戦百勝の威力をもたらした。

いまや、不滅の主体思想を真髄とする偉大な金日成主義は、ひとり朝鮮人民のみならず、現代における全世界の進歩的人民、革命的人民がこれをもって自己をしっかりと武装すべき指導思想・指導理論・指導方法となっている。

この普遍的真理を、つねに勤労人民大衆の革命的実践にしっかりと結びつけつつ発展させ、具体化していくことは、真理を愛する科学者の光栄ある任務である。私は、日本の科学者の一人として、世界各国の同志・友人とかたく連帯しつつ、この光栄ある任務を勇敢に、しかも着実に遂行していきたいと、心から念願するものである。

人類の革命思想の発展史上で以上に述べたような地位を占める金日成主義は、われわれの生きる現代を自主性の

時代として明確に規定した。

この規定は限りなく深い意義と内容をもっている。主体思想を研究してきたわれわれは、現代が自主性の時代であるということを自明のように思いがちだが、なんぴともはっきりとは意識しなかったときにこの鋭い指摘をしたのは、金日成主席の天才的な洞察力をもって初めて可能なことである。このことをわれわれは銘記し、自主性の時代という規定のもつ深い意義と内容を正しく把握し、実践しなければならない。

主席はつぎのように述べている。

「現代は自主性の時代です。今日地球上の多くの国の人民が自主性を求めており、あらゆる形の従属に反対してたたかっています。いかなる民族も他国に自主性をおかされるのを許そうとはしません。社会主義諸国の人民と第三世界諸国の人民はいうに及ばず、資本主義諸国の人民も自主性を要求しています。世界の人民が自主性を求め、多くの国が自主の道へと進むのは、いかなる力をもってしても阻止できない、われわれの時代の基本的趨勢であります」

ここで金日成主席が、われわれの時代においては、社会主義諸国や第三世界諸国の人民のみならず、資本主義諸国の人民も自主性を要求していると指摘していることに注目しなければならない。自主性を要求する闘争は、或は帝国主義に反対し、或は植民地主義、新植民地主義に反対し、或は支配主義に反対するなど、さまざまの内容と形態をもって進められている。

私は、資本主義諸国の一つである日本における自主性要求の闘争について、三点を述べたいと思う。

第一は「日米安全保障条約」体制（略称——日米安保体制）に反対する闘争である。

「日米安保」体制は、第二次世界戦争後の日本が平和条約によって形式的に主権と独立を回復した後も、実質的

には日本をアメリカの支配下に従属させ、日本全土を軍事基地化して、日本の自主性を奪い去った。これは現代における支配主義の重要な形態の一つである。一九六五年に締結された日韓諸協定は、「日米安保」体制と密接な関連をもつものであり、これによってアメリカと日本と南朝鮮の間の三角軍事同盟体制がつくられた。一九六九年の「日米共同声明」（佐藤・ニクソン共同声明）によって、「日米安保」体制は、日本人民にとっても、アジア諸国、とりわけ朝鮮人民にとっても、いっそう危険なものとなった。「共同声明」の悪名高い「韓国条項」において、佐藤は、「韓国の安全は日本自身の安全にとって緊要である」と認め、「万一韓国にたいして武力攻撃が発生し、これに対処するためアメリカ軍が日本国内の施設・区域を戦闘作戦行動の発進基地として使用しなければならないような事態が生じた場合には、日本政府としては、このような認識に立って事前協議にたいし前向きにかつ速やかに態度を決定する方針である」と約束した。

このように危険な性格と可能性をもつ「日米安保」体制にたいして、日本人民は一貫して反対の闘争を続けてきた。これは自主性要求の闘争の重要な一環をなすものである。

残念ながら、闘争はいまだに「日米安保」体制打破の目的を実現するにいたっていないが、この体制を維持し強化しようとする日米反動勢力を制約する大きな力となっていることは確実である。

「日米安保」体制に反対する日本人民の闘争を勝利に導き、日本の自主性を名実ともに回復するためには、自主性の時代の指導思想・指導理論・指導方法である金日成主義からさらに多くを学ばなければならないと、私は考えている。

日本における自主性要求の闘争の第二は、核兵器その他の大量破壊兵器で人類に脅威を与える勢力に反対する闘争である。

広島、長崎、ビキニと三たびにわたって、日本人民は原水爆の惨禍を体験した。その惨禍は、数十年が過ぎた現在もなお、後遺症や遺伝を通じて、被爆者とその子孫を苦しめている。

日本人民だけではない。被爆者の中には、少なからぬ朝鮮人民が含まれている。アメリカ軍捕虜も自国軍の投下した原爆で殺された。マーシャル群島の住民も、原水爆実験によって計り知れない惨禍をこうむっている。

日本人民は、核兵器で人類に脅威を与える勢力に反対する闘争を多年にわたって続けてきた。反対の署名は三千五百万人を超えるという、日本の大衆運動史上で空前の規模に達した。日本人民のこの団結の力は、アメリカ政府の核実験に協力するという政策をとっていた日本政府に大きな圧力を加え、「非核三原則」——核兵器を造らず、持たず、持ち込ませない——を採用させるという、輝かしい勝利をかちとったのである。

しかし、アメリカ帝国主義者は依然として核兵器政策を固執し、「日米共同声明」によって日本政府の態度はぐらつき、日本人民は警戒の念を強めている。アメリカ帝国主義が南朝鮮に核兵器を配備し、有事の際にはそれを使用すると脅喝したことは、日本人民の間に激しい憤激をひき起こした。

最近、アメリカ帝国主義者は中性子爆弾という新兵器を開発している。人間は殺傷するが、物は破壊しないというこの新兵器は、アメリカ帝国主義者の非人間的な本性を白日のもとにさらす結果となった。その思想は、人間をあらゆるものの主人と考え、何ものにもまして人間を大切にする主体思想と、なんという鋭いコントラストをなすものであろうか。

核兵器その他の大量破壊兵器の廃絶は、自主性の時代である現代のもっとも重要な課題の一つである。人間尊重の主体思想を真髄とする金日成主義が、これらの非人間的な兵器で人類に脅威を与える勢力に反対する闘争においても、すばらしい威力を発揮することを信じ、人類の明るい未来に向かってたゆまず前進したいと思う。

日本における自主性要求の闘争の第三は、社会的変革と社会主義社会建設をめざす闘争である。十九世紀の後半に、社会主義思想が日本人民の心に芽生えたときから、さまざまの闘争がおこなわれ、挫折を重ねてきた。そのために莫大な犠牲が払われてきたが、それらの犠牲は決して無駄ではなく、日本の新しい道を切り開く闘争の力量はしだいに蓄積されつつある。

問題は、その力量を有効に発揮して目的を達成する方途と形態を正しく捉えることであると思う。

一九七七年の八月二十九日、平壌で発表された朝鮮民主主義人民共和国とユーゴスラビア社会主義連邦共和国の共同コミュニケのなかに、つぎの一節がある。

「朝鮮労働党中央委員会総書記である金日成同志とユーゴスラビア共産主義者同盟議長であるヨシプ・ブロズ・チトー同志は、国際労働運動および共産主義運動、進歩的運動内の全般的な情勢と動向を検討した。

双方は、社会主義へ進むことが世界的すう勢となり、共産党および労働者党とその他の進歩的勢力が、完全な自主性と独自性に基づいて社会主義のための闘争を非常に広範な戦線で展開していることを評価した。

労働者階級、共産党および労働者党、そしてその他の進歩的な勢力が繰り広げる社会的変革と社会主義社会建設をめざす闘争の方途と形態の多様性は、個別的国家に存在する互いに異なった歴史と政治・経済条件から生じたものである」

金日成主席とチトー大統領の背後には、極度に困難な条件のもとで自主への道をみごとに切り開いた闘争の勝利の実績があるゆえに、共同コミュニケのこの言葉は異常な迫力をもってわれわれの胸に迫るのである。

個別的国家に存在する歴史と政治・経済条件は、明らかに互いに異なっている。それにともなって、社会的変革と社会主義社会建設をめざす闘争の方途と形態は必然に多様でなければならない。この自明の原理が過去において

しばしば無視され、闘争の方途と形態について、他国の模倣や、他国からの押しつけがなされた。そしてそれは多くの悲劇をひき起こし、犠牲をともなって、挫折していったのである。

日本もまた独自の歴史と政治・経済条件をもっている。日本の社会的変革と社会主義社会建設をめざす闘争は、それに即して独自の方途と形態をとらなければならない。

いま日本の政治・経済は表面的には繁栄を誇っているが、私の見るところでは、その内部において矛盾はしだいに深刻になりつつある。その矛盾は、一時的なびほう策ではとても解決できるものではない。

私は、社会科学者としての立場から、第二次世界戦争の以前にも、また以後にも、祖国日本をどうするかという問題を絶えず考えつづけてきたが、近年において、この問題は私にとってさらにさし迫ったものとなっている。この時期に、不滅の主体思想を真髄とする金日成主義が、私の大きな励ましとなった。私はこのことを深く感謝している。

日本の社会的変革と社会主義社会建設をめざす困難な闘争を進めるにあたって解決しなければならない課題は多くあるが、われわれは勤労人民大衆の力を信じ、つねに勤労人民大衆に依拠し、勇気と根気をもって一歩一歩進んでいくつもりである。この闘争について、私は、金日成主義を真剣に研究しつつある日本の青年たちに、未来への大きな期待をかけている。一九七五年十月、東京で開かれた「第七回主体思想科学討論全国集会」の基調報告の終わりに、私が青年たちに「祖国をどうするのか」と呼びかけたのも、その期待をこめてである。

以上、三点にわたって、私は、日本における自主性要求の闘争について述べたが、これらの闘争はすべて朝鮮問題と、とくに朝鮮統一の問題と深い関りをもっている。

祖国統一は朝鮮民族の最大の念願であり、宿望であるが、その基本的な方向は一九七二年七月四日の歴史的な南

北共同声明で明らかにされ、自主・平和統一・民族大団結の三大原則について合意が成立し、さらに一九七三年六月二十三日には金日成主席によって五大方針がせん明された。しかし、さまざまの要因が朝鮮統一の進展を阻害し、南北共同声明の発表から幾年も過ぎて今日にいたっている。

その阻害要因の最大のものが、アメリカと日本と南朝鮮の反動勢力の結託であることを、われわれは遺憾に思う。朝鮮民族と真に連帯するためには、われわれはまず脚下をかえりみ、日本政府の誤った対朝鮮政策を改めさせるところから手をつけ、しだいに先へと進まなければならない。それが日本人民と朝鮮人民の双方に幸せをもたらし、ひいてはアジアと世界の平和に貢献する道であると、私はかたく信じている。

いま、人類は、すでに二十世紀の最後の四半世紀に足を踏み入れている。このあたりで、われわれは、二十世紀の総括、すなわち、二十世紀に人類がなしとげた成果の確認と欠陥の反省をするとともに、二十一世紀の展望、すなわち、来たるべき新しい世紀に人類がいかなる方向に進むべきかの予見をしなければならない。

この膨大なテーマを詳細に取り扱うことは、この文章の任務ではないが、一つの問題だけには言及しておきたいと思う。それは私が生涯をかけて思索と研究を続けてきた、人間の内面的解放を含む全面的解放の問題である。

主著『国際法学と弁証法』のなかで理論的に解明したように、また、歌集『永劫の断片』のなかで詩の形でうたいあげたように、私は、人間解放をつぎの三つの面の弁証法的統一として捉えてきた。第一は自然からの人間解放であり、第二は社会からの人間解放であり、第三は人間の内面的解放である。私は、自然や社会からの人間の外面的解放に人間自身の内面的解放がともなってこそ、真の人間解放が達成されるものであり、人類史はこの真の人間解放をめざしてのたゆみない前進の過程だと考えてきた。

二十世紀の人類史はさまざまの面でめざましい進歩をとげたが、私のいう人間の内面的解放については必ずしも発展があったと認めることができない。この問題意識をもって、私は世界の多くの国を視察したが、ある国では人間の精神的荒廃がいまやその極に達している。また、ある種の社会革命のみによっては人間の内面的解放を達成し得ないことも、二十世紀の人類史によって実証された。現実にいろいろの不幸な社会現象をひき起こしているこの精神的荒廃からどうして立ち直るかは、人類史が直面している重要な課題である。

この視点から、私は、朝鮮革命の人間革命的側面に特別の注意を払ってきた。金日成主席の賢明な領導のもとに、主体思想の旗じるしを高く掲げて進行しつつある朝鮮革命は、画期的な社会制度の革命であるとともに、徹底的な人間の革命である、と私は見ている。

今日しばしば引用した朝鮮労働党創建三十周年記念大会報告のなかで主席が総括的に述べている通り、継続革命としての朝鮮革命の最終目的は、革命と建設ですでに達成した誇らしい成果をふまえて社会主義の完全な勝利を実現し、共産主義を建設することであるが、そのためには、経済と文化、思想と道徳のすべての分野にわたって社会を共産主義的に改造し、共産主義の思想的要塞と物質的要塞を占領しなければならない。この二つの要塞——思想的要塞と物質的要塞——の占領をめざして、思想、技術、文化の三大革命が力強くおし進められている。

金日成主席は、人間改造は、本質において思想改造であると断じ、思想革命の重要性をつぎのように指摘している。

「思想革命の目的は、社会のすべての成員を革命化、労働者階級化して共産主義的人間につくることにあります。勤労人民大衆は社会の主人であり、社会を改造し発展させる基本的要因です。勤労人民大衆を革命的に教育、改造することなしには、革命と建設で提起されるすべての課題を成功裏に遂行することができず、共産主義社会を実現

することができません」

以上の考察によって明らかなように、朝鮮革命は人間改造を社会改造の基本としている。人間をあらゆるものの主人とする主体思想の特色が、ここにきわめて鮮明に現われているのである。

過去二回にわたって朝鮮民主主義人民共和国を訪問したとき、私は、親しく接した人々の態度や作風を通じて、人間改造がいかに進展しつつあるかを自分の眼で確かめることができた。それらの人々は、金日成主席の教える人民的活動作風――「活動では人民の先頭に立って犠牲的に働く革命の闘士としての模範を示し、生活では素朴で謙虚で、互いに尊重し助け合う真実な人間としての模範を示さなければならない」――を身につけ、それを忠実に実践しようと懸命に努めており、接するものにすがすがしい印象を与える。われわれ資本主義社会の精神的荒廃のなかにどっぷりとつかっているものには、そのすがすがしさがとくに身に泌みて感じられるのである。

このような人間改造の進展にとって、教育、とりわけ育ちゆく新しい世代の教育がきわめて重要なことはいうまでもない。朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法の第三十九条は、「国家は、社会主義教育学の原理を具現し、新しい世代を社会と人民のためにたたかう不屈の革命家に、知・徳・体をかねそなえた共産主義的な新しい人間に育てる」と規定している。その教育があらゆる分野で徹底的におこなわれているのを、私は賛嘆の念をもって見学してきた。

新しい人間解放のあり方について、朝鮮革命は一つの実例を示した。それは全面的な人間改造を革命の基本とし、思想革命を通じてこの重要かつ困難な作業を進めつつあるのである。

二十一世紀の人類史の展望との関りにおいて、朝鮮革命の人間革命的側面がどのような役割を果たしていくか。また、ある種の思想教育にともないがちな画一主義の弊害をいかにして克服し、社会の成員の豊かな個性を自由に

発揮させるか。私は深い関心をもってじっと見守りたいと思う。

一九七二年四月、平壌で開かれた「全国社会科学者大会」に出席したとき、私は、あいさつのなかで、「こんにち、主体思想は海を越えて五大陸にひろがり、社会の発展の原動力となり世界史の前途を輝かしくさし照らしています」と述べた。ここ数年間、主体思想のもつ世界史的意義が数々の事実によって証明されたことは、われわれの大きな喜びである。

この驚異的な発展の中心に、不滅の主体思想の創始者であり、朝鮮人民の敬愛する指導者である金日成主席が立っている。

歴史を創造し発展させるのは勤労人民大衆であるが、勤労人民大衆が歴史の創造者としての役割をりっぱに果たし得るのは、卓越した指導者の賢明な領導によってのみ可能である。朝鮮人民は、敬愛する主席の革命思想でしっかりと武装し、主席のまわりに鉄のように統一、団結し、主席の唯一的領導のもとに革命闘争と建設事業をおし進めることによって、勝利と繁栄をかちとった。偉大な指導者に恵まれて、朝鮮と世界の歴史を新たに創造し発展させつつある朝鮮人民を祝福し、かつ称えたいと思う。

私は、金日成主席の不滅の主体思想を真髄とする思想・理論・方法の全一的体系を書物を通じて研究したのち、一九七五年九月、主席に親しくお会いし、哲学の根本原理から現実の政治問題にわたる広範なことがらについてお話を聞く機会を与えられた。そのとき、日本の一人の科学者に謙虚な態度で接し、あらゆる質問に懇切丁寧に答えられる主席を目のあたりに見て、私は、自分の考えあぐんでいる学問上や政治上のいかなる問題をも提起できる偉大な同志についにめぐりあったと実感した。その思いを胸に抱きながら、さまざまの美しい花の乱れ咲く招待所の庭を歩き回ったのが、つい昨日のことのようにあざやかに思い出される。

今日、日本において主体思想の研究と実践を真剣に進めている勤労人民大衆がいる。そのなかには、とりわけ青年たちのなかには、金日成主席を偉大な教師、偉大な指導者として敬慕している人々が少なからずいることを、私はよく知っている。

人類史は絶えず前進し、これまで知られなかった新しい問題がつぎつぎに生まれる。それらの問題を深い洞察力と鋭い先見性をもって解決し、勤労人民大衆に正しい指導的指針を示すことは天才的な指導者、卓越した思想家・理論家の力をまたなければならない。

金日成主席がますます健康に恵まれて高貴な活動を続け、世界各国で苦闘している勤労人民大衆に大きな励ましを与えられることを、切に期待するものである。

日本・法政大学教授、博士

一九七七年　九月

# 偉大な金日成主席の指導を受ける朝鮮人民は実に幸せである

日本　安宅常彦

金日成主席にたいする世界数億人民の敬慕の念は年々、深まっている。主席の接見を受けた人びとや、主席の栄えある革命活動歴史と不滅の革命思想に学ぶ世界人民は、主席を革命の英才、偉大な思想家と称え、高邁な徳性をそなえた人民の父と仰ぎみている。

わたしにとって忘れられない思い出がある。三十年まえ、朝鮮民主主義人民共和国が創建された当時のことで、若かったわたしは、全逓信労働組合山形県内の小さな支部の書記長をしていた。そのころわたしは、朝鮮民主主義人民共和国創建の祝賀デモを組織してアメリカ占領軍の徹底した弾圧を受け、かれらの機関である山形軍政部に軟禁された。わたしはこの弾圧を契機に、朝鮮人民との連帯の重要なことをあらためて認識し、われわれ日本人として何をなすべきかを深刻に考えるようになった。以来わたしは、近所に住む在日朝鮮公民から金日成将軍の話を聞いたり、夢中で文献を集めたりしながら、祖国の独立のためにたたかってきた朝鮮人民の輝かしい歴史を学び、民族の英雄であり、絶世の愛国者であり、主体(チュチェ)思想の創始者である金日成主席に大きなあこがれをもつようになった。

わたしがはじめて主席にお会いできたのは、成田委員長を団長とする日本社会党代表団の一員として朝鮮を訪問した一九七〇年八月のことであった。

当時わたしは、日本社会党の朝鮮問題特別対策委員会委員長として、在日朝鮮公民の帰国事業再開、朝鮮籍登録問題、出入国管理法粉砕のたたかい、民族教育の擁護の問題など、主として在日朝鮮公民の民主的民族権利擁護を中心としたたたかいに取り組み、これらのたたかいをとおして夢にまでみた朝鮮を何回も訪問するようになり、日本と朝鮮の両国人民の友好促進、朝鮮の自主的平和統一など朝鮮問題に専念するようになった。

そのころ朝鮮では、一九六一年からの人民経済発展七か年計画によって社会主義工業国家建設に向けまい進し青山里(チョンサンリ)精神、大安(テアン)の事業体系などで有名な雄大な計画が完成間近いころであった。共和国は、「プエブロ」号事件など幾多のアメリカ帝国主義の妨害による極度に緊張した情勢を勇敢にのりこえて、発達した社会主義工業国を完成させ、さらに思想、技術、文化の三大革命をおしすすめ、社会主義の物質的、技術的土台を強固なものに発展させながら、すべての部門で勤労者を骨の折れる労働から解放するという、画期的な新しい六か年計画に取り組もうとするいわば大躍進の時期であった。

ついに、偉大な指導者金日成主席にお会いできる日がきた。

わたしたちは、八月十五日の解放記念日祝賀式に参列することになり、各国大使や訪朝中の数多い代表団とともに会場に入った。開会されるまえから会場には、あるいは静かにあるいはにぎやかに各国の音楽が流れていた。アラブのある国の音楽がかなでられたとき、突然厳粛な雰囲気が破られ、その国の代表団員たちが陽気に口笛をさかんに吹きならしながら「アンコール」を連呼しだした。わたしたちが驚いていると、金日成主席がニコニコしながらその代表団の席をふりかえられ、言葉はわからないが、庶民的とでもいうか、とてもくだけた態度で笑いながら、

「もう一回やったら…」というしぐさを係の人になされた。
この情景を目のあたりにして、「この方は朝鮮人民からだけでなく、世界の人民から慕われる方だ、こうしたことを自然にやれる元首が他のどの国にいるだろうか、おそらく金日成主席だけだ」とわたしはそのとき強烈に心に焼きつけられた。
ついで八月二十二日、日本社会党にとってははじめてのことであるが、朝鮮労働党とのあいだの共同声明ができあがった直後、成田委員長をはじめわたしたちは長時間、金日成主席と世界情勢、朝鮮の社会主義建設の状況など広範な問題で直接会談をもつ機会を得た。
やがて昼食の時間になり、主席は、昼食をともにして話を続けましょう、といわれ、全員食堂で歓談したときのことである。主席から成田委員長に在日朝鮮公民の民族権利擁護問題についての質問があり、成田委員長が「安宅君がくわしいので同君から説明させます」とこたえたので、わたしが自分の席から説明しようとしたとき、金日成主席は、「テーブルが違っていては話しにくい。こちらにおいでなさい」といわれ、手をあげて招かれた。わたしは「声が大きい方ですから、ここでよろしいです」とそのまま話をはじめたところ「話はそばで向かい合ってやった方が通じやすいものです。こちらに席をかえてください」と重ねていわれ、わたしがもじもじしていると、主席のいいつけで係の人がごちそうのはいった食器を皿ごと、主席のそばに運んでしまった。
一国の元首でこのようにさばけた態度をとれる人は他にいるだろうか。実に親しみ深く飾りけのない方である。さきの解放記念日のときのことと思い合わせ、目がしらがジーンと熱くなってきて、どうしようもなかった。
言葉が不都合かも知れないが、わたしは金日成主席を「大好き」になってしまった。
わたしは別の文章にもこのことを書いたことがあり、日本においてもいろいろな機会にこの話をするのだが、

「金日成主席が君にそのような待遇をするはずがない」とかいってだれもなかなか信用してくれない。しかしわたしの真剣な説明で最後にはやっと納得し「朝鮮の人々は幸せだなあ。金日成主席のような人は、ほかにいないだろう」などといったところに話がおちつくのである。

一九七二年一月、超党派の国会議員で組織した日朝友好促進議員連盟の事務局長であるわたしは、自由民主党の久野忠治氏を団長とする日朝議連第一次訪朝団の秘書長として何回目かの訪朝をしたが、このとき訪朝団員は随行した多数の新聞記者を含めて、わたし以外は全員がはじめて金日成主席にお会いした人であった。

かれらは、朝鮮の社会主義建設に目をみはり、とくに主席の人柄をほめそやし、「たいへん親しみ深くて『抗日武装闘争のなかでたたかいぬいた将軍』とはとても思えない、もっと厳しいこわい方かと思っていた」とか、「長時間にわたる話もユーモアをまじえながら、しかも理路整然として…さすがだ」「世界一流の大政治家であることがよくわかった」などと日本に帰ってからまで大きな話題になっていた。

何人かの国会議員は会見記などの本を書いているが、みな大きな感激と驚きをあらわしたものだけで、金日成主席に直接会った人々はおしなべて深い尊敬の念をもつにいたることがよくわかる。

久野忠治団長などは、「金日成主席は偉大な政治家だ。安宅君の話のとおりの方だった。こんな感激を味わったのはながい政治生活のなかではじめてだ」と涙をうかべながらわたしにいったものだった。

しかも、主席が玄関近くのエレベーターのあるところまで出迎えてくださって全員に握手をしてくれたことがみんなをとくに感激させた。わたしには「あなたはこのまえも会いました」と肩をたたいて言葉をかけられ、とてもうれしかったことが思いだされる。そのときの情況は、同行のニュースカメラマンが撮影していたのを、とくにわけてもらい大切に保管し、ときどき映写機で映してなかまにみせ、うらやましがられている。

このときの主席の話はとても親切なもので、日朝間の情勢、南朝鮮の現状、国連軍の名のもとに南朝鮮に居すわるアメリカ軍の挑発の実態、朝鮮の歴史からみて主体性を確立する問題がこの国にとっていかに大切なことであったかということ、そして雄大な社会主義建設の概要と、日朝両国人民の友好関係促進がアジアの平和にとって、両国の将来にとって重要である理由などくわしく述べられたものであったが、おもしろい挿話などを入れながらの話に、主席のまえで緊張しきった日本の国会議員団もいつしか話にききほれて、ときたま爆笑もおこるという親善的な雰囲気がかもしだされた。久野団長は約束の時間が過ぎたのも忘れて、感謝のあいさつのなかで各党一名ずつの決意表明をいたさせますなどと発言したので、わたしが腕時計を示して時間ですとこっそり注意を喚起したら、主席が気がつかれて、「時間はいいです、どうぞどうぞ」といわれ、ひとりひとりの話を笑顔でうなずきながら聞いてくれたのち、「みなさんの意見表明に感謝します、ありがとう」とまで申されたことなど、偉大な親しみ深い主席の姿が、いまでもありありと目にうかぶ。

十年ほどまえのことだが、わたしの故郷は農村地帯なので、『社会主義農業の正しい運営のために』という、主席が一九六〇年、青山里党総会でおこなった演説のパンフレットを大量に求め、若い青年たちに配って勉強会をしたことがあった。たいへんな反響があり、「わかりやすいし、一国の元首がかゆいところに手のとどくようによくもくわしく農村の実態を知っておられるものだ。すばらしいことだ。朝鮮の農業の実際をこの目でみたい。もっと資料はないのか」などの意見がでて、その後何回も「朝鮮の農業と日本」という題で座談会をひらく契機になり、とくにここ数年のあいだは、一九七四年につくられた「大豊作」という朝鮮の映画をもって講演をかねた巡回映写会を各地でひらいているが、当時の青年であった人々の力を借りて助言者の役割までひき受けてもらうまでに発展した。

金日成主席の偉大さはこうした日本の小さな農村にもよく知られるようになっているのである。

ここ十数年のあいだ朝鮮の人々とつきあいをもつなかで、敬愛する金日成主席に接見する光栄に浴し、つくづく感じたことは、社会主義祖国にあたたかくつつまれ、偉大な主席の賢明な指導のもとで暮らしている朝鮮人民はほんとうに幸せであるということである。うらやましい限りである。

わたしは、朝鮮のさらなる発展と、自主的平和統一の実現を確信し、日朝両国人民の真の連帯をうち立てる運動を一生の仕事としてやりとげる覚悟である。

金日成主席の万年長寿を心から願ってやまない。

日本・衆議院議員、日朝友好促進議員
連盟事務局長

一九七九年　四月

# 朝鮮人民のために生きた生涯

インド

**ビシワナス**

金日成主席は偉大な慈愛あふれる献身的な指導者である。

主席のこのうえなく度量の広い、この魅惑的な人柄のゆえに、世界の人々は、人間の尊厳と平等を世界平和の社会的基準とする新たな世界秩序の確立をめざす主席の決意が実現することを信じて疑わないのである。

わたしは朝鮮を二度訪問した。わたしは、朝鮮が国際舞台で成果を収めるよう導き、朝鮮人民に大きな誇りを与えたばかりでなく、かれらが自己の目的をとげるために勤勉に働き、新しい希望を抱いて進歩と繁栄の道を歩めるようにした主席の生涯とその哲学の研究に多くの時間を捧げた。

貧農の出身である金日成主席は、十三歳のとき、父や祖父、叔父、そして愛国的な家庭のその他の方々の志を継いで、日本植民地主義のくびきから朝鮮を解放するため、史上もっとも苦難にみちたたたかいの道に踏み入った。主席の闘志は衰えることがなかった。その組織的手腕と人民にたいする献身性は、絶望におちいっていた民族を国の主人とならしめた。

主席は、人民にたいする愛と、朝鮮人民の聖なる偉業にたいする献身性のゆえに、人民のあいだできわめて名声

が高く、また人民は、主席の労苦と配慮に感謝して当然のことながら主席を「父なる領袖」と仰いでいる。

主席は、革命発展の各段階で人民の意思と念願、抱負を十分に考慮し、民族の福祉をはかる計画にそれを反映している。すべての政策を決定し計画を作成するにあたって、つねに主席はなによりも人民の利益に重きをおいている。

一九四五年に解放された朝鮮に、一九五〇年六月二十五日、強大なアメリカ軍と力で対決すべき一大試練がふりかかった。

これに際し金日成主席は、かつての試練と災厄、蔑視と侮辱、蛮行と残虐、さらには老若男女にたいする悪らつな非人道的拷問（外国の支配から祖国を解放しようとする民族の堕落をはかる植民地主義者の常套的戦略）の時代に朝鮮を再現しようとする外国帝国主義者の策動の阻止へと人民をふるいたたせた。

このようにして朝鮮人民は、アメリカとその手先らの侵略に相応の報復を行ない、敵をして一九五三年七月二十七日、停戦協定に調印せざるを得なくした。

以後、主席は、国の資源を保護し、すべての分野で自給自足し、一瞬の停滞もなく不断の進歩をとげるよう人民を動員した。

主席はまず、人民を国の真の主人たらしめ、祖国の繁栄をもたらした。それは、主席の主体（チュチェ）思想に根ざす指導原則が貫かれたたまものである。

主席の主体思想は、事実、朝鮮人民のあらゆる問題を解決する鍵となっている。人民を進歩と繁栄にみちびく主体思想の創始者である金日成主席の遠い先を見通す天才的洞察力によって、解放闘争が成功裏にすすめられ、工業、農業、教育分野で成果が収められたし、朝鮮人民の統一への念願が実現するのは必至である。

金日成主席は万人がひとしく認める功績を積みあげた卓越した革命家であるばかりでなく、偉大な天才である。人民がかかえている問題を解決し、かれらに進歩をもたらすための主席の研究は独創的である。

主席は多面的に問題をとらえて、人民が受け入れることができ、進歩と安定の唯一の手段となりうる指導的指針を示している。

主席の人民にたいする忠実性は絶大である。主席は人民のなかに入ってかれらの問題、生活、念願を知る。へき地であれ、積雪の山奥であれ、波高い離れ島であれ、人民のいるところとあればどこにでもかれらを訪ねて行くことを義務とみなしている。

主席は人民のためにはいかなる労苦もいとわない。主席は、祖国の解放をめざす抗日武装闘争の時期に艱難辛苦をなめ、そのような生活に慣れている。主席と人民のあいだには儀礼的な格式がない。主席はだれをも分けへだてせずすべての階層の人々と気さくに会う。

朝鮮人民の謙虚さ、素朴さの象徴であり、朝鮮人民の親しい、真の最高指導者である金日成主席は、いささかも自身を特殊な存在とみなしてはいない。

主席は、普通の人々とわけへだてなく会う。農民たちと一つのむしろに座って農作や国事について語り、食事もともにする。

主席は人民と同じような食事をとることに満足し、人民が特別なものを勧めるとそれを受け入れずにたしなめる。

主席は、喜びも苦しみも人民とともに分かつため、絶えまなくはかり知れない現地指導の道のりを歩んだ。

主席は、たとえ一人でも衣食住に困る人民がいるとき、心を痛め夜も寝つかれないのである。人民はこぞって主席のこの大いなる愛に熱烈にこたえている。

主席はこのように人間的な面で人民と深く結ばれているがゆえに、朝鮮のすべての家族は主席を実の父のように慕っている。

実に主席は人民の指導者として尊敬の的となっている。

金日成主席が朝鮮人民のために献身した生涯は、愛国的な情熱にあふれる偉大な革命闘争と、戦争で破壊された朝鮮をごく短時日に発達した現代国家にきずきあげた伝説のごとき業績でみたされている。

主席はきわめて短い期間に、朝鮮民族を一つの軍部隊につくりあげた。

平凡な労働者、農民であれ、技師や科学者であれ、人々はすべて愛国的な義務感に燃え、一糸乱れぬ立派な行動をとっている。

それが可能なのは、人民の教育に格別の注意が払われているからである。教育はのびゆく世代を健全に育て、人民のなかで愛国心をはぐくむもっとも重要な手段とみなされている。すべての幼児が託児所や幼稚園に行き、一年間の学齢前義務教育を受けている。

工場、企業所、協同農場にはすべて託児所、幼稚園がそなわっており、幼児の保育は国家と社会の負担でおこなわれるため、勤労者は安心して働くことができる。

抗日革命闘争当時、金日成主席によってうちだされた教育方針は、解放後実践に移され、こんにちでは、全般的十一年制義務教育が実施されている。

この十一年制教育は義務的であるがゆえに、すべての子供に、その才能を存分に伸ばす機会がめぐまれ、読み書きのできない子供など一人もいない。

人々は、正しい教育を受けているので、国の繁栄に役立とうという責任感をもった公民として、自己の才能を最

大限に発揮しうる適切な部門で働いている。

金日成主席はまた、革命闘士や愛国烈士に格別な関心を向け、その家族や子弟に肉親の愛をそそいでいる。国家はかれらを育て教育をほどこし、その生活に深い配慮をめぐらしている。

金日成主席はかれらの家を訪れて偉大な解放戦争で勇敢に戦い、また自己の幸福も生命も捧げた父母の誇らしい功績について話して聞かせている。

老人や虚弱者、身体障害者には並々ならぬ関心が払われ、とくにかれらのための住宅が建てられている。金日成主席はしばしばかれらを訪ねて慰め、話も交わしてかれらが孤独感をおぼえぬよう努めている。

なお、朝鮮では毎年二十万～三十万世帯分の住宅を建てて人民に無償で与えている事実も指摘したい。

平和な国においても生産を高め経済の安定を実現するには数世紀を要したが、朝鮮では、平和がいつ破壊されるとも知れぬ極度に緊張した情勢のもとでもきわめて短期間に驚異的な発展を遂げた。

一例として農業生産をあげることができる。解放前は数十万トンの米を買い入れなければならなかったのが、今では需要を満たしてなお多くの食糧を蓄えている。

これは、金日成主席が工業や教育部門とともに農業部門にめぐらした深い配慮の結実であった。

金日成主席はたえず農場におもむいて、管理幹部と生産の展望や新たな計画について話し合っている。主席は青山協同農場だけでも数十回訪れて増産のための現地指導をおこなった。それはいかなる場合にも食糧の余裕をはかる国策の現れである。そしてどのような災禍も農業生産に支障を与えぬよう対策が講じられている。この結果、今アジアではひとり朝鮮のみが米の輸出国となっている。

工業部門についても同じことがいえる。

金日成主席の現地指導の対象とならない工場、企業所は一つとしてない。ある企業所が新設されると主席は直ちに訪れて労働者と会い、輝かしい明日と経済安定のため生産性を高めるよう導いている。そして企業所の運営状態をたえず調べ、折をみて再度赴き、生産計画の遂行状況を確かめている。

朝鮮では、国の富である水産物の生産や養鶏工場、養豚工場などにおける生産も国家が力を入れている。魚類の水揚げおよび加工品生産目標は五百万トンに達している。より広い展望にもとづいて機械化の完成した最新の現代的養鶏工場や養豚工場が年々増設されている。

同時に浪費を防ぎ食糧とその栄養価を保存するため、多くの食品加工工場が建設された。

金日成主席は人民の健康に深い配慮をめぐらし、それには国家が責任をおうようにしている。

国家が人民の健康を増進し、才能を啓発するために体育および体力鍛練用の基本設備をととのえることにしかるべき関心を払い、患者や虚弱者を暖かく見守り、もっとも効果ある医療サービスを与えている。

わたしは朝鮮で青白い顔をした人や暗い表情をした人を見かけなかった。人民は国からゆだねられた任務を責任をもって果たすために最善をつくしていた。それは金日成主席がすべての問題を検討し人民が生活に困ることのないよう解決しているからだと思う。

主席は内外の諸問題についてその解決方向を定め、人民はそれに従っている。どのような疑惑も論争もなかった。主席の言葉は結論であった。人民は主席の才能と愛国心を全的に信頼している。主席の誠実さと忠実さは疑う余地がない。

高邁な品性と限りない愛をそなえている主席はまた、強い意志の持主でもある。

国際緊張の緩和をはかる固い決意と確固たる思想のゆえに、金日成主席は国際舞台において第三世界の指導者と

しての当然の地位を占めている。
金日成主席によって、人間の尊厳を保ち、貧しい民族にたいする搾取を根絶し、発展途上国をして進歩を遂げ、国際的な経済均衡と世界平和を維持するうえで同等な自主国家たらしめる哲学の創始に建設的寄与がなされたがゆえに、朝鮮は世界政治舞台の上でとくに重要な位置を占めている。
まさしくここに、今日ますます多くの外国人が金日成主席の生涯と哲学、なかんずく国の安定と発展、たえざる繁栄の裏づけとなる主体思想に学ぼうと朝鮮を訪れる理由がある。
わたしは、このうるわしい国朝鮮が主席のエネルギッシュな指導の下に遂げた発展について簡単に記し、おわりに、主席が今後とも人民のためにすべてを尽くし、かつその高貴な指導をもって世界人民を力づけるよう願いつつ、つつしんで金日成主席の万年長寿を祈願する。

インド・『インディアン・タイムズ』紙主筆

一九七九年　四月

# 世界を動かす偉大な指導者

日本

尾上健一

私は、革命の偉大な指導者金日成主席の生誕を迎えるたびに主席の接見をうけた日の感激を新たにし、大きな感動にひたるのである。

同時に、偉大な主席を知るようになった喜びと、主体(チュチェ)思想にそって生きる正しい道を示してくれた主席にたいする感謝の気持を禁じえないのである。

そのようなとき私はきまって、主席にまみえた光栄の日々を回顧するのである。

一九七五年四月、二度目に共和国を訪問したとき、主席の接見をうける無上の光栄に浴した。

その時私は、二度目の訪朝でもあるし、偉大な主席にぜひお目にかかりたい衝動を抑えることができなかった。

しかし一方では、かくも偉大な方、国政に多忙をきわめる主席に会見するということは、想像も及ばぬことのように思われた。

実際のところ私は、社会的地位からしても、また仕事の実績からしても主席の接見をうけるだけの資格をもっていなかった。

主席に会見するその瞬間まで、私は全くそれを信ずることができなかった。
そのようなある日、主席が中国を訪問されるというニュースを聞いた。
主席が中国を訪問されるとなると、もう時間をさくことができないから、接見をうける見込みがない、こう思うと、残念でならなかった。
ところが意外にも、全く意外にも歴史的な日がやってきたのだ。
四月十六日、訪中の前日、非常に多忙をきわめたであろうその貴重な時間をさいて、金日成主席は、日本のある学者といっしょに私を招いて下さった。
私たちは、感激と興奮で騒ぐ胸をやっと鎮めつつ、車で内閣庁舎に向かった。
エレベーターが停まってドアが開いたときだった。
夢であろうか、そこには、いつも心の底から尊敬してやまない金日成主席が満面に笑みをたたえ、私たちを待っておられたのだ。
ついに待ちこがれていた瞬間がきたのである。明日へのあてもなく暗中をさ迷っていた私に、明るい希望を与え、栄光の主体の道をさし示して下さった偉大な主席に会えたのだ。
主席は父親のような愛情をこめて私の手をとって暖かく迎え、記念にと、同じカメラにおさまった。
世界でもっとも偉大な革命の指導者として尊敬してきた主席に、じかにお目にかかったこの感激をなににたとえられようか。
私は目がしらが熱くなった。
疑いもなく私の面前には偉大な主席がおられ、私の手をとって下さった。ああ、これは夢ではない。

瞬間私は、主体思想をかかげ、主体偉業の実現のために、すべてを捧げることを固く誓い合った四月十四日の出来事を想起した。

おりから共和国訪問中の日本青年主体思想研究会代表七名は、偉大な主席の誕生六十三周年を迎える前日に、主席の肖像バッジを授与され、みんな感激の涙を流した。それを胸にして、ひたすら主体の道を歩み、主体偉業の成就のために、すべての熱情を傾けることを誓い合ったのである。

その感激もまだ消え去らぬいま、日本の主体思想研究者のひとりとして、偉大な主席の接見をうけることになったのだ。

これは、私にとって無上の光栄であり、幸せである。

主席に案内されて接見室に入った。私は主席のそばの席でお話をうけた。

主席は、私たちの健康について尋ねたあと、もっと早くお会いすべきだったが、遅れてすまないとやさしく話された。

そして主席は、つぎのような内容で話をつづけられた。

「私はきょうはじめて先生方とお会いしますが旧友に会ったような気持です。

それは、私たちが親しくなり、思想意志的に共通点をもっているからです。私はきょう先生方を同志的な雰囲気のなかで迎えることを、大変嬉しく思います」

そして主席は、私たちが日本で朝鮮を深く理解させるために尽力していることが朝・日両国間の親善強化に大きく寄与すると、励まして下さった。

主席は、日本人民と朝鮮人民の運命は一つにつながっているとして、つぎのように話された。

「朝・日両国人民は、帝国主義に反対するたたかいとアジアの平和と社会主義をめざす共通の念願からしても、同じ理想をもっていると思います。

このような点から見れば、朝・日両国人民の団結は非常に重要だと考えます」

金日成主席はこの日、私たちに、現時代は自主性の時代であり、自主性をめざす世界の革命的人民のたたかいは必ず勝利するという必然性を説き、こうした時代に主体思想を学び、主体思想にしたがって生き、たたかうのはもっとも生きがいのあることだと強調したあと、つぎのように話をつづけられた。

「いまは、世界がみな自主性を強調する時期であります。

社会主義諸国は言うに及ばず、新興独立諸国もみな、自主性のためにたたかっています。

…

資本主義諸国のなかにも、自主性を求める国が多くあります。

…

今日、自主性は一つの思想的潮流となっています。

私はアフリカの首班とも、人民とも会い、言論界の人士、学者とも会いましたが、彼らはひとしく自主性を強調しています。

…

あなたたちも、われわれもみな、このような時代に生きているので、この時代的潮流にそうようすべての人をさとし、彼らが自主性のためにたたかうよう、同じ戦友、同志としてともに努力しましょう。こうすることが、全人類のために寄与することだと考えます」

まだいろんな面で未熟な私たちを、自主性のための闘争における戦友として信頼し、励ます主席の言葉に、私たちは大きく感動した。
日本で主体思想を研究し普及する活動をおこなう私たちの力量がまだ弱く、経験も浅いということを申し上げると、主席は、「力量の大小が問題ではありません。一点の火花が燎原の火となるように、いまは小さな力であっても、今後大きく燃え上がることができるでしょう。われわれもいま始めたばかりです。いまは手始めにすぎませんが、今後大きく拡大されるものと思います」と言われた。
取り立てて言うほどの仕事もしていない私たちを、貴重な時間をさいて親しく身近に呼び、理論的、実践的問題をわかりやすく教え、私たちの活動を励ます金日成主席。
古くからの親友に対するように、お菓子やたばこを勧めながらやさしく語る主席、高邁な徳性をそなえた金日成主席の教えをひとつひとつ胸に刻む一瞬一瞬は感動の連続だった。
私はいつの間にか緊張がほぐれ、慈愛深い父親に対するような親近感を覚え、時間のたつのも忘れた。
その日、主席は私たちのために祝杯まで交わして下さった。
私はまたとない光栄、感動にひたされた。
その晩私はとても寝つかれなかった。
長いあいだの切なる念願がかなって主席にお会いした感激、主席のやさしく慈しみ深い人徳にじかに接した感動、そしてかくも偉大な方に学び、生き、活動する栄誉と喜びで寝つかれなかったのである。
貧しい家に生まれ育った私は、苦学して夜間高校を終え、大学に進学した。
生活の体験を通して、矛盾に満ちた日本の社会を変革する必要性と闘争の切迫感を深く自覚し、私は学生運動に

参加した。
しかし闘争は一歩も前進せず、ともにたたかった同僚はばらばらになり、みな「安定」した職を選んで立ち去った。
闘争方法を知らない私は、自分の無能ぶりを嘆き、悔しさを禁じ得なかった。
社会変革の心だけがはやり、いろんな活動をこころみたが、解決の方途がなかなか見つからなかった。
こうしたとき、私は、『金日成伝』を読み、千里の先を展望するような思いをした。
この地球上に、金日成主席のような偉大な指導者をもっているということは、新しいものを志向する世界の進歩的人民のみならず、私たち青年学生にとっても無上の幸せである、と私は確信するようになった。
そして主席をしたい、主席の思想を指針とするなら、主体性を失い教条主義の泥沼にはまって動きがとれなくなった日本の青年運動を正しい道に導くことができると確信した。
まさしく金日成主席は、世界のなかでも、もっとも偉大な革命の指導者である。
人類の近代史には、マルクス、エンゲルス、レーニンなど、偉大な指導者が現われ、彼らの残した功績もまた大きいものがある。しかし彼らが活動した時期は五十年前、百年前である。彼らはそれぞれの時代の指導思想を生みだしたが、それも完全には実現できずに世を去った。彼らはまた、理論的、実践的風格をすべて備えたわけではなく、ある一面においてぬきん出た指導者であった。
しかし金日成主席は、その理論の深さと豊かさ、風格などのあらゆる面で、もっとも卓越した指導者である。
主席は、時代の前途をさし照らし、世界を動かす偉大な指導者である。
私は帰国後直ちに、金日成主席の偉大さを日本人民のなかに広く知らせるための、栄えある活動を始めた。

一九七六年四月十五日、主席の生誕六十四周年を記念して、不滅の主体思想を研究し学習するための『青年センター』の建設を決議し、僅か半年余りの期間に、りっぱに完工した。

私たちはまた、一九七七年四月十五日、主席の誕生六十五周年を祝うため、理論誌『キム・イルソン主義研究』を創刊し、青年問題にかんする主席の古典的な諸労作をおさめた『青年論』を発行した。

この過程に、多くの青年たちが主体思想研究グループをいっそう広範に組織するため、日本の全国各地に出向いた。

一九七七年九月十四日から十七日まで、平壌で主体思想に関する国際討論会が催された。

この討論会で私は光栄にも、「偉大な金日成主義は、今日の発達した資本主義諸国、帝国主義諸国における革命闘争でもっとも威力ある指導思想となっている」と題して、討論した。

討論で私は、現時代がどのような時代であるかについて、およそつぎのような内容のことを述べた。

われわれの時代は、偉大な金日成主義がさし示す道にそって前進する時代である。

革命闘争は、正しい革命思想と指導的指針がなければ勝利できず、時代が提起するあらゆる問題、時代の前途は正しい革命思想によってのみ明らかにされるのである。これは時代を規定する上で、その時代を導く決定的要因である指導思想、革命思想をもって特徴づけることが重要だということを意味する。このような意味で百年前、五十年前をマルクス・レーニン主義時代であったとするならば、われわれの時代は金日成主義時代であるといえる。

われわれの時代はまた、金日成主義創始者である偉大な金日成主席によって導かれる時代である。かつてマルクスやレーニンは、その生存中には制限された範囲でしか役割を演ずることができず、マルクス主義とレーニン主義はその創始者たちが逝去した後に、世界的思潮として普及された。

しかし金日成主義は、その創始者である金日成主席が精力的に活動されている現時代にすでに世界的な基本思潮となっており、世界人民の心をとらえている。これは金日成主義の偉大さを如実に示しているものである。

このように、われわれの時代は、金日成主席によって導かれ、主席を中心に世界の人民が団結して革命と建設をおし進める金日成主義時代であるといえる。討論を終えるに当たって、主体思想を研究するための国際機構の創設が切実に必要である旨強調した。

平壌の国際討論会では、世界各国代表の提案をうけ入れ、主体思想にかんする国際的な研究機構を設置することに合意した。

平壌滞在中、私はまたも金日成主席に二度もお会いする光栄に浴した。

主席は多忙な時間をさいて私たちを接見しいっしょに記念写真をとった上、かけがえのない貴い贈物まで下さった。

九月二十四日夜、対外文化連絡協会のある幹部の方が宿所に見えて、明日、金日成主席が私たち日本主体思想研究学術代表団を接見して下さるという、嬉しいニュースを伝えてくれた。

私はあまりの嬉しさに、なかなか寝つかれなかった。

翌朝、私は服装を正して接見場所に向かった。

車窓から眺める道路の両側には、色とりどりの花が美しく咲きみだれていた。それは、あたかも偉大な主席にお会いしようとする私を祝福し、笑みを送ってくれるように思われた。

この幸せな瞬間、私の脳裏には数日前主体思想にかんする国際討論会に参加した各国代表とともに錦繡山議事堂で主席を迎えたときの感激が蘇ってきた。

その日、主席は代表たちが並んでいる広いホールにお出になった。

不滅の主体思想の創始者である偉大な金日成主席に会える感激と喜びを抑えることができず、各国代表は手をあげて振りながら「主体」、「金日成」とシュプレヒコールを叫び、ある代表たちは「金日成主席同志万歳！」を声高らかに叫んだ。

嵐のような歓呼のなかに、主席は各国代表といちいち握手を交わし、共和国政府が催したレセプションにも参席され、みんなといっしょに記念写真までとって下さった。

その偉大な風格に接し、私は、金日成主席こそ、世界にまれな、もっとも偉大な指導者であると、心底から思った。……

いつの間にか車は接見場所についた。

恐縮にも主席がじきじきに、玄関で私たちを迎えて下さった。

私は主席に、日本で主体思想を学ぶ青年学生たちの活動状況を申し上げ、金日成主義をかかげて生きる日本青年たちのあつい感謝の意を伝えた。

主席は慈しみ深い眼差しで私を見つめながら報告を聞き終ると「ありがとう」と言われた。

主席は、主体思想を学び普及することが、世界人民の切実な要求となった事実をつぶさに話された。そして主体思想研究活動の展望や日・朝関係、全般的な国際及び国内情勢にいたるまで、非常に適確にするどく分析された。

主席は、日本青年たちの活動についても触れた。私は主席が、われわれ日本青年にも関心を払っていることを知り、大きく感動し胸があつくなった。

その日、主席は「午前中は先生たちのために時間をとっておきました」と言われて、長時間にわたって、私たち

に貴重な話をされた。
主席は昼食会の席でも、重要な内容をもつ話をされた。
主席の向かいに席をとった私は、それを書きとるためろくに食事もできなかった。
それを見た主席は、私に食事を勧め、祝杯まで交わしてくれた。そのとき、私はこの世にまたとない、無上の幸福感にひたっていた。
やさしい、慈愛に満ちたその風格、まさしく実の親にまさるものがあった。
その日、主席は私たちのために、四時間以上も貴重な時間をさいた。
接見が終わって宿所に戻った。それまで心にわだかまっていた活動上の難点も、朝露のごとく消え、眼下が一望千里に開かれたような気がした。
日本に帰るとすぐ、私は各地の青年主体思想研究グループ代表に、主席の接見をうけた内容を報告した。それを聞いた代表たちは、主席の慈愛と配慮に大きく感動し、ひたすら主席のさし示す主体の道ひとすじに進み、日本の社会に一日も早く主体思想が花咲くよう、努力し合うことを誓った。
偉大な金日成主席、主席はまさに朝鮮人民の偉大な父であるばかりでなく、世界人民の教師であり、われわれ日本青年の慈父でもある。
それゆえ今日、日本全国各地の数多くの青年たちは、かくも心から主席をしたい、主席の導く道ひとすじに生きる決意を固め、主体の隊列に合流しているのである。
一日の仕事を終えた青年労働者たちは、疲れも忘れ、自分たちの手で建設した事務所に集い、主席の肖像の下で、栄光に輝く主席の革命活動の歴史を学んでいる。

工場と漁村、都市と農村、学校を問わず、日本の津々浦々に、偉大な金日成主席の温かい光がさし照らし、その陽光のもとに日本人民は新しい力と勇気を得ている。

主体思想を学び主体思想に従って進もうとする人たちの隊列は、日本各地で絶えず増大しており、主体思想を研究し普及するグループ活動も、ますます盛んになっている。

一九七七年十一月十九日、日本青年主体思想研究連絡協議会の第三回総会が開かれた。

総会では、主体思想をいっそう広範な日本人民に解説し普及するために、今までの地域を単位にした学習会を職場・学園を基本としたものにかえていくという、新たな方針を討議決定した。そして、金日成主席の生誕六十六周年を記念して青年だけでなく広範な人々を網羅したより大衆的な研究組織である「自主の会」を結成することを確認した。

金日成主席著作研究会全国連絡会議は、十一月十九日と二十日の両日にわたって、第十回全国集会を開いた。集会では、東京に主体思想国際研究所を設立するとの、同研究所組織委員会の決定を全会一致で熱烈に支持歓迎した。

一九七八年四月九日、ついに主体思想国際研究所創立大会が開かれ、主体思想国際研究所が設立されたことを全世界に宣言した。

これは、現時代、金日成主義時代に生きるすべての人民にとって大きな栄誉であり、誇りである。不滅の主体思想を研究し普及するための国際的な常設機構が設立されることによって、全世界の人民は、偉大な金日成主席の指導のもとに、主体思想のさし示す道にしたがって、さらに力強く前進できるようになった。

私は今日のこの栄誉と誇りを抱かせてくれた、偉大な金日成主席に最大の感謝を捧げるものである。

おわりに私は、敬愛する金日成主席が主体思想の全世界的勝利のために、万年長寿されるよう心から願う次第である。

日本・「自主の会」常任幹事長

一九七九年　十月

# ナイジェリアに寄せた金日成主席の言葉

ナイジェリア

**カーウェ**

わたしは朝鮮民主主義人民共和国到着早々、金日成主席にお目にかかりたいという希望を朝鮮対外文化連絡協会に提出し、うむことを知らない哲学家である主席に会えなければ、わたしの朝鮮訪問は意義がないと強調した。朝鮮を離れる数日前の夜、北部地方にある各道の現地指導で多忙な日程を送っていた主席が、わたしたちナイジェリア記者たちと会うために十五分間をさいてくれるとの連絡があった。

翌朝、わたしたちは平壌から飛行機で二時間半ばかり北へ飛んだ。ところが、接見は翌日の予定で、時間は未定であると言う。いらいらと落ちつかぬ一日を過ごしたわたしたちは、あくる朝の九時、主席が待っているという知らせを受け、午前十時、こじんまりとした招待所に到着した。つねに人民と苦楽をともにする主席は、朝鮮のどこでも目にすることのできる簡素な建物でわたしたちに会ってくれたのである。

わたしたちは、カメラマンのフラッシュを浴びながら主席と向かいあった。談話がはじまると、わたしはすぐ主席の賢明さに感嘆し、主席が人民に豊かな文化生活をもたらすためにどれほど心を砕いているかを感じることができた。

## さまざまな問題

主席は広い識見をそなえ、国際問題や発展途上諸国のさまざまな問題を明確に把握していた。

主席は国際政治分野におけるナイジェリアの役割を高く評価し、困難に屈することなく自主性を堅持しなければならないと強調した。

主席は、アフリカのほとんどすべての国が植民地支配から解放されたことを喜び、「いまはアフリカ人がアフリカの主人となっています」と語った。

主席はつづけて、アフリカ諸国は第二次世界大戦後、復活の道をたどり、ナイジェリアなどアフリカ諸国が、世界史の発展と国際問題において大きな役割を果たすようになったと指摘した。

主席は、大多数のアフリカ諸国が非同盟政策を実施していることに満足の意を表し、アフリカ大陸が自主権を価値のある有意義なものとならせるためには、非同盟政策を堅持すべきであると強調した。

主席はつぎのように述べている。

「いずれの国も、完全な独立を達成するためには経済的に自立し、国防において自衛の路線を貫き、思想、技術、文化の面でも先進国に依存してはなりません」

主席は、ナイジェリアは今後も、技術、社会および思想分野で自主路線を堅持し、富強な国家を建設すべきであると語った。

# 民族

主席は、人民大衆を教育してこそかれらを目ざめさせ、政治、経済、社会および技術的な進歩をもたらすことができると述べ、ナイジェリアでも大衆教育を強化すべきであると指摘した。

主席は、個人と同様、国家も団結してこそ強力になり、国の団結にひびが入るようなことは決してしてはならないと語った。

主席は、いま敵は新たな手口でアフリカ人がいつまでもアフリカ大陸の主人となることを阻み、ひきつづきアフリカを搾取しようと企んでいると語った。

主席は、敵は第三世界の発展を望まず、アフリカ人民の志向を阻むために危機をかもしだしてアフリカの統一を破壊しようと策動していると指摘した。

主席は、アフリカは社会、経済などすべての分野で団結し、ひとが十歩歩くとき百歩歩いてこそかれらに追いつき、豊かな生活と繁栄をもたらすことができると語った。

主席は、敵は分裂させて支配する政策を使っているだけに、団結を破壊する敵とたたかうべきであると語った。

主席は、敵は発展途上諸国を恐れているので、アフリカ諸国の離間と反目、分裂を企み、古い経済秩序を維持して経済的支配をつづけようとし、アフリカにそぐわぬ思想を植えつけようとしていると指摘した。

主席は、アフリカは大同団結すべきであり、制度の違いにかかわりなく大同団結を前提としてすべての問題を解

決すべきであると指摘した。
主席はさらに、進歩を標榜しながらいぜんとして他国を支配している者たちを糾弾して、こうつづけた。
「資本家であれ、社会主義者であれ、自らを進歩的人士と称するものであれ、他人を支配するものはすべて世界の敵であり当然糾弾されるべきです。
社会制度にかかわりなく、社会的正義に欠けていれば、それはもはや進歩的であるとは言えず、糾弾されてしかるべきです」
主席はまた、アフリカ諸国が自主性を堅持し、意見の相違を内部で解決して自立経済を建設すれば、アフリカ大陸はいくらでも進歩をもたらすことができると述べ、アフリカは資源が豊富であるだけに、人民は勤勉に働いて自立経済を建設すべきであり、広大な領土と多くの人口をかかえている大陸が団結してたたかえば、搾取者も対抗できなくなると語った。
主席はまた、アフリカで技術を発達させるためには、民族幹部を養成すべきであると指摘し、朝鮮でも、解放直後は技術者がごくわずかであったが、技術幹部を系統的に養成した結果、いまでは多くの技術者をもっていると語った。
主席は、技術人材も、アフリカが自力で養成すべきであると言われた。それはアフリカ人こそアフリカ人の隘路や文化、志向などをだれよりもよく知っているからであると指摘した。技術人材養成のためには、非同盟諸国を効果的に利用すべきであると語った。

## 国家

主席は、ナイジェリアが百余の非同盟諸国に百名の留学生を送るとしても、百名の有能な技術者を養成することができると言われ、非同盟諸国が技術者を交流すれば、すべての分野がすみやかに発展するであろうと語った。

主席は、ナイジェリアに大きな期待をかけていると述べ、ナイジェリア人民が人間愛と献身性をもって誠実に、勤勉に働けば、偉大な国家を建設することができると強調した。

主席は、ジンバブエ問題に触れ、朝鮮民主主義人民共和国はアフリカを支持していると言明した。またアフリカ問題はアフリカ人自身が解決しなければならないと指摘した。

## 占領

主席は、ナイジェリア人民が朝鮮の平和的統一方案を支持していることに謝意を表し、アメリカ人はいかなる国も永遠に分裂させることはできないと言われ、悠久な歴史をもつ朝鮮は、外国の占領を決して許さないと強調した。

主席は、帝国主義の支配下にあった大多数のアフリカ諸国が解放されたように、朝鮮もかならず自由をかちとるであろうと強調した。

十五分の予定であった主席との接見は一時間にかけておこなわれた。廃虚となった国をわずか十五年という短い期間に豊かな国につくりかえた主席に会えたことは貴重な体験であり、大きな喜びであった。

ナイジェリア・『ディリー・スケッチ』紙主筆

一九七九年十二月

# 金日成主席は最もすぐれた人民の指導者

日本

成田知巳

わたしは日本社会党の委員長在任当時、朝鮮民主主義人民共和国を二度訪問した。いずれも日本社会党代表団を引率しての訪問だった。

そのつどわたしは、主体（チュチェ）思想を創始し朝鮮人民を勝利と幸福に向けて確信をもって導いている金日成主席に接見する有意義な機会にめぐまれた。

二回にわたる共和国訪問中、主席にはたびたびお会いできたが、なかでも主席が日本社会党代表団を接見した一九七〇年八月二十二日と、一九七四年九月六日のそれは最も意義深いものであった。

金日成主席の接見もしくはさまざまな機会にお会いするうちに、わたしは主席について非常に深い印象を受けたが、それは今もわたしの記憶になまなましく残っている。

朝鮮民主主義人民共和国を初めて訪問するさい、両国間に国交がないのでソ連か中国などの第三国を経由しなければならないが、われわれは、一国を公式訪問する党代表団としては外国を経由するより直接行くのが礼儀だと考えた。

そこでわれわれは、共和国に直行する航空路も、定期連絡船もない状況のもとで、貨物船に乗って咸興に到着した。そこから汽車で平壌に向かった。

わたしは、平壌が美しい都市だとは聞いていたが、自分の目で確かめて、その美しさに驚嘆せずにいられなかった。

同行の日本人記者も、「平壌がこんなにりっぱな都市だとは思わなかった。平壌は世界の都市の中で五本の指に数えられる実に美しい都市だ」と感嘆してやまなかった。

われわれは、この美しい平壌の都心にある内閣庁舎（当時）で、朝鮮人民の敬愛する指導者金日成主席にお目にかかった。

接見場は、二回とも主席の執務室だったと記憶している。

わたしは最初の接見から思いがけない出来事にぶつかった。

宿所の迎賓館を出発した乗用車が平壌の美しい街路を縫って内閣庁舎に到着するとすぐ、われわれはエレベーターで接見場へのぼった。

わたしは、金日成主席は政務にたずさわりながら、執務室でお待ちになっているものとばかり思っていた。

ところが、エレベーターの扉が開くと、その前に金日成主席が立っておられたのである。

金日成主席は多忙をもかえりみず、われわれ代表団一行を迎えるために、エレベーターの前で到着を待っておられたのである。

わたしはこの瞬間、ただただ恐縮するばかりであり、同時に慈しみ深い主席の人柄に触れた思いがした。

主席は満面に明るい微笑をたたえ、わたしをはじめ代表団員の一人一人と固い握手を交わされた。

握手したときの初印象は、主席が非常に健康で若々しいということであった。
金日成主席は、接見されたばかりでなく、昼食会まで催して長時間われわれと席をともにしてくださった。
わたしはこの意義深い席で、主席といろいろな問題について貴重な話を交わすことができた。
わたしは、世界各国を訪れ、多くの国家元首とも会ったが、金日成主席は最も傑出した指導者であることを感じた。
金日成主席は飾り気のない実におおらかな方であった。
主席は格式にこだわることなく、なんでも思ったままを率直に話されたが、その一言一言が確信と自信にあふれていた。わたしはこの点で非常に強い印象を受けた。
自信にあふれている人は概して高姿勢でうぬぼれが強く、相手の思惑にかかわりなく一方的に話を進めがちである。これが本当に自信のある人でないことは二言をまたないであろう。
ところが金日成主席は非常に謙虚で思いやりがあり、明朗な方であった。
主席はわれわれと談話中、外国の政客にありがちな、一方的に話を進めるとか、相手の話の腰を折ってはばからないというようなことはなく、必要な問題については詳しく話されながらも、われわれに語る余裕を与え、意見を述べる機会を提供するなど、われわれがいつとはなく主席の話す世界に誘われていくようにされるのだった。
これこそ真の自信であって、主席のこのおおらかな品性には、主席自身の路線にたいする確信が裏打ちされているのだと、わたしは思った。
その後、二度目の共和国訪問の日程が終わりかけていたある日のことだった。
金日成主席は多忙を極めておられたにもかかわらず、われわれの宿舎を訪れ、温泉で一緒に昼食をとりましょう

とさそい、わたしを主席の車に同乗させてくださった。
車中主席は、これまではわたしが多く話したようです、温泉までは二時間半かかりますから、さしつかえがなければ成田先生のお話を聞かせていただけませんか、大いにお話ししてくださいと言って、いろいろな問題についてざっくばらんに話す機会を与えてくださった。
また、温泉に着いて一同が食卓を囲むと、主席は座中を見回して、格式張った挨拶は抜きにしましょう、食事をしながら話し合いましょう、と言い、非常になごやかな雰囲気をつくってくださった。
こうしたことは、わたしにも、また代表団員たちにとってもはじめてのことで、とりわけ大きな感動を受けた。
金日成主席のこのようにおおらかで慈しみ深い人柄に接して、それまでわたしの頭の中に深く刻まれていた一つの先入観が粉々に打ち砕かれてしまった。
われわれの若かった日本帝国主義時代のことである。
われわれは日本の新聞紙上で「白頭山の虎金日成」出没という記事を読み、また、そうした話をたびたび耳にした。
言うまでもなくこれは、当時、神出鬼没の戦法で日帝軍警を悩ませた抗日の霊将金日成将軍の勇猛果敢な活躍にあわてた帝国主義者の表現であったが、われわれ日本人のなかには、「白頭山の虎金日成」といえば、普通の人間はあえて近づくこともできない、そのような英雄を連想する人が少なくなかった。
正直な話、わたしもやはりそう考えていた。
帝国主義によって植えつけられた先入観であっただけに、それは長続きせず、その後、金日成主席の人柄と徳性にかんする話を多く聞いてはきたものの、主席にお会いするまでは若いころの考えがきれいにぬぐい去られてはい

なかったのである。
しかし、主席の慈しみ深くおおらかな人柄に接してその先入観は完全になくなり、わたしは深い尊敬の念を抱くようになった。
金日成主席はほかにも、ものごとにたいする鋭い洞察力と判断力、度量のある包容力、そして理路整然とした論理と心をうつ強い説得力を兼備した偉大な方である。
金日成主席はすでに多くの労作を世に出している。それはいずれも、わたしはもちろん、すべての革命家の指針となる闘争の教科書である。
主席はとくに、『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』のなかで、過渡期とプロレタリアート独裁の問題について独創的で科学的な解明を与え、あらゆる日和見主義の反動的見解に打撃を加えた。
また主席は『わが国における社会主義農村問題にかんするテーゼ』において、懸案となっていた農村問題解決の道を科学的に解明し、テーゼにもとづいてこの難問題を朝鮮で真っ先に解決している。これは実にすばらしいことである。
こうしたいくつかの事実によっても、金日成主席は偉大な実践家であるとともにすぐれた政治理論家でもあることをはっきり知ることができる。
金日成主席のこれらの主な労作をほとんど読んだわたしは、主席が革命と建設のすべての分野にわたって理論的に非常に造詣が深いことを知ってはいたが、主席のお言葉を直接聞いて、その高く深い政治理論的識見に感嘆を禁じえなかった。

その内容をここにすべてしるすことはできないが、主席が全般的な国際問題から日本の実情にいたるまで非常に詳しいばかりでなく、冷静にそして明快に分析しながら、それらひとつひとつの問題の本質をすべてずばりとついていることにわたしは驚嘆してしまった。

わたしは主席の接見と共和国各地での見聞、そして自らの体験によって、金日成主席はすぐれた思想家、理論家であるばかりでなく、人民にたいする大いなる愛をいだいている人民の偉大な指導者であり、慈父であることがよくわかった。

金日成主席はつねに大衆のなかに入り大衆に依拠して活動し、つねに人民の立場にたって考え、人民の利益を代表して人民の意思を行政に反映する根本的立場を堅持している。そういう意味においても金日成主席は偉大な領袖である。

大衆のなかに入り大衆とともにあること、これは金日成主席の一つの特徴だと思う。

一例として、あの有名な青山里には数十回も現地指導をおこなったという。主席が多忙をきわめながらもつねに人民とともにあることに、わたしは感動せざるをえなかった。

金日成主席は人民のなかに入って人民の意見に耳を傾け、通り一遍の指導ではなく実情に適した具体的な指導をおこなっている。

マスゲームの見物に行って聞いた話がある。そこは南浦であったと思われる。

数年前金日成主席がここを現地指導していた当時のことで、ある婦人農民が当地ではとうもろこしが適作だという意見を主席に申し上げたそうである。彼女はしばしば各機関にこの提言をおこなったが実現されず残念に思っていた。

すべての事情を了解した主席は彼女の意見の妥当性を認め、現地で必要な措置を講じた。こうして、その農場ではとうもろこしを栽培したが、結果が非常によかったという。

われわれ代表団が金日成主席の招きで一緒に演劇を見物したときのことである。公演が終わると、主席は主人公をはじめ出演者、演出家などと会い、握手を求めて労をねぎらいながら、公演の成功を祝ったあと、問題点を正すようくわしく指摘した。

あとで知ったことであるが、朝鮮の芸術家はつねに随所で主席のこのような指導を受けているというのであった。こうした細心の配慮と具体的な指導は、どの指導者にもできるものではない。わたしはこの事実にたいへん感激した。

金日成主席のこうした深い心づかいと暖かい配慮は、わが代表団と同行した日本人記者にもそのままめぐらされた。

われわれと同行した日本人記者たちは、金日成主席との会見を切望したが、政務に忙しいため時間をさくことがむずかしいというので、主席との会見をあきらめていたときのことである。

ある日、金日成主席が大同江のほとりにあるわれわれの宿所に来られた。玄関に入った主席は、一緒に出迎えた日本人記者たちを見ると、みなさんから会見を申し入れられたのに希望にそえずすまなかった、今からここで会見しようと言ってわざわざ時間をさき、彼らと二十分間も話し合われた。

このような場合、一国の国家元首がいったん会見をことわった以上それで済むのが通例である。しかし金日成主席は、日本人記者の要請を記憶していて、彼らに会うと、会見できなかったことを詫び、意外にも異例の会見をおこなってくださったのであった。

実に至れり尽くせりの配慮である。
主席のこのような配慮に記者たちが感激し喜んだことはいうまでもなく、わたしをも含めわが代表団一同も感激を禁じえなかった。
われわれ代表団が共和国訪問の日程を終え船で帰国するときのことであった。
われわれを乗せた船は、途中しけにあい共和国に戻った。こうして代表団一行は、興南の一ホテルでしけがおさまるのを待っていた。
ところで意外にも、金日成主席がこの事実を知ってわれわれに長距離電話をかけてくださった。
主席は、ホテルでは不便だろうから平壌の宿所に戻って疲れをいやしながら待つようにと、暖かく言われるのであった。
われわれはすっかり恐縮して強く辞退したが、結局、主席のお言葉にしたがって平壌の宿所に戻ったがこの暖かい配慮には目がしらが熱くなった。
金日成主席は実に慈愛にみちた人情味豊かな指導者である。
わたしは、金日成主席と会って主席の偉大さを肌で感じた。
朝鮮人民の敬愛する指導者金日成主席は、久しい間英雄的な抗日革命闘争を導いて日本帝国主義の支配から朝鮮を解放し、解放後は世界「最強」を誇っていたアメリカ帝国主義侵略軍をうち破って英雄朝鮮の名を全世界にとどろかせたし、新しい朝鮮の国づくり、社会主義建設を賢明に導いて歴史に輝く偉大な功績を積んだ。
周知のように、朝鮮戦争当時朝鮮を廃虚にしたアメリカ人は、「朝鮮は百年たっても再起できないだろう」とうそぶいた。

しかし金日成主席の賢明な指導のもとに、朝鮮人民は不死鳥のように立ち上がり、奇跡的な成果をおさめている。とりわけわれわれを驚嘆させたのは、朝鮮人民が、資本主義である一世紀ないし数世紀かかった工業化の複雑困難な課題を、十四年というきわめて短い期間にりっぱになしとげたことである。

さらに、かつて農業の発展は不可能とされていた共和国北半部で食糧問題を解決し、米を完全に自給自足している。

また過去日本帝国主義の乱伐によって「朝鮮の山には木がない」と言われたものであるが、いまではすべての山が緑におおわれて景勝をなしている。

人民は、国家の建てた文化住宅で衣食に心配することなく、病気になれば無料で治療をうけ、子どもたちを無料で勉強させながら幸せな生活を送っている。

人々を驚かせるこのような事実は、金日成主席の主体思想が完全に具現されていることを示すものであり、それはまさに偉大な主体思想によって、金日成主席によって導かれているからこそ創造された奇跡にほかならない。

これらの背景には主席の主体哲学があり、それに裏打ちされた確固とした路線がある。そして主席の政治的偉大さと人民にたいする深い愛情がある。

これらが一体となって主席の高度の指導力となり、主席は朝鮮革命をどのような偏向をおかすこともなくひたすら勝利へと導いてきたのである。

だからこそ、朝鮮民族は金日成主席を偉大な指導者として深く敬慕し、信頼し、どこまでも従っているのである。これはきわめて当然なことである。

日本には偉大なすぐれた政治家、指導者がいない。

金日成主席のように偉大な指導者、すぐれた人民の指導者のもとにある朝鮮人民は実に幸せな人民であると思う。

＊　＊　＊

現代は自主性の時代である。

世界各国人民は、あらゆる階級的搾取と民族的抑圧を排撃し、自己の解放をめざして自主的で創造的なたたかいをくりひろげている。日本人民もその例外ではない。

金日成主席の賢明な指導のもとに、このたたかいの先頭に立ち、主席によって創始された主体思想を熱烈に支持し、その全面的具現のために革命と建設に拍車をかけている朝鮮人民は、これまでと変わりなく今後も輝かしい勝利をおさめるであろうと信じてやまない。

今日朝鮮の統一問題をめぐる情勢も、金日成主席の指摘したとおりに動いている。

歴史は自己の流れをもっており、だれもその流れを逆行させることはできない。

朝鮮はこの歴史発展の法則にしたがって、とりわけ金日成主席の正しい統一方針にしたがってかならず統一されるであろう。

最後に私は、朝鮮人民の敬愛する指導者金日成主席の万年長寿を心から祈願しながら、偉大な指導者の導きのもとに、朝鮮民主主義人民共和国が私の瞼にあざやかな緑の山野とともにとこしえに栄えることを願ってやまない。

日本社会党前委員長

一九八〇年　一月

# 忘れがたい偉人

インドネシア
A・N・ナスチオン

あれはもう十七年前のことだが、わたしの脳裏にはついきのうの出来事のように鮮やかに蘇ってくる。その日の午後、わたしと妻は、朝鮮革命の参謀部、朝鮮労働党中央委員会の庁舎で金日成主席の接見を受けることになり、ホテルで待機していた。

あいにく外は土砂降りの大雨で、降り止まぬ空を見あげながら、わたしたちはせっかくの接見がお流れになるか延期になりはしないかと不安な気持に駆られていた。その日は、朝鮮を訪れて二か月のあいだ待ちに待っていた日であったし、翌日は平壌を立つことになっていたのである。しかし、降りしきる雨もわたしたちの予定を変えることはできなかった。わたしたちの車は雨の中を目的地に向かって走った。

インドネシアの記者としてはじめて主席に会うだけに、それはまたとない貴重な機会であり、わたしの二度にかけての共和国訪問におけるハイライトでもあった。

待っていた主席は、旧知のようにわたしたちの手をかたく握ってくれた。とても五十一歳とは思えない若々しい堂々たる体躯であり、飾り気のない謙虚な人柄であった。

朝鮮の地味な白い服を着た主席はたえずやさしい微笑をたたえながらも、帝国主義、植民地主義を非難するときの口調はきびしかった。その風格は、愛国心と崇高な気概にみちていた。このことは指導者の偉大さというものはなにか人目をひく風采や華美な身なりによってではなく、素朴で寛容な品性のうちにおのずとにじみでるものであることを物語っている。

現実をふまえた主席の談話は、このうえなく貴重で感動的であった。主席は朝鮮人民が外国の支配をふり切って政治のうえで自主性を堅持し、自力更生の原則に立って民族経済を建設した朝鮮の具体的な例をあげながら、二時間余にわたって主体(チュチェ)思想について語った。通訳をあいだにはさんでの談話であったが、わたしたちは時間の経つのをすっかり忘れていた。

主席の話を聞いていると、そこで言われていることや、わたしが二か月間の滞在中に目撃したことがありありと目に浮かんできた。

半世紀前、貧農の家庭に生まれた主席は、人民から敬愛される栄えある社会主義国の偉大な領袖となった。

主席は一九一二年四月十五日、平壌から約十二キロメートルはなれた大同江下流の麗しい万景台の貧しいわらぶき家で生まれ、そこで幼年時代を過ごした。

万景台は現在重要な革命史跡地となっており、朝鮮人民は万景台のわらぶき家をどのような豪壮な宮殿よりもさらに貴重なものと見なしている。万景台は永遠に光り輝く朝鮮革命の偉大な太陽がさし昇ったところであり、今日もさん然とその光を放っている朝鮮人民の革命精神と闘争精神の発祥地である。万景台にさし昇った太陽は永遠な宇宙とともにとわに光り輝くであろう。

世界各国の人民、とりわけ発展途上諸国の人民は主体思想こそもっとも合理的な思想であると認めている。それ

は主体思想が人間があらゆるものの主人でありすべてを決定するという哲学的原理に根ざしているからである。

主席は、主体思想は政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則によって具現されると指摘し、それを自国の現実に生かした。いまや主体思想は、第三世界諸国人民の前途を明るく照らす指針となっている。

十七年前に朝鮮を訪問したさい、わたしは朝鮮経済の急速な発展テンポに目を見張る多くの外国の友人に会ったが、今日世界各国からの訪問者たちは、主席に忠実な朝鮮人民にたいして、主席が朝鮮人民を賢明に導いておさめた主体思想の結実にたいして驚嘆している。

わたしは、主体思想を創始し具現した金日成主席こそ、今世紀最大の世界的指導者であると思っている。主席はつねに人民とともにあり、工場や漁村、山間僻地の協同農場にも現地指導をおこない、主体思想の真理を実証している。

主体思想を創始した革命の英才金日成主席は、新しい革命理論を人類にもたらした。自由と独立をめざしてたたかう人民は主体思想を求めている。主体思想は被抑圧人民の闘争の武器であり、人類の理想社会を実現する強力な思想的武器である。主体思想の創始者である金日成主席こそ光あまねく世界革命の太陽である。赤い灼熱の太陽は暗黒にとざされた国々から黒雲をとり払い、人類に永遠な繁栄と幸せをもたらす光を放っている。これが十七年前に会った主席の印象である。

わたしは、久しい前から主席を帝国主義、植民地主義に反対する不屈の闘士、国の完全独立をめざす熱烈な愛国者として敬慕の情をいだいてきた。

わたしは、一九四五年八月、わがインドネシアの青年たちが、人民の代弁者スカルノとともに独立を宣言し、歓呼にわきかえっていたとき、金日成主席が朝鮮半島で独立を達成したという消息を耳にした。

一九五三年七月、アメリカ帝国主義者が朝鮮人民のまえに膝を屈したとき、わたしは正義のたたかいに立ちあがった人民はかならず勝利するという確信を新たにし、朝鮮人民の闘争精神に感動した。

十七年前にわたしが主席にお目にかかってその偉大な人柄に魅了されたのは当然のことである。いまなおその強烈な印象はわたしの脳裏に焼きついている。

わたしはこれまで作家として、記者として世界各国の多くの指導者に会ったが、金日成主席のように深い印象を残した方はいなかった。

主席は、朝鮮人民に生きがいのある生活をもたらしたが、わたしにはいつまでも消えることのない印象を与えた。

主席は、新年や主席の誕生日、共和国創建記念日などに送ったわたしの祝電にたいして丁重に謝意を表してくれている。これはささやかな誠意をもおろそかにしない高邁な品性と偉大な心を物語るものである。

わたしは、主席の高邁かつ謙虚な品性と英知、人類の幸せと繁栄のために生涯を捧げている主席の闘争とその精神に思いを馳せている。

全民族が日本植民地主義の圧制下にあった時期、主席は十三歳の年少の身で暴虐な侵略者とのたたかいにのりだし、帝国主義支配から祖国を解放する重責を担ったのである。

主席は民族の前に提起された全般的革命の前途を切り開いたが、これは洗練された指導者のみがなしうるものである。

主席は世界史における不世出の偉大な指導者であり、人類が生んだすぐれた指導者である。

人民から全幅的な支持を受けている主席は、不退転の意志、勇気、剛毅な精神をもって、戦災をこうむり人民の

血に染まった廃虚のうえに今日の朝鮮民主主義人民共和国を建設した。

主席は共和国を創建したばかりでなく、解放後ひきつづき社会主義建設をめざしてたたかい、抑圧と貧困、税金と学費のない社会主義模範の国、朝鮮民主主義人民共和国をうち立てたが、それは人民の楽園として世界にさん然と光を放っている。

われわれは世界の偉人である尊敬する金日成主席を東方にさし昇った世界革命の太陽として仰ぐべきである。わたしは主席をいつまでも不滅の光として仰ぐであろう。

インドネシアの作家、記者

一九八〇年 二月

# 金日成主席との栄光の会見

コスタリカ
ホセ・フランシスコ・アギラル・ブルガレーリ

偉大な主体(チュチェ)の太陽がさし昇ったもっともめでたい四月の祝日がきた。

人類の春をもたらした金日成主席の意義深い生誕記念日を迎えて世界の進歩的人民は、不滅の主体思想で織りなされた栄光と勝利の年代を感銘深くふりかえりながら、偉大な思想家・理論家であり、天才的な軍事戦略家である金日成主席にもっとも熱烈なお祝いの挨拶をおくっている。

天も地も広い胸を大きく張ってこの最大の祝日を声高く称えているかのようである。

全世界は主席によせる尽きない敬慕と尊敬の念に燃えている。

地球上のいたるところに人民の祝福と感謝の歌声が高らかに響きわたる四月のよき日を迎えて、わたしは金日成主席にお会いした感激の日々を感無量の思いで回想しながら、この小文をしたためている。

＊　＊　＊

真の革命家はその名を恥ずかしめないためつねに新しい業績をつみ重ねなければならない。
革命家は、一国もしくは一地域全般の闘争を科学的に分析しうる高度の思想的準備と計画を立派に実行していける比類ない展開力、その過程の変化を予見しうるすぐれた英知、各階層の広範な人民大衆を導き、その支持を獲得するに足る高邁な徳性を身につけなければならない。
革命家をもって任じる人々が実践闘争にとりくむやいなや挫折する事例は少なくない。
革命家となるのはそれほど難しいのである。まして、革命の指導者には容易なことでなれるものではない。指導者は革命理論を創始しなければならない。たんに勇敢であるだけでなく、英雄とならなければならない。指導者は普通人の知恵や品性ではなく、人民大衆が敢然と敵に立ち向かえるよう彼らに固い信念を吹きこむ卓越した能力をそなえていなければならない。
それは、指導者が人民大衆をどのように導き、どれほど彼らの信頼をかちえているかによって、革命の勝敗が大きく左右されるからである。
人民大衆は自己の運命の主人である。それゆえすべての問題を自己の利益に合わせて考えなければならない。そのためには自分たちを正しく導く指導者をもたなければならない。
社会発展史における偉大な変革をかえりみるとき、われわれはつねに、変革の担い手である人民大衆とともに、英知と鋭い洞察力、英雄主義、正しい道を切り開く決断力を具備して彼らを導く指導者を見出すことができる。
人類史上には大小の変革がつみ重ねられてきたが、それらをなしとげた人々はいずれも功績者といわなければならない。しかし、限られた見識の所有者と、遠い未来をも見通す眼力をそなえた人とでは、大きな開きがある。
革命運動の場合、自己の目先のことにのみとらわれている人もいれば、真のプロレタリア国際主義を発揮してい

る人もいる。

また、一定の時期にのみ限られた思想と方針しか示せない人もいれば、いつどこででも創造的に適用しうる古典的意義をもつ思想と理論、普遍的な理論と学説を創始する人もいる。このような革命家は、もっとも立派な社会をきずくためにすべてを捧げる偉人である。マルクス、エンゲルス、レーニン、そして金日成主席は、そうした普遍的な理論と学説の創始者である。

普遍的な思想を創始した偉人たちは、その思想にもとづいて人類の歴史を規定したが、それは不変の真理である。偉大な革命家たちは、科学的な思想と、平等、民主主義、自由をめざす新社会の建設へと人類を導く創造的活動とを史上、はじめて一つに結びつけた。彼らは、理論だけではなにもできず、それを実現するための活動が必ずこれにともなわなければならないことを教えている。

彼らは、数世紀もの間社会関係の基本をなしていた搾取と抑圧の鎖から解放された人々を、どのように新しいタイプの人間につくるべきかを示した。

マルクス、エンゲルス、レーニン、そして金日成主席は、自由な新しい世界の創造者として、特権者がなく人間の真の尊厳が守られる先進的な社会をきずくための展望を開いてくれた。人類がこれらの偉人から得たものは実に多い。それゆえ、人類は、彼らに深い敬意を払い、真の独立をめざす人民のたたかいで果たすその役割をたたえ、最高の栄誉を捧げているのである。

人類に貢献している現時代の偉大な指導者の一人は、ほかならぬ朝鮮民主主義人民共和国の金日成主席である。

われわれは、未来社会の創造者である金日成主席と固い握手を交わし、多くの問題について教えを受け、食事を共にする無上の光栄に浴した。これは一生忘れられない出来事である。

# 主席の人柄

わたしは、主席の労作と朝鮮の同志たちが聞かせてくれた言葉から、金日成主席を知るようになった。こうして主席を尊敬し、その革命活動の歴史に驚嘆し、興味深く読んだ諸労作の基調をなす主席の思想に心酔するようになった。

偉大な思想家である金日成主席は、世界革命にはかりしれない貢献をおこなった。

朝鮮人民をつねに勝利に導いている主席はまた、偉大な革命理論家である。

このことは、深遠な思想と理論、観点が賢明な指導をつうじて、実践的にどのように具現されていくかを示す最適の模範となっている。

朝鮮の歴史は、主席が困難を極めた諸問題を正しく解決した数千数万の史実で織りなされている。

主席は十三歳の少年の身で革命の壮途につき、朝鮮人民を勝利ひとすじに導いてきた。

朝鮮人民と金日成主席の勇敢なたたかいによって、日本帝国主義ははじめて屈服した。主席の正しい指導のもとに朝鮮労働党と共和国が創建され、朝鮮人民はアメリカ帝国主義との戦いで偉大な英雄主義を発揮し、史上はじめて彼らを撃破し、現在は、人民の福利をはかる新しい社会主義社会をきずいている。

わたしは主席の諸労作をつうじて、朝鮮人民の歴史を深く理解した。

労作には、革命発展の各時期の要求にこたえて、勝利の道をさし示す極めて賢明な方針がうちだされている。

わたしは、金日成主席こそ歴史を開く指導者の一人であると信じ、尊敬の念をいだくようになった。以来、わたしはなんとかして主席に会えないものかと、日夜思いつづけてきた。これはわたしの希望であるばかりでなく、世界の多くの革命家の念願でもあろう。

一九七五年、われわれは朝鮮を訪れた。

朝鮮の友人は実に親切であった。わたしは朝鮮と呼ばれる地上の楽園がどのようなものであるかを、このことからもうかがい知ることができた。

はるばる地球の反対側から到着したわれわれに、朝鮮の同志は、希望はできるかぎりかなえるつもりであるから、どんなことでも提起してほしいと言った。

わたしは即座に、最大の願いは主席にお目にかかって、われわれの敬慕の念を表わすことだと言った。

そのときわたしは、金日成主席のような方がわたしのためにたとえ短い時間なりと割いてくださるなど、とうてい望めないことだろうと思った。

しかし、主席がたえず工場や農場、各級学校などを現地指導し、労働者、農民、学生たちと会っていること、とりわけ素朴な人々と話し合うことを好まれると知って、ぜひともお目にかかりたくなった。

そしてその希望はついにかなえられたのであった。四月のあるうららかな朝、金日成主席が会ってくださるという思いがけない朗報を案内の人から告げられた。

われわれの感激は筆舌につくせないものであった。そのような光栄にあずかろうとは、全く夢のようでしかなかった。朝鮮を訪れたら金日成主席によせるわれわれのひたむきな崇敬の念を表したいという、切願が実現されることになっただけにわたしは天にものぼらんばかりの気持だった。

車中わたしは、朝鮮人民の偉大な指導者に述べる挨拶の言葉を選択し、忘れないよう口の中で何度もくりかえしてみた。わたしは興奮しながらも、おびただしい要務に忙殺されている主席の接見を求めたのが、度を越した心ないわざのように思われてならなかった。

主席との会見前の出来事をここに全部書くわけにはいかない。ただ、そのときわたしは限りない感激に包まれ、待ちに待っていた荘厳なひとときを過ごしていたと記すにとどめる。

やがて下車し接見場所に案内された一瞬わたしはわが目を疑った。

主席が廊下に出迎えてくださっているのである。主席は慈愛にみちた笑顔で握手を求められた。わたしは用意していた挨拶の言葉も忘れて、主席の手を固く握っていた。

一生にはじめて味わう余りにも大きな感激に、わたしはつい涙ぐんでしまった。

この偉人の手でなされた数々の業績が頭をかすめた。

主席はまさにこの手で労作を執筆して朝鮮人民にもっとも正しい方針を示し、世界人民の解放のための強力な武器を提供したのである。

主席はこの手で朝鮮人民の解放をめざす決戦で引き金を引き、この手で朝鮮民主主義人民共和国憲法を制定し、朝鮮労働党創立の文書を作成した。そしてこの手を高くかざして、アメリカ帝国主義を撃滅する勝利の道を示したのであった。

主席はこの暖かい手で朝鮮人民を幸福な社会の建設に導き、子供たちの頭をなで、労働者と握手し、土地改革を指導し、執筆をおこなって朝鮮人民の進路を示したのである。

固く握り合った手から主席の温情を感じとり、わたしはこみあげる感激を抑えることができなかった。その手の

感触は今も新たな感慨をもってよみがえってくる。

われわれはこの栄光の瞬間をどれほど待ちこがれたことであろうか。

われわれは、書物を通してよく知っていた伝説的英雄であり、英雄的闘争をもって現代のもっとも強大な二つの帝国主義をうち破った天才的戦略家であり、重要な労作を著した偉人金日成主席と親しく握手を交わしたのである。

謙虚で人情にとむ主席は、ご自分の部屋にわれわれを案内し、親切に対してくださった。

金日成主席のおおらかで飾り気のない人柄は、格別親しみをおぼえさせた。

主席にはわれわれを見くだすようなところがみじんもなく、むしろ深い信頼を寄せてくださるのだった。このことからも、わたしは偉人の風格はこうしたささいなところにも表われるものだと、しみじみ思った。わたしはこの点を特に強調したい。主席の暖かい愛情は言葉のうえだけのものでなかった。主席は心からわれわれを客としてもてなしてくださった。

朝鮮人民だけでなく全世界人民の正義の自主偉業を深く理解し、惜しみない支援を送っている素朴で慈愛にみちた偉人を、われわれはますます尊敬するようになった。

訪朝中、この国の人民も主席を敬慕してやまないことを知った。

主席はつねに人民と共にあって、どんな困難や苦痛も人民と分かつ指導者である。

主席は、抗日武装闘争当時、遊撃隊の司令官であると同時に、もっとも勇敢な戦闘員でもあった。

米軍が共和国北半部を侵略したときも戦いの陣頭に立ち、新しい社会づくりでもつねに人民の中にあって苦楽を共にした。

重要な決定を採択し、あるいは国家建設の新しい方針をうちだすとき、主席はそれを机上で考え出すのでなくつ

ねに人民の中に入っていき、彼らと問題を討議している。したがってそれらの方針は具体的な現実に合致し、極めて正確である。

主席が訪れた工場と農場、学校と託児所は数千、数万にのぼっている。だからこそ朝鮮人民は、自分たちを暖かく見守ってくれる敬慕してやまない英明な指導者、素朴で慈しみ深い方と主席をたたえているのである。

これは非常に重要なこととして、強調しなければならない。それは、偉大な主席を朝鮮人民にとって近づきがたい指導者、その頭上に君臨する指導者と考える者も一部ありうるからである。

それとは逆につねに人民と共にいる主席は車を止めて道を行く老婆を乗せてやり、もっとも大切な国事でも討議するように一農場を訪ね数日間も農民と話し合うなど、人民と深いつながりを保っている。そして人民を信頼し、彼らのどんな意見にも耳を傾け、正しい方針を示している素朴で慈しみ深く、賢明な方である。

このように金日成主席は、宮殿にひきこもっている指導者ではなく、人民とともに生活し、自身にゆだねられた絶大な権力も人民の忠僕として彼らの利益のために行使し、人民生活のすべてを熟知している指導者である。

だからこそ主席は、初対面のわれわれをも旧知のように接し、大きな配慮をめぐらしてくださるのであった。

## 主席の思想

われわれは接見室に案内された。

主席ははじめて会ったわれわれに実に気さくに対してくださった。それで、最初は小さくかしこまっていたわた

しもたちまち緊張がほぐれて、われわれは友人だという印象を強くしながらも深い感動をおぼえた。
主席は多くの問題について語られた。
まず朝鮮にかんする問題がとりあげられた。
金日成主席は、分断された祖国を統一することは朝鮮労働党と朝鮮人民の最大の民族的任務であり、もっとも重要な革命課題であると述べられた。
主席は、飢えと貧困に苦しむ南朝鮮人民について深い愛と思いやりをこめて語り、彼らも北半部の兄弟のように共に幸せに暮らせるよう祖国統一の大業を一日でも早めるのが緊要な課題であると強調された。
そして、統一を現代の要求に合わせて平和的に実現するためには、アメリカ帝国主義者の犯罪的な新戦争挑発の策動を阻止すべきである、もしも彼らが平和統一の提案を受け容れず全面戦争をひき起こすならば、朝鮮人民も全面戦争で応える覚悟をもっていると断言した。
つづけて主席は、祖国の統一は平和的に、しかも自主的に実現されるべきであって、これはいかなる外勢の干渉も許せない朝鮮人民の内政問題であり、朝鮮人民自身の問題であることをくわしく説明し、祖国統一をめざす重要な問題の一つは民族の団結をはかることであると言われた。
主席は、祖国の統一のために共和国政府がうち出した数多くの方案にふれた。そして、南朝鮮人民が北半部の豊かな漁場にきて魚をとるのも望ましいことだし、北半部の経済は大量の労働力を必要とするから、南朝鮮の多くの失業者が安価な労働力として日本やドイツなどに売られることなく北半部各地の工場にきて働くのも望ましいことだ、このように南半部の兄弟が北半部の勤労者と同じ状況のもとで働くならば暮らしもよくなれば、全朝鮮人民が力を合わせて無限の天然資源を人民のために開発することもできると語られた。

主席は、社会主義建設で朝鮮人民がおさめた誇らしい成果についても語った。わたしは、主席と人民が一心同体となっていることを強く感じた。また、革命をおし進めるためには、指導者とともに、指導者の思想を支持し、その理論を実践するために熱心に取り組む人民がなければならないことがよく理解できた。

朝鮮には偉大な指導者と偉大な人民、偉大な党があり、明らかにそれが一体となって偉大な業績を積みあげたのである。

主席はついで国際政治情勢について話された。

まずアジア諸国人民のたたかいの特徴について指摘し、祖国統一をめざす朝鮮人民のたたかいは必ず勝利するであろうことを分かりやすく説明してくださった。

主席は、反帝民族解放闘争におけるアフリカ人民の役割を明快に指摘し、彼らは自分たちを支援し革命的に覚醒させてくれることを求めていると強調された。

主席はまた、広範な人民が新しいより進んだ社会への変革を熱望し、そのような必然性が芽生えている複雑なヨーロッパ問題について語られた。

主席は、わがラテンアメリカ人民の闘争について深い理解と極めて正確な見解をいだいておられた。そしてラテンアメリカ問題の専門家のようにチリにおける先のクーデターの過程と当時の出来事について客観的で具体的な分析を加えた。

主席はラテンアメリカ問題に限らず、アフリカ、ヨーロッパおよびアジア問題の専門家でもあった。

主席は、すべての闘争の実態を客観的かつ適確に分析する思想的尺度と、すべてを明快に判断する広い知識をもっている。

わたしが強調したいのはまさにこの点である。

人間のあらゆる行動の原点にはその思想がある。なんらかの具体的な問題にぶつかったとき、人々はその原因および解決方法について考える。創造的な人であるならば熟考を重ね、さまざまな解決策を見出すであろう。

マルクスの唯物論にもとづいて人々はあらゆる社会的出来事を現実に立脚して分析しうるようになった。

ある社会現象の原因を知ろうとするならば、歴史の主体であり社会発展の原動力である人民大衆を中心にすえてそれを深く研究し、現実に依拠して結論を下し、解決方法を見出さなければならない。

金日成主席は、偉大な主体思想を創始された。

それは現時代にいたって世界の人民が手にしたもっとも貴重な思想的武器である。

主体思想は、世界の人民が自主独立をめざしてたたかっている現時代の革命の理論と方法を明らかにした思想体系である。

金日成主席の主体思想は朝鮮で輝かしく具現され、経済、教育、人民生活などすべての分野で立派な実を結んでいる。

主体思想は、人民大衆は革命の主人であり、それゆえ自分の頭で考え、自分の力に依拠しなければならないという極めて明白な真理を教えてくれる。

これらの概念は大きな意義をもち、それは世界の多くの人々が研究し熟読している主席の労作に明快に示されている。

主席は主体思想についてわかりやすく説明してくださった。主席は主体思想を創始し体現しているために、それを具現するうえでも他のものに抜きんでているのだと、わたしは思った。

主席はわれわれとの会見においても、すべてを主体思想によって分析し、主体思想の示す原則にもとづいて話を

すすめられた。
主席の談話はわれわれを大いに啓発し、新しい展望を開いてくれた。当時わたしは主体思想について多くのことを研究し、その原理をかなり理解しているつもりだったが、それを十分に消化していなかったので、物事を判断し分析するさいつねに主体思想を尺度とすることはできなかった。
国際問題にたいする主席の正確な分析と判断、整然とした明確な論理、これらは決しておのずとそなわったものではない。それは、つねに情勢を主体的に分析しているところの当然の帰結である。
主席の教えを受けて以来、われわれの生活には多くの変化が起こった。主席の教えはわれわれに新しい視野を与え、理論と実践を一つに結びつけ革命的実践に移る方途を明らかにしてくれた。
言いかえれば、われわれは、新しい時代を展望し、理論と実践が結びついた革命的実践に移行する方途を明らかにする主体的世界観を確立したのであった。
われわれは理論を理論にとどめず、それを生活に生かさなければならない。また、革命家とはどういう人間であり、革命家はいかに生きるべきかを知るだけでなく、実際に革命家にならなければならない。そして正しい活動方法を理解するにとどまらず、それを実践に移さなければならない。
これは、主席が実践的模範、真の革命家の模範によってわれわれを啓発してくださったその日にわたしが得た最大の教訓であった。
金日成主席は革命家の真の典型であって必要なすべての理論的知識をそなえておられる。
主席は少年時代から社会革命にかんする古典を研究し、のちには主体思想を創始し発展させ、その重要な思想を体系化した数多くの労作を著した。

そして、武器を取ってたたかい、あるいは国家首班として活動する過程で、それらの理論を実践に移したのであった。われわれは主席との会見をとおして、主席は理論と実践を結びつけることによって世界的な実践的模範を示すことができたということを理解した。

われわれは、朝鮮人民の偉大な指導者から受けたそのときの教えをまだ完全に消化してはいない。いまようやく第一歩を踏み出したにすぎないのである。

しかし、われわれはこの偉大な思想を身につけて大きな進歩をとげ、主席の立派な模範にならって真の革命家になることを強く望んでいる。

記憶に深くきざまれつねに新たな感慨を呼びおこす主席の談話からわれわれは、生涯をとおして得たそれまでのすべてのものよりはるかに多くのものを得たと、わたしは信じている。

主席の談話はたんなる談話ではなく、主席の人柄と活動、事物の分析方法をそのまま示すものであった。これはわれわれに深い感銘を残した。数年後の今もわたしは当時を回顧し、主席を革命家のかがみとして仰いでいる。

# 友

その日、われわれは主席と食事を共にする大いなる光栄にあずかった。

そこでは、主席は政治問題には触れず、私的な問題についていろいろと話された。

わたしはこのとき、われわれを親友とみなしていると言われた主席の言葉の真意を悟った。

昔から食事を共にするのは、親交の最大の表現の一つとされている。ところでわれわれはこの日現時代のもっとも偉大な方と食事を共にしたのである。

われわれは主席の暖かい友情を胸熱く感じた。主席は実に気さくで　わたしは、この大きな栄誉がまるで当然のことのような錯覚におちいっていた。

主席はわれわれと向かいあって座り、しきりに食事を勧めてくださった。

よい機会に手厚いもてなしを受けること以上に喜ばしいことはない。

主席はまさにこうした喜びをわれわれに与えてくださったのである。わたしは、言葉のうえではなく、実践的行動によってこの友誼にみちた歓待に報いようという衝動にかられた。

それゆえにわれわれは、現在、決して虚栄心からではなく、大きな誇りをいだいて主席と朝鮮労働党と全朝鮮人民のために情熱的に活動しているのである。

そして世界のどこかで朝鮮の人に会うと、主席のその日の深い配慮を想起し、彼らと親交を結ぶのである。

## 再度の接見

一九七七年、主体思想にかんする国際討論会に参加するため平壌を訪れたわたしは、二度も主席にお会いできる機会に恵まれた。

第一回目は、討論会の全代表とともにお会いした。そのときわれわれは、壮麗でありながらも素朴な趣きをもつ

建物に向かった。盛大な宴会場で主席は、代表の一人ひとりと挨拶を交わされた。
主席が親友、同志として握手してくださった瞬間、わたしは大きな感激に包まれて最初の対面の日のことを思い出した。
われわれは食事に招待され、わたしはまたも主席と同席する特典に浴した。主席は以前と少しも変わっていなかった。
主席は栄光と祝福を一身に集めながらも素朴で謙虚だった。主席は慈愛にみちた語調で話された。
栄えあるこの瞬間、わたしは、かつて朝鮮人民を祖国の独立へと導いた主席が、今日も偉大な業績をつんでおられることを改めて思い起こした。
数日後、主席は特別にわれわれと会ってくださった。
主席は昔も今も変わらぬ笑みをたたえ、当時と同じ愛情をもって、われわれの身辺のことからわが国の問題にいたるまで心を配られるのだった。
われわれは、あのとき主席の教えを受けて以来生活に起きた大きな変化と将来の計画についてお話しした。
わたしは、これらの問題に明確な分析を加える主席の賢明さにいま一度驚嘆し、多くのことを学んだ。そして今後さらに精力的に活動すべき信念を固めた。
われわれは主席とうちとけて語り合った。
主席は実に偉大な方であり、無数の戦闘を勝ちぬいた百戦百勝の英雄であり、驚くべき広い知識をもつ理論家であったが、われわれを親友のように対してくれた。
どこまでも素朴で謙虚な主席は、最初の接見の日と同様、この日も親切にもてなしてくださったのである。
このま心あふれる歓待にこたえるためにもっと積極的に活動し主席に忠実であろうとする決意が胸の奥底から湧くのだった。

# われわれの体験

全世界の人民がわれわれの時代のもっとも偉大な革命家の一人と仰いでいる主席にお会いできたのは、わたしにとって実に意義深い出来事である。

偉大な革命思想と革命的実践、そして素朴、謙譲、ひたすら人民に尽くし、つねに人民大衆とともにありたいと願う心情など、金日成主席から学ぶべきことは実に多い。

世界人民の偉大な指導者の一人として公認されている主席にお会いするのはまたとない光栄である。

わたしは、主席との会見記を書く機会を得たことを大きな喜びとしている。それは、この機会に当時の感激を新たにすることができたからである。

わたしは、この小文が偉大な革命家であり、われわれの親友である偉大な指導者金日成主席への心からなる敬慕のしるしとなるよう願ってやまない。

歳月の流れとともに世界の人々がますます高く称え慕う金日成主席に謁見した栄光の日をわたしは永遠に忘れられない思い出として心に刻み、主体思想の旗を高くかざして一路自主の道を力強く進むであろう。

コスタリカ・サンホセ総合大学教授
ラテンアメリカ主体思想研究所委員長

一九八〇年　四月

# わたしが体験して受けた印象

ネパール
マンジュ・ラトナ・サキヤ

朝鮮記者同盟の親切な招きで、わたしを団長とし妻のサブハ・ルクスミ・サキヤ、ネパール記者協会書記長ニルマル・クマル・アルジャル、記者協会中央委員会委員ゴパル・グルングを団員とするネパールの親善使節は、ビルマ、中国を経て一九七九年六月十二日朝鮮民主主義人民共和国に到着した。

朝鮮に滞在中われわれは多くを体験し、永遠に忘れることのできない印象を受けた。わたしは昨年にもネパール文化代表団の一員として訪朝し、この国の現実に直接触れて強い印象を受けたものである。一年間の二度の訪朝で受けた最大の印象は、朝鮮が早い速度で発展していることである。二度目に訪朝したとき、朝鮮では毎週新しい目標が達成されていると聞き、わたしはそれが真実であることを自分の目で確かめることができた。

金日成主席の卓越した指導のもとに、朝鮮人民が主体(チュチェ)思想を具現してとげている輝かしい発展は、われわれ親善使節に大きな教訓となった。

訪朝中われわれは、金日成主席の故郷万景台を訪れる機会にめぐまれた。われわれは万景台の事績物を見て、主席が先祖のすぐれた闘争精神に励まされ、愛国的で革命的な業績をあげたことを知った。この崇高な万景台を訪れる

人は、誰もが気高い感情につつまれる。それは、ここで現代朝鮮革命の根源と朝鮮人民の進歩の礎がきずかれたからである。

われわれは万景台訪問後、国際親善展覧館を参観した。展覧館には世界各国の国家と政府首脳、著名な人士などからの金日成主席への贈り物が国別に整理されて展示してあった。わたしはネパール陳列室にラストリヤ・パンチャーヤット、ネパール朝鮮友好協会、週刊誌『アルパン』などの名義になる主席への贈り物が展示されているのを見て喜びにたえなかった。

われわれはまた、祖国解放戦争勝利記念館、平壌学生少年宫殿、金星トラクター工場を訪問し、金日成同志労作展示館、平壌地下鉄、金日成総合大学、大城山遊園地、平壌サーカス劇場を参観した。

われわれは清津で金日成主席の接見を受け、大冶金基地金策製鉄所を見て回った。その他多くを見学したが、ここですべてを列挙することはできない。

訪朝中われわれは、各地で朝鮮人民の熱烈な歓迎と歓待を受けた。

朝鮮に滞在中、われわれは祖国ネパールにいるような気がした。わたしは、われわれの訪問が大きな成果をおさめたことに喜びを禁じえなかった。

訪朝中わたしは、記者会見と十分間のテレビ・インタビューをおこなった。

われわれは朝鮮の各地を訪れ、すべての分野のめざましい発展ぶりをじかに見ることができた。

朝鮮は短期間に、国内の需要を自力でみたすようになった。そして現在は、自力更生をめざして大きく躍進した戦後以上の早いテンポで発展している。

朝鮮人民のこうした発展テンポは、勤労者の職業問題を完全に解決した。すべての勤労者は希望と能力にしたが

って職業を選択し、国家はかれらに安定した職場と労働条件を保障している。朝鮮人民は主体の原則を徹底して具現し、すべての人が労働分野で同等の権利をもち、献身的に働いている。朝鮮民主主義人民共和国では勤労者を骨の折れる労働から解放し、肉体労働と精神労働の差をなくす闘争がくりひろげられている。国家は思想革命、技術革命、文化革命を促進し、千里馬(チョンリマ)の精神を高く発揚させ、生産量と労働生産性を高めることに力を傾けている。

朝鮮が主席の卓越した指導のもとに主体思想を具現し、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則を堅持し、千里馬の速度で発展をとげ短期間に世界先進国の隊列に加わったことは広く知られている。朝鮮は主体思想を指導指針にして社会主義工業と現代的農業を発展させた。われわれはまた、国家がすべての分野で人民の生活水準を系統的に高めるため、いかに力を傾注しているかを目のあたりにすることができた。人民の生活水準が系統的に高まったのは、金日成主席の指導のたまものである。わたしは幸福と喜びにあふれる朝鮮人民に会って、これを強く感じた。

朝鮮の子供たちは、近代的な施設を保障されている。老人は国家の配慮を受け女性は家事のあらゆる負担から解放されつつある。朝鮮はまったく搾取のない社会である。これは朝鮮人民のおさめた大きな勝利である。

朝鮮は金日成主席の賢明な指導のもとに、主体思想にもとづいて空前の速度で発展している。

金日成主席は、さし昇る太陽のような方であり、主席の賢明な指導のもとに朝鮮の教育と文学・芸術などすべての分野では革命伝統がりっぱに継承され発展している。

朝鮮は世界最初の無税国となり、教育も無料である。朝鮮は文字通り教育の国である。これらの成果はいずれも、主席の配慮を離れては考えられない。

金日成主席は、党と国家の活動を指導する多忙な時間をさいて、一九七九年六月十九日清津でわれわれを接見し

た。主席がわたしを旧友と呼び、やさしく抱擁してくれたので、わたしは感きわまって胸が熱くなった。
この日はわたしの生涯において永遠に忘れることのできないきわめて重要な日であった。それは主席に会って教えを受けたいという長年の念願がかなえられたからである。
わたしはわれわれの質問に答えてくれた主席に深く感謝している。
わたしが主席に提起した質問は、金日成主義と主体思想、共和国の雄大な第二次七か年計画と朝鮮の統一問題、そしてネパールと朝鮮の友好関係と関連した問題であった。その回答は、週刊誌『アルパン』と『ニュー・ライト』に発表されている。
わたしは金日成主席の懇切な接見が、われわれにとってきわめて意義深い出来事であったことを重ねて強調するものである。われわれは主席がわれわれとの談話で示した気高い感情と配慮を生涯忘れないであろう。わたしは、つねに国と人民の利益を真っ先に考える金日成主席と会見する機会をもったことを光栄に思っている。
わたしは、帝国主義によって分断された祖国の平和的統一が、朝鮮人民のもっとも緊切な問題であることを知った。
金日成主席は、解放直後から国の統一をめざしてたゆみない闘争をくりひろげてきた。朝鮮の統一問題と関連して主席が提示した三大原則と五大方針は、世界に広く知られている。今日国際世論は、金日成主席を支持している。国連総会は、朝鮮の平和的統一方案に全幅的に賛成し、朝鮮民主主義人民共和国人民の正当な立場を支持した。
五千年のあいだ一つの言語、一つの文化をもって結ばれた朝鮮が三十四年間も分断されていることは、世界の人民にとってもきわめて遺憾なことである。南朝鮮駐留外国軍隊の即時撤退は、朝鮮の平和的統一の先決条件である。
朝鮮は単一民族である。決して二つの国に分裂してはならない。朝鮮は一つの民族として統一されなければなら

ない。これについては異論がありえない。それゆえわたしは、朝鮮の統一は外部勢力の干渉を受けることなく、自主的、平和的におこなわれなければならないという金日成主席の祖国統一方案を熱烈に歓迎し支持するものである。

わたしは今度朝鮮民主主義人民共和国を訪問し、朝鮮人民をさらに深く理解することができた。訪朝中わたしは、祖国統一にたいする朝鮮人民の確固とした立場を知ることができた。朝鮮人民は主席の賢明な指導のもとに朝鮮の統一をなし遂げる決意にみちている。

わたしは金日成主席が国の進歩と繁栄、平和的統一のために、万年長寿されることを心から祈願するものである。

最後にわたしは、代表団の名で、われわれを歓待してくれた朝鮮人民に感謝の意を表したい。

ネパール記者協会委員長

一九八〇年　四月

# 太陽にたとえるべき偉大な指導者

シエラレオネ
サム・J・K・メッガー

金日成主席のように偉大な方をいったい、なんと表現すべきであろうか。

それほど偉大な方は太陽にたとえるほかないであろう。

大きな災厄や深刻な危機にさらされるとき、民族の救い主、すぐれた指導者の出現を待望するのは民族のつねである。そうした受難の時期に人民は、勇猛の士にもまして、かれらの前進を大きく励まし力となる指導者を待望するものである。

世界史には、一身をなげうって人民を災難から救い幸せをもたらした多くの偉人の名が記されている。なかには、その哲学をもって数百万の人々の生活を改善した精神的指導者もいれば、ひたむきな努力で民族の災いをとりのぞいた政治、経済の天才もいる。

しかし、傑出した名将、天才的経済学者、英明な政治家、偉大な哲学者のすべての資質をかねそなえた指導者はいなかった。

二十世紀の歴史は、まさにそうした指導者として、朝鮮人民を勝利の道ひとすじに導いている金日成主席（朝鮮

の太陽）を誇っている。
主席は、富裕な家庭の出ではなく、ばらの花におおわれた大路をたんたんと歩んできたのでもない。
一九一二年四月十五日、主席が生まれた当時の朝鮮は、暴虐な日本帝国主義の圧制に大きな災いと苦しみをなめていた。朝鮮人民は日本帝国主義の銃剣のもとにあえぎ、数かぎりない人々が殺されていた。主席が生まれた年を例にとっても、朝鮮人民の検挙件数は五万二千余件にのぼり、無数の犠牲者を出した。
朝鮮人民は日本帝国主義に反対してさまざまなたたかいをくりひろげたが、いずれもむざんにおしつぶされた。独立を叫んでいた多くの人々が戦列からはなれ、日本帝国主義の手先となる者もいた。
しかし、愛国的で革命的な主席の一家は屈することなくたたかった。
父の金亨稷先生は反日民族解放運動のすぐれた指導者であり、母の康盤石女史も革命家で婦人解放運動の闘士であった。
金亨稷先生は、自分が祖国解放のたたかい半ばに倒れれば、息子があとをついでかならず独立を達成しなければならないと語った。それは革命の要求であり、わが子への深い信頼の表れであった。父と母は貧苦にめげず、主席を闘士に育てた。
金亨稷先生は日帝の警察でうけた拷問とひどい凍傷がたたって、三十二歳の若さで世を去ったが、臨終のさい、祖国の自由と独立の偉業を妻の康盤石女史とわが子たちに託した。
金日成主席は父からたえず革命的影響をうけ、父の革命活動を手伝うなかで幼いころから祖国解放の大志をはぐくみ、朝鮮革命にすべてをささげる決意をかためていった。
祖国を愛する父母は世に数知れないであろうが、いささかのためらいもなくわが子を厳しい試練にたちむかわせ

うる父母は、はたしてどれほどおり、年少の身で敢然とその試練をのりこえていける者はまた、どれほどいるだろうか。

金日成主席はわずか十一歳で単身、吹雪をついて百里もの険しい道を踏破した。

十三歳のときふたたび故郷をあとにして中国の東北地方にむかった主席は、つぎのような誓いの言葉を残した。

「おじいさん、おばあさん、どうかお元気でいてください。ぼくはお父さんの志を継いで国をとりもどすまでは、決して帰って来ないつもりです」

二十年後主席は、その誓いどおりに解放した祖国、独立した自由の国、朝鮮に凱旋した。亡き父への誓いは実現した。

朝鮮人民は誰もが、主席が祖国の自由と独立のためにどのように戦い、どのような功績をつんだかをよく知っている。

主席の功績について書かれた本は多いが、おそらくそれらは功績の半ばも伝えていないであろう。もちろんわたしはここで主席の伝記を書くつもりはなく、ただ主席がいかに偉大な指導者であるかを述べてみたいと思っている。

朝鮮人民の歴史において、植民地のきずなから祖国を解放するたたかいは苦しいものであった。しかし国家建設のたたかいはそれ以上に困難をきわめた。

世界史をひもとくとき、多くの国の指導者は自国の人民を自由と独立のたたかいに導くことはできても、国家再建の困難な時期に大衆の信頼を失う例がまれでなかった。かれらは人民の不満を買い克服しがたい挑戦をうけ、結局は人民から見放された。

しかし金日成主席は祖国の自由と独立を達成した鋼鉄の統帥者であるとともに、革命と建設の英才である。

朝鮮人民は、国の再建期ばかりでなく、三年間の戦争で首都平壌をはじめ全国が廃虚となったときも、失望することがなかった。朝鮮人民は主席の天才的な英知と賢明な指導に深い信頼をよせ、そのまわりに団結して困難な再建課題をりっぱになしとげた。

主席の賢明な指導と気高い品性は、新社会建設にとりくんだ人民を励ます偉大な力となった。主席のすぐれた指導のもとに、朝鮮人民は短時日で、ヨーロッパのどの先進国にも劣らない近代国家をきずきあげた。

金日成主席は、おおいなる愛に徹した人情味ゆたかな真の人民の指導者である。

主席は、自身は倹素な生活を送りながらも、人民にはよりよい生活をと心を砕いている。早朝から深夜まで執務し、読書で夜を更かす主席に、いったい、私生活のための時間があるのだろうかという疑問がおこってならない。

わたしは、このように偉大な指導者と会見する栄光に浴した。主席は席上、世界全般の政治・経済問題について明快な解明をおこなった。

主席は、南朝鮮問題にもひろい度量をもってのぞんでいた。

国が二つの地域に分かれて敵対関係にあるとき、他方を訪問した外国人の入国を許さないのはよくあることである。しかし主席は、朝鮮人民の巨大な成果に自信をもっているので、そうした偏狭な態度をとらない。主席は確信にみちた口調でわたしたちに、「南朝鮮にも行ってごらんなさい。比較することができるでしょう」と言われた。

じつに主席は疲れを知らない方である。そのときも、農業上の大きな会議を指導した直後わたしたちと会ってくださったのであるが、相変わらず情熱にあふれていた。

主席の火のような情熱と無限の英知こそ、朝鮮を人民の楽園にかえた力の源である。人民のためにそれほど大きな業績をつんだ方—強固な自立的民族経済を建設し、全般的十一年制義務教育と無料治療制を実施し、税制を全廃

し、繁栄する朝鮮をきずきあげた金日成主席を、人民がかぎりなく敬慕しているのは当然のことである。

主席は、朝鮮人民一人一人の幸せをわがこととしている不世出の愛国者であり、人民の偉大な指導者である。

主席がいかに国務に多忙をきわめているかは、人民もよく知っている。しかし主席は、工場や協同農場にでむいてどうしたら生産を高め、すべての労働者、農民の生活を改善できるかについて、長時間相談する。

主席は、新年には学生少年宮殿で子どもたちと一緒に楽しいひとときをすごす。

以上は、石とあしを原料にして織物を生産する国、米があり余って食糧の心配のない国、乞食やどろぼうのいない幸せな国の話の一端にすぎない。

じつに主席の業績はなににもたとえようがない。主席はたたかう人民が求めるすべてをそなえた偉大な指導者であると、わたしは断言できる。だからこそ、南朝鮮人民はいま、アメリカ帝国主義とかいらい一味のファッショ暴圧のもとでも、民族の太陽である金日成主席の愛につつまれて幸せに暮らせるその日のためにたくましくたたかっているのである。

朝鮮民主主義人民共和国が富める国、栄える国となったのは、ひとえに、金日成主席の賢明な指導のたまものである。

偉大な指導者をいただく朝鮮人民がうらやましい。主席ほど人民から慕われ、敬愛の的となっている方はほかにいない。じつに、金日成主席のような方は世界にまたといないのだ。

シエラレオネ・『ウィオン』紙主筆

一九八〇年　四月

# 大いなる愛に守られて

パキスタン

A・ラヒム

わたしたちは遠からず、金日成主席の生誕七十周年を意義深く迎えることになります。そのよき日を思うにつけ、わたしは主席への限りない敬慕の念にとらわれずにいられません。

偉大な主席に謁見し、その後大いなる愛と配慮に接した幸運児としてわたしは、慈愛にみちた人民の指導者としての主席の偉大さをしのぶ特典にあずかれたことを無上の光栄としています。

金日成主席は、朝鮮人民の偉大な指導者であるばかりでなく、世界人民の偉大な指導者であり、親しい教師であります。

早くも十三歳で祖国解放の大志をいだき、革命の壮途につき、十五年余、苦難の抗日武装闘争をくりひろげて祖国解放の歴史的大業をなしとげた伝説的英雄であり、世界最強を誇るアメリカ帝国主義侵略者を撃破して下り坂に向かわせた百戦百勝の鋼鉄の統帥者であり、わずか十四年間で工業化を完成し、たち後れた貧しい朝鮮を偉大な社会主義強国につくりかえた革命と建設の英才であり、人間を世界でもっとも貴い存在とみなし、社会主義の楽園をきずきあげた慈愛深い人民の指導者であり、世界革命を導き、人類解放の大業に多大な貢献をおこなっている世界

革命のすぐれた指導者である金日成主席に一目でもお会いしたいというのが、わたしの一生の願いでした。
その切願がかなったときの喜びはなににもたとえようがありません。
一九七三年九月、わたしは光栄にも、朝鮮民主主義人民共和国建国二十五周年記念式典に招かれました。わたしがパキスタン朝鮮友好協会代表団団長として、千里馬(チョンリマ)の国朝鮮の首都平壌に着いたのは、九月七日の午後三時ごろだったと思います。記念式典に参加する多くの国の代表団が一緒に到着しました。親善の使節を迎えて、空港はお祭り気分に沸いていました。
愛らしい少女たちが駆けよって香り高い花束を贈ってくれました。主体(チュチェ)の発祥の地であり、自主時代の聖地である主体の祖国朝鮮に第一歩を印した瞬間から、すべてが新しいものに感じられて、興奮を抑えることができませんでした。
車が市内にさしかかったとき、わたしたちは、絵のように美しく清潔な平壌のたたずまいにうっとりとなってしまいました。
広い道路、緑したたる街路樹、近代的な美しい高層建築、青葉が目にしみる公園や遊園地などすべてがわたしたちの心を奪いましたが、市民たちがみな快活できびきびとし親切なことも、深い印象を与えてくれました。
アメリカ帝国主義の爆撃による廃虚の上に、世界でも有数の近代都市を短時日できずいたことは、驚異というほかありません。
平壌に着いた翌日、わたしたちは市内の各所を参観しました。実に有意義な日々がはじまったのです。
ついに栄光の日、九月八日の朝があけました。この日共和国建国二十五周年記念報告会がおこなわれ、主席の謁見が予定されていることを案内員から知らされたわたしは、胸をおどらせてしきりに時計をのぞきこみました。

かれの案内で会場の控え室に着くと、もう多くの国の代表団団長が来ていて、緊張した視線を入口に注いでいました。わたしも身なりをととのえて入口を見守りました。

やがて主席が控え室に姿を見せました。わたしは大きな喜びと激情に全身をゆさぶられる思いでした。主席は満面に明るい微笑を浮かべ、各国代表の丁重な挨拶に手を振って答えました。

（あの方が有名な金日成主席なのだ。主体の偉大な太陽なのだ）

わたしは心にこう叫び、主席に目をこらしながら、人類の永遠の教師であり、解放の救いの星である主席に会えた幸福感と誇りに酔いしれていました。

主席は団長たちの一人ひとりと握手をかわし、遠来の労をねぎらうのでした。主席がわたしの前に立ったとき、わたしは全身がこわばって挨拶もろくにできませんでした。案内員が、パキスタン朝鮮友好協会の書記長だと紹介したような気がします。

主席はわたしの手をかたく握って、長いこと振ってくれました。一生にまたとない栄光の瞬間、わたしは崇厳な感情にうたれました。

やがて記念報告会開催の時刻となり、わたしは光栄にも幹部席に招待されました。

主席が壇上に現れると、場内は割れるような拍手と万歳の声にどよめきました。参加者たちの目は敬慕の情で輝き、万歳の歓呼はいつまでもなりやみませんでした。

金日成主席を指導者に仰ぐ朝鮮人民の高い誇りが、一つの大きなうねりとなってわたしの胸に迫ってくる思いでした。各国代表の表情にも、主席にたいする敬慕の念がありありと浮かんでいました。

主席は、歓呼する人々に座るようしきりに手で制しましたが、万歳の声は高まるばかりでした。

主席は実に慈愛深い人民の指導者です。わたしは、「指導者と人民」という概念の真髄にふれたような感動にひたりながら腰をおろしました。

場内は水をうったように静まりかえりました。

やがて記念報告がはじまりました。わたしは報告を一言も聞きもらすまいと、レシーバーに耳をこらしました。報告者は、主席の賢明な指導のもとに共和国が歩んだ誇らしい道程を概括しました。朝鮮で達成された驚嘆すべき成果は、すべて主席の名と深く結びついていました。

ふと何かの本で読んだノロドム・シアヌーク殿下の言葉が、まざまざと記憶によみがえりました。アジアの卓越した英雄、革命ののろし、新しいアジアの希望、地上の楽園の建設者である金日成主席は、人民に最大の栄光をもたらしているという彼の言葉は、まことに当を得た表現です。

主席にまみえた興奮で、わたしはその夜一向に寝つかれませんでした。思いはいつしか、主席の写真をかかげて、パキスタン朝鮮友好協会を結成し、主席あての祝電を採択した一九六七年六月十三日にさかのぼっていました。

その日、協会の書記長に選ばれたわたしは、大きな誇りをいだいて、主席に導かれる朝鮮民主主義人民共和国との友好関係の強化につくす決意を固めました。わたしは、親善室をきれいにしつらえ、正面に主席の写真をかかげました。

会員や客たちに主席の革命活動歴史の写真を示しながら、説明に時の経つのを忘れたのも、一再ならずありました。しかし当時わたしの知識はきわめて浅いものでした。

わたしは、主席の労作を熱心に読みました。読めば読むほど、その深い思想にひきつけられるのでした。『金日成著作選集』や多くの著書、そして『金日成伝』は、わたしのかけがえのない教師、親友となりました。

それらの本を耽読するうちに、主席の不滅の主体思想と輝かしい革命活動歴史、その偉大さと賢明な指導についてある程度理解を深め、主席にさらに心酔するようになりました。

共和国建国二十周年記念慶祝大会での主席の報告を、まんじりともしないで読み明かしたのが、きのうのことのようなのに、早くも五年の歳月が流れたのです。

夜は大分更けたのに、頭は冴えるばかりでした。

わたしは、建国二十五周年記念の大宴会場で再び主席にお目にかかることができました。この日南浦競技場で青少年学生五万の見事なマスゲームを見物したのち、わたしたちは、はやる心で宴会場にかけつけました。

主席は各国代表団団長と会って談笑しましたが、その言葉は高潔な同志愛と親近感にあふれていました。わたしはおおらかで飾り気がなく、謙虚で気高い主席の人となりにすっかり魅せられてしまいました。

主席は宴会で歴史的な演説をおこないました。そして、まだ感動のさめやらぬ団長たちの一人ひとりと乾杯をかわしました。

わたしたちは、言いしれぬ喜びに包まれて愛情こもる杯をのみほし、心から主席の万年長寿を祈りました。主席の万年長寿は全朝鮮人民の幸せであり、世界人民のひたすらな願いであるのです。

その翌日から朝鮮を去るまで、わたしたちは金星トラクター工場や朝鮮パキスタン友好大城協同農場、南浦や元山の各所を見学し、金剛山にも足をのばしましたが、それはまたとない学習の過程でありました。

アメリカ帝国主義者は停戦後、朝鮮は百年かかっても再起不能だと放言しましたが、その予想を裏切って、朝鮮の建設は驚くべきスピードですすめられていたのです。この偉大な変革の底力となったのは、主席が人民の胸に植えつけた自力更生の精神ではないでしょうか。

わたしたちが訪れた大城協同農場にしても、主席は十数回も現地指導をおこなっています。主席の現地指導の日々と道のりは実にはかりしれないものがあります。

当時の参観でいまも記憶になまなましいのは、万景台の見学です。

万景台は主席が生まれ、幼年時代をすごしたところで、すべての人々の心のふるさととなっています。

万景台は有名な名勝地ですが、わたしたちはまず主席の生家をたずね、解説係りの説明を聞きました。軒の低いわら屋根、赤土の壁、狭い庭をはさんで母屋と向かい合った納屋、質素な家財道具、それらは過去の朝鮮の貧しい農民たちの生活となに一つ変わるところのない、実に粗末なものでした。

父祖の代から愛国的で革命的な家門に生まれた主席は、両親の薫陶を受けて幼いころから革命の大志をはぐくみました。虹を取るのだと言ってやちだもの木に登り、それが叶わぬと、さらに虹を追って万景峰の松の木にまで登ったという説明に、わたしは心をうたれ、後日「虹」という詩を作ったものです。

朝鮮滞在の期間は実に充実した日々でした。ここで受けた歓待は一生忘れることができないでしょう。

わたしは強烈な印象をいだいてパキスタンに戻りました。

〈朝鮮は、金日成主席の不滅の主体思想によって導かれる強力な工業国であり、地上の楽園である。朝鮮はパキスタンの真の友人である。しかし朝鮮はいまなお民族分断の苦しみをなめている。わたしが朝鮮のためにできることはなんだろうか〉わたしは、主席と握手をかわしている写真をのぞきこんでは、よくこう思ったものでした。

こうして思いたったのが、主席の不朽の労作を出版し普及することでした。

『金日成著作選集』の最初のウルドゥー語版が出たときの喜びは、たとえようもなく大きなものでした。読者の大きな反響に力を得たわたしは、わずか数年間に、主席の労作や『金日成伝』を数十万部も出版しました。多くの

読者から感謝の手紙を受けとるたびに、仕事への意欲はいよいよつのるのでした。
ところが数年後、わたしは持病の心臓病が急にこじれて病床にふす身となりました。いろいろと薬を使っても効がなく、容態は重くなるばかりで、わたしは絶望感に襲われていました。
こうしたとき思いがけなくも、主席の救いの手がさしのばされたのです。ある日朝鮮の友人が訪ねてきて、主席が重病のわたしをたいへん気づかい、朝鮮で治療を受けるよう配慮されたと言うではありませんか。わたしは感激の涙にむせばずにいられませんでした。
(主席が身近に呼んでくださるとは…)
わたしは夢みる心地でした。生みの親もこれほどには心を配れないことでしょう。
世間では親心にまさる愛はないと言われていますが、しかしそれをどう主席のあつい恩愛に比べられるでしょうか。
当時のわたしの心情はとても筆舌に尽くせるものでありません。わたしは蘇生の希望に燃えて、ただちに旅装をととのえ、平壌に向かいました。
北京から特別旅客機で平壌に着いたのは、確か一九七七年七月十五日のことです。空港では、数名の医師と看護婦が暖かくわたしを迎えてくれました。平壌ホテルで一夜をすごしたのち南山診療所に入院したわたしは、驚かずにいられませんでした。無名の一外国人のために、一等級の専用室があてがわれ、四人の医師と看護婦が付きそってくれるのです。かれらの誠意には頭がさがるばかりで、病は薄紙をはがすようによくなっていきました。
八月中旬の快晴のある日、明け放たれた窓から漂ってくる庭園の花の香りを胸いっぱい吸いこみながら、わたしは看護婦に言われたとおり薬を飲み、さわやかな気分でまた横になりました。

このときノックの音がし、主治医と一緒に、三人の客が入ってきました。見舞いの方だろうと思ってベッドから身を起こそうとすると、幹部らしい人がそのまま横になっているようにと、ひき止めました。かれらのあとからまた、美しいかごを持って二人の人が入って来ました。

幹部と医師が姿勢を正して、あっけにとられているわたしに、忙しくて見舞いに行けないが了解して欲しいという主席の言葉を伝えるのでした。そして主席は、わたしが早く食欲をとり戻して元気になるようにと、くだものを贈ってくれたのでした。

みずみずしいりんごやなし、すいか、まくわうりなどの詰まったかごの上には、主席の名刺がおかれていました。国事に忙殺されている主席が、わたしのような名もない外国人にこれほど深い配慮を寄せてくださるとは。両親からさえこうした熱い愛情をうけた記憶のないわたしは、あふれる涙を抑えることができませんでした。

人類の歴史は久しいものですが、古今東西のどのページにも、金日成主席のように慈愛にみちた高潔な指導者の名を見出すことはできないでしょう。

わたしは起きあがって、主席の恩情こもる贈り物をなんどもなでさすりました。すると百倍、千倍の力と勇気がわき、すぐにも病気が吹き飛ばせそうでした。

(早く全快してご恩返しをしよう)

わたしはこう心に誓いました。

主席の貴い愛情が心の支えとなったのか、わたしはほどなくして健康をとりもどしました。

主席の恩愛をかみしめ大きな喜びにひたっていたわたしに、またも感激的な知らせがもたらされました。

その日も医師の勧めにしたがって、朝の軽い体操をすませてくつろいでいるところへ、院長が主治医を伴って入

ってきました。かれらは、主席がわたしの全快を知ってこのうえなく喜び、歯も悪いそうだが、ついでに全部金歯を入れてやるように指示されたと言うのです。主席は、わたしが朝鮮とパキスタンの友好関係の発展に尽くしていることをたたえ、このように身に余る配慮をめぐらしてくれたのだそうです。

世の中にこれにまさる恩情がまたとあるでしょうか。重病を無料で治してくれたうえに、歯まで全部入れかえるようとりはからってくれたのです。

親も考え及ばない点にまで心を配られる主席！　わたしは喉に熱いものがこみあげて、主席の写真を仰いだまま口をきくことができませんでした。

わたしは、世の中でもっとも有力な貴い存在は人間であるという偉大な主体思想が具現されている朝鮮の各地を参観しながら、朝鮮で広く愛唱されている歌の意味をはっきりと知りました。

われらの父は金日成元帥
われらの家は党のふところ
われらはみんな兄弟
われら幸せうたう

主席の大いなる愛に守られて生きる朝鮮の人々は、実に幸せな人民です。

かれらは主席の配慮によって無料教育、無料治療をうけ、税金を知らずに豊かな生活を楽しんでいます。

主席のこの深い配慮こそ朝鮮人民の無限の力の源であり、そのすべての成果は主席の愛のたまものにほかならな

いと、わたしは信じて疑いません。
その後歯まで治してもらったわたしは、朝鮮で言われている「六十は青春で、九十が還暦」という言葉どおりすっかり若返り、元気に出歩けるようになりました。
主席の恩愛は、蘇生の喜びをかみしめるわたしの胸に青春の活力と火のような熱情を吹きこんでくれました。
主席の愛は永遠のものです。
わたしと家族が代をついで忠誠をつくしても、主席の恩愛の万分の一も報えないことでしょう。主席のおかげで命をとりとめ、幸せに暮らしているのは、決してわたしだけではないと思います。
もしこの世のもっとも偉大な愛についてたずねるならば、それは金日成主席の愛だと、世界に向かって声高く叫びたいと思います。
主席の愛は太陽の恵みにもたとえられます。太陽の恵みのゆえに万物が生を営むように、主席の愛によって人々は世の中でもっとも有力な貴い存在となり、肉体的生命のみならず政治的生命をも永遠に輝かせているのです。
主席の愛を思うにつけ、わたしは、朝鮮人民と世界の人民が主席を太陽と仰ぎ、限りない敬慕と感謝の念に燃えている理由をはっきりと知ることができます。
主席の大いなる愛をぬきにしては、朝鮮人民の今日の栄誉と幸福が考えられないように、主体思想に学ぶ世界人民の誇らかな人生についても語ることができません。
主席の愛があればこそ、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、ヨーロッパの数多くの人民は主体思想を確信し、金日成主義の旗高く堂々と前進しているのです。実に主席の愛の光が及ぶところでは失った生命もよみがえり、絶望していた人々も新しい希望に燃え、枯木にも芽が吹いて花が返り咲きます。

わたしは、主席の恩愛の一部をここに書き記しただけですが、主席のためにはすべてを捧げてたたかう決意に燃えています。
わたしはこよない忠誠の念をもって、朝鮮人民の偉大な指導者であり、パキスタン人民と世界人民の親しい友である金日成主席の万年長寿をつつしんで祈念するものです。

パキスタン朝鮮友好協会書記長

一九八〇年　七月

# 偉大な主席の懐にいだかれて

ヨルダン
アフマド・アブドル・カリマル・ジュービ

わたしは光栄にも、万民の慈父金日成主席の接見に浴した幸運児の一人である。

このことはわたしの生涯における最大の喜びであるばかりでなく、孫子の代まで語り伝えるべきわが家門の誇りでもある。

＊　＊　＊

今日、進歩的な思想家や政治家、社会活動家、学者、文筆家、芸術家ならなんぴとを問わず、一目なりと金日成主席にお会いしたいと願わない人はいないであろう。

わたしも久しい間そうした願いをもちつづけてきた。

わたしが金日成主席のことを知ったのはかなり以前のことであるが、主席の著作と革命活動歴史に接してからというものは、ひたすら主席を敬慕してやまなかった。

偉大な主体(チュチェ)思想を創始した主席はどのような方であろうか。

この世にそれほど理想的な政治家（いささか通俗的な表現のように思われるが、わが国の言葉にはより適切な表現が見あたらない）、理想的な人民の指導者がまたといようか。

わたしは、金日成主席に魅了された。主席の思想はわたしの全身にしみこんで血となり肉となったし、その英姿はわたしの心に宿って、わたしを教え導いてくれた。

こうしてわたしは火のような忠誠の念をこめて手紙を書き送ったが、望外にも主席は返書を寄せてくださったばかりか、わが家の宝とすべき貴重な贈り物まで寄せてくださったのである。

主席にほんの一目でもお会いしたいというわたしの願いはつのるばかりであった。

それだけに、一九八〇年九月、主体の祖国を訪れて主席の接見をうける機会に恵まれたときの感激と喜びは筆舌に尽くせないものがあった。

主席はすこしも格式ばったところがなく、久しぶりに会う身内のような親しさで、わたしたちに対してくれた。そして平壌で会うことができず、こんなに遠いところまでわざわざ出向いてもらって申し訳ないと、わたしたちの労をねぎらってくれさえした。

当時、主席は朝鮮の祖宗の山、白頭山が近くに望める地方で現地指導をするかたわら、朝鮮労働党第六回大会の報告を執筆していた。

わたしたちは主席に丁重に挨拶し、かつて主席が祖国の解放をめざして抗日闘争をくりひろげた戦跡地にわたしたちを招き多忙な時間を割いてくださったことはこのうえない喜びであり、光栄であると、偽りのない心情を述べた。

主席は、抗日武装闘争にゆかりのある当地にしばしばたずねて来ると言われたが、その瞬間目がキラリと光った。祖国のため、全人類のためにたたかった苦難の半世紀を一瞬振り返ったのだろうか。…

旧知のような親しみをこめて質問もし説明もする主席の話しぶりは、実に率直でこだわりがなかった。しかしその言葉には深い哲学があり、時代を洞察する戦略と戦術があった。

主席は、今日の国際情勢とアジア問題、そしてレバノンをはじめアラブ人民が当面している重要な問題について明快に論じた。

世界の人民が帝国主義に反対し、あらゆる支配と従属をふりきって自主、自立、自衛の道に進むのは現代の基本的趨勢であると断じた主席は、ヨルダン人民も自主性を求めてたたかっているが、それは非常に好ましいことであるとわたしたちを励ましてくれた。そして、アラブ諸国が自主性を堅持するためには、人民大衆をはじめアラブ民族の利益のためにたたかうすべての人々が統一団結しなければならないと強調した。

主席は、いま重要な問題は、制度と信教の違いを越えてすべての人々が団結し、帝国主義に抗して自主性を擁護することである、それで第六回党大会の報告にも反帝自主勢力の団結を強化しようという中間題目を入れる予定であると述べた。

主席のこの言葉は、現代の発展方向を正確に反映したもので、支配と従属のない世界をめざす革命的人民のモットーとすべき重要な指針であると、わたしは確信している。

主席はつづけて、各国が自主性を堅持するのは容易なことではないが、自主性を堅持してはじめて国の独立を守り民族の繁栄と人民の幸福をはかることができ、ひいては人類の理想社会をきずくこともできると語り、主体思想を具現しておさめた朝鮮の成果と経験について分かりやすく説明してくれた。民族幹部問題、農業問題と農民問題、

自立的民族経済建設問題などで朝鮮がおさめた成果と経験は、いずれも第三世界、非同盟諸国など世界の多くの国々で解決を待たれている緊切な問題のカギとなる。

主体思想はこのように、たんなる理念ではなく、同時に行動の指針であり、革命と建設の戦略・戦術であり、実践の教科書である。

だからこそ政治家や学者、創作家もそして労働者や農民もひとしく主体思想を熱烈に支持し、それに学んでいるのである。

周知のように人類の思想史は、人民大衆が自己の運命を切り開く方途を求めてきた歴史であると言えるが、かれらは久しい間正しい道を見出せず、運命にもてあそばれてきた。

しかし、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという主席の主体思想によって、この問題ははじめてみごとに解決されたのである。

金日成主席は、人民大衆が自己の運命の主人になるためには自主的で創造的な立場を堅持しなければならないと、つぎのように述べている。

「主体性を確立するということは、革命と建設にたいし主人らしい態度をとることを意味します。革命と建設の主人は人民大衆であるがゆえに、人民大衆は当然、革命と建設にたいして主人らしい態度をとらなければなりません。主人らしい態度は自主的立場と創造的立場に表現されます」

人民大衆があらゆる支配と従属をふりきって自然と社会の主人となるためには、自主的立場を堅持するとともに無限の創造力をあまさず発揮しなければならない。こうしてはじめて人民大衆は、自然と社会の真の主人として幸福に生きる新しい世界を建設できるのである。

このように、主体思想は客観世界の合法則性を解明するばかりでなく、認識と実践過程で人々の役割を極度に高める問題にも正しい解答を与えている。

主席の偉大な主体思想は、新しい生活づくりにとりくむ数十億人民を励まし、かれらの勝利を保障する不敗の思想的武器である。事実、主体思想は社会発展の巨大な推進力となって、従属と屈辱の鎖を断ち切り民族の独立と社会の繁栄をめざす世界数十億人民の歴史的偉業に確固とした勝利の保障を与えている。

朝鮮を訪れて、わたしは主体思想の正しさと不敗の生命力について確信を強めることができた。

朝鮮は、主体思想の明るい光をもって世界を照らす主体の祖国である。

主席との会見時間はかなり長いものであったが、わたしにはそれが非常に短いものに思われてならなかった。

それにもう時間が終わりかけているのに、まだジューピ一門の祝賀の挨拶を伝えることができないのももどかしかった。

わたしの訪朝が決まったとき、アラブの各地に住むジューピ一門の代表四十数人がわたしの家に集まり、わたしの朝鮮訪問は子孫に語り継ぐべき栄誉であると喜びながら、ぜひとも金日成主席にお会いしてジューピ一門の祝賀の言葉を伝えるようにと言った。

こうした切願を胸に秘めて来たのではあったが、いざとなると、門閥的な観念をもってわが一門の挨拶を伝えるのは現代人の感覚にそぐわぬ旧時代的なことのように思えて、ためらっていたのである。しかし、こだわりのないおおらかな主席になら十分に理解していただけようと思い直したわたしは、遠くアラブの地で主席を慕っているジューピ一門の念願とあわせて、全ヨルダン人民の祝意を伝えた。

主席はこれに謝意を表し、全ヨルダン人民に挨拶の言葉を伝えて欲しいと言った。

主席は最後に、わたしたちヨルダン主体哲学研究グループの活動で指針とすべき貴重な話をしてくれた。
わたしは大きな感激につつまれ、立ちあがって主席に誓った。
「わたしは今後も偉大な主体思想をアラブ世界に普及するために全力を投じ、帝国主義に反対し、自主性を擁護するたたかいに生涯をかけるでありましょう」
謁見後、主席にあたたかく見送られながら車に乗ったわたしは、慈父の膝もとを離れるような寂しさを覚えた。
しかし、いつまで主席の懐にいだかれて甘えてばかりいられようか、そのあつい愛、深い恩情にこたえるためには、主体の戦士としての責務を全うしなければならない。主体の光をもって、人生のオアシスを探し求める人たちに救いの手をさしのべるために、たたかいの持ち場に帰るのだ。……

ヨルダン記者

一九八〇年　九月

# 金日成主席と朝鮮

インド
H・D・マラビア

世界には約二百の国があるが、インフレと失業、不景気、税金のない国は朝鮮民主主義人民共和国だけである。朝鮮民主主義人民共和国では無料義務教育、無料治療制が実施され、すべての施設の使用料もほとんど無料に近い。またこの国では公害現象はどこにも見られない。

朝鮮は世界を襲っているオイルショックやエネルギー危機の影響をまったく受けていない。

一九七九年、第三十五回世界卓球選手権大会を取材するため、平壌を訪れた西ヨーロッパの多くの記者は朝鮮が経済危機に見舞われていると考えたが、経済がきわめて活気をおびているのを目撃した。

金日成主席の主体（チュチェ）の原則に貫かれている独特な経済構造は、この謎に解答を与えている。

一九八〇年一月一日の新年の辞で主席は、朝鮮民主主義人民共和国が一九七九年に工業総生産額が前年に比べて一一五％という高い成長を示し、農業分野では九百万トンの穀物を生産し、輸出額は一九七八年に比べて一・三倍に伸び、人口一人当たりの国民所得は千九百二十ドルに達したと指摘した。

国民所得の急激な成長は、共和国の自立的民族経済の威力と生産潜在力の大きさをよく示している。

金日成主席は、新年の辞でつぎのように述べている。

「全人民が生産と建設に積極的に参加し、労働生産性を絶えず向上させた結果、国民所得が急速に増大しました。昨年、わが国人口一人当たりの国民所得をドルに換算すると千九百二十ドルになります」

人口一人当たり国民所得のこの高い数字は、朝鮮の経済力と人民生活が高い水準にあることを示している。

一九七五年に人口一人当たりの国民所得が千ドルを越して、先進諸国の水準に達した朝鮮が、そのわずか数年後に国民所得を大幅に増大させたのである。

これは人民経済の飛躍的な発展を示すものである。

一九五七年から一九七〇年にかけて、工業は毎年平均一九・一％の高いテンポで成長した。

こうしてすでに一九七〇年に朝鮮民主主義人民共和国は、電力、石炭、鋼鉄、化学肥料、セメントなど主な工業製品の人口一人当たり生産高で先進国の水準に達し、一部の品種はそれを上回った。

六か年計画（一九七一～一九七六年）期間に工業生産は毎年平均一六・三％の伸びを示し、一九七七年の工業生産は一九四六年の百九十六倍に大幅成長した。

現在すすめられている第二次七か年計画（一九七八～一九八四年）は、経済の規模が著しく大きいにもかかわらず、生産の高度の成長とかつてない膨大な建設を予定している。

朝鮮人民が社会主義建設で発揮した高い革命的熱意と創意によって、工業総生産額は第二次七か年計画の初年度にあたる一九七八年に、前年に比べて一七％伸び、一九七九年はその前年に比べてさらに一五％増加した。

国民所得のこのような急速な成長は、生産規模の拡大と生産の急速な伸長、たえざる労働生産性の向上に負うものである。重工業の優先的発展と軽工業、農業の同時発展を経済建設の基本路線としている国は朝鮮のほかにない。

他の国の工業発展史を見れば、一般的に軽工業を先に発展させて資本を蓄積したのちに重工業を建設するか、重工業を優先的に発展させたのちに軽工業を伸ばしている。ところが朝鮮はまったく違った道を歩んだのである。

重工業は経済のもっとも重要な土台である。重工業を優先的に発展させなくては、軽工業と農業の発展も拡大再生産も期待できない。

また軽工業と農業が発展しなくては、人民生活の向上は望めない。そこで朝鮮民主主義人民共和国は重工業の優先的な発展を保障しながら、同時に軽工業と農業を発展させたのである。朝鮮民主主義人民共和国は、重工業のための重工業ではなく軽工業と農業の発展にもっとも効果的に服務する重工業を発展させたのであった。

一九五八年八月、農村と都市で生産関係の社会主義的改造が完成し、全国的に社会主義制度が確立されたが、その当初、ほとんどの人は、技術的改造が先行しなければ、経営形態の改造は不可能だと考えていたので、農業の機械化にさきがけて農業協同化を実施する方針には首をかしげていた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「わが党の方針は、人民経済の技術的改造を実現しうるまでに工業が発展するのを待つべきではなく、社会発展の成熟した要求にそって、まず生産関係の社会主義的改造をなし遂げて生産力を急速に発展させ、とくに技術革命への大道を切り開くことでありました」

朝鮮の農業は発展一路をたどっている。穀物生産量は一九七四年に七百万トン以上、一九七七年に八百五十万トン、一九七九年には九百万トンであった。なお一九八〇年の目標は九百五十万トンである。

朝鮮の農村の変革は驚異的である。それはひとえに金日成主席の賢明な指導のたまものである。

金日成主席はつぎのように述べている。

「土地は重要な生産手段であり、国の経済発展と人民生活にきわめて大きな意義を有する貴重な富であります」

朝鮮では、「貴重な富」である土地をりっぱに保護、管理して農業を急速に発展させている。

金日成主席はまた、つぎのように述べている。

「今日われわれは農業を完全に工業化、現代化する時代に入ったと確信をもって言えます」

一九七九年現在、朝鮮の農村では、平地で耕地百ヘクタール当たり七台、中間部と山間部で六台のトラクターとその他多くの農業機械が稼働している。

解放前、朝鮮の農民は機械を見たことがなかった。たち後れたすきやシャベルが農具のすべてであり、それさえ不足がちであった。ところがいまでは耕うん、除草、田植え、施肥、収穫、脱穀、運搬などの農作業がほとんど機械化され、平地や山間部のすみずみまで総合的機械化が実現されつつある。これが今日の千里馬朝鮮の農村の姿である。

強力な民族経済をもつ朝鮮民主主義人民共和国は、衣食住の問題も自力更生の原則で完全に解決している。全人民の需要を十分にみたす穀物を生産しているので食糧不足はまったく問題にならないのである。

国家が農民から米を一キログラム当たり六十チョンで買い上げ、住民には八チョンで供給している。消費者価格は原価をつぐなう程度にすぎない。

朝鮮では三百五十万人の幼児が託児所と幼稚園で国家と社会の負担で育てられ、五百十万人の学生が人民学校から大学にいたる各級学校で無料教育を受けている。

また、医療施設が全国各地に完備しており、はやくも一九五三年一月初旬から全住民にたいする完全な無料治療制が実施されている。

朝鮮は、一九七四年四月一日に税制を永久に廃止し、世界最初の無税国となった。

高度に発展した社会主義国でも、租税はまだ国家歳入の約一二%を占めている。税制の完全廃止を宣布した国は、朝鮮のほかにはない。朝鮮が「社会主義模範の国」と呼ばれる理由の一つがここにある。

農村を車で通ると、魅惑的な庭園の中を通っているような感じがする。山頂や渓谷には大小の貯水池があり、それらは明るい日ざしを浴びてまばゆく輝いている。銀色に輝く水の流れが山の麓から田野のすみずみに伸びている。明るい陽光、広い田野と樹木の茂みを縫って銀の帯のように伸びた用水路…これらは一つにとけあって美しい景色をなしている。さらに注意ぶかく眺めると、天然湖のような大小の貯水池が用水路によってつながっていることに気がつくであろう。禿山はなく、どの山も樹木でおおわれている。丹精に手入れした段々畑や果樹園、広い田やとうもろこし畑、これらのあいだを碁盤の目のように縦、横に灌漑用水路が走っている。

朝鮮では自然の美をそこなうことなく大自然改造がおこなわれており、わずかな耕地も丹念に手入れされている。緑におおわれた朝鮮の農村は、自然と人間が調和をなしていっそう美しく、のどかに見える。

朝鮮は、金日成主席の先見の明のある老練な指導のもとに、千里馬の速度で発展し、自主、自立、自衛の原則を具現することによって、短い期間に先進諸国と肩を並べる国となった。

主席の指導によって朝鮮は人民生活の全般的向上をはかる重要な措置を講じ人民生活は系統的に向上している。

人間は肉体的生命とともに社会的・政治的生命をもっているが、主体思想は、社会的・政治的生命がより貴重であると教えている。

人間は社会的・政治的生命をもっているために動物とは異なるのであり、人間生活の社会的・政治的性格のゆえに、自主性は人間の生命となるのである。

金日成主席はつぎのように述べている。

「人間にとって自主性は生命であります。人間が社会的に自主性を失うならば、人間とは言えず動物となんら変わるところがありません。社会的存在である人間にとっては、肉体的生命よりも社会的・政治的生命の方が大事であると言えます。たとえ命はつながっていても、社会的に見捨てられ、政治的自主性を失うならば、社会的人間としては屍も同然であります」

人間は自主性をもつ社会的存在であるがゆえに、自主性の要求を実現するたたかいに真の生活を見出し、自己の運命の主人、自然と社会の主人としての地位を占め、自主的で創造的な生活をおこなうことに真の生き甲斐を感じるのである。

社会的・政治的生命は、人間が革命と建設の主人となってはじめて保たれ、社会と人民の利益のためにたたかう過程に強固なものとなる。

朝鮮はすばらしい発展をとげ、人民は、自分たちの幸福が主席によってもたらされたものであることをよく知っている。

主席は朝鮮人民から深く敬愛されている。欧米帝国主義の一部の出版物は、朝鮮を独裁国家として中傷している。かれらは主席の徳性と英知についてはなにも知らないのである。主席にたいする人民大衆の尊敬は、抑圧や強要によるものではない。それはきわめて自然なものである。

わたしには朝鮮の人たちと一緒に記録映画を見る機会が何度かあったが、主席が人民とともにいるシーンが現れると、彼らは熱狂的に拍手し、涙を流す人さえいた。他律的に敬愛の念をいだかせることは不可能である。

朝鮮人民は主席を心から尊敬し、主席に感謝している。こうしたことからも、かれらがどんなに自分の指導者を

尊敬し、その教えと方針を信頼し支持しているかをはっきりと知ることができる。

アメリカ軍の空爆ですべてが破壊された困難な戦後、主席は人民になによりも自力で（主体思想にもとづいて）国を復興するよう呼びかけた。このように主席は国が難局に直面するたびに適切な対策を講じ、人民に難関を乗り越える方途を示した。

主席の指導の賢明さは、社会主義制度が社会の主人である人民の幸せのために全的に服務していることに現れている。共和国北半部の人民は、主席を偉大な指導者と呼んでいる。

今日世界、とくにアジア、アフリカ、ラテンアメリカの発展途上国人民は主席に深い尊敬を寄せている。なぜなら、かれらは、主席の主体哲学と諸般の民主的施策に励まされ、それを新社会建設の指針としているからである。

主席の指導と品格に現れるこうした理論と実践の統一は、ほかにはまったく例をみないものである。

たとえば、主席の社会主義農村テーゼは書斎にとじこもって書かれたものではない。主席はもっとも困難な抗日革命闘争を指導し、きびしいたたかいの中で主体思想を創始した。主席は人民の中に深く入ってかれらに学ぶ高邁な品性をそなえている。主席はきのうは全国農業協同組合大会を指導したかと思うと、きょうは農村に入って農民たちと寝食をともにし、農家の庭で農民たちと語りあいながらかれらの意見や希望を慎重に聞き、かれらの隘路と農業経営の実態をつぶさに調べ、分析している。青山協同農場に十五日間も泊りこんで指導したこともある。

わたしは朝鮮で自発的に、誠実に働く喜びと幸せにみちた人民を見た。それは実に感動的であった。すべての農村に電気が入り、近代的な便益サービス施設がそなわっている。かつて雇農や小作農として苦役と飢餓にあえいでいた農民が今日ではラジオやテレビで余暇を楽しんでいる。

どの農場にも医師や看護婦がおり、ベッドをもつ病院がある。協同農場の幼稚園は驚くほど清潔で、かわいい子

供たちが資格をもつ教養員に見守られてすくすく育っている。子供たちの幸せな姿は、訪問客の心をとらえ、立ち去りがたい気持をいだかせる。

全国をくまなく現地指導している主席の指導の賢明さと朝鮮の驚くべき成果に感動したわたしは、ぜひとも主席に会って敬意を表したかった。

わたしの願いはついにかなえられた。主席は党と国家を指導するその多忙な時間をさいて、わたしに会ってくれたのである。

わたしはある建物に案内され、ついで別の庁舎のエレベーターの人となった。ところがエレベーターを降りると、思いがけなくそこに主席が立っていたのである。主席はにこやかな笑みをたたえてわたしを迎え、接見室に案内してくれた。わたしは主席の謙虚で慇懃な人柄にすっかり感動した。席について二分はたったろうか、わたしはすっかりうちとけて、親しい友人と語りあっているような気分になっていた。主席は口もとに微笑を絶やさず、わたしが不自由な思いをしてはいないか、要求したいことがあったらなんでもよいから遠慮せず話してほしいと言うのであった。

わたしは、朝鮮の友人の歓待を受けており、各地の農村を訪問して希望を十分にかなえたと答えた。そして主席の賢明な指導のもとに、朝鮮の農村が地上の楽園に変わり、朝鮮人民は主席に絶大な敬慕の念をいだいていることを知ったと語った。

主席との談話はおよそ一時間もつづいたが、その間わたしは主席の言葉に現れない思いやりを強く感じた。主席は、格式ばらない誠実な方であった。

朝鮮と世界の人民を崇高な自主偉業へと賢明に導く主席、謙虚で人間味にとんだ主席にたいするわたしの敬慕の

念はつのるばかりであった。
わたしは以前から農民問題、農業問題に大きな関心を寄せていた。農民問題は、長年帝国主義者の抑圧を受けてきた新興独立諸国にとって重要な問題である。
わたしは主席に、朝鮮農民のすぐれた経験と農業の発展ぶりについて心から賛辞を呈した。独立後三十二年が経過したいまなお勤労農民の問題がまったく解決されていないインドの現状を思うと、感動をおさえることができなかったのである。
主席は私の話を喜んで聞いてくれた。わたしはこのうえなく幸せであった。
主席は朝鮮のすべての分野について熟知しているようで、具体的な数字をあげながら、いろいろと説明してくれた。解放前農家戸数の四％に当たる地主が総耕地面積の五〇％以上を占めていたと指摘した。農村人口の八〇％は土地をもたないか、少ししかもたない農民であった。小作料はきわめて高く、そのうえ地主はさまざまな名目でかれらを苛酷に収奪した。
朝鮮の土地改革に関心を寄せていたわたしは、重要な土地改革が朝鮮のように速やかに徹底しておこなわれた国はないと語った。
わたしはまた、主席の有名な社会主義農村問題にかんするテーゼが、世界、とくに発展途上国の農村問題解決に与えている影響について語り、朝鮮で農業の社会主義的改造がきわめて短い期間に順調に実現したことについて賛辞を呈した。
主席の高邁な品性の一つは、大きな忍耐力と確固とした自信である。
主席は、わたしの話を聞き終えると確信にみちた口調で、農業の社会主義的改造が実現した今日、労働生産性の

向上が重要な課題となっていると言い、農業の化学化、機械化について語るのであったが、その記憶力は驚くばかりであった。トラクターの稼働台数や今後の計画、目標など、説明は詳細をきわめ、まさに偉大な指導者ならではとの感を禁じえなかった。

主席は農村の病院数までそらんじていた。これからもわたしは、主席がどれほど農民を深く愛し、勤労者の幸せを願っているかをはっきりと知ることができた。

ついで、わたしは発展途上国人民の心をとらえている、主席の偉大な主体思想について語った。

主席は、朝鮮革命は朝鮮の共産主義者と人民の第一義的な課題であり、もっぱら朝鮮人民自身の創意と労力、知恵によって遂行されるべきである、主体の原則を確立できるかどうかは基本的な問題であり、それによって朝鮮革命の成果と朝鮮民族の将来が左右されると語った。

わたしはぶしつけだとは思ったが、主体思想にもとづく朝鮮の全般的発展について、すでに一九二六年に展望していたのかとたずねた。

主席はちょっと考えてから、生活は一つの発展過程であり、理念と思想は生活の体験が増えるにつれて発展するものであると答えた。

しかし主席は、革命活動の初期すでに、朝鮮人民がその目的を達成するためには自力に依拠すべきであり、そうしてこそ勝利することができ、他の尊敬をうけることができると確信していたのである。

主席はきっぱりとした口調で、朝鮮人民はだれにも追従するつもりはなく、またけっして追従しないであろうと言った。そこには、他への依存心はつねに好ましくない結果をもたらすという確信がこもっていた。

主席との忘れがたい会見をとおして、わたしは人民の創造力にたいする主席の不動の信念にあらためて感嘆した。

主席が訪問した工場、農場、学校、託児所は数かぎりなく多い。主席が現地を指導し工場や田畑で勤労者と親しく語りあっていることは、この国のどこででも耳にする話題であり、それは歌のテーマにまでなっている。戦いには百戦百勝し、どのような事業や計画も必ずりっぱにやりとげる主席を、朝鮮人民が賢明な指導者として敬愛するのはきわめて当然なことである。

わたしは接見時間が長びくにつれ、国務に多忙な主席からあまりにも多くの貴重な時間を奪っているような気がして落ち着かなかった。鋭い洞察力をもっている主席は、すぐその気持を察したらしく、わたしに煙草をすすめ、接待の人にお茶を頼んだ。それでわたしはすっかりくつろいだ気分になった。

それはわたしにとって生涯忘れることのできない光栄であった。国家首班である主席の謙虚さにはただただ感動するほかなかった。とくに強い印象を受けたのは、還暦が過ぎた主席が若く精力的で、情熱にあふれていることであった。またいつも微笑をたたえ、親切で明朗であった。

わたしは、朝鮮のいたるところで、人民にたいする主席の深い愛を感じとることができた。そのよい例は、共和国の首都平壌である。停戦後三十年足らずで、平壌は広い清潔な街路、高層住宅、朝鮮式大建築物、公園、遊園地をもつ近代都市に変わったのである。平壌は市民一人当たりの緑地面積で世界第一位を占めている。

これらの驚異的な成果は、朝鮮人民の信望を一身に集めている金日成主席の賢明な指導の結果である。勤労者たちは、主席の教えを、高度の熱意をもって実行している。

人民生活の基本問題は完全に解決され、米や生活必需品が十分にゆきわたっている。

わたしの関心をひいたのは、工業と農業のめざましい発展にもまして、子供の社会的保護と教育が驚くほど充実していることである。

平壌学生少年宮殿の課外教育はそのよい例で、わたしに深い感銘を与えた。

朝鮮で社会主義を建設している労働者、農民をはじめ勤労大衆は、主席をかぎりなく敬慕している。主席は、南朝鮮人民にも希望と鼓舞を与えている。

南朝鮮の一労働者はつぎのように語っている。

「金日成将軍は、抑圧されさげすまれている人民に真の生活と幸せを与える人民の太陽である。将軍は、主体の新時代を切り開いた革命のすぐれた指導者であり、人類解放の救いの星である。金日成将軍を指導者にあおいでいることは、わが民族の大きな幸せである。われわれはいま暗黒の中で踏みにじられているが、金日成将軍の指導のもとに幸せに暮らせる日がかならず到来するであろう。

わたしはこの暗黒の地で生活難にたえがたい苦痛を感じるたびに、将軍の崇高な姿を心に描いている。そうすれば気持がなごみ新たな勇気がわいてくる」

朝鮮人民のもっとも切実な念願は、帝国主義者によって分裂された祖国を平和的に統一することである。主席は、祖国の分裂直後から朝鮮の統一のためにたゆみない努力を重ねてきた。祖国統一の三大原則と五大方針はすでに、世界に広く知られており、国際世論は、主席の提案を支持している。国連総会は朝鮮の平和的統一をめざすこの提案を全幅的に支持し、朝鮮人民の正しい立場を支持する世論をもりあげている。

五千年の文化と固有な言語をもつ朝鮮が三十五年間も分裂状態にあることは、全世界人民の大きな関心事となっている。朝鮮の平和的統一のためにはなによりも、南朝鮮駐屯の外国軍隊がただちに撤退しなければならない。

朝鮮は一つであり、決して二つに分裂してはならない。朝鮮は一つの民族、一つの文化をもつ国として統一されなければならない。これについては二つの見解がありえない。朝鮮の統一は、外部勢力の干渉を受けることなく平

和的、民主主義的に実現されなければならない。
世界の人類が、朝鮮の平和的統一をめざす朝鮮人民のたたかいを支持している。数多くの国際会議で世界各国の代表は、外国軍隊が核兵器を含む戦闘装備をまとめて南朝鮮から撤退することを要求している。
世界は、二十七年間も存在してきた停戦協定を平和協定に切りかえ、朝鮮の統一が外国の干渉を受けることなく南北朝鮮人民の会談によって実現されることを要求している。
平和と自由を愛する世界のすべての善良な人々は、朝鮮人民と全人類の幸せのために金日成主席の万年長寿を願っている。われわれは、主席の指導のもとに朝鮮人民の正義の大業が必ず実現されるものと確信する。
主席はつねに人民とともにあり、人民を信頼し、人民の声に耳を傾ける謙虚で、人間味豊かな指導者である。
金日成主席の英知は、つねに正しい政策を生んでいる。主席はぜいたくに暮らす指導者ではない。主席は人民とともに生き、かれらの忠僕としてかれらの幸せのために生涯を捧げる、そのような人民の指導者である。

全インド朝鮮友好協会副会長

一九八〇年　十月

# 世界にあまねく英名

バングラデシュ
サムスル・アラム

わたしは世界に英名をはせている現代革命の偉大な指導者金日成主席にかなり以前から深い敬愛の念をいだいていた。

そんなわけで、主体(チュチェ)思想国際討論会準備委員会の招請状を受け取ったときのわたしの興奮と感激は筆舌につくしがたいものがあった。カジ・ザファル・アーメド団長とわたし、この二人のわが代表団が、主体思想平壌国際討論会に参加するためダッカを出発したのは一九七七年九月六日であった。

機上、主席とゆかりの深い鴨緑江の名を耳にしたわたしは、思わず体を乗り出した。

鴨緑江は、朝鮮が日本帝国主義の植民地支配下にあった当時、主席が祖国の解放を迎えるまでは再び帰るまいと固く決心して渡った由緒の深い川である。

主席が鴨緑江を渡ったのは十三歳のときであった。そのときから祖国解放の長い苦渋にみちたたたかいがはじまるのである。鴨緑江は、主席の名とともに革命闘争史跡地として永遠にその名を輝かすであろう。

飛行機が平壌に着陸したとき空には雲が垂れこめ、小雨が降っていた。われわれは普通江ホテルに宿をと

った。

解放前の普通江には朝鮮人民の苦難の歴史が秘められている。それはバングラデシュの荒れはてたパドマ川やチスタ川と同様、人民の怨嗟の的となっていた。

しかし、日本帝国主義の植民地支配から解放された朝鮮の労働者、農民は、主席の発起によってこの禍の川を征服した。

わたしは、朝鮮の老技師から、主席が普通江改修工事の先頭に立って真っ先にシャベルをとり、現地指導をおこなったこと、これに励まされた朝鮮人民が、山をうがって川の流れを変え、堤防をきずく膨大な工事をわずか五十五日間で完工したことを聞いた。こうして長い間、沿岸の住民を苦しめ絶望に陥れた悲哀の川普通江が、かれらの喜びと幸せを謳歌する楽園の川に変わったのである。

わたしは、人民の労働によって奇跡的に立ち上がった勤労者の楽園の都市、平壌の雄大な姿とその繁栄ぶりに驚嘆の目を見張った。平壌は廃虚のうえに再建されたのである。一九五〇年から一九五三年にいたるアメリカ帝国主義の空襲で都市は焼け野原と化し、その惨状を語りつぐ証でもあるかのように一軒の建物がぽつんと残ったにすぎなかった。しかし英雄的な朝鮮人民は、主席の賢明な指導のもとにその廃虚のうえに世界屈指の近代都市を建設したのである。

主席の賢明な指導のもとに朝鮮民主主義人民共和国は、経済建設を力強くおし進め、きわめて短い期間に植民地農業国から社会主義工業・農業国へ、ついで社会主義工業国へと飛躍的な発展を遂げ、その威力を強めている。

わたしは万寿台の丘に建てられた主席の荘厳な銅像と朝鮮革命博物館を大きな関心をもって参観した。また牡丹

峰の麓に高くそびえる、朝鮮人民の英雄的な気概とめざましい飛躍ぶりを象徴する千里馬(チョンリマ)銅像も見た。

平壌の街路は広く清潔で、都市のたたずまいは整然として美しい。この点では西方のどの近代都市も平壌に遠く及ばない。とくに印象的だったのは、資本主義国の首都に見られる「豪華街」もなければ、暗黒と犯罪の街や、資本家階級の腐敗したぜいたくな生活とは対照的な貧民街が見あたらないことである。資本主義社会の都市とはまったく異質的な現象である。

社会主義国家である朝鮮民主主義人民共和国は、国家が労働者、農民をはじめ全勤労者の物質・文化生活に責任を負っているため、すべての人が衣食住や子女教育、治療の心配がなく幸せに暮らしている。平壌ばかりでなくどの都市も建築美が自然の美とよく調和し、カラフルな身なりの子どもたちでにぎわっている。

わたしは朝鮮を訪問して、全世界が主体朝鮮の指導を求めている理由がよくわかった。

それは、朝鮮が主席によって創始された主体思想の祖国として自主性の新しい時代に光を放ち、世界の進歩的人民に明るい未来を約束し、勝利の信念と勇気を与えているためである。

伝説的な英雄であり、世界のもっとも偉大な指導者である金日成主席は、永遠に人民の尊敬を受けるであろう。なぜならば、主席の指導によって朝鮮は、世界の革命的人民に勝利の信念を与える不抜の要塞となり、すべての人を暗黒と不幸から明るい未来へと導く燈台となっているからである。主席に一日も早くお目にかかりたいというわたしの気持は日に日につのるばかりであった。

わたしのこの願いはついにかなえられた。討論会初日の午後の会議がはやめに終わり、われわれは錦繡山議事堂に案内されたのであったが、その日はわたしにとって生涯忘れることのできない日となった。われわれ国際討論会

参加者はここで主席の接見を受けたのである。主席が姿を現したとき、われわれは一斉に立ち上がって主席を熱烈に歓迎した。

主席は満面に微笑をたたえてわれわれに近づき、一人ひとりと握手をかわした。われわれは心からの挨拶を述べた。つつしんで主席の万年長寿を祈り、感激した多くの代表が主席をあつく抱擁した。その夜、錦繍山議事堂で、国際討論会参加者のための盛大な歓迎宴が催された。宴会に参席した主席は、代表たちと記念写真をとった。宴会の席上、主席は、自主路線は科学的にも実践的にもその正しさが証明された有力な路線であり、それは、世界数十億人民の心をとらえ、りっぱな成果をもたらしていると述べたが、この言葉はいまもわたしの胸にあざやかに刻みつけられている。

わたしは、偉大な指導者であり、哲学家である主席の言葉に熱心に耳を傾け、その深い意味を理解しようと努めた。わたしは、社会主義革命と社会主義建設の問題において、主席と他の思想家の思想上の根本的な相違点を発見した。

従来の思想家、哲学家は、人文科学的理解の域にとどまり、生産関係一面のみを強調した。ところが主席は、人間があらゆるものの主人でありすべてを決定するという新しい哲学的原理にもとづいて、全一的に体系化された主体思想を創始した。わたしの理解するところによれば、主体思想が主張する人間とは、自主性と創造性を尊重する人間を意味する。革命と建設の主人は人民大衆である。一言でいって、すべてを人民大衆に服務させることが主体思想の要求である。

わたしは、主席の話を聞いて、主体思想がすべての問題を自主性と創造性の立場に立ち主人らしい態度で解決することを要求するということをはっきりと知った。それがゆえに、人類史は主席の不滅の主体思想をもっとも傑出

した思想としてたたえ、それを金日成主義と宣言したのである。
金日成主席はつぎのように述べている。
「主体性を確立するということは、一言でいって自国の革命と建設にたいして主人としての態度をとるということであります。これは他への依頼心を捨てて、自分の頭で考え、自分の力を信じ、自力更生の革命精神を発揮して、自分の問題はあくまで自分自身が責任をもって解決していく自主的な立場を堅持することを意味し、また教条主義に反対し、マルクス・レーニン主義の一般的原理と他国の経験を、自国の歴史的条件と民族的特性にあうように適用していく創造的な立場を堅持することを意味します」
わたしは、これが本質上、主体の世界観の根本をなし、朝鮮民主主義人民共和国の力の源泉となっているばかりでなく、帝国主義、植民地主義、反動支配のきずなを断ち切るためにたたかっている、各国人民の英雄的な革命闘争を大きく鼓舞していると考える。
わたしは、全朝鮮人民の宿願である祖国の統一を実現することなくしては、朝鮮革命の完全な勝利はありえないということを確信している。
主席は長年、朝鮮の自主的平和統一のために惜しみない努力を払っている。主席は、祖国統一の三大原則と五大方針にもとづいて、朝鮮問題を完全に解決する歴史的提案をおこなった。こんにち国際世論は、これらの提案を全幅的に支持しており、国連も朝鮮民主主義人民共和国の公明正大な立場を支持する決議を採択した。しかし朝鮮の南半部を占領しているアメリカ帝国主義の侵略策動と「二つの朝鮮」政策によって、朝鮮人民はいまなお国土が分断され民族分裂の苦痛をなめている。
しかし、わたしは、勇敢な朝鮮人民が金日成主席の精力的な指導のもとに、世界の進歩的人民と力を合わせて帝

国主義、分裂主義者のこれらの策動を粉砕し、朝鮮の統一をめざすたたかいに必ず勝利を収めることを確信している。いかなる力もこれを阻むことはできないのである。

バングラデシュ・『ナヤ・ユグ』紙主筆

一九八〇年　十月

# 主席によって示された主体の原則

フランス
ロベール・オペティ

一九七七年の春、朝鮮の自主的平和統一を支持するフランス行動委員会代表団の一員として、はじめて朝鮮を訪問したわたしは、「百聞は一見にしかず」という格言がいかに正鵠を得た言葉であるかを知った。

わたしは二週間にわたり平壌、元山、金剛山、板門店などで朝鮮の現実に接した。わたしはそこで、本で読んだり人から聞いたことよりもはるかに多くのことを理解することができた。わたしは、いたるところで「錦繡江山」と言われる朝鮮の自然の美しさと資源の豊かさを知り、新たな成果が達成されているのを見た。

わたしは勤勉で芸術的で礼儀正しい朝鮮人民にたいする理解を日々に深めることができた。わたしは、各地で朝鮮人民の努力の結実を目撃し、かれらが敵と勇敢に戦った感激的な話を聞いた。そして祖国の不当な分裂が、朝鮮人民にどれほど大きな苦痛を与えているのかを改めて痛感した。

わが代表団は一九七七年五月八日、金日成主席の接見をうける光栄に浴した。席上主席は、祖国を統一し単一民族の特性をとりもどすことがきわめて緊切であると強調した。

帰仏後わたしは、朝鮮の過去を深く知るため朝鮮史の研究に熱中した。

翌一九七八年わたしは再び朝鮮を訪問し、共和国創建三十周年の盛大な記念行事に参加する機会にめぐまれた。さらに朝鮮の学者や考古学者、歴史学者たちから朝鮮研究に必要な援助を受け、現在の成果についてもいろいろな知識を得ることができた。

平壌、開城、万景台など二度目の訪問を通じて、わたしはまた親しい友人の国にやって来たという感を強くした。この間わたしは、いくつかの名勝、旧跡を参観した。それらの旧跡は、朝鮮文化がきわめて長い歴史をもっていることを物語っていた。わたしは歴史的遺物が大事に保存されているりっぱな博物館を訪問して、そのことを確認することができた。

雪におおわれた雄大な白頭山のスロープで、鴨緑江の岸辺の普天堡や黄海南道の信川で、朝鮮の愛国者と人民の血が流された抗日闘争や祖国解放戦争の時期のその他多くの戦跡地と史跡地で、主体(チュチェ)の原則を踏まえ祖国の独立をかちとった朝鮮人民の不屈の闘志を読みとることができた。

抗日革命闘争の初期から主席は、主体の原則を貫くよう朝鮮人民を教え導いた。

主体の原則に導かれて朝鮮の勤労者は、もっとも困難なときにも屈辱と災厄、破滅にうちかつことができた。朝鮮人民のこうした闘志と勇気は、都市と農村、田畑や果樹園、工場や協同農場などのどこででも感じとることができた。飛躍的に増加する重工業・農業・軽工業製品、自然改造によって建設された灌漑用水路や人造湖、段々畑は、朝鮮人民の闘志と勇気をれきれきと示していた。それはまた、総合大学をはじめ各級学校で、学生少年宮殿や劇場で、マスゲームや各種の芸術公演でも感じることができた。一言で言って、新社会建設にとりくんでいる朝鮮人民のすべての活動からそれを感じとることができた。

わたしはとくに、青年がゆきとどいた配慮につつまれて活動し生活している姿に感動した。青年の活動力は人民

の生命力の現れである。

全人民のたゆまぬ労働によって朝鮮は復興した。

廃虚と化した国の再建をめざして二十五年ものあいだすべての部門で遂行された膨大な建設事業、自主性を堅持し国際的連帯を尊重しつつ朝鮮の固有な伝統と利益に合わせて国を発展させている原則的な立場、すべての分野を等しく発展させている実態、これらのことにわたしは深い感動をおぼえた。それらは人民大衆の志向を反映し自分の運命を自分自身の力で切り開くことを願う革命的人民にとって貴重な模範である。

不当に分断された祖国を統一し、全国的範囲で国の自主権を確立することは、朝鮮人民の最大の念願である。このことのために全朝鮮人民の政治闘争が意義をもち、自力によって経済を発展させ、生活条件を改善する北半部人民のたたかいはさらに誇らしいものとなり、その意義を深めているのである。

未来は朝鮮人民のものである。わたしは、朝鮮人民が自主、平和統一、民族的大団結の原則を踏まえて統一を実現するよう心から願うものである。

単一民族として悠久な輝かしい歴史をもつ勇敢な朝鮮人民は、必ず統一を実現するであろう。

フランス・ド・ゴール主義者同盟政治局委員兼国際部長

一九八〇年　十月

# 主体の祖国

ペルー
ビルヒニア・バルガス・バレンテ

わたしは少年時代から朝鮮についていろいろのことを聞いていた。
長いあいだ日本帝国主義に支配され、その後国土の半分をアメリカ帝国主義にじゅうりんされた朝鮮人民は、二つの強大な帝国主義者と戦って勝利した。
朝鮮がこれらの戦いに勝利した原因は、国の独立と自由をめざし英雄的に戦った不屈の人民と、人民の悲願を体現し、かれらを輝かしい勝利に導いた偉大な指導者がいたからである。
少年のころからマルクス主義を熱心に学び、それを自国に創造的に適用した主席、二十歳のときに人民的な反日遊撃隊を組織し、後日それを朝鮮人民軍に発展させた主席、人民の指導者として二十年のあいだ英雄的な革命闘争をくりひろげ、ついに日本帝国主義侵略者を駆逐して国を解放した主席、その数年後には、朝鮮分裂の元凶アメリカ帝国主義侵略者と三年間の血戦をくりひろげて勝利した主席、そして破壊された国を復興し社会主義工業強国に変えた主席。わたしが少年時代から伝説的な指導者として敬慕してきた金日成主席は、そのような方であった。

## 朝鮮で受けたもっとも強い印象

朝鮮ではすべての人が飢えや貧困、搾取を知らず幸せに暮らしている。

このような初印象は日がたつにつれて深まるばかりであった。実際、朝鮮のどこへ行っても植民地支配時代の痕跡はまったく見られず、すべての人が自分自身と集団のために、万人の幸福のために働くことに生き甲斐を求め、その気風は国のすみずみにみちあふれている。

訪朝中もっとも楽しく、もっとも強い印象を残したのは、金日成主席との会見であった。

主席にたいする朝鮮人民の敬慕の念は驚くばかりである。

革命闘争でおさめたすべての勝利の歴史、人民の誇りにみちた生活は、主席の思想と指導をはなれては想像すらできない。

革命と建設が自分自身のためのものであることを自覚している人民は、それに全力を投じ、すべての困難を克服してきた。

しかしそれには、主席の闘争と労苦、そして指導が決定的な役割を果たしていることを知るべきである。だからこそわれわれは、主席との会見を熱望したのである。

ところでわたしは、主席がそのように偉大な方なので、さぞいかめしい方であろうと想像していた。しかしそれはまったくの思い違いであった。

主席は非常に謙虚で、おおらかで、思いやりの深い方であった。
主席は満面に微笑をたたえて多くのことを語った。
主席について語ろうとすればきりがない。
わたしは朝鮮革命自体が主席の偉大さを証言していると思う。従って偉大な戦略家であり、指導者である主席について一言で表現することが許されるならば、主席はどのようなてらいもない、謙虚な人民の指導者であると言うのが正しいと思う。

## 革命の基礎

朝鮮革命は、主体思想(チュチェ)にもとづいて力強くおし進められている。
主体思想は、革命の指導思想、指導理論、指導方法である。
主体とは、自分自身が主人、つまり人民自身が自分の運命の主人であるという意味である。
主席が述べているように主体思想は、自己の運命の主人である朝鮮人民自身が朝鮮革命と社会主義建設をおこない、政治において自主性を守り、経済において自立、国防において自衛を実現する道を明示している。
朝鮮人民の闘争と社会主義建設には、主体思想が具現されている。そこで得た成果はすべて、自分の力に依拠し、自らの実情に即してたたかいとった人民の創造物である。
主体思想にもとづき、大衆の要求と志向にあわせてすべての問題を解決することによって、朝鮮ではきわめて大

きな政治的成果をおさめている。

主席が過去も現在も、朝鮮革命を勝利の道一すじに導くことができたのは、つねに人民をかたく信頼し、人民の中に入って国の実状を確かめ、かれらを正しく指導しているからである。

朝鮮人民は戦後の復興建設でも外国の援助を一部受けるには受けたが、主に自国の資源と自力に依拠し、一歩一歩国の経済をたてなおした。

朝鮮の社会主義建設で決定的な力となったのは、人民大衆の創造的積極性である。

主体思想は、人民大衆を動かして革命をおし進め、互いに助け導きながら働くよう人民大衆を励ます。

主体思想は、革命の指導方法を明らかにしている。

主体の指導方法は青山里（チョンサンリ）精神、青山里方法にあますところなく具現されている。

朝鮮革命の象徴である千里馬（チョンリマ）運動もやはり主体思想を具現している。一日千里を駆けるという翼のある千里馬は、全力を集中してすべての革命課題を電撃的に遂行する朝鮮人民の力と意志の象徴である。

千里馬精神は、人民の政治的・思想的信念であり、あらゆる困難にうちかって社会主義を力強く建設する大衆の創造的熱意である。

人民が騎手である千里馬は、社会主義・共産主義をめざして疾風のように駆ける朝鮮人民の英雄的気象を象徴している。

## 革命の獲得物

朝鮮でおさめたもっとも輝かしい成果は、経済分野での成功であろう。

朝鮮は、世界の人民が志向する強力な自立的民族経済を建設した。

朝鮮の発展の物質的基礎をなす自立的民族経済は、主席の賢明な指導と朝鮮人民の不屈の闘争、千里馬精神によって建設されたものである。

朝鮮における経済建設の基本路線は、重工業を優先的に発展させながら、同時に軽工業と農業を発展させることである。このような経済建設路線を堅持したため、強力な重工業と近代的な軽工業、工業化された農業が建設され、経済の各部門が等しく発展したのである。

工業部門はすべて、高度の技術と自国の資源にもとづいて発展している。

朝鮮の地方都市咸興の二・八ビナロン連合企業所は、石から綿を作り衣服と靴の生産に必要な繊維原料を供給する大工場である。

朝鮮は多角的に発展した工業に依拠して人民のすべての需要を自らの生産でみたしている。したがって朝鮮はすでに先進工業国の水準に到達していると言える。

とくに朝鮮では、資本主義諸国におけるような人民の需要よりも利潤追求を目的とする経済ではなく、すべてが人民の福祉に服務する経済を建設した。

農業部門でも農地をりっぱに整理して、社会主義建設の他の分野と同様飛躍的な発展を遂げ、毎年大豊作をおさめている。

農村建設における重要な方針の一つは、思想・文化革命とともに技術革命をおし進め、工業と農業間のアンバランスを一掃し、都市と農村、労働者階級と農民の差を漸次なくすことである。

その結果、今日の朝鮮は近代的な繁栄する農業をもって国の農産物需要を完全に充足させている。

朝鮮で社会主義がいかにりっぱに建設されているかは、国家がゆきとどいた大衆サービス施設や完璧な社会保障など全人民の福祉向上に大きな力を入れていることからもよく分かる。

資本主義制度と異なる点は、社会発展の原動力である人民への深い配慮である。そのもっとも代表的な人民的施策の実例は、一九七四年に工業製品の価格を引き下げながらも、税制を廃止したことに見ることができる。

わたしは、朝鮮革命の重要な部門の一つである教育についてふれないわけにいかない。

朝鮮の教育体系は、全人民に服務するもっとも完成した人民的教育体系で、年齢、地位、職業にかかわりなくすべての人が学んでいる。

朝鮮革命において画期的な発展を遂げたいま一つの分野は、文化建設分野である。

朝鮮の文化は、過去のすぐれた文化と新しい社会主義文化がりっぱに結びついた新しい文化である。芸術は特定人のためのものではなく、人民が創造し楽しむ人民的芸術となっている。実に朝鮮は、人民的な芸術が花咲く芸術の国である。

朝鮮革命の今日の発展にはいくつかの要因が作用している。

それは第一に、革命の卓越した老練な指導者金日成主席がおり、

第二に、主席の賢明な指導のもとに朝鮮人民が主体思想に依拠して革命を自国の具体的実情に合わせて発展させ、

第三に、闘争のなかで鍛えられた前衛党朝鮮労働党があり、

第四に、革命の真の主人であり、社会主義建設者である英雄的人民がいることである。

この四つの要因があるからこそ、朝鮮人民は、帝国主義によって国土が分断され、たえず脅威をうける困難な状況にあっても、破壊された後進的半封建国家であった国で社会主義を建設する難事業をりっぱに遂行することができたのである。

## 祖国の統一をめざして

朝鮮はまだ国土の分断という深い傷を負っている。

金日成主席は、全朝鮮人民の渇望する祖国の統一に全力を傾けている。

主席は祖国統一の三大原則をうち出し、その貫徹に全人民を決起させている。

世界の革命家と民主人士は、朝鮮人民の祖国統一偉業を積極的に支持しなければならない。

彼らの切実な念願を実現させるために、積極的な支援を与えなければならない。朝鮮の統一をめざすたたかいは、帝国主義者の朝鮮にたいする侵略と干渉を退け、世界の恒久平和をもたらすたたかいである。したがって、世界的規模で朝鮮の統一を支持する連帯運動を力強くくりひろげなければならない。

金日成主席の賢明な指導のもとに、朝鮮人民は帝国主義者と南朝鮮かいらい政権を打倒して祖国を統一し、千里

馬精神を発揮して全国的に社会主義をりっぱに建設するであろう。

ペルーの前首相オスカル・バルガス・プリエトの娘

ペルー全国文化委員会計画課長

一九八〇年　十月

# 偉大な指導者

タンザニア　J・ウムヌビ

金日成主席は偉大な指導者です。あなたは主席にお会いしたことがありますか。世界の多くの名士が主席に会っています。あなたもぜひお目にかかるようおすすめします。

なぜなら、主席は労働者、農民、老若の別なくだれにも会って下さるからです。遠く数千、数万マイル離れたアフリカの名もない人ともお会いになっています。主席は人民のなかから生まれた方です。

わたしも、自由な自主国家、朝鮮民主主義人民共和国の元首、金日成主席にお会いしたのです。

それは一九七八年九月六日の午前十時四十五分、色とりどりの花が咲き乱れる首都平壌の壮大な錦繡山議事堂でのことです。

…主席は、ぬきんでた英知と深い思慮、精力的な活動力そして広い度量と温かい愛情をそなえた、朝鮮人民の偉大な指導者であり、最高司令官であり、慈父です。

主席は、この世の偉大さをすべて身につけているのです。

わたしはまた朝鮮で数百人の朝鮮人と語りあいました。

主席の導く朝鮮民主主義人民共和国は民主国家で、主席の配慮のもとに朝鮮人民は文字どおり民主的に暮らしています。共和国の今日は主席によってもたらされたのです。

わたしはこのことを一九七八年九月五日から十二日まで、短くはあっても充実した八日間を朝鮮で過ごして、この目で確認しました。

わたしは平壌での忘れられない九月六日、わずか三メートルをへだてて主席の話を聞きました。

主席は、国の進歩性はその国のかかげるスローガンによって規定されるのではない、自主性のない国は進歩的な国になれない、真の進歩は自主性を堅持することによって遂げられるからである、と語りました。

主席のような偉大な指導者ならではの明快な教えです。それは千鈞の重さをもってわたしの胸にひびきました。

主席のお言葉には十分な根拠があります。帝国主義者は常時、われわれの自由な国にたいする支配を画策しているからです。

自主性を堅持することは容易なことではなく、そのためには高度の革命意識と団結、強力な民族経済が必要であることをわれわれは知っています。

主席はこれを実現する方途をどう教えているでしょうか。

朝鮮人民の信頼と崇敬の的となっている主席は朝鮮で社会主義・共産主義の新しい始原を開きました。

主席は、もっとも強力で尊厳ある自主独立国家、朝鮮民主主義人民共和国を創建し、民族の大繁栄期をもたらしました。

主席は接見の席上団結を強調し、発展途上諸国は互いに協力すべきである、世界には百余の非同盟国がある、これらの国が助け合えば短期間で国の経済的自立を遂げ、大国の支配をふりきることができる、と述べました。

主席の言葉は記憶にかたくありません。直接聞くときはなおさらのことで、わたしは主席のつぎのような言葉をおぼえています。

「朝鮮民主主義人民共和国の創建は、わが革命の発展とわが人民の生活にとって歴史的意義をもつ偉大な出来事でありました」

一九七八年九月六日は、「朝鮮の日」として永遠にわたしの記憶に残るでしょう。わたしは、朝鮮民主主義人民共和国創建三十周年記念行事の期間、輝かしい主体(チュチェ)の発祥地に滞在していました。

わたしは、大きな感激と誇りにみちた朝鮮人民の姿を目のあたりにし、朝鮮民主主義人民共和国の創建によって人民政権にたいする朝鮮人民の長年の願望が見事にかなえられたことを痛感しました。共和国の創建は、長いあいだあらゆる蔑視と迫害をうけた朝鮮人民が有力な尊厳ある人民となった歴史、抗日革命闘争の栄えある革命伝統をうけ継いだ朝鮮の歴史に新時代を画する出来事でした。かつて世界地図から抹殺されていた朝鮮は、共和国の創建によって主体思想の旗じるしも高く自主独立国家として世界の大小各国と肩を並べて国際舞台に登場したのです。

主体思想は、主席によって創始されました。朝鮮人民は主席の指導のもとに主体の道を歩み、きわめて短い期間に大きな変革をとげました。

歴史は、過去朝鮮が多年間植民地半封建社会であったことを記録しています。当時の平壌はたち後れた貧しい都市でした。それさえアメリカ帝国主義者の野蛮な戦争行為によって廃虚と化しました。しかし今日の平壌は朝鮮でもっとも美しい都市であり、たち後れの跡などみじんもありません。

わたしは、主席の指導のもとに朝鮮人民が民族的尊厳と権威のある強力な社会主義自主独立国家を自らの手で建設し、自力更生の革命精神を発揮している現実に接しました。

さて九月六日の会見において、金日成主席は、ニエレレ大統領の確固とした指導と進歩的な社会主義国を建設するという真しな公約を高く評価し、ジュリアス・K・ニエレレのような反帝闘士をアフリカにもっていることは大きな誇りであると語りました。

主席はたんに、朝鮮民主主義人民共和国だけの指導者ではありません。主席は国際舞台でも大きな影響力をもっています。主席と朝鮮が世界の人民、とくに第三世界諸国の人民から尊敬されているのは当然なことです。

主席は、決断力のある人民が自国のためになにをなしうるかを示してくれました。

主席の卓越した指導のもとに朝鮮労働党は、後れた個人農経営を機械化された近代的農業に発展させるうえで大きな成果をおさめています。

わたしは、工場で生産される機械や設備、資材や肥料などが工業と農業間のバランスのとれた発展を保障していることを知りました。農業は重工業と軽工業の発展に寄与し、重工業と軽工業は農業を支援しています。

工場の各種製品はどの国の商品にもひけをとらないものです。

主席の主体思想が具現されている朝鮮では今日、いかなる天災をもこうむることなく農業生産を伸ばしており、多量の糧穀をたくわえ、なおかつ輸出しています。農業と工業ばかりでなく、社会便益事業も発展しています。判断力のある人ならば、共和国の成果を否定することができないでしょう。それは成果をあげているのが工業と農業だけではないからです。

重工業と軽工業部門では自立性の強化に力を注いでいます。社会便益事業もまた発展しています。保健医療事業の強化によってここ三十年来、人々の平均寿命はいちじるしく伸び、だれもが無病長寿して、ゆくゆくは、平均寿命がいまの七十二歳からもっと伸びるだろうと言われています。

未来の朝鮮の主人公たちは、あらゆる条件が完備した託児所や幼稚園、学校や壮麗な学生少年宮殿などで学び、すくすくと育っています。

学校教育、就学前教育、成人教育を並行させ、教育と生産労働を結びつけており、民族的形式に社会主義的内容を盛った新しい豊かな文化をつくりあげています。

朝鮮を奇跡の国と呼ぶのは当然なことです。

これらの成果は英雄的なたたかいによるものであって、今後も多くの成果がおさめられることでしょう。こうした成果が第三世界諸国にとっても切実な要求となっていることは言うまでもありません。それゆえ第三世界は自己の隊列のなかに朝鮮をもち、金日成主席を指導者にいただいていることに感謝し、朝鮮の多面的で有益な経験に大いに学ばなければなりません。

朝鮮が多くの分野で第三世界のために寄与することができるということは実証ずみであり、わたしも目撃者としてこれを認めます。

朝鮮の経済理論ははっきりしています。自立的民族経済は口先だけで実現するものではなく、社会制度と生産関係を正しくうち立ててこそ建設することができます。これは自立的民族経済建設の基本的公理であり、わたしはその成果を朝鮮で確認しました。

主席は対外政策にも触れました。主席は団結を重んじています。主席は党、政府、人民間の親善について語りました。

朝鮮人民は非同盟諸国人民、第三世界諸国人民との団結と協力を強化するために全力をつくすであろう、と言った主席の言葉をわたしは二度も自分の耳で聞きました。一度は共和国創建記念式典での演説で、もう一度は一九七

八年九月六日の接見のとき耳にしました。
主席は朝鮮人民を指導するとともに、朝鮮を平和的に統一するために大きな力を傾けています。主席の念願、それは統一です。主席は対外的にもこの偉業に献身しています。
主席はまた外国との双務的関係や国際問題にも言及しました。
主席は、われわれの親善は青空のように清明なものである、朝鮮人民はかつて植民地人民として搾取をうけた、しかし今日では社会主義を建設している、われわれは真の自主性を実現することを望んでいる、われわれは互いに協力し支持しなければならない、と言いました。
第三世界に属するアフリカの発展途上国の一介の活動家にすぎないわたしに下さったこの鼓舞的な言葉から、金日成主席と朝鮮は新興勢力諸国といつでも協力する用意があることをはっきりと知ることができました。主席は協力することを義務とみなしています。朝鮮人民は自己満足することがありません。かれらは外国の経験を重んじ、自分の経験を外国の人々と分かっています。
主席が強調している親善が真の親善であることを実証する例はいくらでもあります。南部アフリカ一つをみてもそうです。朝鮮民主主義人民共和国が南部アフリカの解放のために与えている物質的政治的支援は、搾取と抑圧から人民を解放するための国際協力のりっぱな手本です。
わたしは八日間の朝鮮滞在中、金日成主席から多くの賢明な言葉を聞くことができました。
結論的に言えば、朝鮮民主主義人民共和国は搾取と抑圧がなく税金のない国、だれもが働き、学び、教育も治療も無料となっている社会主義国であって、人々は自主的で創造的な生活を営んでいます。
これは、主席の革命的な主体思想と卓越した指導、高邁な徳性のたまものであると思います。

主席は生涯を祖国と人民のために捧げています。主席は現代のもっとも偉大な指導者であります。金日成主席は実に偉大な指導者であります。

タンザニア通信社社長

一九八〇年　十月

# 真の人民の指導者

アンゴラ

ジュセ・メナ・アブランテス

多年間、ポルトガル植民地主義や国際帝国主義の抑圧下にあったアンゴラのような国では、アメリカ映画が朝鮮を知る唯一の手がかりであった。

一九五〇年代までもアンゴラには、朝鮮の独立を侵そうとして敗れたアメリカ帝国主義者の惨敗を美化しようとするアメリカ映画が氾濫していた。

アンゴラ人民は、一九五六年に創立したアンゴラ人民解放運動の地下活動と、一九六一年からの反植民地主義武装闘争をつうじて、しだいにアメリカの宣伝とは違った朝鮮とその人民にたいする理解、現実そのままの理解を得るようになった。アンゴラ人民解放運動のすべての代表部では、朝鮮の出版物とくに、金日成主席の著作をきわめて重んじている。

人民解放運動の党員たちは、朝鮮人民が日米両帝国主義とたたかって軍事、政治、経済、文化、思想の各分野で収めた諸成果の要因について知るようになった。彼らの反米闘争はいまも続いている。

現実を故意にゆがめる意図がなくても、現実と出版物の間には一定のへだたりがあるものである。

極東に位置し風習や生活様式がアンゴラとは異なる朝鮮の出版物にしても、すべての国の政府が自国とその人民

を外国に紹介する場合と同様内容の多くが現実とは違う宣伝にすぎないだろうとわれわれは考えていた。
しかしこうした疑念は、朝鮮訪問をつうじて跡かたもなくけし飛んでしまった。
われわれが朝鮮の出版物から理想として受けとめた政治のあり方や人間像は、まぎれもない現実であった。事実、全人民があげて民族の繁栄のための建設と革命闘争にとりくんでいた。
朝鮮人民の親切心、人間味、組織力、創造力、そして澄んだ大気、清潔な都市などすべてが事実であった。
また朝鮮人民がいかに金日成主席を深く敬慕し、忠誠の限りをつくしているかも、確かめることができた。主席の名を呼ぶとき誰もが必ず「偉大な領袖」という尊称をそえていた。そしていたるところに主席の写真や画像がかかげられていた。
われわれは、朝鮮の首都から数キロメートル離れた大同江のほとりに主席の生まれ故郷万景台を訪ねた。朝鮮の同志たちが「革命のゆりかご」、「心のふるさと」と呼んでいる万景台で、訪問客たちは朝鮮の歴史にたいする理解を深める。そして緑におおわれた峰に立って、足下を地平線のかなたへと流れる大同江を見やりながら、主席の革命活動の道のりに思いをいたすのである。
金日成主席は、父祖代々愛国的で革命的な家門に生まれた。万景台の生家と事績物は、人民の指導者としての主席の品性がどのように形成されたかを物語っている。主席は幼いころから、日本帝国主義と地主の搾取にあえぐ人民の苦しみを体験し、人民のために献身することを誓った。
主席はつねに人民とともにある。主席は労働者や農民の働くところはどこへでも出かけてかれらと国事を相談し、ゆきづまっている問題を解決してやり、奇跡と革新を起こさせている。朝鮮の同志たちは、朝鮮の驚くべき成果は主席のたゆみない現地指導に負うものであると語っている。

われわれは朝鮮を訪れて三日目の日、北部にある鉄の都清津で、現地指導の途上にあった主席にお目にかかることができた。

主席の提唱と指導による業績を直接自分の目で確かめてきたわれわれは、銅像や美術作品でなじんだ偉人に謁見するのだと思うと興奮せずにいられなかった。そして威厳にみちた方との対面を想像して緊張したが、それは取り越し苦労だった。

われわれは招待所の玄関口で実に親しみ深い主席の出迎えをうけた。

主席は落ちついた人柄や気さくな態度、太い声でわれわれの緊張をいっぺんにときほぐし、ゆったりとさせてくれた。席上およそ一時間にわたって両国の情勢について意見が交された。主席はアンゴラの再建に関心を示し助言を与えてくれた。そしてアゴスティノ・ネト大統領との長年の友情についても思い出話を語るのだった。まったく気兼ねを感じさせない優しい方であった。

われわれは、全国のいたるところにかかげられた主席の画像が、つねに主席の身近にありたいと願う人民の切望の表れであることを、強く実感した。いかに歳月が流れても、主席の英姿は朝鮮人民の胸深く永遠にきざまれていることであろう。

指導者と人民大衆との深い結びつき、素朴で勤勉な人民、豊かな天然資源、美しい風光、このすべてに恵まれた朝鮮の同志たちは、世に羨むべきことがない。

朝鮮人民は、偉大な変革をもたらした指導思想、主体（チュチェ）思想について誇り高く語っている。

アンゴラ通信社局長

一九八〇年　十月

# 偉大な指導

インド
K・N・サンディリア

金日成主席の指導のもとに世界でもっとも残忍な日本帝国主義の支配から独立をかちとった朝鮮は、もっとも先進的な国に発展し、世界の自由闘士の注目を浴びている。

熱烈な愛国心とすぐれた組織力、戦略的才能をそなえた主席の指導のゆえに、長年きわめて過酷な従属と奴隷的境遇にあった植民地朝鮮が独立を達成して楽園をきずき、世界で最初の無税国となった。

朝鮮が創造的な建設でおさめたあらゆる成果は、主席の英知と独創性のすばらしい結実であり、それは朝鮮の勤労者に一九四五年の独立以来自分たちが主人となって新しい社会を建設した大きな誇りと自負をもたせている。

世界の思想家と社会活動家が、偉大な朝鮮を訪問して、このりっぱな国とその指導者について深く知りたいと願うのは当然のことである。

## 偉大な奇跡の創造者

金日成主席によって創建され導かれている朝鮮民主主義人民共和国は、文字どおり、全人民によって支えられている主権在民の民主国家である。それゆえ人民の自由と平等、繁栄を願う人々は朝鮮を訪れ、朝鮮に学ぼうとしているのである。

朝鮮は主席がゼロから出発してきずきあげた国である。

朝鮮革命の揺籃万景台にさし昇った偉大な太陽は、新しい朝鮮の山や海、街や村、職場や憩いの場などをくまなく照らして暗黒と失望、疾病と貧困を一掃し、全朝鮮人民に幸福をもたらし希望を与えている。

金日成主席は朝鮮人民の生活のすみずみに心を配り、もっとも困難なときにも、輝かしい勝利をかちえたときにもかかわりなく全人民に深い配慮をめぐらしている。

敬愛する金日成主席は、たゆみなく現地指導をおこない、つねに人民の中に入って人民の意見に耳を傾け、人民を教えている古今東西にその例を見ない指導者である。

朝鮮はいま、新しい型の人間が新しい使命を帯びていかに活動するかを示す国として、自主性と創造性、人間の尊厳を重んずるすべての人々の一つの大きな大学となっている。

わたしは、すべての分野にわたって不眠不休の活動をつづけている主席の賢明な指導のもとに、全勤労者が自発性と創意にもとづく大衆的運動によって力強く進めている国家建設について、思想、技術、文化の三大革命につい

て理解を深めようと努めた。
主席は金日成総合大学や託児所、平壌医学大学病院や名もない診療所、平壌の雄大な学生少年宮殿や青山協同農場、沙里院の一工場にいたるまでくまなくたずね、数時間ときには数日間も現地指導をおこなっている。このように偉大で独特な指導方法は、人民にたいする深い愛情に根ざしている。
こうした愛情は、革命的で愛国的な家庭教育を受け、早くも十四歳で打倒帝国主義同盟を結成した主席にのみ見られるものである。社会主義国を含めた世界のどの国にも、主席のように貧困と試練、苦痛と犠牲を体験した指導者はいない。
万景台のわらぶき家の貧しい愛国的家庭に生まれた主席は、両親から祖国解放の大志をうけついだ。きびしい地下革命闘争と遊撃戦を指導した主席は、強い忍耐力をもっている。
朝鮮人民はだれもが胸に主席の肖像バッジをつけている。それはかれらが主席の偉大な業績と高邁な徳性に心服し敬慕していることを示している。非凡な能力と徳性をそなえた指導者が、自国人民に慕われるのは当然のことである。
偉大な主体（チュチェ）思想、千里馬（チョンリマ）の理念、青山里（チョンサンリ）精神と青山里方法などは、どの国の社会学テキストにもないものである。
主席は、世界「最強」を誇る帝国主義諸国をうち破り、廃虚の上に国を建設し、支配主義勢力の圧力をふりきって朝鮮民主主義人民共和国を自主の国につくりあげた。
主席は人間を自主的な存在、創造の決定的な力と見る独創的な主体哲学を創始した。
歴史は社会発展に傑出した寄与をおこなった主席を永遠にたたえ、記憶するであろう。

## 革命の揺籃の地

わたしは一九七九年九月十六日、新しい朝鮮のもっとも重要な革命史跡地の一つである万景台を訪れた。平壌から大同江沿いに十二キロの地点にある万景台、古来名勝の一つに数えられてきた万景台で主席について、その少年時代と愛国的な家庭について多くのことを知った。

主席が生まれた万景台のわらぶき家は、昔のままに清く丁寧に保存され、主席の愛国心にまつわる話や被抑圧人民の解放のためにかかげた革命と建設ののろしを永遠に伝えている。

わたしは万景台革命事績館を参観し、主席の愛国的な家庭について学び、大きく励まされた。

朝鮮の現代史は、この愛国的な家庭に生まれた主席によって人民の念願がかなえられた歴史である。これまでも自国に新しい生活をもたらした指導者は多いが、主席のように愛国的で革命的な極貧の家庭に生まれた指導者がいたであろうか。被搾取大衆を自力で立ちあがるよう、明快な説得力のある言葉で教え導いた指導者がいたであろうか。

主体の哲学は、創造の決定的な力である人間の正しい進路をもっとも明確に示している。主席のように気高く権威があり、主体思想のような偉大な思想を創始した指導者はかつてなかった。

万景台が革命の聖地として万人の参観地となっているのは、そこから世界を照らす太陽がさし昇ったからである。

朝鮮人民が、革命的気象と活気、喜びと信念にみちているのは、一九一二年四月十五日に万景台のわらぶき家か

らさし昇った太陽の光に照らされているからである。

## 歴史的な接見

朝鮮を訪問した外国人にとって、もっとも大きな出来事は、金日成主席の接見を受けることである。議事堂に案内されたわれわれは、建物のすばらしさに感嘆していた。そこへ満面に明るい笑みをたたえて主席が現れたのである。朝鮮の太陽金日成主席…。わたしは親しみこもる握手と抱擁にこみあげる感激をおさえることができず、主席の胸に顔をおしあてた。

主席は記念に写真をとろうと言われ、われわれと並んでカメラの前に立った。

われわれを広い部屋に案内した主席は煙草に火をつけ、われわれにも煙草と朝鮮茶をすすめ、朝鮮訪問を心から歓迎すると言われた。

主席の言葉は飾り気がなく、おおらかで、思いやりと親しみにあふれていた。

しかしこれは、兄弟的で同志的な信義にあつく、苦痛をなめている人々を愛する主席の人柄の一端にすぎない。

生涯忘れることのできない主席との会見は、三時間もの間おこなわれた。

主席はユーモアをまじえて語り、ときには大きな声で笑った。

主席は多くの問題にたいして原則的で確固とした態度をとっていた。主席は朝鮮の勤労者を深く信頼し、朝鮮の統一を確信していた。

主席は人間の役割について、また自主的に思考し行動する当然の権利についてかさねて言及し、事大主義の危険性を明確に指摘してから、人間は自立すべきであり、外部に頼り援助にすがってはならないと強調した。主席は自分の体験を例にひいて主体の理論を説明したが、それは主席の謙虚な人柄を端的に示すものであった。その独創的な科学的社会主義理論は、主席の人民にたいする愛で貫かれている。

すべての問題を巧みな表現で明快に分析する主席の話は、われわれに深い感銘を与えた。われわれは、主席が最高の理論家であることを信じて疑わなかった。

昼食会の席上主席はざっくばらんな口調で、疲れはしなかったかと、われわれをいたわってくれた。

それにわたしはこう答えた。

「閣下にお目にかかり、お話をうかがえたことは無上の光栄です。閣下がつねに現地指導に出かけ人民とともにすごされることは広く知られています。その多忙な時間をさいて会ってくださったので、まるで不老長寿の薬を飲んだような気がします。

わたしの胸ははずみ、新しい力がもりもりとわいてくるようです。

むしろごゆっくりお休みにならねばならない大事な日曜に、インドの名もないわたしたちと三時間以上も親切に会ってくださって、感謝の言葉もありません」

すると主席は笑顔でわたしの肩を軽くたたき、わたしには友人や人民と会うことが休息であって人民と離れた休息など考えられない、人民と会って話しあうことがもっともよい休息だ、そうすれば疲れがすっかりとれる、わたしはインドの親善使節であるみなさんと会って十分にくつろぎ、疲れをいやしたと言うのであった。

永遠に忘れることのできない主席の偉大でしかも慇懃、素朴な人柄と深い友情のこもった言葉に感動し、わたし

はただ恐縮するばかりであった。
主席は、われわれを笑顔で見送ってくれた。
主席との会見は、われわれを永遠に励ます深い印象となってわたしの胸に焼きついた。
一九七九年九月二十三日、この日はわが代表団一同にとって生涯忘れることのできない特筆すべき日であった。
とくに一九六〇年代の初期から朝鮮に心をひかれ主席を敬慕してきたわたしには、その意義が格別大きいものと思っている。

## 朝鮮とインド

われわれは会見のさいに主席にすすめられて、普通江改修工事記念塔を訪れた。
一九四六年五月、朝鮮の偉大な解放者である金日成主席は、人民に不幸と災厄をもたらしていた普通江の改修工事を提唱し、人民大衆に工事に決起するよう呼びかけた。
人民大衆は、偉大な恩人であり、卓越した建設者であり、指導者である主席の呼びかけにこたえて立ちあがった。
こうして解放直後の困難な経済事情のもとで、この手におえない川をわずか五十五日間で征服する奇跡が創造されたのである。
今日、朝鮮人民は普通江を恵みと幸せの川としてたたえている。
破壊と貧困、死と疾病をもたらした川、多年月、数多くの人々から父母を奪い、夫を奪い、子供を奪った普通江

は、主席の深い配慮によって二度と氾濫することがなくなり、その一帯の住民は豊かで幸せな生活を楽しんでいる。すぐれた指導者に導かれる人民は、危険や貧困、災厄のいかなるささいな要素もとりのぞくことができるのである。

主席が人民を創造の決定的な力に変えてきた過程はそのことを実証している。

指導的地位にある政治家の偉大さは、人民が提起する問題を完全に理解し解決することにある。

主席は、大衆を暗黒の世界から永遠な幸せと長寿の世界に導く、世界でもっとも権威のある指導者である。

われわれは、青山協同農場と沙里院紡織工場を訪問し、朝鮮の人民経済がインドとは逆に自然の恵みをうけているのではなく、世界のもっともすぐれた指導者である主席の恵みをうけていることを確認することができた。

世界の人々は、朝鮮がどの社会主義国よりもはやく発展していることに驚嘆している。

これと関連してわたしは、インドの社会活動家や自由闘士たちに、朝鮮が日本帝国主義の支配から解放されて三十五年、朝鮮を廃虚に変えたアメリカ帝国主義を撃破してからは二十七年しかたっていないことを忘れないよう強調したい。

インドでも水力などの豊かな自然力を自力で管理できるようになれば、ひでりや洪水　飢饉や後進性を一掃することができると、わたしは確信している。

金日成主席の主体思想とインド人民の念願がインド人民の実践闘争に具現されることなくしては、外部のいかなる援助もわれわれを旱ばつ、洪水、飢餓、後進性から解放することができないであろう。

主席は、新しい社会を建設するためには人民大衆が新しい思想を学び、たえず革新を起こし、全国がつねに活気にみちていなければならないと、簡明、率直に言われた。

現在朝鮮のすべての分野におこなわれている三大革命グループ運動は、全社会の主体思想化を促す独創的な運動である。この運動は、主席が指摘しているように青山里方法を具現し、政治的指導と科学技術的指導を結びつけた革命的指導方法である。

主席が成果をあげ、人民から絶大な忠誠と信頼を寄せられている秘訣は、つねに人民とともにあることである。現地指導をとおして人民を導くこの独創的な哲学、指導方法は人類史上はじめて主席によって創始された。人民大衆が活動し、創造的労働がおこなわれているいたるところをたずねて人民と寝食をともにし、かれらの経験を一般化し、かれらの意見に耳を傾け、新たな高い目標をめざして前進するよう人民に力を与える金日成主席のような国家首班は、朝鮮民主主義人民共和国のほかにはどの国にもいないのである。

人民にたいする指導者のこのような献身性は、りっぱな実を結んでいる。

主席は、人間愛と人民への献身性においてもっとも高い境地に到達している。

主席の賢明な指導のもとに朝鮮でおこなわれている三大革命グループ運動は、学びかつ教えるという精神で全人民を改造し、官僚主義のあらゆる要素をのぞき、人民大衆に主人としての気風を高度に発揮させており、全国を互いに助け導く一つの大家庭に変えている。

これは人間の思考と活動方式を主体思想化する典型である。

主席はこのように、人々をより現代的な人間、主体的な人間に改造する新しい大衆指導方法、人民の指導者の指導方法、人生の航路を切り開く船長がそなえるべき活動方法を創造した。

わたしは、偉大な国朝鮮と世界共産主義運動の偉大な思想家であり、指導者である金日成主席の偉大さを紹介するためには、金日成主義を事実にもとづいてさらに掘り下げて真しに研究すべきであり、そのためには本稿の幾百

倍の文章を書くべきであることを朝鮮の友と全世界の主体思想学習者、金日成主義研究者のみなさんにことわって、結びにかえたいと思う。

インド朝鮮友好協会ビハール州支部長

一九八〇年　十月

# われわれは金日成主席の接見を受けた

イギリス
ウィリアム・ウィルソン

わたしは一九七九年の九月から十月にかけて国会議員のテッド・フレッチャー、デニス・カナバンとともに朝鮮民主主義人民共和国を訪問した。共和国の訪問は以前から計画されていたもので、イギリス国会議員代表団の訪朝はわれわれが最初であった。金日成主席の指導する国を訪れる最初のイギリス国会議員であるだけに、われわれの喜びは大きかった。

もっとも一方では、われわれの思いどおりに参観できるだろうか、またどのような扱いを受けるであろうかという一まつの不安もなくはなかった。しかし、それらはすべて取り越し苦労にすぎず、われわれはいたるところで心からの歓迎を受けた。すべての人々がわれわれイギリスの国会議員が朝鮮を訪れたこと、そしてとくにわれわれが朝鮮の統一のために努力していることを知って喜び、感謝してくれた。

わたしは平壌空港に到着した瞬間から、りっぱな話題のある国を訪れたことを知った。われわれは朝鮮戦争でアメリカが共和国北半部を廃虚に変えたことを知っていた。われわれが見た写真や映画は、朝鮮の町や村が焼け野原となっていたことを語っていた。例えばアメリカ軍は平壌に都市の人口を上まわる数の爆弾を投下したのであった。

その間約三十年の歳月が流れたが、三十年は廃虚と化した国の復旧には長い期間とは言えない。
しかしわれわれは戦災の痕跡をどこにも見ることができなかった。空港から平壌市内に向かう道すがら清潔な住宅と豊作の穀物をとり入れている手入れのゆきとどいた田畑を目にすることができた。粗末な家屋はどこにも見あたらなかった。空港周辺だけに特別力を入れているのではないかとも思ったがそうではなかった。その後車で国内各地を参観したが、どこでも住宅は美しかった。

平壌市内には広い並木道が続いている。むざんに破壊された平壌は近代都市に再建されたのである。わたしは訪朝する数週間前に日本を訪問し、広島と長崎を見たが、それらもかつて徹底的に破壊された都市である。社会主義的復興と資本主義的復興の相違を知りたい人は、平壌と広島、長崎をたずねれば、そこで解答を得ることができるであろう。わたしは平壌を見てわたしが社会主義者であることに誇りをもった。

朝鮮民主主義人民共和国は中国、ソ連と国境を接し、軍事境界線を境にしてアメリカ軍と対峙している。そして海の向こうに日本がある。こうした環境におかれた朝鮮で「主体(チュチェ)」哲学が創始されたことは、容易にうなずけることである。朝鮮と同じような状況にある国にとって、自主・自立は、模範とすべき指針である。朝鮮は自主的な国となりうる十分な条件をそなえている。朝鮮には、石油を除いて必要なすべての天然資源がある。鉄鉱石、石炭、金、銀などの地下資源や大理石などの建材も豊富にある。肥沃な耕地の大部分は南半部にあるにもかかわらず、北の共和国は食糧を完全に自給自足している。共和国は一九八〇年も大豊年を迎えた。

朝鮮の最大の誇りは、金日成主席を指導者にあおいでいることである。主席は人民の中から生まれ、りっぱな闘争の歴史をもっている。主席の一家は代々人民の先頭に立ってたたかった人たちである。主席は朝鮮人民革命軍を組織し、日本に反対する遊撃闘争をくりひろげた。主席が指導者となっているのは、主席とその一家が祖国の歴史

につんだ愛国的業績の結果であり、きわめて当然のことである。

景色のよいところには子供の遊び場や学校がある。平壌学生少年宮殿では毎日約一万余名の少年少女が課外活動をおこなっている。われわれは学生少年宮殿を訪れて熱烈な歓迎を受けた。そこではさまざまな年齢の子供たちが舞踊、絵画、ピンポン、ボクシングに熱中し、各種の楽器を演奏し、歌っているのを見た。国家は子供たちに学生服を供給している。子供たちは健康である。共和国ではすべての人が食生活にゆとりがあるようであった。乞食は一人も見かけなかった。

ある日の夜、われわれは、共和国創建三十周年を慶祝して製作された記録映画を見た。百万の朝鮮人民が共和国政府を熱烈に支持するシーンがあった。朝鮮人民の情熱はかれらの日常生活に表現されている。現在すすめられている建設事業は、実に驚異的なものである。

朝鮮には自家用車はきわめて少ない。しかしバスや地下鉄の便がよく、運賃も非常に安い。平壌地下鉄は驚嘆に値するものであった。地下鉄駅は大理石でつくられている。わたしは有名なモスクワ地下鉄にも乗ったことがあるが、平壌の地下鉄はモスクワ地下鉄よりもはるかにりっぱであった。ロンドンの地下鉄をしばしば利用しているわたしは、平壌地下鉄の大理石の柱、モザイク、調和のとれた色調、照明にすっかり魅惑された。

かずかずの建築物や博物館、美術博物館もすばらしく、それらについて書けば多くの時間を費やさなければならない。

われわれは軍事境界線も訪問した。われわれは平壌を発ち境界線に向かった。国を二分するこの障壁は、国の経済発展と人間関係の見地から見てまったく悲劇的である。数限りない人たちが長年家族と別れ、親友と会えないことは大きな悲劇であるといわざるをえない。非武装地帯の北側では、境界線ぎりぎりまで耕作していたが、南朝鮮

側では障壁を構築していた。この二つの現実が今日の事態を明白に物語っている。

われわれは金日成主席の接見を受けた。

主席は祖国の統一が、国の実質的かつ効果的な発展を可能にすると述べた。主席はわれわれに、南北連邦制を実施する用意がある、連邦制が実施されても南朝鮮に投資したアメリカ、日本、フランスの金融業者はいささかも心配する必要がない、かれらは南朝鮮で経済活動をつづけることができるであろうと述べた。

北半部の人民は、南北の交流が実現しても、現在の国の偉大な無限の発展にいかなる不利な影響もないと思っている。

アメリカ軍は撤退すべきである。わたしにはアメリカ軍が南朝鮮を「保護」するために駐留しているとは思えない。一九三〇年代にスタンリー・ボールドウィンは「英国の国境線はライン河である」と言ったが、現在朝鮮の軍事境界線はアメリカの国境線のように見られている。アメリカ人は自国の利益に合わないかぎり朝鮮から手を引こうとしないであろう。しかしアメリカ人は朝鮮のため、ただちに撤収すべきである。

われわれが朝鮮で受けた印象はきわめて深く、忘れがたい。金日成主席は再び朝鮮を訪れるようわれわれを招請してくれた。したがってわれわれは、朝鮮訪問を再度申請する必要はないと思っている。

イギリス・国会下院議員

一九八〇年　十月

# 人民と指導者

ペルー
アンヘル・カストロ・ラバレリョ

金日成主席は気高い共産主義的徳性を身につけ、生涯を人民のために捧げている慈愛深い人民の指導者である。歴史は長年月にわたって無数のエピソードを伝えている。しかし永遠の光を放つエピソードは、主席の人民にたいする熱い愛の物語りだと思う。

主席の人民愛にまつわるエピソードは数十巻の本にも収録しきれないことだろう。わたしはそのいくつかの側面にのみ簡単にふれることにする。

主席は敵とは仮借なくたたかうが、人民には惜しみない愛情を注いでいる。

主席は戦闘にのぞんではつねに敵を恐怖におとしいれた。敵は主席の名を聞いただけでも震えあがった。かつて日本侵略者の出版物は主席を「白頭山の虎」だと書いた。

しかし主席は人民にたいしては真の慈父であって、老幼の別なくすべての人民を大きな愛情でつつみ、かれらのためには一身の危険もかえりみず、きびしい寒さにもたえてたたかった。主席は人民のためにすべてを捧げる真の人民の父である。

ラテンアメリカ記者同盟書記長である著明な社会政治活動家、ヘナロ・カルネロ・チェカは主席ともしばしば会ったが、かれはその著書『朝鮮――米と鋼鉄』で、朝鮮の社会主義建設の成果と人民の自由と幸福のために尽くした主席の不滅の業績を非常に感銘深く紹介している。

主席の人民愛を語るとき、人民の政治生命を重んじる側面を強調しなければなるまい。

朝鮮ではすべての人民が革命と建設の主人として誇り高く社会生活に参加している。これは、かれらにたいする主席の深い信頼、その政治生活にたいするあつい配慮と離れては考えられない。

主席は、人間にとって第一の生命は政治生命であるという主体的な人生観の根本原理を明らかにし、人民をその道へ導くよう心血を注いでおり、だれもが政治組織に加わり、組織生活を通じて政治生命を輝かすことに第一義的な関心と配慮をめぐらしている。

解放後党を創立した主席は、ついで勤労者団体を組織し、革命の発展にともなってそれに広範な大衆を加入させてかれらを思想的に教育、改造し革命と建設に極力動員する政治組織に強化した。

いま朝鮮には、職業同盟組織や青年組織、婦人組織などのほか、すべての農業勤労者を擁している農業勤労者同盟のような独特な勤労者団体がある。これらの団体は、組織原則と活動方式において外国の同種の団体と区別される特殊な点をもっている。

現在朝鮮の勤労者はもれなくこうした政治組織に参加して組織生活をおこなっているが、これは他の社会主義国に見られない点である。

人民の慈父である主席は、一人ひとりの政治生活に責任を負って配慮をめぐらしている。きのうは、ある模範労働者の朝鮮労働党入党を推薦し、きょうは無名の科学者に手ずから党員証を授与する。

主席はまた、つねに人民のなかに入ってかれらと苦楽をともにし、その意見に耳をかたむけてゆきづまっている問題を解決し、明るい展望をひらいてやっている。

主席の有名な現地指導は、真の人民的政治家のみが創造しうる政治的指導方法の具現であり、人民と一体になってその意思を現実に生かし、かれらを励まし動員する真の人民的政治の具現である。

主席は工場、企業所、農漁村、鉱山、労働者の寄宿舎、学校、商店、託児所、幼稚園など人民のいるところならどこへでも出かける。そして労働者の油に汚れた手を握って国事を相談し、農村におもむいては実情を調べ難問題をその場で解決してやっている。

朝鮮には「青山里（チョンサンリ）精神」、「青山里方法」の発祥地で知られた青山里という農村がある。主席はこの村に十五日間も滞在して農民たちと意見を交わし、ゆきづまった問題を解決した。こうして大衆路線に根ざす指導方法の手本がつくられ、社会主義建設を新たな高揚に導く転機がひらかれたことは、周知の事実である。

われわれが訪れた工場や文化機関はいずれも、主席の度重なる指導を受けていた。

このような主席であればこそ、人民の意思と念願をだれよりも深く知って人民の利益にかなった路線と政策をたてそれを実現に導いており、人民に革命と建設、自然と社会の主人としての自主的で創造的な生活をもたらしているのである。

主席は何事につけまず人民の利益をはかり、そのためにすべてを捧げている。

主席は抗日革命闘争期から、主体（チュチェ）思想の要求にそい人間を中心にすえて党、国家、経済、軍事などすべての活動を指導し、それらを人間のために服務させている。

抗日武装闘争期の数多いエピソードのうち、人民にたいする主席の深い愛情を語る回想記『司令官も人民の息子』

や、村民に負担をかけまいと正月を一緒にすごそうというかれらのたっての勧めをふりきって、部隊の出発を命じたことなど多くのエピソードは、わたしの胸をうたずにおかない。
一九三四年六月、三道河子村での出来事である。部落で戦闘をおこなえば遊撃隊に有利であったが、主席は人民に被害が及ぶのを恐れ、いったん部落を明け渡してから敵を田野におびき出してせん滅した。
解放後新しい民主朝鮮の建設にとりくんだ初期から、社会主義建設の高い段階に入った現在にいたるまで、主席は、人民の利益優先をあらゆる活動の最高原則となした。経済建設も人民のためのものとする主席は、技術革命の主な目的も、資本主義国のように勤労者の生活にはおかまいなく生産を高めて最大限の利潤を得るためでなく、かれらを骨の折れる労働から解放することにおいた。
わたしは訪朝中、技術革命の大々的な推進によって勤労者たちが骨の折れる労働からぬけ出しているのを確認した。朝鮮では最近にも、新しい鋳物法を発明してこの分野で大きな成果をあげている。
これらの成果には主席の大いなる人民愛がひそんでいる。こんにち朝鮮の農村は水利化と電化を完成し、機械化においても百ヘクタール当たりのトラクター台数が世界的な高い水準にある。この結果、世界をなやませている寒気団の影響を受けずに年々大豊作をおさめている。これは農民を骨の折れる労働から解放しようと心を砕く卓越した人民の指導者の深い愛情の結実である。主席はそのために自ら農事の実験までおこなっているという。
主席は人民に食肉を十分に供給しようと畜産業の発展に力をかたむけ、家禽業を速やかに近代化するよう指導した。
主席が肉親の情で各階層人民の生活を暖かく見守り実状をよく知って、一活動家の家庭問題やささいな個人的問題まで解決してやっている話は、数知れない。わたしは抗日革命闘士やその子弟、労働者、農民、青年学生、イン

テリ、南朝鮮出身者、外国にいる朝鮮人など多くの人びとから、そうした話を聞かされた。
主席は、老抗日革命闘士の子を探すために三十余年間も手を尽くしたたし、父母を失った四人姉妹の面倒を最後までみている。また解放後他界したある南朝鮮民主人士の遺児たちを気づかって正月には家に呼びよせ、古くからのインテリを大切にしている。このようなエピソードは枚挙にいとまがない。
人民にたいするこうした深い愛情、革命的義理をまたどこに求められようか。
主席の大いなる愛は朝鮮人民にのみ注がれているのではない。世界の多くの人びとが、主席に謁見し貴重な教えをうけて革命の道をたくましく歩んでおり、また主席の不断の配慮にあずかっている。これについてはラテンアメリカの多くの進歩的人士が感動的な記録を残している。
わたしも直接お目にかかって、主席こそ慈愛にみちた飾り気のない真の人民の指導者であることをしみじみと感じた。
主席は旧知のように暖かく迎えてわたしたちの言葉に慎重に耳をかたむけてくれた。わたしたちは主席の素朴でおおらかな話しぶりにすぐ緊張感がほぐれ、親友にでも対するように腹蔵なく意見を語り、貴重な教えをうけた。
栄光の謁見は長くはなかった。しかし素朴で親切で真実味と愛情にあふれる主席の偉大さを全身で感じとることができたそのひとときは、わたしたちにとってもっとも幸せな時間であったたし、主席への崇敬の念がわたしの思想となり血とも肉ともなる歴史的な瞬間であった。
わたしは朝鮮での見聞や朝鮮にたいする最近の研究、体験などによって、朝鮮人民と世界の革命的人民が、主席を伝説的英雄、偉大な思想家・理論家、革命と建設の英才、人民の慈父と仰ぐのは、偽りない真情の発露であることをいっそう確信した。

共和国北半部と南半部の人民、つまり全朝鮮人民が主席をもっとも敬慕し、清らかな忠誠心をいだいている。わたしは自分の目と肌でこのことを確かめた。指導者と人民間のこの結びつき、言いかえれば、生活の中に根づき闘争の炎の中で花開き歴史の流れとともに深まる、数千万人民大衆のこの素朴な心情を色めがねでみようとする者は、人間関係を金でしか見ることのできない愚かな人間である。

真の人民の指導者、金日成主席によせる朝鮮人民と革命的世界人民の敬慕の念は永遠にかわらず、なんぴともそれを阻むことはできない。

ペルー共和国国会上院議員

ペルー民族解放戦線委員長

一九八〇年　十月

# 忘れがたい思い出

エジプト
ムハンマド・アボウ・エル・ハディド

わたしは一九八〇年一月にムハンマド・フスニ・ムバラク副大統領に随行して朝鮮民主主義人民共和国を訪問した。

金日成主席にもお目にかかり、実に感激にみちた日々をすごした当時の出来事は、いまもありありと目に浮かぶ。朝鮮でもっとも寒い時節だったので、空港に降り立つと、あたり一面や山々がアスワンの綿のような白雪に覆われていた。気温は零下十度前後であった。

しかし朝鮮の友人たちの熱烈な歓迎にわれわれは、一月の酷寒を全然感じなかった。そうした歓迎こそわがエジプト人民に寄せる金日成主席の深い友情のあらわれにほかならないのだ。

わずか数日の滞在期間であったが、それは進歩的人類の敬慕してやまない偉大な主席にお会いして高見に接した喜びの日々であり、主席の主体（チュチェ）思想の正しさと生命力を体得し、もっとも美しい崇高なものを身につけた日々であった。

滞在中、世界に名をはせた万寿台芸術団の音楽・舞踊劇『楽園の歌』の観劇に招待された。

万寿台芸術劇場に足を踏み入れた瞬間、わたしは驚きに目を見張った。一足先に朝鮮を訪れた友人から世界的な大劇場と聞いてはいたが、そのすばらしさは想像を絶するものであった。

世界の名だたる劇場を見て回ったわたしも、これほど立派な劇場ははじめてであった。いわば一つの完全な芸術作品とも言えた。極楽とはこんなところではなかろうかと思われた。これが数十年前まで帝国主義、植民地主義に無知と蒙昧を強いられていた朝鮮人民の手になるものなのである。人民大衆が主体思想を身につけて自力更生の革命精神を発揮するとき、どんなにすばらしい知恵と奇跡を生みだすかをわたしは改めて痛感した。

舞台にのせた劇も観衆の心をうばわずにおかなかった。慈しみ深い主席の懐にいだかれて幸せに暮らす朝鮮人民の生活をえがいた作品であるが、それはフィクションと言うよりも、朝鮮のありふれたナマの生活そのものであった。

草木が陽光を浴びて花咲き実を結ぶように、朝鮮人民の幸せと誇りはすべてが主席の大いなる愛のたまものにほかならない。

主席のこのような恩愛は朝鮮人民だけにかぎられてはいなかった。わたしたちが平壌に到着した翌日の夕方、案内の人が医師の往診を告げた。病人がいたり往診を請うたわけでもないので不審に思っていると、かれは、主席の配慮によって朝鮮人民はだれでも定期的に担当医の検診をうけて適当な処置を講じているが、大事な客であるあなたがたも例外ではないと言った。

わたしたちは親切な医師の細密な診察をうけたが、もちろん朝鮮の医療制度上まったく無料であった。

朝鮮ではすべてが人民のためにそなわっており、人民の福祉増進にむけられている。

主席は子どもたち、とくに孤児や革命家の遺児に大きな配慮をめぐらしている。

滞在中、主席の生まれ故郷であるわれわれの心のふるさと、万景台を参観し、ついで万景台革命学院を訪ねた。院児たちには基礎技術知識と近代科学を心おきなく学べるあらゆる条件が与えられていた。

一点のかげりもない明るい顔、きちんとした身なり、はつらつとした足どり、なんの心配もなく学業に励んでいるその姿を目にして果たしてだれがかれらを孤児と言えようか。

かれらは幸せを謳歌してうたう。

「われらの父は金日成元帥、われらの家は党のふところ」と。

主席は実に朝鮮人民の慈しみ深い父である。わたしたちはまさに、その偉大な金日成主席に謁見する光栄に浴したのであった。主席は貴重な時間を割いてわたしたち副大統領一行を歓待してくださった。滞在中不便なことはないかと心を配り、貴重な教えを与え、記念撮影や昼食会までともにしてくださった。実に身にあまる栄誉であった。

わたしの生涯にまたとない意義深いその日の出来事はすべてもっとも貴重で美しい追憶としてわたしの胸の中に残るであろう。

朝鮮とエジプトは遠くはなれているが、わがエジプト人民に寄せる金日成主席の愛が永遠なものであるように、主席にたいするエジプト人民の敬慕の念も永遠にかわらないであろう。

エジプト『アル・グムフリア』紙副主筆

一九八〇年　十月

# 金日成主席の万年長寿は人類の念願

シリア
ナジャト・カサブ・ハッサン

こんにち、全世界の進歩的人民は、敬愛する金日成主席とその天才的な思想のおかげで、あらゆる敵にうちかてるかたい信念をもつことができたと確信している。

それは金日成主席が、数千年のあいだ人類に強要されたあらゆる抑圧と従属に終末を告げさせた二十世紀の偉大な革命家だからである。

主席ははやくも青少年時代から革命闘争に身を投じすぐれた思想・理論活動をおこなって偉大な革命思想である主体（チュチェ）思想を創始し、長いあいだ闘争の道を歩んできた。主席の創造的な思想と指導経験は朝鮮のわくをこえて世界的なものとなり、地球上の多くの国が主席の示した原則を指針にして革命と建設をおこなっている。

一国の指導者の影響が自国のわくをこえてひろく世界におよぶということはきわめてまれなことである。こうした影響力は、歴史と人類の将来の運命を一身にになった偉大な指導者に特有のものである。

わたしはマダガスカル民主共和国の首都アンタナナリブでこれをさらにはっきり語った。

わたしは一九七六年の秋、主席の主体思想にかんする国際シンポジウムに参加するため、そこへ行った。

これにはアジア、アフリカ、ラテンアメリカ、ヨーロッパの大多数の人民を代表する五十余か国の新興勢力諸国が参加した。シンポジウムは、朝鮮人民と人類のために五十余年のあいだ主体思想ののろしを高くかかげてたたかい、各国人民の進路を照らしている主席への敬愛の念を示すよい契機となった。

シンポジウムでは、世界の多くの革命勢力の闘争を導いている主席の革命思想の偉大さがたたえられ、主席によせるつきない尊敬の念があふれていた。

主席は世界の大多数の国の人民がおかれている新しい革命情勢にあうように労働者階級の革命思想を独創的に発展させた。

こんにち、多くの国の人民はたちおくれた状態からぬけだすことができず、社会主義的発展を阻害しようと企てる新植民地主義者と反動らの連合勢力によるさまざまな困難を克服しなければならないきびしい状況のもとでたたかっている。シンポジウムの参加者はその発言で、主席の革命思想を科学的に分析し、あらゆる生活分野におけるその生命を論証し、革命の英才であり豊かな人間性の体現者である主席への限りない感嘆を表した。

主席の革命思想は真昼の陽光のように明るく、自分で体験したように実感にあふれているので、人々の心をとらえている。

シンポジウムでは演説や討論だけでなく、自由を渇望する人民の念願を詠んだ数篇の詩を聞くことができた。

参加者たちは会場の正面にかかげられた主席の画像を見ながら主席にたいする敬慕の念につつまれた。

ことに、主席に会える栄光と幸福に浴した筆者を含む多くの人は、ひとしおその感を深くした。

アンタナナリブでの滞在期間わたしは、平壌で送った一九七一年十月初旬の楽しい日々を感慨深く思いかえした。

そのときわたしは、シリア朝鮮友好協会代表団の一員としてはじめて朝鮮民主主義人民共和国を訪問したのであ

った。
訪朝期間行くさきざきで、主席によってなされた努力と業績、朝鮮人民の意識と個性への大きな影響を見聞し、主席への敬愛の念を禁じえなかったのであるが、わたしたちは直接会うことができたのである。
思想と業績、世評によって心に描いていた人と対面し、親しみのこもった言葉を聞けば、忘れられない印象をうけるものである。
まして偉大な主席に会った印象はとうてい筆舌につくし難い。
訪朝以前にもわたしは主席の著作を読んで、主席は深奥な思想を簡明に集約する偉大な革命家であると考えていた。
主席はいつもわかりやすい言葉でいきいきと語り、問題の中心を明らかにする。
主席は、大衆にかれらの力と人間の創造的能力を認識させ、かれらの信念を革命的意志に、山をも移す大きな物質的力にかえさせる。
はやくから主席の指導をうけて活動してきた人々の回想記にもみられるように、主席は人民の念願を反映して民族の大綱を作成した。
回想記の筆者たちは言いあわせたように、主席の強じんな意志と英明な思想、人民にたいする信頼について書いている。
それでわたしにも、伝説的な鋼鉄の偉人にたいするイメージが浮かんだ。
わたしたち一行が到着すると、主席は戸口まで歩いてきてあたたかく握手してくれ、一緒に記念写真をとった。
わたしは、主席のおおらかで親切な、そして気さくな品性に驚いた。

主席のわけへだてない態度にわたしたちはすぐうちとけてしまった。

わたしたちは緊張がとけ主席のあたたかい愛情につつまれ、親しみを感じた。

瞬間わたしは、どうして朝鮮人民が主席を父と呼び、主席の生誕の地万景台を訪ねるのか、主席が出向いたところや主席が手を触れたすべてのものを大事にしているのか十分に理解することができた。

それは、つねに主席を忘れないでいようというかれらの念願の表れである。主席を思うとき、かれらには仕事への意欲が生じ、たちおくれと沈滞に反対し絶えざる発展をとげようという決心が深まるのである。

明るい微笑をたたえ、ときには慎重な表情で語る主席の教えをうけたときわたしは、すべての朝鮮人が主席の肖像バッジを胸につけているわけがわかった。

それは、誰もが金日成主義の祖国に住んでいることを忘れないで、千里馬(チョンリマ)の翼の一本の羽となる覚悟をもとうということであった。

接見席上主席は、朝鮮の周辺における帝国主義者の策動について、難攻不落の要塞と化した朝鮮の領土を自衛の原則にしたがって守れるよう主体的な力を用意するための朝鮮人民の大きな努力について語った。

そのときわたしは、犠牲を恐れず戦って敵をうち破り、不撓不屈の模範として歴史に記された一二一一高地と、わたしたちが訪ねたある工場近くの高射砲陣地を守っていた朝鮮人民軍の女子隊員たちを思いおこした。

主席の言葉は過ぎさった事実と将来のできごとにふれたもので、過去と未来を一つにつなぐ不動の論理であった。

主席は、一九六九年、朝鮮人民軍に撃墜されたアメリカの偵察機EC—一二一事件と、その前年、朝鮮海軍にだ捕されたアメリカのスパイ艦プエブロ号事件に言及し、朝鮮人民がこれらの事件と関連したアメリカの威嚇をはねのけて屈することなくたたかったことについて語った。

主席は、海・空軍を動員して威嚇したアメリカの企ては、祖国の栄誉と尊厳を守ってあくまでたたかう朝鮮人民の鉄の意志のまえに水泡に帰したと語った。そして、主席は敵の不意の侵攻に対処するため全人民を武装させているると述べた。

最新の防御手段で全人民が武装するたたかいは、主席の指導のもとに朝鮮人民がおこなっているたたかいの一部にすぎない。

朝鮮の随所では、人民の主体的な力に依拠して国を平和的に統一し、革命と建設を促して物質的、精神的力を養う大戦闘がくりひろげられている。

現在の難関をのりこえて未来を建設する構想について語る自信満々たる主席の姿をながめていると、その鋼鉄の意志が石炭を掘り、鋼鉄を溶かし、大型機械や機関車、船舶をつくり出し、美しい建物をたて、文化の花園をいろどり、石から織物をつくりだす奇跡を生むのだとうなずかれた。

この接見によってわたしは、思想と闘争、勇敢さによって五十有余年歴史の最先端にたっている主席にたいし全世界が深い尊敬をよせているのは当然であると思った。

主席はつねに人民とともにおり、現場の幹部とともにいる指導者である。とくに、主席は労働者、農民、科学者、技術者、軍人を訪ね、あらゆる部門すべての単位の仕事を現地で指導している。

わたしたちは接見をうけるまえに朝鮮の各地を見学し、この国の人々が自分の指導者をいかに敬慕しているか、はっきり見てとることができた。

誰もが主席に深い信頼をよせ、その言葉を肝に銘じ、書き記しており、主席に問い、また答え、慕っている。

これは田畑や工場、学校で自分たちに会ってくれる主席によせるつきない尊敬の念の当然の帰結である。歴史の

必然性と合法則性をきわめ、人々を結集してあらゆる困難をのりこえ進歩の道をつきすすむ人のみが歴史の主人公になれる。

主席はすべての事物現象の本質を千里眼で見抜き、勝利は必然的ではあるが苦難の道をたどってはじめてかちとることができ、そのためには、たたかいにめざめた人民を確固と導かなければならないことを明らかにすることによって近代史をきりひらいた偉大な英雄である。

勤勉で自覚的な態度、高尚な道徳、潔白な節義、死も恐れぬ強い闘争精神など、朝鮮人民はその教養水準において最高峰に達している。

こうした教育は金日成主席によってこそ可能であった。

主席は子どもから青壮年、老人にいたるすべての人が片時も朝鮮の精神を忘れないように関心を払っている。

主席は生活のどの側面ものがさず分析している。そして完全無欠な主体思想にもとづいて、つねに、人間が世界の基本をなす創造的力であり奇跡を生む基本的要因であると教えている。したがって主席は人間の精神状態と教養程度、物質的環境に深い関心を払い、とくに、人々に闘争の目的を明示して自分のものにさせた後、それを成就する方途を教え、その実現へと賢明に導いている。

朝鮮では誰もが自分の仕事の目的と革命闘争における自分の任務をよく知っている。

それは主席の主体の革命理論に導かれているからである。

主席は、困難を過小評価もしないが、克服できないものと過大評価もしない。

主席は、日帝の植民地略奪とそれによる後進性のため、そして祖国の南半部に帝国主義が居残っており、きびしい戦争をおこなったため朝鮮の前途に困難がたちはだかっていることを正しく分析評価したうえで、アメリカ帝国

主義侵略者を追いだし、祖国の分断に終止符をうち、国を発展させて自給自足できるようにしうる勢力を規定した。標的が確定し方途が示された以上、この勢力は闘争に決起しなければならない。

しかしそれはスローガンやプラカードをかかげるだけでは実行できず、人民の活動と生活のすべてがこの目標の達成に従わなければならない。

米やビナロン、電力のわずかな増産でも、それはいずれも敵とのたたかいを容易にさせることになる。そのために主席は舵をとった船長のように全国の動きに目をそそぎ、田野と工場、学校と病院、住宅の建設と道路の舗装、前線の防衛をになっている人たちを訪ねている。主席の足跡がしるされないところはどこにもない。

そこで朝鮮人民は誰もが自分の持ち場で明確な思想と強い力をもった働き手となって自分の仕事を国の総体的な戦略目標と結びつけている。

主席の現地指導の旅は、人民によせるつきない愛にもとづくものであり、気高い精神と謙遜さの表れである。それは主席が堅持している共産主義的指導活動の一部分である。

主席は現地指導をつうじて、人民と考えや感情をともにし、わずかなへだたりもなく人民大衆と渾然一体となり、主体思想にもとづいてすべての人を英雄にそだて、各自が自己の信念で生きるようにする。

主席にたいする朝鮮人民の尊敬の念は、主席がつねに自分たちのそばにおり、一緒に仕事をしながら、ひたすら勝利へと賢明に導いていることの体験にもとづくものである。

主席はつねに明るい微笑をたたえ人民とともに手ぐわをもって田畑に出かけたり、かれらの機械のエンジンをかけたり、ときには本をもってかれらとむかいあうかと思えば土を掘る仕事もする。また芸術家を指導して人民を教育する名作も創作する。

犠牲をいとわず戦争と戦後の経済建設で超人的な努力を払った朝鮮人民はひとしく、主席が朝鮮労働党と朝鮮人民を賢明に導いたからこそ、すべての成果が可能であったと確信と誇りにみちて語っている。

朝鮮人民は主席の指導によってもっとも短い期間に戦争の痛手をいやしたばかりでなく、廃虚のうえに強力な重工業と近代的軽工業、発達した農業と輝かしい民族文化をもつ社会主義工業国を建設した。

じつに、主席は百戦百勝する万能の力をもって折り重なる困難にうち勝ちながら、人民を信じ、かれらの創造力を自力更生の道に導き、人類文化のピラミッドをもっとも高くつみあげた。

こうした指導をうける以上、人民はいかにきびしい困難も克服できるのであり、天をも突かんばかりの勢いで祖国を建設しうるのである。

訪朝期間わたしの頭に刻まれたこれらの考えは公正な評論家としてもつようになった見解である。

こんにち、世界の進歩的人民は金日成主席が人類のためにつくした貢献にたいして最大の敬意を表している。

主席は人類に自主性の真意を教えている。

主席は人類に革命の勝利にたいする信念をいだかせ、この信念を強固にする主体思想の武器を与えた。

主体の原則は、日を追っていっそう輝かしい未来へと人民大衆を導いている。

主席は、不屈の確固たる思想さえあれば、帝国主義の高慢な鼻柱をへし折り、敵をひざまずかせることができると人類に明示している。

主席は、人々をどうすれば真の自主的な人間に教育し、幾百万の子どもたちをつねに明るく育てることができるかについて教えている。

主席の英姿は永遠に人々の心のなかにきざまれ、陽光よりも明るい光で人々に信念と英知を培い、課題とその遂

行方途を示すであろう。

こんにち、全世界の進歩的人民は金日成主席が歩んできた多年間にわたる困難かつ輝かしい闘争の道を回顧し、人類思想史上最高峰をなす主席の偉大な思想に熱心に学んでいる。

全世界の進歩的人民は、主席をつうじて朝鮮を知り、朝鮮人民を愛し、朝鮮人民と同様自分たち自身も勝利するという信念をもつようになった。

敬愛する金日成主席の万年長寿は人類の念願である。

不滅の主体思想は人類のまえに高くそびえる燈台となってたたかう闘士たちを導くであろう。

主体思想と千里馬を創造した偉大な金日成主席に栄光あれ！

シリア朝鮮友好協会書記長

一九八一年　一月

# 偉大な金日成主席に栄光を

ネパール
N・G・バイディヤ

世界史は、その生涯が自国のさまざまな光輝ある歴史的出来事と深く結びついた偉人を数多く記録している。人類は、それらの英雄や傑出した指導者のすぐれた品性と才能をすべて合わせてもなお余りある英資をそなえた不世出の偉人を二十世紀に迎えたが、その方こそ主体(チュチェ)の太陽金日成主席である。

わたしは、主体の国朝鮮を訪れて主席に会い、今世紀の人類がどのような偉人を迎えたかを、あらためて深く認識した。

＊　＊　＊

一九六〇年十二月、主席の洗練された指導を受ける千里馬(チョンリマ)の国、朝鮮民主主義人民共和国を訪問したいというわれわれの久しい念願はついに実現した。

われわれが平壌駅に到着したのは十二月九日の午後四時であった。平壌は聞きしにまさる壮麗な都市であった。

千五百余年の歴史を誇る平壌は、「英雄の都市」「難攻不落の都市」としても広く知られている。
アメリカ帝国主義者は、一九五〇年六月から五三年七月までの朝鮮侵略戦争中、一千四百余回にわたって平壌を空襲し、総計四十二万八千余発の爆弾を投下した。
平壌は廃墟と化したが、市民は屈することなく、主席の賢明な指導のもとに首都を守って敢然とたたかった。停戦後アメリカ帝国主義は、平壌は百年かかっても立ち直れまいとうそぶいたが、英雄的な朝鮮人民は、短時日で平壌を壮麗な近代都市にきずいて侵略者に打撃を与え、世界にすぐれた模範を示した。
平壌は、金日成主席がおり、朝鮮労働党中央委員会と共和国政府が位置している朝鮮革命の心臓部であり策源地であるとともに、世界進歩的人民のあこがれの地でもある。
はじめての都市ではあるが、なぜか久しぶりに故郷の町を訪れたような親しみを覚えた。駅や街、ホテルでのゆきとどいた配慮のためか、それとも市民の明るくやさしい微笑のためだろうか。
われわれは、大きな期待のなかに有意義な日々をすごした。平壌の革命史跡地や名勝、主体思想を具現した朝鮮人民のすばらしい成果にふれるにつけ、主席に会いたいというわれわれの願いはつのるばかりであった。
いったいいつ会えるだろうか。朝鮮革命と世界革命のために多忙をきわめる主席が、自分たちのような一介の市井人に会ってくれるだろうか。…
しかし、われわれの念願はついにかなった。十四日の午後五時ごろ、主席に謁見する無上の光栄に浴することになったのである。
接見場に案内されたわれわれは、すっかり固くなっていた。途中くり返し反芻していた挨拶の言葉も口にできず、満面に微笑をうかべた主席の顔を仰ぎみるばかりだった。

（ああ、この方なのだ。
日本帝国主義の植民地支配に苦しむ祖国と民族の運命を一身にになって、わずか十三歳の身で革命の壮途につき、十代の少年期にはやくも古今東西の思想、理論に通暁して偉大な主体の真理を発見した方。三百余年の侵略史をもつアメリカ帝国主義者を下り坂に追いやり、失われていた朝鮮の栄誉を世界に輝かせた方…。人類が二十世紀に生んだ偉大な指導者がわたしの前に立っておられるのだ！）
全身をゆさぶる激しい感動に、ついわたしは涙ぐんだ。
主席は、そうしたわれわれの手をやさしくとって、ソファーに座るようにすすめてくれた。
主席は多忙な身であるにもかかわらず、われわれの生活についてこまごまとたずね、長時間にわたって貴重な話を聞かせてくれた。主席のおおらかで気さくな人柄にひかれて、われわれの緊張はすっかりほぐれ、朝鮮の革命と建設について話していただきたいと所望した。
主席はこころよく応じ、朝鮮革命の黎明期から朝鮮民主主義人民共和国建国にいたるまでの歴史をかいつまんで話してくれた。われわれは、朝鮮革命がどのようにしてはじまり、おり重なる難関をどう克服して勝利の一すじ道を歩んできたのか、勤労人民大衆の世界観であり闘争の武器である主体思想がどう創始され具現されてきたかを、はっきり知ることができた。
主席は革命の嵐をつき抜けていくなかで、朝鮮人民の偉大な指導者に、全世界の労働者階級を導き励ます世界人民の指導者の一人となった。
主席の説明をとおして、われわれは主体思想の深遠な真理をくみとり、ぬきんでた思想家、理論家としての主席の偉大さを、身にしみて感じた。

「主体(チュチェ)」という朝鮮語はいま世界の共通語となっている。

勤労人民大衆は革命と建設の主人であり、革命と建設の推進力である。革命は輸入することも輸出することもできず、他国の人民が代わっておこなうこともできない。各国の革命の主人はその国の人民自身である。したがって革命闘争と建設の過程で提起されるすべての問題と障害は、革命の主人であるその国の人民自身が自主的で創造的な力と知恵によって解決し、克服しなければならない。外国に頼ってはどんな問題も解決できない。この不滅の主体思想が、朝鮮の革命と建設に驚くべき成果をもたらしていることは、周知の事実である。

主席の接見後、共和国の各地や各部門を参観する過程で、主席の指導の賢明さ、主体思想の正しさと生命力をはっきり知ることができた。

とくにわれわれは行く先ざきで、主席が祖国と人民をなによりも愛しており、そのためにすべてを捧げることを最大の喜びとしていること、つまり主席の人民にたいする愛は無限であることを知り、驚嘆せずにいられなかった。

朝鮮には、主席の現地指導の及んでいない地方がなく、人民の福祉を最大限に高めるための主席の指導に接していない部門がない。これまでの三十年間、主席は無数の工場や農場を現地指導しているが、なかには数十回も訪れたところもある。

われわれは、主席が湿地や険しい山道もいとわず山間の僻村に出むき、勤勉な農民たちと話し合ってかれらの実状を調べ、生活の改善をはかったという感動的な話も聞いた。主席は解放直後の複雑な情勢のもとでも、以前は人間の住めないところと言われた陽徳郡隠下里を訪ねた（当時自動車道路はおろか細道もろくにない山中を飛び石伝いに谷川を渡り、低木の茂みを踏み分けて四キロ余りを徒歩で行ったという）。農家のアンペラの上で木枕を枕にして一夜をすごした主席は、翌暁険しい山に登って「山の幸」を探しあて、山間地帯での生活向上の手立てを示

した。

果たしていつ、どの国にこれほど人民に献身した指導者があったことだろうか。わたしは感動するばかりだった。主席は労働者の住宅街や漁村に出かけてその実状を調べ、また風雨をおかして人民軍部隊におもむき、不足していることがあれば即座に解決してやり、兵士たちの戦闘談に耳をかたむける。そして学校や工場、機関などを視察しては、寮の食堂に立ち寄って食べ物の味を見、関係者に食事の質と栄養価を高めるよう強調する。わたしはこの話を聞いて本当にうれしく思った。

主席は自身の休息など念頭にもなく、ただ労働者や人民大衆の幸せな生活に大きな喜びを見出している。このような気高い徳性のゆえに、朝鮮人民は主席を深く敬慕しており、自分たちを世界でもっとも幸福で誇りにみちた人民と思っている。

したがって朝鮮人民が、かれらの今日の幸福とより輝かしい未来のために生涯をかけ、苦楽をともにしている主席を民族の太陽と慕い、世界の進歩的人民が主席を万民の慈父、人類解放の救いの星と仰いでいるのは、しごく当然なことである。

朝鮮に滞在中、われわれはある協同農場を参観し、付属の幼稚園と託児所をのぞいたことがある。虚弱児は一人もなく、みんな健康で朗らかだった。子供たちがこんなに元気で栄養状態がよい秘訣はなにかとたずねると、一人の保母はこう答えるのであった。

「わたしは最近保育員養成班を出たのですが、人民に仕える保育員になれてこんなにうれしいことはありません。

金日成元帥は全国保育員・教養員大会でつぎのように教えてくださいました。

『実に今日、保育員、教養員の仕事は、よその家の子守ではなく、共産主義建設の後続部隊、わが革命大業の後継者を保育する光栄ある革命事業であり、祖国の未来にかかわる重要な仕事であります』わたしはこのお言葉を心にきざんで、子供たちを丈夫で賢い子、全面的に発達した祖国の明日の担い手に育てる仕事に一生を捧げるつもりでいます。

わたしたち保育員は大きな喜びをいだいて仕事にうちこんでいます。わたしたちはいつも集まると、どうしたら子供たちの栄養状態を高め、しつけのよい明るい子に育てられるだろうかと相談しあっています。

元帥は、幼いとき体が弱いと大きくなっても健康にひびくと言われました。

それでわたしたちは文化的で科学的な保育に集団の力を傾けています。まず毎週医師が健康診断をおこなって、病気のおそれがある子がいればすぐ予防対策を講じます。もちろん費用はいっさい国家が負担します」

これは、労働の量と質による分配にもとづく社会主義的原則の枠を越えた、明らかに共産主義的な施策である。朝鮮では次の世代の教育のためばかりでなく、社会生活の多くの領域でこうした共産主義的施策がとられている。そうした実態をわれわれはじかに確めることができた。

人類が切望する理想社会を実現している金日成主席に、限りない敬慕の念をこめて最大の栄光と感謝を捧げたい。

*　　*　　*

以上は、わたしが二十余年前に見聞きしたことである。朝鮮には、十年たてば山河が変わるという諺がある。千里馬の勢い、速度戦のスピードでばく進する朝鮮でその間どんなに大きな変化が起きたかは、常識では想像すらで

きないことである。ただ現実だけが、今日の主体朝鮮を訪れて直接それにふれることだけが、正確な解答を与えてくれるであろう。

ネパール・「進歩書店」店主、出版業者

一九八一年　四月

# 自主時代の偉大な指導者、金日成主席

シリア
マフムド・オベイダット

偉大な指導者金日成主席！

今日、その名は、自主の黎明をもたらす新しい世界の輝く象徴として、あるいは人民のあつい心をあわせた合唱となり、あるいは心の奥底からわき出る親しみこもる歌声となっていたるところでこだましている。

偉大な指導者金日成主席！

今日、その名はたたかう大陸では永遠の闘争と勝利ののろしとなっており、新生の光を求めてさまよう人々には明るい燈台となってゆく手を照らしており、勝利した人民からは、新たな勝利、より高い高峰へと導く世紀の偉大な開拓者としてたたえられている。

シリアの作家であるわたしも、偉大な金日成主席の名を崇敬の念をもって呼び、主席を限りなく信頼し敬慕する者の一人である。わたしはこれを最大の幸福とし、誇りとしている。わたしのこの信念、この心情は、たえざる探究と生活体験をとおしておのずと形成され、はぐくまれたものである。

シリア・バース党第十二回大会で、わが偉大な指導者ハフェズ・アル・アサド同志は、偉大な金日成主席の豊かな

経験と闘争について深い感動をこめて語った。
それ以来わたしは、金日成主席にたいする敬慕の情をさらに深め、主席に一目でもお会いできたらと念じてきた。
この願いはついにかなえられた。
平壌で開かれた主体思想国際討論会にシリア代表の一員として参加したわたしは、敬慕してやまない主席に謁見する光栄に浴したのである。
一生記憶に残る出来事は誰にもあるが、わたしにとって主席との対面は永遠に忘れることのできない最大の幸福であり喜びである。
一九七七年の夏、朝鮮を訪れた短い期間に偉大な主席の接見をうけ、主席の導く主体朝鮮の現実にふれ、さらに世界各国から来た多くの友人たちと語りあうなかで、わたしは金日成主席こそもっとも天才的な思想と非凡な指導力、伝説的な愛をそなえて自主時代を賢明に導く偉大な指導者であることを確認した。

## 一　天才的発見

われわれの時代、自主時代は、以前のどの時代とも区別される歴史の新しい時代である。
それは、共産主義の幽霊がヨーロッパを徘徊しながらヨーロッパ労働者階級を新しい闘争にそなえさせた時代でも、また一国で勝利した社会主義革命が帝国主義の包囲のなかで血にいろどられた革命の旗をかかげ死線をのりこえていた時代でもない。

自主の時代と呼ばれるわれわれの時代は、世界のすべての大陸で自主の旗のもとに旧世界をくつがえし、人民大衆の力で繁栄する新世界をきずく時代であり、帝国主義、植民地主義の鉄鎖に苦しんでいた被抑圧、被搾取人民が世界の主人として登場し、自力で世界を改造する新しい時代である。

闘争の幅と規模、社会政治的変革の深さと多様性において前例のないわれわれの時代、自主時代が奔流のごとく前進し発展一路にあるのはなぜであろうか。

かつて社会の下積みだった人民が、確信と力にあふれて新しい歴史をきりひらいていけるようになった理由はなにか。

歴史の歩みをふり返るとき、それを力強くおしすすめるさまざまの出来事――多くの発見があった。

火の発見と労働用具の利用、それにつづくあまたの科学的発明発見――たとえば蒸気機関車の出現や細胞、原子などの発見が進歩と文明への突破口を開いた。しかし、それらが人間の運命問題を根本的に解決したのではない。

新しい社会現象や自然法則が無数に発見されたが、忌まわしい運命の鎖につながれた数十億人民大衆の境遇はかわらず、またかわるはずもなかった。

しかし、歴史の外にあって、あらゆる蔑視と虐待にあえいできた人民がいま自身の権利と力を自覚して世界のひのき舞台に登場したがその根底には、偉大な発見がある。

金日成主席は、人間とはなにかについて、つぎのような有名な定義をくだした。

「人間は自主性と創造性をもつ社会的存在です。人間は、目的意識的で能動的な活動を通して、自己の意思と要求にあうように世界を改造してゆくもっとも発達した有力な存在です」

人間の本性については、有史以来はてしなく論争がつづけられてきた。著名な哲学者や識者によってさまざまな

学説が出されたが、人間はいっこうに従来の概念から脱け出せなかった。

人間は、奴隷主の口のきける生産道具でもあり、神の定めた運命のとりこでもあった。

資本家は封建勢力を駆逐する初期には、人間は本然の姿にたちかえるべきだと仰々しく騒いだが、ひとたび権力をにぎるとその本性をさらけ出して、人間的なもののすべてを踏みにじり、人間の虐待に快楽を求めた。

搾取階級は例外なく大衆の擁護者、救済者を名のりながら、人間を支配と圧制の対象、価値生産の手段とみなし、抑えさげすむことを合法化した。

人間を歴史的な具体的存在、社会的諸関係の総体と規定したマルクスの学説が、従来のいっさいの反動的学説に強い打撃を与えたのは事実である。しかし、マルクスは人間を労働力をもつ存在、生産力の要素という見解から革命闘争の必然性と方途を説明し、階級・階層の境遇や運命も物質と社会経済的諸関係のわく内でのみ考察したために、世界における人間の地位と役割に関する問題にまでたちいることができなかった。

金日成主席が人間の本性を天才的に明らかにし、世界における人間の地位と役割を史上はじめて完全に解明したことは、人間学説の完成を意味するとともに、物質中心の哲学から人間中心の主体哲学に移行する新しい時代の到来を告げる歴史的変革である。

金日成主席の天才的な英知によって「神」と圧制者にもてあそばれ、ふみにじられてきた人間の本性が正しく解明され、数千年来埋もれてきた人間の知恵と力の価値と偉大さが明らかにされた。このときから自主の時代がはじまり、人民大衆はいっさいの圧制と束縛に反対し、革命の主力軍、世界の主人として登場した。

じつに、人間の本性と世界におけるその地位と役割を独創的に解明した金日成主席の理論は、「神」のとりこ、黄金の奴隷としてしいたげられてきた人間を世界最高の地位にひきあげた偉大な発見であり、人民大衆の無限のエネ

ルギーを新世界の創造へと爆発させた発見である。それは自主の巨大な流れが日とともにますます激しく地球をおおっている今日の現実が実証している。

金日成主席が導く自主の道に入った世界数十億の勤労大衆はいま、世界の主人としての強い自覚のもとに、自主性を束縛する地球上のあらゆる抑圧と搾取に終止符をうったたかいに決然とたちあがっている。

世界のすべてのもの、権力も財宝も文化も働く人民のものとなり、人民に奉仕しなければならないという偉大な真理は、さげすまれてきた人々を自主の新世界の創造へと奮起させるのろしであり、真の人生を生きる旗じるしである。この旗のもとにアフリカがたちあがり、アジアとラテンアメリカが帝国主義の牙城に肉迫している。

誰にもふみつけられずに生きることを願うのは人間特有の本性である。

奴隷となって生きるより、むしろ生命を賭して自由をたたかいとろう。自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命をきりひらく決定的な力、偉大な力も自分自身にある。

金日成主席によって人間の本性がみごとに解明され、人間の運命問題の根本原理が明示された結果、自主時代に生きる人民は有力な闘争の武器をもって勝利の信念に燃え、希望にみちた未来に向けて力強く前進している。

パレスチナの抗争闘士は自主性をふみにじる仇敵イスラエル侵略者を撃滅するため銃をとって戦い、自主性を尊ぶアラブ世界がかれらと同じ戦列にたっている。

アフリカの一隅にしがみついて最後のあがきをつづける人種主義者を一掃し、抑圧と従属のない平和な繁栄する新しい世の中をつくるために、全アフリカ大陸が一つの思想・意思で団結している。

自主ののろしは、支配と従属に反対する世界のいたるところで激しく燃えさかっている。

最近朝鮮の南半部、光州市でおこった青年学生と市民の大衆的進出は、搾取と抑圧のあるところには反抗があり、

人間の本性である自主性を侵す敵とはともに天をいただきえないことを血と死をもって確認した。

アメリカ帝国主義者と南朝鮮の軍事ファシストどもは、今日アメリカ製の殺人兵器で光州市を一時血の海にひたすことはできたが、明日はかならずもっとも恐ろしい歴史の審判台にたたされ、滅亡せずにはいないであろう。これは自主時代の闘争の法則であり、当然の帰結であることをわれわれは確信している。

数十億人民が一つの目標に向けて総決起してたたかうわれわれの時代、自主時代の奔流をせきとめる力はこの世にない。

金日成主席のように卓越した指導者がわれわれの時代をきりひらき導いているがゆえに、自主の流れは巨大な大河となって帝国主義、植民地主義の最後の牙城をおし流し、人民の敵を一掃した大地には自主の新世界が生まれるであろう。

## 二　主体朝鮮は自主国家の偉大な模範

金日成主席によってきずかれ導かれる主体の国朝鮮民主主義人民共和国は、全世界が希望の燈台と仰ぐ偉大な国である。

それは、新しい制度、新しい生活をめざしてすすむ人民の前途を照らす燈台であり、すばらしい未来をさし示す希望の星である。

むかし、東方への航路をひらく苦心の末に見つけたアフリカ大陸南端の岬を喜望峰と名づけたが、かつてしいた

げられた人民のすべての念願がすばらしい現実となって花開いている人民の楽園、主体朝鮮を当然世界の喜望峰と呼ぶべきであろう。

金日成主席によってきずかれ導かれる真の人民の国、勤労人民大衆の自主的な要求が最高度にみたされている主体の国朝鮮は、自由、独立をめざしてたたかう世界と世界人民の目標を仮説や推測ではなく動かせない現実をもって示す、世界でもっとも住みよい、富んだ文明国である。

事実、世界の人民と政治家は主席の賢明な指導のもと、朝鮮民主主義人民共和国が歩んできた栄えある道のりに、真の人民的国家建設の路線、方法、経験を見出すであろう。

主席がはじめて示した自主、自立、自衛の路線は、過去のどの歴史をひもといても見出せない独創的な自主国家建設方針であり、今日、尊厳ある強力な主体朝鮮を揺るぎなく支える鋼鉄の柱である。

主席が構想し実践するすべての路線と政策は、自主精神でつらぬかれているがゆえに、自主性をめざす世界の共同の財宝、全人類の貴重な指針となっている。

それは一口で言って、金日成主席が自主の旗を高くかかげて国家と人民を導くその道に、搾取され抑圧されてきた人民大衆の完全な解放と自由、真の独立と幸福が現実的に最高のたかさで確保されているからである。

政治における自主は、どの国、どの民族も自己の尊厳と利益を徹底して守ることを可能にする偉大な真理である。それはまた、地球上になおも従属と支配、干渉が残存している今日、それを一掃する唯一の道を示す貴重な真理である。

経済における自立は、自主独立国家の実際的な基礎であって、すべての国の人民がどのような圧力や干渉も断固しりぞけ、自己の権利を堂々と行使するだけでなく、もっとも豊かで幸せな生活を自力できずけるようにする。

国防における自衛の原則が自国とその人民をいかに力強く守るものであるかは、朝鮮の現実がはっきり示している。

世界に知られたアメリカ帝国主義の武装スパイ艦プエブロ号事件、ＥＣ—一二一事件、板門店事件などで戦争瀬戸際の情勢がかもしだされたとき、朝鮮民主主義人民共和国は断固とした宣言をもって、そのつどアメリカ帝国主義をひざまずかせ、断固として革命の獲得物を守りぬいた。

人口や領土のうえでアメリカ帝国主義とは比較にもならない小国朝鮮が、どうして傲慢無礼な帝国主義の元凶をふるえあがらせることができたのであろうか。

その強大な力は、主席が堅持している国防における自衛の原則が達成した諸成果を直接目撃した者だけが理解できるであろう。主体朝鮮のめざましい工業の発展、年々大豊作をおう歌する農村、世界でもっとも進んだ教育、二十世紀の王者を誇る芸術、主席の導くそのすべてが世界の典型となっているがゆえに、世界の人民は朝鮮に人類の輝かしい春を見出しているのである。

じつに金日成主席の導く自主の国朝鮮民主主義人民共和国は、数十億人民を旧世界から明るい未来世界に向けて前進させる闘争の旗じるしとなり、世界のすべての闘士に信念と力を与え、経験と方法論を教える革命の策源地となっている。

主席はつねに自主性をめざす人民の側にしっかりとたち、かれらとともにあってそのたたかいを限りなく励ましている。

わたしはたたかう国、朝鮮民主主義人民共和国を訪れた短い期間に、アラブ人民と朝鮮人民間の兄弟的同志的友好関係がじつに深く、また、朝鮮労働党総書記であり、朝鮮民主主義人民共和国主席である闘士金日成主席とバー

ス党総書記であり、シリア・アラブ共和国大統領である闘士ハフェズ・アル・アサド同志との関係が反帝闘争のなかで結ばれた革命的で同志的な関係であることをいま一度確認した。

金日成主席は、アラブとパレスチナ人民にたいするシオニストの敵対的侵略行為をきびしく糾弾し、つぎのように述べている。

「今日パレスチナ人民が、アメリカ帝国主義者とイスラエル侵略者に反対して展開している抵抗運動は、奪われた祖国をとり戻し、民族の独立と尊厳を回復するための正義の闘争であります。祖国解放の神聖な大業をなしとげようとするパレスチナ人民の正義のたたかいは、全世界の進歩的人民の積極的な支持と声援をうけています」

偉大な闘士であり、伝説的英雄である主席は、たたかう人民の闘争の旗手、指導者として、精神的、物質的な支援を惜しみなく送っている。それゆえすべての大陸から闘士たちが朝鮮を訪れ、主席の教えをうけることを最大の栄誉とし、その教えに従えばかならず勝利するとの確信をいだいて帰るのである。

朝鮮式社会主義がいちばんだ！

主体朝鮮はわれわれの第二の祖国だ！

朝鮮にならってすべての問題を自主的に、自己の信念にもとづいて独自に、創造的に解決していこう！

これは、主席の接見をうけ、主席の導く偉大な自主の国朝鮮の現実を目撃した世界人民が等しく心から叫ぶ賛嘆と感動の声である。このことは、主席の導く主体朝鮮が新世界の輝く象徴であり模範であることを示している。

## 三　自主時代と指導者の愛

朝鮮訪問のさい、わたしは同じ外国の訪問客からつぎのような言葉を聞いた。

「世界が一様にうらやむ主体朝鮮の高さは、金日成主席が人民にそそぐ偉大な愛の高さである」

朝鮮を訪れた外国の詩人のなかには、こうした感銘にひたる者が少なくない。この言葉は、自主時代のすぐれた指導者金日成主席の高潔な人民的品格にたいする感動的な賛辞であり、人民の念願と幸福が花開いている主体朝鮮の真の姿をうたうものである。

主席が指摘しているように、われわれの時代のすべての革命闘争は、結局勤労人民大衆の自主性を擁護するたたかいである。したがって現代を導く指導者のあらゆる思索と実践の基本的内容は、勤労人民の自主性を完全に実現するための努力と愛情につらぬかれていなければならない。なぜなら長年さげすまれ、抑圧されてきた人民大衆は、革命の指導者に自己の運命を全的に託しているばかりでなく、種々さまざまの政治的詐欺師に欺かれて苦痛と不幸を強いられた体験にてらして、真に自分たちを愛し、救う指導者にのみ従うからである。

主席はつねに人民とともにあって、生涯を祖国と人民のためにつくし、人民を愛し革命的に育てること以外のなにものをも望まない真の指導者であり、教師であり、慈父である。

主席は、生涯の目的と喜びについてつぎのような感動的な言葉を述べている。

「…わたしは人民の忠僕として、人民とともに生涯を捧げたいと思っています。人民の忠僕となることにまさる

栄誉はありません」

主席の接見をうけたさい、わたしは人々の心を限りなく清めてくれる慈愛にみちた素朴な人柄に接して、主席こそ人民の慈父であり教師であるとの印象を強くした。また、朝鮮の現実にふれ、人々の話を聞くなかで、主席の気高い徳性をいっそう感銘深く感じとることができた。わたしの感動を一口で言い表すと、金日成主席が構想し、実践するすべての活動は人民大衆を世界の堂々たる主人に育て、かれらにもっとも幸福な自主的生活をもたらそうとする太陽のような熱い愛に裏うちされているということである。

朝鮮を訪れる人なら誰もが感じることであるが、人民のために献身し、今日も休むことなく精力的な指導をつづける主席の恩情によって、朝鮮民主主義人民共和国の幸福な公民が住み働くすべての地に、人民にたいするもっとも熱い愛と配慮が脈うっている。

主席が人民にそそぐ愛はたんなる同情や哀れみ、義理によるものではない。

愛は、いかなる人間観に根ざすかによって、同情や哀れみにとどまりもすれば、偽善におちいりもする。

主席の人民愛、それは世の中でもっとも貴いものは人間であり、もっとも有力な存在も人間であるという主体哲学にもとづく愛であるがゆえに、もっとも偉大であり、慈しみ深い永遠の愛なのである。したがって、朝鮮人民は主席のおおいなる愛の懐にいだかれて、自身と社会と世界を再認識し、世界の堂々たる主人、革命と建設のりっぱな担い手に成長している。朝鮮人民は誰もが誇り高く語っている。

主席の愛と配慮は主体哲学にもとづく人民愛の最高の境地に達しているがゆえに、たんに生活上の便宜をはかり、心配事の相談にのるといった俗世的な愛にとどまらず、人民の貴い政治的生命を守り花開かせる永遠の生命の源として、無力な人々を革命と建設の炎のなかで英雄、闘士に鍛え、力が足りなければ力を、知恵と情熱に欠ければそ

の泉を与え、働く人々すべてを希望にみちた未来に向け不断に導く偉大な愛である、と。

主席の愛は幅と深み、暖かさにおいてたぐいのない人類の夢みてきた真に人民的な愛である。それはわれわれの時代に創造された不滅の記念碑として高くそびえ、その愛にはぐくまれた自主の国朝鮮は、もっとも幸福な住みよい社会の典型となっている。それは、主席の愛が人民的愛の最高峰をなしており、主席が人民のために歩む人生のみちのりは、人民愛のもっとも美しい叙事詩でおりなされているからである。

つとに抗日革命闘争の日々に、もっともかよわい存在として社会の最下層でしいたげられていた朝鮮の子どもたちと女性の運命に思いをいたし、『祖国光復会十大綱領』にその新しい運命を金文字で刻んだ主席は、祖国解放後、子どもたちを国の「王様」と呼び、また女性たちとしばしば会って大小あまたの願いを残らずかなえてやった。

いっさいの税金を全廃し、のびゆく世代を就業年齢に達するまで国家と社会の負担で育てるうそのような話、労働者の健康にわずかの害もあってはと、解放直後一グラムの鉄もこのうえなく貴重だったときに原鉄炉を爆破した話、山間僻村の少数農民のために国家が数万金を投じて五段揚水場を設けた話、家事の重荷からの婦人の解放を重要な目標の一つとして三大技術革命をおしすすめている話、三人の児童のために分校をつくり、十三人の生徒のために通学列車を贈った話、貝の採集中海におし流された一女性の救助に飛行機、艦艇、漁船を総動員し、彼女が救出されてはじめて全国が胸をなでおろしたという話…。

これらは、黄金万能の社会はもちろん、人間よりも経済的収支を先に考える社会ではとうていありえない出来事である。これは、人間をもっとも大切にしすべてを人間に奉仕させる主体の国、偉大な金日成主席が生涯をかけ、いまもその無限の繁栄と幸福のために力をそそぐ人民の楽園、朝鮮民主主義人民共和国にのみ見られる夢のような現実である。

じつに歴史的に疎外されてきた人民が今日世界の主人として登場し、世界をきりひらいていく自主時代は、金日成主席の最上の人民愛が世界と世界の人民に力と信念を与え、未来を約束しているがゆえにいっそう誇り高く、前途洋々としている。

偉大な金日成主席の卓越した思想と指導、高邁な徳性のゆえに花開き前進する自主時代万歳！

永久不滅のアラブ・朝鮮友好万歳！

シリアの作家

一九八一年　十月

# 人民のために生きる偉大な主席

ネパール
ゴパル・グルング

朝鮮人民の敬愛する父であり、朝鮮の太陽である金日成主席の名に、わたしは親近感をいだいている。主席に敬慕をよせる世界の多くの友人と同様、主席の名はもっとも偉大な指導者、もっとも親しみ深い慈父、もっとも尊敬する教師のそれとして心に刻まれている。

金日成主席は、朝鮮のもっとも偉大な指導者であるばかりでなく、世界人民の進路をも太陽さながらにさし照らす世界最高の指導者の一人であるとわたしは確信している。

主席は苦難にみちた祖国解放の偉業を達成し、驚嘆すべき速度で朝鮮を発展させた。

このことを思うにつけ、わたしは心から尊敬する主席にお会いしたいと願い、主席の導く朝鮮、とりわけ主席の故郷を必ず訪れたいと念願してきた。これはわたしにとって最大の美しい夢であった。

この夢は、一九七九年六月に現実のものとなった。

人間だれしも年来の念願がかなったときほどうれしく幸せなときはないであろう。実際、朝鮮民主主義人民共和国を訪れる機会に恵まれたわたしは、このうえない喜びと幸福感にひたった。

わたしの訪朝は実り多いものであった。わたしは朝鮮で、金日成主席の革命活動歴史と人民的な品性について、そして、主席を民族の父と仰ぐ朝鮮人民のうらやむべき幸福な姿と、国の発展ぶりも見聞し、感嘆を禁ずることができなかった。

一九七九年六月十九日の朝は、わたしの生涯においてもっとも有意義な、永遠に忘れられない幸福なひとときであった。その朝、朝鮮のもっとも偉大な指導者であり、敬慕してやまない金日成主席にお会いしたのである。

言い知れぬ幸福感と緊張感をいだいてわたしは主席のもとに向かった。世界的な偉人に会うのは、だれにも容易に恵まれる栄誉ではない。その栄誉がわたしにめぐってきたのである。実に夢のような思いであった。

主席が満面に明るい笑みをたたえてわたしの前に立ったとき、わたしはすっかり固くなってしまった。だがそれも一瞬のことで、主席がわたしの手をやさしくとって、肩を抱きよせてくれたとたん、わたしは思わず旧知の間柄のように振舞ってしまった。わたしはそうした自分に驚かずにいられなかった。いまにして思えばそれも自然のなりゆきだった。主席のにこやかな表情に接した瞬間、緊張感があっというまにほぐれ、日常起居をともにする父の前に立っているようなゆったりした気持になっていたのである。

主席は、旧来の知己に対するような親しみをこめてわたしに話しかけてくれた。そこにわたしは、主席のおおらかな、人民的品性を見る思いがした。だからこそ主席は、朝鮮人民だけでなく、世界人民の心からの尊敬をうけているのである。かれらが主席をこよなく敬慕するのは、よろずの花があたたかい日光を注いで美しさと香気を与えてくれる太陽を慕うのと同様、しごく当然なことといえよう。

金日成主席は実に素朴で寛容な方である。朝鮮人民が父のように慕う主席は真の愛国者であり、多面的な才能に恵まれた指導者であり、勇敢かつ温厚な品性をかねそなえた人民の偉大な領袖である。

思うに主席のそのような人柄は、主席の革命的な家庭に根ざし、実践をとおしてかためられたものであろう。
主席の一家は代々、富貴とはおよそ縁遠い極貧の暮らしをしてきた。主席の生家は、昔日の朝鮮人民の貧しい生活ぶりをしのばせるわらぶきの家である。幼年時代をここですごした主席は、どん底にあえぐ人民の生活を自分自身のものとして体験し、日本帝国主義と地主の本性を知った。だからこそ主席は、貧しい人たちの気持をよく知り、富める者の貪欲さを見抜いているのである。
主席の一家は、人民の自由と解放のためにたたかったもっとも愛国的で革命的な家庭である。百年余にわたって代々祖国と人民にすべてを捧げてたたかったそのように偉大な家門はほかに例がないであろう。
主席の尊父金亨稷先生は、朝鮮における反日民族解放運動のすぐれた指導者であった。祖国の独立をめざして不屈にたたかった先生は、日本帝国主義の警察でうけたむごい拷問と深い凍傷がもとで、三十二歳の若さで世を去った。母堂の康盤石女史は、祖国の独立と婦人の解放をめざすたたかいに生涯を捧げ、叔父と弟、母方の近親も祖国と人民のために献身した。
主席ははやくも少年時代に革命闘争に乗りだした。
十一歳のとき、父の志にしたがい吹雪荒れる百里の道を踏破して故郷万景台に帰った主席は、日本帝国主義と地主の抑圧と搾取に苦しむ祖国人民の悲惨な姿に接し、抑圧者、搾取者を打倒して人民を救おうという一念に燃えた。
主席は十三歳の年に、父の志をついで日帝侵略者を駆逐し人民を解放するまでは再び祖国に帰るまいと決心して、再度鴨緑江を渡った。
このように、つとに人民の念願を胸に秘めて解放闘争に一身を捧げた主席であればこそ、つねに人民と生死苦楽をともにし、人民のためならなにものをも惜しまないのである。

わたしは朝鮮の行く先ざきで、主席の愛の物語りを、目に涙をたたえて話してくれる人びとに出あった。工業部門をはじめ農業部門、教育部門、保健医療部門など、主席の現地指導の及んでいないところはなく、朝鮮人民一人ひとりの胸に主席の愛が脈うっている。

主席は人びとのいるところなら山間僻地であれ、鉱山の深い切羽であれどこにでも出かけるし、労働者の集会や党の会議を指導し、困難な問題が持ちあがれば人民の中に入って、解決策を相談する。

抗日革命闘争当時から人民を愛し、人民に尽くしてきた主席の感動的な逸話を、わたしはたくさん知っている。

抗日武装闘争を展開していた金日成将軍の遊撃隊がある村にしばらく駐屯していたときのことであった。押し迫った年の瀬村人たちは将軍をはじめ遊撃隊員たちと一緒に正月を楽しくすごそうと、ささやかながら料理を準備していた。隊員たちもかれらの誠意をうれしく思い、わが家にいるような気持で、その仕事を手伝った。

一方、村人たちの暮らしぶりを見てまわった将軍は、突然、部隊に出発命令をくだした。その夜、部隊は黄泥河子の深い森の中で野営した。

将軍は、たき火を囲んだ隊員たちに静かに語った。

「われわれが駐屯していた官地付近の村人たちの状態を見よう。何人かの地主をのぞいて、裕福に暮らしている人が一人でもいたであろうか。かれらの大多数は服一着ろくなものがなく、当座の食糧にもことかく有様である。明日には正月を迎えるというのに、新しい服一着着られない子どもや、元日の朝に一口の酒も飲めない老人がどれほど多いことか。それればかりか、すでに食糧が切れてお粥さえすすれない人たちもいる。地主にこうりゃんやひえを借りようと頼んで、侮辱されたままむなしく帰る人も多い。

ところがあの村人たちは、われわれのために豚をつぶし、ギョウザをつくり、酒さえ求めようとしていた。この

ことについて、われわれは深く考えなければならない。かれらがわれわれを積極的に支援しており、ごちそうをつくって一緒に正月を祝いたいというその誠意は尊いものである。だが、われわれは村人たちのもてなしをうけていいものだろうか。村人たちの中に当座の食事にことかく人もいると分かっていながら、好意に甘えてかれらのつくる料理で正月を楽しむことができるであろうか。小人数でもないわれわれが、たとえ一日でもよけい村にいるならば、それは村人たちにとって大きな負担となるだろう」

こうして将軍は、隊員たちと粟飯を前にして正月を祝った。

将軍はこのように、人民的な品性をもって人民を愛し、かれらのためにすべてを捧げてたたかったので、人民も将軍を心から信頼し、慕ったのである。抗日遊撃隊が「無敵皇軍」と豪語した日帝侵略者と戦って、勝利を重ねた秘訣の一つである人民の絶大な支援も、将軍の人民大衆にたいする深い愛情と革命的大衆観点をはなれては考えることができない。

金日成主席は、人民にたいするもっとも美しく気高い愛情で長い革命闘争の道をいろどってきたのであった。主席の半世紀余の革命活動歴史は、そのまま、朝鮮人民にたいする熱愛と配慮、献身的な服務の歴史である。

わたしは、朝鮮の偉大な太陽である主席が、解放後、孤児たちに語った言葉を忘れることができない。

祖国に凱旋した主席はまっさきに、抗日革命闘争で犠牲となった戦士の遺児たちを探した。

主席はかれらにこう言った。

「わたしはお前たちを長いこと探した。こうして会って見ると、お前たちのお父さんやお母さんのことが思い出されてならない。これからはわたしをお父さんだと思うのだよ。わたしはお前たちをりっぱに勉強させて、お父さんやお母さんの願いをかなえてやりたいと思う」

また、こんな話もある。

ある日、主席は両親が日本にいる帰国学生たちの寮を訪れてかれらの生活にあたたかい配慮をめぐらしこうかれらを励ました。

「なにか困ったことがあれば、両親に手紙を出さないで、わたしに知らせるのだよ。異国で苦労している両親に心配をかけるのはよくない。頼みたいことがあったら、遠慮しないでわたしに手紙を寄こすのだ」

これらの話は、人民と新しい世代にたいする主席の恩愛がいかに深くあついものであるかをよく示している。まさに人民のために生きる主席ならではの言葉である。これまでわたしはこのような感動的な言葉を聞いたことがない。古来万民の救世主であり守護者であると言われてきた「神」からさえ、このようにあたたかい言葉をかけられた者はいないであろう。

人民の真の救援者、守護者は、朝鮮の太陽金日成主席である。主席こそ、万民が心から慕い、敬うべき慈父である。

金日成主席は朝鮮民族に再生の光をさし照らして、かれらを暗黒から光明へ、幸福にみちた楽園へと導いた。人民の力を信じ、人民を思う主席の指導があればこそ、世界的にもっともおくれ、荒廃した朝鮮が、世界人民のうらやむ理想の国、幸せな人民の楽園に変わったのである。

今日の朝鮮はすべてのものを自力更生によってまかなう唯一の国であり、人民に必要なものであればなんでもつくれる偉大な国である。十一年制義務教育と無料治療制が実施されている朝鮮ではまた、税制が全廃され、衣食住の心配がない。朝鮮は、一言でいって、人類の久しい念願と理想が実現した国である。

朝鮮の現実そのものが、朝鮮人民にもっとも幸福な生活をと願う主席の気高い愛と徳性を物語る記念碑である。

朝鮮の奇跡的な成果のすべてに、一つの建築物、一本の樹木にも、主席のあつい人民愛が秘められている。

金日成主席は、朝鮮人民への最大の贈り物は祖国の統一であると語り、次代に統一した祖国を残すために心血を注いでいる。

朝鮮民族は単一民族である。国土の分断は全朝鮮人民にはかり知れない苦痛を与えている。主席は、人民の胸にしこるこの最後の痛みをいやすために全力を傾けている。

朝鮮統一の最大のがんはアメリカである。アメリカは南朝鮮当局に肩入れし、かれらをファシズムと祖国分断の道に進ませている。

今日、南朝鮮人民はファシズムと分断に反対し、民主主義と統一を求めてたたかっている。一方アメリカと南朝鮮のファシストは、そのたたかいを苛酷に弾圧し、愛国的な南朝鮮人民と青年学生を虐殺している。

金日成主席は、高麗（コリョ）民主連邦共和国を創立して祖国を統一するもっとも公明正大な方案をうち出した。

アメリカ軍は南朝鮮から撤退すべきであり、朝鮮の統一問題は朝鮮人民自身によって解決されるべきである。

わたしは、朝鮮の統一の一日も早からんことを心から願い、朝鮮人民の正義の祖国統一偉業に全面的な支持を表明する。

人民の幸せのために生涯を捧げる朝鮮のもっとも偉大な指導者金日成主席の万年長寿をつつしんで祈るものである。

ネパール週刊紙『ニュー・ライト』発行人兼主筆

一九八一年　十月

# 偉大な太陽

インド
T・B・ムケルジ

近くわれわれは、もっとも輝かしい歴史のメルクマールともいうべき四月の大祝日、敬愛する金日成主席の生誕七十周年を人類共通の大慶事として迎えることになる。

主席の誕生は、世界に自主時代の夜明けを告げ、人類に晴れ渡った大空のような明るい未来を約束した。いま世界の人民は、時代と人類の前につみあげた主席の不滅の業績をたたえ、主席に深い敬意を表している。

人民の自由と幸福のために、次代の恵まれた未来のために生涯を捧げている主席の栄光にみちた革命活動史とぬきんでた業績を、ここに書きつくすことはとうていできない。わたしはただ主席の接見にあずかった幸運児として直接体験した主席の高邁な徳性の一端にのみふれたいと思う。

世人はしばしば、かぎりなく広く深いものを大地や海にたとえているが、それには限界がある。しかし金日成主席の愛は実に広大無辺である。

長年人生の真のあり方を探究してきたわたしは、晩年になって、偉大な主体（チュチェ）の太陽、金日成主席を見出し主体の哲学と永生の政治生命を得て、有意義な人生と闘争の道を歩む主体思想研究者の一人となることができた。

わたしは、万民の敬慕する金日成主席にたびたび謁見する特典に浴し、その過程で主席の偉大さは非凡な英知と卓抜した指導力にあわせて崇高な徳性にあることを知った。

わたしが朝鮮をはじめて訪問したのは一九八〇年六月初旬であった。主体の原点であり、革命の聖地である朝鮮民主主義人民共和国を訪れたわたしは、主席の貴重な教えを乞うことを熱望した。

わたしは主席の労作を読み、多くの人々から主席の革命活動史についての話を聞くうちに深い敬慕の念をいだくようになった。

主席はつとに不滅の主体思想を創始して人類に永遠の春をもたらし、理想社会を建設するもっとも正しい指針を示した。そして主体思想にもとづいて朝鮮革命を勝利に導いた。主体の祖国を訪れてその奇跡的な成果がひとえに主席の賢明な指導に負うものであることを知るにつけ、主席に会いたいという願望はつのるばかりであった。

それだけに、主席の謁見を許されるという朗報を伝えられたときの感激と喜びは筆舌につくしがたいものであった。

金日成主席との会見は、わたしの朝鮮訪問におけるハイライトであった。北部山間地帯で現地指導の多忙な日々を送っていたにもかかわらず、主席はわたしの希望を入れて、千載一遇の機会を与えてくれたのである。

世界人民のあいだに絶大な権威をもつ主席の接見を受けたとき、わたしは感激のあまり挨拶も満足にできず主席を仰ぎみるばかりだった。

主席はわたしの手をかたく握ってくれた。慈愛にみちた主席の笑顔は、傑出した偉人と一介の市井人との大きなへだたりをいっぺんに吹きとばしてしまった。

その日わたしは光栄にも主席と同席し、主体思想に接して以来、微力ながらその研究と普及につくしてきた状況

を語った。主席はわたしの話を最後まで聞いてから、りっぱな活動をしたと励まし、われわれが関心をよせている問題に明快な解答を与えてくれた。

主席は、朝鮮で主体思想を具現して得たさまざまな成果と経験について、具体的な例をあげて分かりやすく説明してくれた。主席の賢明な指導のもとに、朝鮮人民が自立的民族経済と富強な自主独立国家の建設でつみあげた成果と経験はいずれも、第三世界諸国、新興勢力諸国で解決を待たれている緊切な問題である。そのとき主席のあげた実例はいかなる金言にもましてわたしの記憶に生々しく残っている。

主席は、現下の国際情勢とアジア人民の重要な課題について貴重な見解を述べた。主席はとくに、アジア諸国はヨーロッパ崇拝思想や技術を神秘視する観点を打破し、繁栄する新しいアジアを建設すべきである、われわれはともにアジアに住んでおり、もっとも古い歴史を誇っている、アジア諸国人民が民族的自負心をもって自国人民のために献身する覚悟をもつとき、急速な発展を遂げることができると語った。

東洋史をひもとくとき、「アジアの黄金時代」と呼ばれた紀元前の時期に、ガンジス河の流域に文化を花咲かせたインドなど多くの国が、その後久しいあいだ外来侵略者のために輝かしい文化と古い歴史を踏みにじられ、圧制のくびきにつながれた。それらの国は肥沃な土地と豊かな資源を奪われ極貧の状態につき落とされていた。これは、ヨーロッパ崇拝思想や技術を神秘視する観点、依頼心、民族虚無主義を生んだ。

金日成主席は、アジア諸国のこうした実情を踏まえて、われわれに主体思想の真理を示し、自主精神を吹きこんでくれたのである。わたしは、非凡な英知でアジアの全般的な政治情勢と経済事情を見きわめ、透徹した理論と力強い説得力で、富強なアジアの明るい展望を示す主席の偉大さに感嘆を禁じえなかった。

人類の思想史は、人民大衆が自己の運命を切り開く道を探究してきた歴史と言える。しかし人民大衆は長いあい

だ、自己の運命を切り開く正しい道を発見しえず、辛酸をなめてきた。

この問題は金日成主席によって、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという偉大な主体思想が創始されてはじめてりっぱに解決された。

わたしは、主席こそ実に卓越した領導者、不世出の偉人であり、主席の指導のゆえに朝鮮革命と世界革命の勝利が保障され、人類の明るい未来が約束されていることを確信した。予定の接見時間が残り少なくなるにつれ、わたしの全身は敬慕の念にもえ、真実な人生と闘争の真理を与えてくれた主席の大いなる愛のふところに、永遠にいだかれていたいという心情を抑えることができなかった。

主席のもとを辞去するさい、わたしは失礼もわきまえず、インド流にわたしの頭に手をのせて祝福して欲しいとお願いした。

主席が快諾して頭の上に手をのせてくれたとき、わたしの胸には形容しがたい激情がこみあげた。

主席がわたしを祝福してくれたのは、たんなる人間愛にもとづく儀礼的なものではなかったと思う。それは人民の偉大な領袖と革命戦士を革命的意志と永生の政治生命のきずなで結ぶもっとも美しく気高い愛の現れであった。

領袖と戦士のこの崇高な結合によって世界人民は金日成主席に導かれて自主の新時代を切り開き、主体思想の大花園のなかで自主性が完全に実現する日を早めつつあるのである。

主席の大いなる愛は、太陽や宇宙のように無限である。

栄光のその日、わたしは金日成主席の恩愛を全身に感じながら、主席の気高い人民愛について思いをはせた。

主席は革命運動に乗りだした初期から、革命的同志愛こそこの世でもっとも貴い愛であるとみなし、革命戦士たちに深い信頼と惜しみなき愛を注いだ。主席は革命戦士の偉大な領袖であるばかりでなく、もっとも親しい教師であ

り、戦友であった。
血みどろの抗日革命闘争期、主席は苦難の行軍途上に「一合のはったい粉」にまつわる逸話を残し、激戦に倒れた一隊員のなきがらを葬ろうと吹雪をおかして東満州への四十キロの道のりを引き返した。主席はまた、革命活動の過程で誤りを犯した戦士を暖かく見守って再生の道を開いてやり、困難な革命任務をまえにして気おくれする戦士には闘志と知恵を与え、任務を全うできるよう導いた。
主席のすぐれぬ健康を案じた隊員たちが、サンサム（山に自生する朝鮮人参）をとってきたときも、自身は服用せず病床の隊員に送った話や、厳冬に、一枚しかない毛布を若い隊員に与えたことなど、こうした例は枚挙にいとまがない。
主席の半世紀余の革命闘争史は人民への熱い愛と配慮、献身的な服務によっていろどられている。
抗日革命闘争期における主席のこのような逸話を思い起こしながら、わたしは考えた。人間の愛は人類とともに発生し、その歴史は人類史の長さに等しいといわれるが、金日成主席の偉大な愛はそれを超越するものであると。
主席の同志愛は永遠の生命力をもち、日とともに深まる無限の愛である。
永久に忘れられない祝福を受けたわたしは、高鳴る胸を抑えて、こう心に誓った。
（敬愛する主席、わたしは晩年になって主席のおかげで自分自身と有意義な人生の真理を発見しました。わたしは老いの身にむちうって主体思想の研究と実現のための大業に余生をささげるつもりです）
わたしは同年十月、妻と一緒に朝鮮労働党第六回大会に招かれて、主席に再会する光栄をになった。とりたてた活動もしていないわたしを党大会に招待してくれようとは夢想だにしなかったことである。
開会直前、主席はわれわれの控え室に入ってきた。主席は大きな喜びと興奮につつまれているわたしの手をかた

く握り、健康状態をたずねた。わたしは胸に熱いものがこみあげて、「主席閣下、わたしは元気です」と答えるのが精一杯だった。

しばらくして会場に入ったわたしは光栄にも、偉大な金日成主席とその唯一の後継者である親愛な指導者金正日同志から近い幹部席に列席することになった。

主席が会場に入場したときの感動は一生忘れることができない。会場は感激のるつぼと化して「偉大な領袖金日成同志万歳！」の歓声にどよめいた。歓声は五分以上もつづいた。それは生涯にはじめての光景であった。主席にたいする代表たちの敬愛の情がひしひしと胸に迫った。

会期中主席の声を聞くことは、わたしにとって最大の喜びであった。

金日成主席は歴史的な第六回党大会の報告で、朝鮮労働党がこの十年間主体の革命大業の遂行においておさめた輝かしい成果を総括し、主体の革命大業を完遂するための闘争課題と輝かしい展望を示した。

主席はさらに、非同盟運動の拡大発展について、古い国際経済秩序をつきくずし、新しい国際経済秩序を確立して発展途上国にたいする先進国の搾取を阻止することについて語った。

主席は社会主義勢力の統一団結を強く訴え、兄弟党、兄弟諸国間の意見の相違を拡大せず、社会主義勢力と国際共産主義運動の統一団結を早急に実現すべきであると強調した。

わたしは大会に参加して、主席の賢明な指導が人民愛に根ざしていることをあらためて痛感した。

朝鮮労働党創立三十五周年と第六回党大会を祝うパレードや大マスゲームも実にすばらしかった。非常に大がかりでいながら一糸乱れぬパレードやマスゲーム『党の旗のもとに』を観覧して、領袖と人民が一心同体となっていることに感嘆せずにいられなかった。民族受難の暗い時期に、祖国と民族の運命を一身にになって革命運動に身を

投じて以来の長い歳月、ひたすら人民の幸福と次代の輝かしい未来のために、すべてをささげてきた主席にたいする朝鮮人民のこよない敬愛の念はきわめて感動的であった。
金日成主席のまわりに結集した朝鮮人民の思想と信念、意志による統一団結の力、主席の大いなる愛に裏打ちされたこの力はなにものをもってしてもうちくじくことができない。
大会閉幕後のある日、わたしは主席に心からの敬意を表すべく、謁見を願い出た。主席が多忙な時間をさいて、わたしと妻に会ってくれるという知らせにわたしは興奮した。妻もご挨拶を申し上げるのだと簡単な朝鮮語を習いはじめた。
わたしたちが接見の場所に駆けつけたとき、主席は握手を求めて「あなたとはおなじみですね」と言った。わたしは慈父のような温情に胸を熱くし、妻も深く感動していた。
金日成主席の人間愛は、朝鮮の革命と建設に巨大な成果をもたらす基本要因となっており、朝鮮人民はもとより、世界の革命的人民の尊敬の念を呼び起こしている。
わたしは席上、アジア人民の一致した要請にこたえて、インドの首都ニューデリーに、アジア主体思想研究所が創設されたことを報告した。
主席は慈愛にみちた表情で、つぎのように語った。
「アジア主体思想研究所が創立されたことは大変喜ばしいことです。
研究所の創設を祝うとともに、あなたが第六回党大会に参加されたことに謝意を表します。あなたの参加は、わが党員たちを大いに励ましてくれました」
わたしは感動のあまり涙を流し、主体の大業のために生涯をささげる決意をあらたにした。

主席はわたしの質問に答えて、思想革命について分かり易く説明してからアジア諸国がすぐれた歴史と文明をもっていたことを実証的に指摘した。

主席はつづいて、主体思想にもとづく朝鮮の経済建設について、例をあげながら語った。朝鮮の技術者がはじめてトラクターを製作したときの話は感銘深かった。朝鮮ではトラクターを生産して農業を機械化したばかりでなく、多くの外貨を節約した。この事実は外国の援助にたよらずとも、自力で十分に農業を発展させうることを示している。

わたしは主席の言葉を銘記し、アジア諸国が自国人民に力と知恵と創造的熱意をいかんなく発揮させるならば、事大主義にとらわれずに自立経済を発展させることができるという確信を強くした。

妻は、わたしたちが訪問した協同農場の管理委員長のことについて語った。妻は管理委員長が婦人であることを大変嬉しく思っていた。

わたしたちは管理委員長の名をよく覚えていなかったが、驚いたことに主席はすぐその名をあげ、彼女の話をしてくれた。わたしは主席が活動家たちと深く結ばれていることに感じ入った。

主席は、婦人が男性よりも仕事をりっぱにおこなっていると語った。

わたしたちが、主席のたえまない現地指導の労苦をねぎらうと、主席は笑顔で、それはすべての国の指導者が当然おこなうべきことである、大衆としばしば会って意見を聞き、彼らを励まし苦楽をともに分かつべきであると述べた。

主席は、平壌市近郷の二つの協同農場管理委員長のほほえましい競争について、興味深く語った。

一人は婦人で、いま一人の管理委員長は男性だったが、婦人の方がもっと成果をあげているとのことだった。

主席は二つの農場によく出かけて実情を調べているが、婦人管理委員長は男性に比べて細心なので成績もよい、彼女はいつも温度計を手放さず、夜中にも田畑の温度や湿度を計っていると目を細めて語った。

わたしは主席の話しぶりから、わが子の話をしている父親のような愛情を読みとった。主席が全朝鮮人民から、慈父と慕われている理由が分かるような気がした。わたしは、金日成主席のように人民と深いつながりを持っている指導者は他にいないと思う。

主席の接見を受けたことは、わたしの一生において最大の慶事であった。

主席の偉大さ、輝かしい英知、高邁な人柄についてすべてを語るのはとうてい不可能である。実に主席は不世出の偉人である。

主席の大いなる愛のゆえに、五大陸の多くの主体思想研究者は、新たな希望と信念にみちてひたすら自主の道を力強く歩んでいる。実に主席の愛は太陽の恩恵にも比すべきである。太陽があってはじめて万物が生を営めるように、主席の愛のゆえに、世の中でもっとも貴い存在である人間は真の人生を生き、政治生命をりっぱに保っているのである。

わたしは、主席の恩愛を思うにつけ、朝鮮人民と世界人民が主席を太陽にたとえ、心から敬慕の情をよせている理由がよく理解できた。主席の偉大な愛を離れては、朝鮮人民の今日の栄誉と幸福について、世界の数多くの主体思想研究者の充実した生活と明るい未来について考えることができない。

金日成主席によって主体思想の真理を体得し、真の人生を歩めるようになったわたしは、主体思想に学び、その具現に努めて、主席に変わらぬ忠誠をつくすであろう。わたしは衷心から、人類の永遠の教師であり、慈父である金日成主席の万年長寿を祈願するものである。

アジア主体思想研究所所長

一九八一年　十月

{
  "before_pdg2pic_conversion": {
    "filename": "NDA0NDYzOTkuemlw",
    "filename_decoded": "40446399.zip",
    "filesize": 11721210,
    "md5": "accbdd1bf4d2d9cdf6fb9dbf372d29b2",
    "header_md5": "1ab563e2a3a98b04045dea963fe4f728",
    "sha1": "89f67732c5f570d8068373d9e93bc0dd5cc340ae",
    "sha256": "49965c0037ad493a62466c09b4893077d2fc4ebd4afc3880dfcf220961c024d1",
    "crc32": 383997758,
    "zip_password": "",
    "uncompressed_size": 11898654,
    "pdg_dir_name": "",
    "pdg_main_pages_found": 361,
    "pdg_main_pages_max": 361,
    "total_pages": 372,
    "total_pixels": 7476480
  },
  "after_pdg2pic_conversion": {
    "filename": "NDA0NDYzOTkuemlw",
    "filename_decoded": "40446399.zip",
    "filesize": 23008224,
    "md5": "991d8c9f76eab595853c174881b2ab68",
    "header_md5": "19dbf98e71281449a2ef3e1abb80c80b",
    "sha1": "9328f21048406da028e0668b7c18bb00c5c3fc5d",
    "sha256": "5d8dadb7fdc5225ce6b31cf86f557ab1fd696177427477e7f38cd674e4de2738",
    "crc32": 1141933713,
    "zip_password": "",
    "uncompressed_size": 23197953,
    "pdg_dir_name": "",
    "pdg_main_pages_found": 361,
    "pdg_main_pages_max": 361,
    "total_pages": 372,
    "total_pixels": 1364539184
  },
  "pdf_generation_missing_pages": false
}